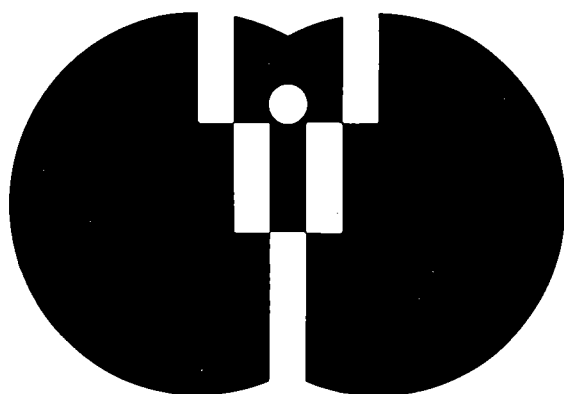


こどもの城

事業年報

平成 5 年 度



財団法人 日本児童手当協会

こども の 城

事 業 年 報

平 成 5 年 度



財団法人 日本児童手当協会

こどもの城事業年報 平成5年度

目 次

I 事業の概要

- 1 事業と運営の基本構想7
- 2 運営の基本的な考え方8
- 3 組織機構図と役員名簿.....10
- 4 平成5年度の活動の概要.....11
 - 1) 事業活動12
 - (ア) 入館者数12
 - (イ) 一般来館者のための活動12
 - (ウ) 講座・クラブ活動.....13
 - (エ) グループ活動13
 - (オ) 劇場事業13
 - (カ) 各種の普及・協力活動14
 - 2) その他の活動14
- 5 活動時間・入館料(こども活動エリア).....14
 - 1) 平常期間14
 - 2) 特別期間(学校の季節休み)14
 - 3) 特別期間(児童福祉週間特別行事等).....15
 - 4) 入館料15
 - 5) その他15
- 6 活動状況一覧.....16
 - 1) 入館者数16
 - 2) グループ活動実施状況18
 - 3) 講座・クラブ等19
 - (ア) 講座19
 - (イ) クラブ20
 - (ウ) 短期集中講習会等.....21
 - (エ) 専門指導者向け講習会等21
 - 4) 視察・見学実績22
 - 5) 事業経理収支計算書23
 - 6) 1年の活動の歩み24

II 各部の活動(1)

- 1 体育事業部.....29
- 2 プレイ事業部.....47
- 3 造形事業部.....61
- 4 音楽事業部.....77
- 5 A V事業部.....91
- 6 保育研究開発部107
- 7 小児保健部125
- 8 企画部133
- 9 劇場事業本部147

III 各部の活動(2)

- 1 広報部161
- 2 研修教養部167
- 3 国際交流部177
- 4 営業部182

IV その他の活動

- 1 こどもの城全国連絡協議会189
- 2 チャリティー事業196
- 3 こどもの城友の会197

(参考)日本児童手当協会の助成事業

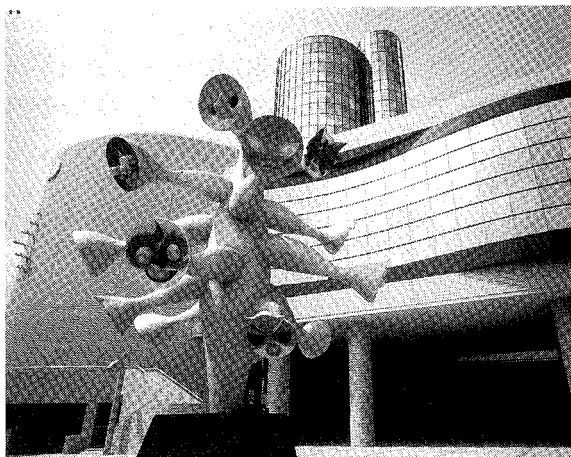
- 1) 事業所内保育施設の整備等に対する助成201
- 2) 事業所内保育施設の保育従事者の研修及び指導202
- 3) 企業委託型保育サービス事業に対する助成203
- 4) 啓発活動203
- 5) 職域児童育成事業に対する助成204
- 6) 特殊ミルク共同安全開発等事業に対する助成205
- 7) おもちゃ図書館普及推進事業205
- 8) 児童福祉文化財普及等事業205
- 9) 病児デイケアパイロット事業205

I 事業の概要

1	事業と運営の基本構想	7
2	運営の基本的な考え方	8
3	組織機構図と役員名簿	10
4	平成5年度の活動の概要	11
5	活動時間・入館料	14
6	活動状況一覧	16

I 事業の概要

〔こどもの城〕は、厚生省が1979年(昭和54年)の国際児童年を記念して計画、建設したものである。国が東京都から譲り受けた、渋谷区神宮前5-53-1の約1万m²の敷地に、昭和56年11月、着工された。以来、4年の歳月と323億円(土地収得費を含む)の国費をかけ、



地上13階、地下4階の、ミラーガラスに包まれた美しい建物が完成、昭和60年11月1日に開館した。厚生省の委託を受けて、財団法人日本児童手当協会がその運営に当たっている。

〔こどもの城〕は、新生児から高校生までの全児童を対象にした、幅広い福祉と文化活動を行うとともに、ハンディキャップを持つ児童も一緒に活動する施設である。親たちをはじめ、児童の福祉・文化の関係者、研究者、教育者などのためにも開かれている。次代を担う子どもたちを心身ともに健やかに育成し、その資質の向上を図ることを目的に、常に先駆的で実験的なプログラムを企画、実践し、全国に普及させていくこと、そして、国際的視野に立ち、世界各国の子どもたちと、福祉・文化活動を通じて交流を図ることを運営の基本としている。

1. 事業と運営の基本構想

〔こどもの城〕の創設に当たって、昭和54年、厚生省により、「こどもの城企画委員会」(葛西嘉資座長)が設けられ、委嘱を受けた有識者メンバーによって基本構想の検討が重ねられた。委員会は同年6月、この結果を「基本構想に関する意見」として取りまとめ、児童家庭局長に提出した。

意見書は「近年、わが国の社会の都市化、工業化に伴い、児童の健康や安全が損なわれており、また、核家族化、家庭規模の縮小に伴う児童の人間関係の変化によって、さまざまな問題が生じている。一方で、高年齢化が急速に進んでおり、この中で、豊かな活力ある社会を維持していくために、未来を担う児

童の健全育成の必要性が高まってきている。このときにあたり、わが国の児童をとりまく諸問題に適切に対処し、明るい21世紀を展望する総合施設を建設することは、時宜に適したものである。(要約)」と述べ、〔こどもの城〕の性格、機能、運営に関して積極的な提言がなされ、基本方針が打ち出された。

以来、厚生省と財団法人日本児童手当協会は、この「基本構想に関する意見」を踏まえ、協力しながら、〔こどもの城〕の建設に当たり、運営に取り組んできた。

2. 運営の基本的な考え方

出生率の低下傾向による人口構造の急速な高齢化、青少年の非行問題、体位に追いつかない子どもの体力、その心をむしばむ要因の増加など、わが国の児童を取り巻く環境は、活力のある未来社会を期待するうえで、憂慮すべき現状にある。こうした、重要な課題に対応していくためには、単に国や自治体の行政に頼るだけではなく、家庭、学校、地域社会が相互に協力しつつ児童の健全育成に取り組んでいかなければならない。

〔こどもの城〕はこのような多くの問題を克服し、明るい21世紀の日本を築いていくための児童福祉、文化の拠点でありたいと願っている。

〔こどもの城〕は、全国の児童を対象とした施設であり、東京及びその周辺の児童だけの施設ではない。すなわち、〔こどもの城〕における事業について広く全国各地に情報を伝え、さらには各地の児童センターなどでの児童福祉、文化活動を全国に紹介するといった全国的な広がりを持つ〔こどもの城〕を目指して運営している。

〔こどもの城〕は、いわゆる幼児のみを対象とするのではなく、幅広く新生児から高校生までの全児童を対象とした福祉・文化活動に関する施設であるとともに、ハンディキャップを持つ児童も当然参加し、ともに活動する施設である。さらに〔こどもの城〕は、親をはじめ、児童の福祉・文化の関係者、研究者、教育者など、子どもの幸せを願うすべての人が利用できるよう開かれている。

〔こどもの城〕は、既製のプログラムだけでなく、先駆的、実験的なプログラムを企画し、実践する。また、国内だけでなく、国際的な視野に立って世界各国の児童福祉・文化活動との交流を図る。

以上のように〔こどもの城〕は、①芸術、文化、科学、スポーツなどの活動による児童の健全育成 ②児童福祉関係者の研修、現任訓練 ③児童福祉に関する研究、開発 ④国際交流、といった各種の機能を併せ持つ総合施設である。これらの機能を相互に関連させながら、総合的な運営をしている。

〔こどもの城〕の建築概要

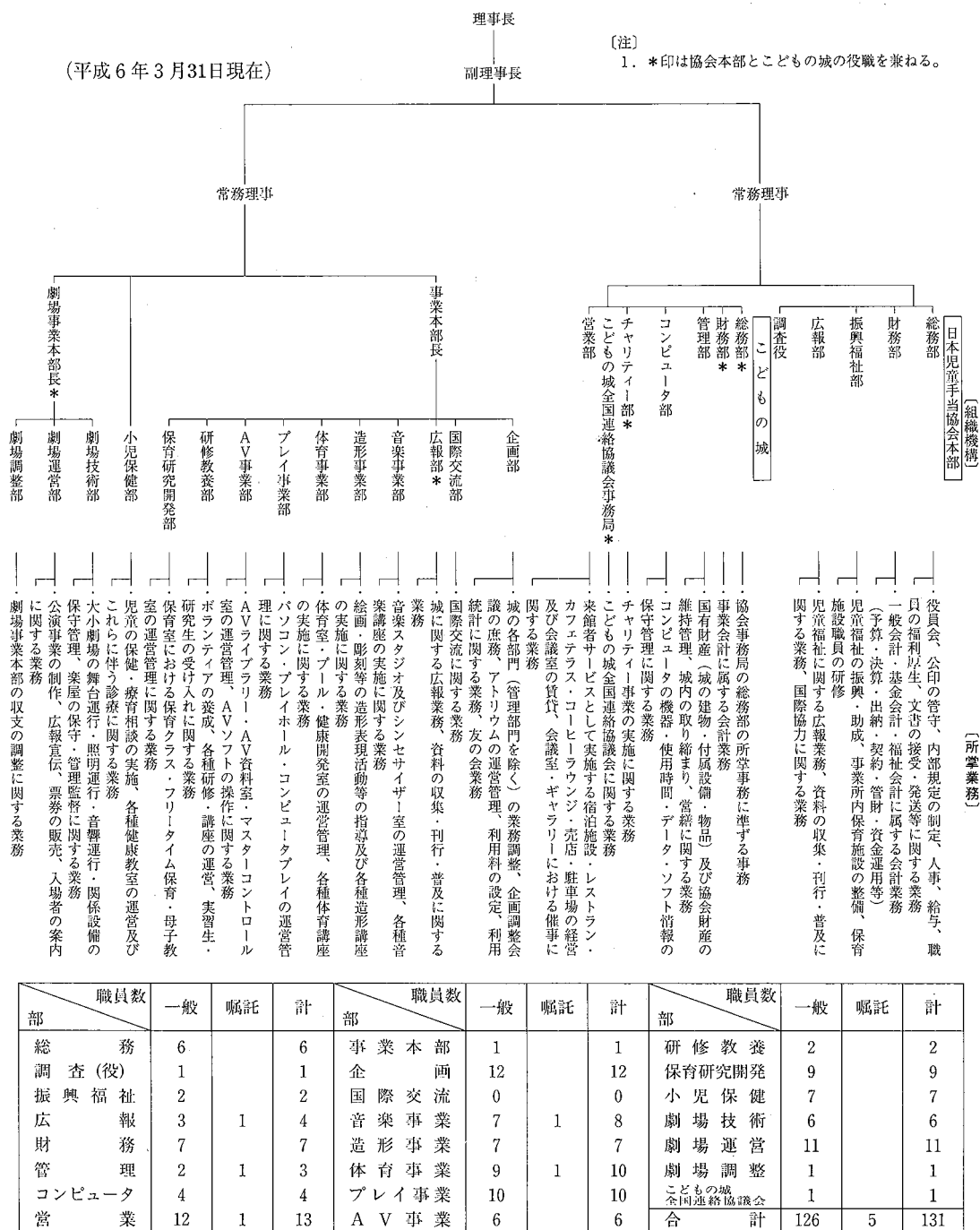
所在地	東京都渋谷区神宮前5丁目53番地1号
地域・地区	住居地域・商業地域（特定街区指定）・ 防災地域・準防火地域・一部第2種文教地域
建築主	厚生省
敷地面積	9,923.39m ²
建築面積	6,001.5m ²
延べ床面積	41,690.4m ²
建ぺい率	60.4%
容積率	345.38%
階数	地下4階・地上13階・塔屋1階
最高高さ	GL+57.6m
基礎下端	GL-28.5m
主要構造	高層部 鉄骨造 低層部 鉄骨鉄筋コンクリート造 地下 鉄筋コンクリート造
設計・管理	株式会社 山下設計
着工	昭和56年11月
完成	昭和60年9月

内部施設の概要

こども活動エリア	○アトリウム（こども活動エリア入口）・ギャラリー	〔1・1～2階〕
	○フリーホール（休憩室・催し場）	〔地下1階〕
	○プール・体育室・健康開発室・トレーニングジム	〔地下2階〕
	○プレイホール・コンピュータプレイルーム	〔3階〕
	○造形スタジオ	〔3階〕
	○音楽スタジオA, B・音楽ロビー・シンセサイザー室	〔4階〕
	○AVライブラリー	〔4階〕
	○屋上遊園（ふしぎが丘, ともだち広場, プレイポート, ネット広場）	〔3～5階〕
	○パソコンルーム	〔10階〕
保育園	○小児保健・診察・相談室	〔5階〕
	○保育研究開発・保育室I, II	〔5階〕
劇場	○青山劇場	〔1・2階〕
	○青山円形劇場	〔3階〕
サービスエリア	○駐車場	〔地下2～4階〕
	○売店	〔1階〕
	○カフェテラス「アンファン・ひさご寿司」	〔1階〕
	○コーヒーラウンジ「アミティーエ」	〔2階〕
	○ホテル	〔6・7階〕
	○レストラン「ラブニール」	〔8階〕
	○研修室	〔8・9階〕

3. 組織機構図と役員名簿

(財)日本児童手当協会組織機構図



（財）日本児童手当協会役員（平成6年3月31日現在）

役 職	氏 名	
会 長	翁 久次郎	（財）厚生年金事業振興団理事長
理 事 長	小 島 弘 仲	
副理事長	清 水 康 之	
常務理事	弓 掛 正 倫	
常務理事	大 野 出 穂	
理 事	石 野 清 治	資生堂取締役会長
理 事	谷 村 昭 一	日本商工会議所専務理事
理 事	花 村 仁八郎	経済団体連合会相談役
理 事	松 崎 芳 伸	日本携帯電話株式会社社長
理 事	品 川 正 治	経済同友会副代表幹事
理 事	竹 内 嘉 巳	（社福）日本肢体不自由児協会理事長
理 事	金 平 輝 子	東京都副知事
理 事	平 田 寛一郎	早稲田大学政治経済学部教授
理 事	平 山 宗 宏	日本総合愛育研究所所長
監 事	松 尾 正 人	（財）厚生年金事業振興団常務理事
監 事	杉 本 敏 雄	（社福）慶福育児会麻布乳児院院長

4. 平成5年度の活動の概要

〔こどもの城〕は「こども活動エリア」と総称される体育、プレイ、造形、音楽、AVのほか、企画部、研修教養部、国際交流部、保育研究開発部、小児保健部、劇場の各部門を持つ総合施設。活動は大別して①一般来館児・者を対象とした活動 ②講座・クラブ活動 ③グループ活動の3つの柱で行われ、これに対外的な普及・協力活動が加わる。

それぞれ活動の対象、時間、場所、プログラムの内容は異なるが、これらの活動が有機的に連動してこそ初めてフル活動といえる。そして、子どものための総合施設という特徴のすぐ裏には、それにふさわしい各部協力による総合機能は発揮されているか——という課題がある。同様に先駆的な参加・体験施設であるための不断のプログラム開発や、そうした活動全体の外への広がり、状況などが問われることになる。

平成5年度は〔こどもの城〕の開館8周年の年。開館以来蓄積してきた事業実績をもとに、〔こどもの城〕が負う社会的な使命や課題、および利用者の需要に十分対応できるよう10周年に向け、より一層の活動の充実に努めた。特に、各部門の連携による創造性と総合機能の発揮に努めるとともに合理的な運営によって経営基盤の安定を図った。

しかし、まだ改善、充実の努力を要するところが多い。関係機関、提携団体

などの助言、要望もいただいて新しい軌道設定への努力をさらに続けていかなければならない。

1) 事業活動

(ア) 入館者数 (16～17ページの表参照)

平成5年度の年間入館者数は、一般来館者が415,883人、劇場入館者が460,332人、これに保育、小児保健、講座・クラブ関係のほか、研修・会議関係の来館者を加えた総数は1,085,008人。平成4年度に比べ、約3万人の減となった。来館児・者の多い夏休みが天候不順で冷夏であったこと、バブル経済の崩壊に伴う“不況感”が広まり出掛ける回数が減ったことなどが、その原因として考えられる。

また、外的要因だけでなく、[こどもの城]の活動そのもののマンネリ化を排し、常に積極的に新しいプログラムを開発していくことが必要であろう。

(イ) 一般来館者のための活動 (各事業部の項参照)

(1) 平常期間

文化体育事業(体育、プレイ、造形、音楽、AV)は、各事業部とも一般来館の親子が楽しく参加し、体験できるプログラムの開発、提供に努めた。

特に平常期間の平日に多い幼児・母親のためのプログラム(育児支援プログラム)については、保育研究開発部、小児保健部を含め、活動の強化を重点目標として行い、内容の充実を図った。同時に学校5日制に対応する活動として、主に小学生以上を対象に、遊びを通じて仲間づくりを活発化するプログラムも積極的に推進した。このように、対象年齢を考慮したプログラム開発が行われるようになり、多様なニーズにきめ細かにこたえられるようになった。

各事業部のプログラム内容も、[こどもの城]ならではの独自の“味付け”をしたものが定着して好評を得ている。音楽事業部のサンバのプログラム、体育事業部のドッジボールのプログラムなど、スタッフの創意工夫が生かされたもので、人気を集めている。

保育研究開発部は、保育実践活動として「母子教室」「保育クラブ」「幼児グループ」を実施したほか、「保育セミナー」「育児相談研修会」「保育内容研修会」の開催や「ニュースレター」の発行など保育関係者のためのプログラムを積極的に推進した。また、過去8年間の実践をまとめた「母子教室の手引き」を作成し、各方面に配布したが、特に市町村関係者の活用が多かった。

小児保健部の活動は、クリニック活動、講座活動や育児支援活動、研修会などの啓もう活動、そして研究活動に大別される。他事業部との連携事業である「健康スポーツ教室(太りすぎクラス)」「母と子のリトミック(ダウン症クラス)」「マタニティスイミング」などの活動を継続して実施した。また、講座「新しい

時代の育児」「小児肥満のための指導者講習会」や現代版“井戸端会議”とも言うべき「赤ちゃんサロン」は着実に定着した。

(2) 特別期間

学校の季節休み（春休み、夏休み、冬休み）の期間及び児童福祉週間（ゴールデンウィーク）を特別期間とし、外部の企画なども取り入れ、斬新で多数の参加が可能な大型の催しを含む各種の行事を集中的に行ったほか、こども活動エリア入館券と劇場入場券を共通にし、来館者へのサービス向上と来館者の増加を図った。

夏休み特別期間に行われた、「人形劇見本市 ザ・人形しばい '93」（日本人形劇人協会と共催）、ギャラリー展示「世界の子どもたち アジアの仲間と遊ぼう」（ユネスコ・アジア文化センターほかの協力）、「AVフェスティバル '93 すばらしいアニメーションの世界」（キンダー・フィルムフェスト・ジャパン実行委員会が企画協力）など、外部の企画協力を得て「こどもの城」ならではのプログラムも活発に行われるようになった。

時間をかけて練り上げた造形事業部の大型プログラム「素材との出会い展 土と造形～パートII」など、8年間の実績と経験を生かした多彩なプログラムが展開された。

また、恒例の「渋谷スタンプラリー」が、「こどもの城」、NHK展示プラザ、東京電力の電力館、たばこと塩の博物館、東京都児童会館及び五島プラネタリウムの6館で、夏休みの特別期間中に実施された。

(ウ) 講座・クラブ活動

継続的、体系的に「こどもの城」を利用できるプログラムとして講座・クラブを実施し、その充実と活発化を図った。

講座は44種、89コース、受講者数2,400人、クラブは11種、12コースで会員数 930人にのぼった。また、夏休みや春休み特別期間には8種33コースの短期集中講座を開いた。このほか、専門指導者向けの講習会など6種、9コースも開催した。

平成5年3月に取りやめになった「シンセサイザー&コンピュータミュージック」に代わって、9月から「こどもの城」職員による「エレクトリック・アンサンブル」が開講された。また、本年度いっぱい、「ユースバンド」が初期の役割を全うしたとして講座を閉じた。

(エ) グループ活動

平日の午前中に、保育所、幼稚園、小学校などを単位とした児童及びハンディキャップを持つ児童グループの活動を積極的に受け入れ、年間62グループ(1,670人)を迎えた。

(オ) 劇場事業 (147～151ページに公演名一覧)

自主公演として青山劇場で1公演、青山円形劇場16公演を開催した。また、

劇場の貸与は青山劇場が21件、青山円形劇場が48件で、両劇場とも年間フルに使用された。

劇場の運営面でも、貸し劇場でのフル稼働にかけりが出てきたこと、企業のメセナ支援と公的助成金額の減少など、長引く景気低迷の影響が強くなり始めてきたことなどの困難な状況に当面する中で、自主公演や劇場経営の質・量の維持・充実に努めた。

(カ) 各種の普及・協力活動

〔こどもの城〕の活動の趣旨・内容を広く知ってもらい、関係団体との交流を進めるために各種の事業を行った。

主なものは、児童厚生員等実技指導講習会（5月・10月・1月）、小児肥満のための指導者講習会（8月・3月）、富山県こどもみらい館とこどもの城児童合唱団の交流会（8月）、ぐんまこどもの国児童会館の「あそびと造形発想展」（8月）、名取市館腰児童センターの開館記念プログラムに音楽事業部の“おんがくズキ”チームが出演（9月）などの実施に協力した。

2) その他の活動

前記の〔こどもの城〕の事業活動のほか、〔こどもの城〕の運営ならびに趣旨の普及・推進にとって重要な活動である下記の事業を行った。

- ①広報 ②国際交流 ③こどもの城友の会 ④こどもの城全国連絡協議会
- ⑤ボランティアの養成、実習生・研修生の受け入れ ⑥チャリティー事業 ⑦利用者サービス事業

5. 活動時間・入館料（こども活動エリア）

1) 平常期間

平日 開館（午後12時30分～午後5時30分）

土曜日	} 開館（午前10時～午後5時30分）
日曜日	
祝日	

月曜日 休館（祝日または振り替え休日に当たる時は開館＝午前10時～午後5時30分＝この場合は火曜日が休館）

2) 特別期間（学校の季節休み）

学校の季節休み（夏休み、冬休み、春休み）は特別期間とし、曜日にかかわらず、午前10時から午後5時30分まで開館し、特別プログラムを企画・実施

し、子どもや家族の期待にこたえるよう努めた。

夏休み期間（7月21日～8月31日）の休館日は7月26日、8月9、23日の3日間で、このほかの月曜日の振り替えとして、9月1～3日に休館した。

冬休みは、12月25日～1月7日で、12月28日～1月2日は休館とし、1月3日は12時30分に開館した。

春休みは、3月25日～4月5日で、全期間開館した。

3）特別期間（児童福祉週間特別行事等）

4月29日～5月5日のいわゆるゴールデンウィークには、厚生省、社団法人全国児童館連合会、〔こどもの城〕が共催して特別プログラムを企画・実施した。

横浜開港記念日（6月2日）、川崎市制記念日（7月1日）、東京都民の日（10月1日）、埼玉県民の日（11月14日）は午前10時に開館し、特別行事を企画して、来館者を迎えるようにした。

4）入館料

一	般	18歳未満	300円（保護者に同伴される3歳未満児は無料）
		18歳以上	400円
一般回数券		18歳未満	12枚つづり 3,000円
		18歳以上	12枚つづり 4,000円
団体		18歳未満	240円
		（20人以上）18歳以上	320円

5）その他

5月5日の「こどもの日」と11月1日の「こどもの城開館記念日」は、18歳未満の入館料を無料とした。

6. 活動状況一覧

1) 入館者数

	一 般 来 館 者			劇 場			そ の 他	計
	有	料	総 数	青山劇場	青山円形劇場	小 計		
4 月	大 人	(人) 10,281	(人) 32,244	(人) 35,560	(人) 6,069	(人) 41,629	(人) 18,050	(人) 91,923
	子ども	12,115						
	団 体	8,774						
	小 計	31,170	推計 (37,390)					推計 (97,069)
5 月	大 人	15,488	38,556	31,468	6,030	37,498	18,276	94,330
	子ども	14,304						
	団 体	4,272						
	小 計	34,064	推計 (45,688)					推計 (101,462)
6 月	大 人	9,289	20,905	24,679	6,211	30,890	22,433	74,228
	子ども	9,524						
	団 体	1,063						
	小 計	19,876	推計 (25,555)					推計 (78,878)
7 月	大 人	12,071	30,585	34,903	7,539	42,442	17,806	90,833
	子ども	14,016						
	団 体	2,881						
	小 計	28,968	推計 (36,627)					推計 (96,875)
8 月	大 人	22,850	61,258	35,413	4,894	40,307	11,833	113,398
	子ども	27,059						
	団 体	7,140						
	小 計	57,049	推計 (72,691)					推計 (124,831)
9 月	大 人	7,902	17,547	18,999	6,121	25,120	17,865	60,532
	子ども	7,400						
	団 体	1,234						
	小 計	16,536	推計 (21,505)					推計 (64,490)
10月	大 人	9,178	21,800	46,085	7,849	53,934	19,171	94,905
	子ども	10,411						
	団 体	875						
	小 計	20,464	推計 (26,397)					推計 (99,502)
11月	大 人	10,158	23,406	29,603	9,506	39,109	18,272	80,787
	子ども	9,975						
	団 体	1,951						
	小 計	22,084	推計 (28,490)					推計 (85,871)

	一 般 来 館 者			劇 場			そ の 他	計
	有	料	総 数	青山劇場	青山円形劇場	小 計		
12月	大 人	(人) 6,271	(人) 16,445	(人) 30,719	(人) 8,614	(人) 39,333	(人) 14,362	(人) 70,140
	子 ども	6,861						
	団 体	2,139	推計 (19,585)					推計 (73,280)
	小 計	15,271						
1 月	大 人	10,765	29,629	42,642	9,331	51,973	13,509	95,111
	子 ども	11,083						
	団 体	5,953	推計 (35,017)					推計 (100,499)
	小 計	27,801						
2 月	大 人	9,063	20,525	19,032	5,777	24,809	18,583	63,917
	子 ども	8,266						
	団 体	1,841	推計 (25,062)					推計 (68,454)
	小 計	19,170						
3 月	大 人	12,980	35,380	26,270	7,018	33,288	18,633	87,301
	子 ども	15,005						
	団 体	2,725	推計 (41,876)					推計 (93,797)
	小 計	30,710						
計	大 人	132,296	348,280	375,373	84,959	460,332	208,793	1,017,405
	子 ども	146,019						
	団 体	40,848	推計 (415,883)					推計 (1,085,008)
	小 計	323,163						



▲900万人目の入館者は、横浜市の前田浩彰くん（3歳）

2) グループ活動実施状況

			保 育 園	幼 稚 園	小 学 校	養 護 学 校	ろ う あ 学 校	盲 学 校	小 学 校 特 殊 学 級	中 学 校 特 殊 学 級	幼 児 教 室 ・ 研 究 所	自 主 保 育 グ ル ー プ	計
件 数			5	34	1	7		2	4	2	6	1	62
月 別 内 訳	4 月			5									5
	5 月		1	3							1		5
	6 月			3		1							4
	7 月										1		1
	8 月												
	9 月		1								2		3
	10 月			3	1	1							5
	11 月		1	4				1	2		1		9
	12 月										1		1
	1 月		1	6									7
	2 月		2	7		3		1					12
	3 月			3		2			2	2		1	10
地 域 別 訳	東京都 区市		4	33		5		1	1		6	1	51
			1					1	2				4
	他 府 県			1	1	2			1	2			7
参 加 児 童 数 別 内 訳	10未満			3		3			1	1		1	8
	10～19		3	4		3		2	2	1	3		19
	20～29		2	11		1			1		1		16
	30～39			6	1						2		9
	40～49			2									2
	50～59			3									3
	60～79			4									4
	80～99												
	100～149			1									1
	150以上												
参 加 児 童 数	延 べ 数		97	1,209	39	73		35	54	24	124	15	1,670
	1 件 当 た り		19.4	35.5	39.0	10.4		17.5	13.5	12.0	20.6	15.0	26.9
引 率 者 数 付 き 添 い 者 数			20	150 240	5	70		21 33	19 14	8 1	11	2 5	306 293
活 動 部 門	体 育		1	5		2			2		3		13
	プ レ イ		2	10	1				2	1			16
	造 形 楽			7		1					1		9
	音 楽		2	18	1	5		2		2	2	1	31
	A V			10					1	1			12
門	プ レ イ 自 由		4	26	1	3		2	4	2	3	1	46
	A V 自 由			2									2

3) 講座・クラブ等

(ア) 講座

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
体 育	幼児・母親水泳	幼児・母親	1 年 2 コース	60(組)
	幼児水泳	幼児	" 6 "	330(人)
	幼児体育	"	" 3 "	120
	小学生水泳	小学生	" 6 "	320
	シニア・スイミング	小・中学生	" 3 "	90
	シニア・スイミング・フレッシュ	"	" 1 "	30
	小学生体育	小学生	" 1 "	40
	小学生総合体育	"	" 1 "	40
	ジュニア新体操	"	" 1 "	35
	シニア新体操	小・中学生	" 1 "	35
	手足の不自由な子の水泳	小学生	" 1 "	15
	レディース・スイミング	女性	" 3 "	180
	レディース・リズム&ストレッチ	"	" 1 "	30
	幼児・母親体育	幼児・母親	3 か月 3 "	90(組)
	幼児リズム運動	幼児	" 3 "	90(人)
	母と子のすくすくランド	幼児・母親	" 3 "	60(組)
	母と子のパチャパチャスイム	"	" 3 "	90
プ レ イ	小学生パソコン教室Ⅰ (初級)	小学生	2 か月 2 コース	40(人)
	小学生パソコン教室Ⅱ (中級)	パソコンⅠ修了者	" 2 "	40
造 形	A. クレイワーク	小・中・高校生	1 年 1 コース	10(人)
	B. わくわくワーク	"	" 1 "	10
	C. ゆかいな造形	"	" 1 "	10
	D. えいぞうたんけん	小2・3年生	" 1 "	10
	E. ハンズワーク	小・中・高校生	" 1 "	10
音 楽	おながく星みつけた (就園前のリトミック)	幼児・母親	3 か月 3 コース	90(組)
	おかあさんもいっしょ (リトミック)	"	1 年 3 "	60
	リズムムービング	幼児	" 3 "	42(人)
	リズムムービング&パーカッション	小学生	" 1 "	20
	合唱	"	" 1 "	30
	ガムラン	小・中・高校生	" 1 "	10
	三味線	"	" 3 "	36
	和太鼓グループ「日本のリズム」	"	" 1 "	12
	集まれ・みんなのリズム	小・中学生	" 1 "	10
	エレクトリック・アンサンブル	小・中・高校生	7 か月 1 "	8
	おとなのためのガムラン	一般	4 か月 1 "	15
	混声合唱	高校生以上	1 年 1 "	15

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
国際交流	パフォーマンス・アーツ・グループ	小学生	1 年 1 コース	30(人)
研修教養	手話講座	高校生以上	5か月 2 コース	60(人)
	点訳入門講座	一般	1 年 1 "	30
	子どもの心を考える	"	" 1 "	60
保育研究 開 発	幼児グループ	幼児	1 年 1 コース	20(人)
	母子教室	幼児・母親	3か月 3 "	39(組)
	育児相談の研修会	育児相談担当者	3回/年 1 "	20(人)
	保育内容研修会	保育従事者	3か月 2 "	200
小児保健	健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉	小学生	1 年 1 コース	25(人)
	母と子のリトミック〈ダウン症児クラス〉	ダウン症児・母	" 1 "	15(組)
	講座「新しい時代の育児」	保母・保健婦等	2か月 3 "	60(人)
	マタニティスイミング	妊婦(16週～)	通 年 1 "	35
合 計	44種		89コース	2,727

(イ) クラブ

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
体 育	ダイナミック・ヘルス・クラブ	一般成人	通 年 1 コース	会員数 191(人)
ブ レ イ	パソコンクラブ	小・中・高校生	通 年 1 コース	100(人)
	キッズクラブ	小学生	1 年 "	30
	ユースクラブ	中学生	" "	40
音 楽	児童合唱団	合唱講座修了者	1 年 2 コース	90(人)
	ユースバンド	小・中・高校生	" 1 "	28
	ガムラングループ	ガムラン講座修	" 1 "	15
	パーカッション・アンサンブル	小・中・高校生	" 1 "	15
研修教養	L. I. T. (高校生ボランティア養成)	高校生	1 年 1 コース	30(人)
	点訳サークル	入門講座修了者	" "	30
保育研究 開 発	保育クラブ	幼児	通 年 1 コース	会員数 437(人)
合 計	11種		12コース	1,006

※講師により指導しているクラブについては、講座に準じた。利用型のクラブについては3月末の登録者数とした。

(ウ) 短期集中講習会等

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
体 育	夏休みこども集中水泳講習会	幼児・小学生	5日間 6コース	270(人)
	春休みこども集中水泳講習会	〃	〃 2 〃	90
	ガンバノ'93	小学生	〃 1 〃	30
	成人集中水泳講習会	成人	1か月 11 〃	220
プ レ イ	夏休みパソコン教室	パソコン教室ⅠⅢⅣ	3日間 1コース	15(人)
	夏休みパソコン教室 Ⅲ	パソコン教室ⅠⅡ 修了者	5日間 1 〃	20
造 形	夏休み造形教室	小学生3年生以上	2日間 10コース	100(人)
小児保健	夏休み健康教室(太りすぎ教室)	幼児・母親	3日間 1コース	20(組)
	8種		33コース	765

(エ) 専門指導者向け講習会等

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
A V	保育にビデオを活かすためには シンポジウム「アニメーションをつくる仕事, つたえる仕事」	保育関係者	3か月 1コース	16(人)
		映像関係者	1日間 1 〃	50
研修教養	児童厚生員等実技指導講習会	児童厚生員等	4日間 3コース	150(人)
保育研究 開 発	保育セミナー	保育関係者	2日間 1コース	150(人)
小児保健	小児肥満のための指導者講習会	小児保健関係者	1日間 2コース	100(人)
	小児保健セミナー		〃 1 〃	133
合 計	6種		9コース	599

4) 視察・見学実績

年 度		都道府県・市区町村 の本庁その他の行政 部局、公共団体		児童館、保育所、幼稚園、学校、施設、サークル、これらの団体		外 国 人		そ の 他		計	
昭和	60年度	(100)	1,122	(100)	1,578	(22)	169	(18)	410	(240)	3,279
	61年度	(121)	714	(192)	4,085	(52)	359	(31)	513	(396)	5,671
	62年度	(107)	439	(123)	2,437	(36)	347	(20)	477	(286)	3,700
	63年度	(91)	598	(69)	770	(30)	211	(32)	296	(222)	1,875
平成	元年度	(72)	541	(71)	931	(10)	86	(25)	195	(178)	1,753
	2 年度	(65)	605	(27)	292	(8)	156	(17)	212	(117)	1,265
	3 年度	(63)	417	(47)	705	(11)	77	(6)	274	(127)	1,473
	4 年度	(78)	585	(62)	1,038	(9)	122	(6)	35	(155)	1,780
平成 5 年 度	4 月	(1)	2	(2)	6	(1)	2	(0)	0	(4)	10
	5 月	(5)	12	(3)	206	(0)	0	(0)	0	(8)	218
	6 月	(6)	17	(3)	15	(0)	0	(1)	17	(10)	49
	7 月	(5)	20	(6)	126	(3)	58	(1)	4	(15)	208
	8 月	(1)	33	(4)	22	(0)	0	(1)	1	(6)	56
	9 月	(7)	70	(4)	192	(2)	10	(2)	3	(15)	275
	10月	(7)	194	(5)	27	(1)	20	(0)	0	(13)	241
	11月	(8)	99	(12)	165	(1)	8	(1)	4	(22)	276
	12月	(2)	4	(7)	241	(3)	8	(0)	0	(12)	253
	1 月	(4)	57	(2)	58	(2)	8	(0)	0	(8)	123
	2 月	(9)	59	(12)	80	(0)	0	(1)	2	(22)	141
	3 月	(14)	131	(15)	44	(1)	5	(2)	10	(32)	190
	合計	(69)	698	(75)	1,182	(14)	119	(9)	41	(167)	2,040
累 計		(766)	5,719	(766)	13,018	(192)	1,646	(164)	2,453	(1,888)	22,836

※(1)「外国人」：韓国、北朝鮮、中国、香港、台湾、タイ、ネパール、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドシネア、フィジー、スリランカ、インド、パキスタン、ビルマ、オーストラリア、ニュージーランド、ヴァヌアツ、ソロモン、キリバス、トゥヴァル、西サモア、バプア・ニューギニア、イラン、イラク、クウェート、イスラエル、イギリス、フランス、西ドイツ、スイス、イタリア、デンマーク、フィンランド、ソ連、チェコ、ポーランド、カナダ、メキシコ

(2)「その他」：中央官庁、中央団体、会社など

5) 事業経理収支計算書

収 入 の 部		備 考
款 項	5 年 度	
	5.4.1～6.3.31	
事 業 収 入	1,773,559,492	
管 理 運 営 収 入	129,541,627	入館料収入, 友の会収入 ほか
文 化 体 育 事 業 収 入	170,837,832	受講料収入, 集団利用料収入, 一般利用収入, 施設使用料収入 ほか
保 育 事 業 収 入	47,749,760	保育収入, 受講料収入 ほか
小 児 保 健 事 業 収 入	18,645,189	診療収入, 相談指導料収入, 受講料収入 ほか
劇 場 事 業 収 入	689,522,611	公演収入, 劇場使用料収入 ほか
利 用 者 サ ー ビ ス 事 業 収 入	707,168,073	宿泊収入, レストラン等収入 ほか
特 定 預 金 取 崩 収 入	10,094,400	退職手当引当預金取崩
繰 入 金 収 入	1,108,533,000	基金経理より繰入収入等
収 入 合 計	2,882,092,492	
支 出 の 部		
事 業 運 営 費		
役 職 員 給 与	733,451,565	役員報酬, 職員給与 ほか
諸 支 出 金	75,993,842	社会保険料事業者負担金
特 定 預 金 支 出	47,430,000	退職手当引当金支出
退 職 手 当	48,656,573	
非 常 勤 嘱 託 手 当	15,799,660	
業 務 諸 費	885,391,583	諸謝金, 旅費交通費, 事業庁費, 業務委託費 ほか
公 演 事 業 費	112,496,218	公演費, 公演諸費 ほか
舞 台 管 理 費	310,806,616	事業庁費, 業務委託費 ほか
利 用 者 サ ー ビ ス 事 業 費	518,008,424	営業費, 業務委託費 ほか
協 賛 事 業 費	2,739,202	協賛事業費, チャリティー事業費
こどもの城全国連絡協議会助成金	4,580,000	
支 出 合 計	2,755,353,683	

6) 1年の活動の歩み

月 日	事 項
平成5 2.18～	平成5年度〔こどもの城〕講座・クラブ受講生受付開始
4.1～5	春休み特別期間〈こどもの城の春休み〉 「春休みチャレンジゲーム」「春は元気に1・2・3」「オープンスタジオ こんなかお がおもしろい～面」「こどもの城映画劇場」などのプログラムを実施
4.	プレイホールの新しい遊具に愛称が「わくわくらんど」に決定
4.29～5.5	児童福祉週間特別期間（ゴールデン・ウィーク特別期間）＜ゴールデン・ウィークはもよ おしいっぱい＞ 「キャッスル・ファイト」「こどもフェスティバル」「宇宙ステーション“M96”宇宙へ の招待」「人形劇フェア」「親子であそぼう音楽広場」などのプログラムを実施。 ※5月5日の「こどもの日」は18歳未満の入館料は無料
5.1～5	児童福祉週間こどもフェスティバル（家族で楽しめる、入館券対応の青山円形劇場プロ グラム）
5.20～23	平成5年度第1回児童厚生員等実技指導講習会「学校5日制の拠点をめざして～児童館 を拠点とした屋外の活用法」（会場は東京YMCA山中湖センター）
5.23	〔こどもの城〕友の会のファミリーハイキング（千葉県・木更津海岸）
6.8～27	第6回「遊びと造形発想展 たしざん・かけざん」（ギャラリー）
7.13	平成5年度（第2期）〔こどもの城〕講座・クラブ受講生募集開始
7.20～8.31	夏休み特別期間＜夏 あそび 発見＞ 「パソコンで自然を知ろう」「AVライブラリー＜自然特集＞」「AVフェスティバル'93」 「素材との出会い展 土と造形パートII」「世界の子どもたち～アジアの仲間と遊ぼう」 「エンジョイ！ レク・スポーツ」「おはなし広場」などたくさんの方のプログラムを実施 野外活動として「スポーツキャンプ」「キャッスルキャンプ」「ちびっこ冒険団」「ジュニ ア・アウトドア・スクール」を実施
8.2～4	マリウス・ブティバ生誕175年記念「第8回青山バレーフェスティバル」開催（青山劇場）
8.5・6	児童館こども卓球大会（東京都公立児童厚生施設連絡協議会と共催）
8.9・10	第7回保育セミナー「ぐるみ子育て論 PartIII～家族を見直す」開催
8.10～12	カナダのアニメーション作家のディアンヌ・シャルトランさんを招いて、ワークショッ プを開催（「AVフェスティバル」）
8.10～15	人形劇見本市 ザ・人形しばい'93（20のプロ劇団による公演など）
8.11・12	こどもの城おまつり劇場 ※ゲスト出演＝11日 相模人形芝居（神奈川県立厚木東高校人形浄瑠璃部） 12日 沖縄の芸能（川崎市沖縄芸能保存会）
9.4	アレルギー講習会（小児保健部）
9.11・12	〔こどもの城〕友の会のファミリーキャンプ（南足柄市・どんぐりの家）

月 日	事 項
9.21～24	「子ども～アフリカの開発と未来」写真展とアフリカのこども絵画展（ギャラリー）
10.7～12.5	第7回青山劇場フェスティバル～夢みつづける力。6演目を上演
10.22～24	平成5年度第2回児童厚生員等実技指導講習会「児童館あそびのおもちゃ箱～レク技術の基本を考える」（会場＝〔こどもの城〕）
10.30～11.28	子どもたちのパソコンソフト作品展（パソコンルーム）／第8回造形スタジオ展（造形スタジオ）
10.31～11.3	開館記念特別期間 「チャレンジゲーム グーチョキパークへようこそ」「人形劇フェア」などのプログラムを実施
11.1	〔こどもの城〕は満8歳（11.3に開館8周年記念セレモニーを音楽ロビーで開催） ※18歳未満の入館料は無料
11.6	第8回小児保健セミナー「早期教育を考える 平成5年版・子育ての論点」
12.7	平成5年度（第3期）〔こどもの城〕講座・クラブ受講生募集開始
12.11・12	国際交流ファミリー・シアター100回記念公演「サンクス・トイボックス」（青山円形劇場）
12.18	開館以来の入館者が900万人を突破
12.25～平成6.1.9	冬休み特別期間＜あそび ポカポカ 冬休み＞ 「クリスマス人形劇フェア」「やってみよう！つくってみよう！～宝島へいこう！」「うたってポカポカ」「冬もガンバレ！ドッジボール」「お正月の遊び大集合～みる、つくる、あそぶ」などのプログラムを実施 館外活動として「ゆきんこ冒険団」「スキースクールⅠ」を実施
1.22	国際交流基金地域交流振興賞を受賞した「熊本たけのこ会」のみなさんが〔こどもの城〕を訪れ、プレイホールでマジックショーを披露
1.28～30	平成5年度第3回児童厚生員等実技指導講習会「豊かな感性を育てる造形活動をめざして～今ときあかす造形スタジオの謎」（会場は〔こどもの城〕）
3.3	こどもの城全国連絡協議会幹事会・総会を開催
3.13	水泳大会（体育事業部）
3.20	新体操発表会（体育事業部）
3.25～4.5	春休み特別期間＜あそび満開 春うらら＞ 「春休み人形劇フェア」「オープンスタジオ～造形宝島」「スポーツいっぱい！」「春休みチャレンジゲーム大会」「パソコンミュージック～音であそぼう」「不思議な映像実験室 光の魔法～ごく」などのプログラムを実施 館外活動として「スキースクールⅡ」「ジュニア・スキーキャンプ」を実施
3.26～28	ぼくらのサウンド'93（音楽事業部・青山円形劇場）

II 各部の活動(1)

1	体育事業部	29
2	プレイ事業部	47
3	造形事業部	61
4	音楽事業部	77
5	A V 事業部	91
6	保育研究開発部	107
7	小児保健部	125
8	企画部	133
9	劇場事業本部	147

1 体育事業部

(1) 5 年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
プール 一般開放	水曜日～金曜日 16:30～17:30 土曜日 13:30～16:00 日曜日・祝日 10:30～17:30	各曜日にそれぞれの時間帯で一般開放。入館料のほかに利用料18歳以上300円、小1～17歳200円、幼児100円。
体育室 一般開放 レクリエーション ゲーム ニュースポーツ ゲーム 卓球 ミニサッカー ユニホック	各第1日曜日と 前日の土曜日 各第2日曜日と 前日の土曜日 各第3日曜日と 前日の土曜日 各第4日曜日と 前日の土曜日 各第5日曜日と 前日の土曜日	週ごとに内容を変えて行っている。卓球の週は終日卓球のみ（混み合う場合は各グループ20分交代で利用）。他の種目は日曜日の①14:00～②16:00～の2回、土曜日の①14:00～の1回、練習とゲームを行い、それ以外の時間帯はフライングディスクの的当てとフリースローイングを行っている。 利用時間は土曜日が13:00～16:00、日曜日が10:00～17:00。
体力測定	土・日曜日・祝日	健康開発室で7種目9項目の体力測定を行っている。4歳児くらいから大人までだれでも利用できる、男女別に全国平均値と比べることができる。入館券のほかに、利用料1人100円。土曜日が①14:00 ②15:00 の2回、日曜日が①11:00 ②13:00 ③14:00 ④15:00 ⑤16:00 の5回。
グループ活動	毎週火・木曜日	午前中を使ってまとまった団体（グループ）を指導する。体育室を使っていろいろなプログラムを展開している。時間は10:00～12:00。（グループ活動の項参照）
体育の日ドッジボール	10.9～11	“的当てドッジボール”を中心にゲームを行った。
水泳大会	3.13	体育の講座受講者がエントリーフィー（1人2種目300円）を払い参加。年齢別・男女別で記録に挑戦。10:00～12:00に実施。
新体操発表会	3.20	新体操のクラブ受講生による演技発表会。新体操専用のマットを敷き、観覧用の席を設置。受講者の家族のほか、〔こどもの城〕来館者にも啓もうを含め開放している。時間は10:00～12:00。
小児肥満のための 指導者講習会	8.27, 3.11	小児保健部との協力事業。体育では運動指導や測定についてのレクチャー及び実践を行った。時間は10:00～17:00。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
〈春休み〉 卓球	4.1~5	ミニ卓球台や円形の卓球台などもあり，親子で楽しめるプログラム。
〈児童福祉週間〉 宇宙ステーション M96	5.2~5	体育事業部の宇宙体験コーナーでは宇宙飛行士になるための活動の体験や体力測定のほか，雰囲気盛り上げるため体育フロアの廊下を装飾し，宇宙のイメージを強調した。AV事業部との合同企画。
〈夏休み〉 ユニホック	7.21~25	室内で行う簡単なホッケーのゲーム。練習と試合を各時間に。
〈 〃 〉 ミニサッカー	7.27~30	体育室で行う室内サッカー。
〈 〃 〉 トランポリン	7.31~8.1	空中でのバランス感覚を養う，見た目よりはハードな運動。
〈 〃 〉 卓球	8.2~4,7・8	ミニ卓球台や円形の卓球台などもあり，親子で楽しめるプログラム。
〈 〃 〉 児童館対抗 卓球大会	8.5・6	東京都児童館連絡協議会との合同企画。小学生36チーム，中学生22チーム参加。
〈 〃 〉 ドッジボール	8.10~26	新企画。“中当てドッジボール”“的当てドッジボール”“普通のドッジボール”の3種類実施。
〈 〃 〉 フライングディスク	8.27~31	ボールとは違った浮遊感覚のあるフライングディスクを楽しむプログラム。
〈 〃 〉 健康教室集中講座 (幼児太りすぎクラス)	8.24~26	太りすぎの幼児（5・6歳児）とその親を対象とする太りすぎ改善のための集中講座。小児保健部との協力事業，体育指導を担当。
〈 〃 〉 ちびっこプール	7.21~8.31	夏休み特別期間中，5階屋上に仮設プールの設置，一般に開放した。
〈 〃 〉 こども一日ドック	7.22・23	小児保健部との協力事業。体力測定など，運動面の指導を担当。
〈開館記念〉 ドッジボール	11.3	“的当てドッジボール”を中心にゲームを行った。
〈冬休み〉 ユニホック	12.25~28	室内で行う簡単なホッケーのゲーム。練習と試合を各時間に。
〈 〃 〉 ジャンボすごろく	1.3~9	入門から横綱まで，相撲の出世街道を自分が“こま”になって進むすごろく。
〈春休み〉 フライングディスク	3.25~31	ボールとは違った浮遊感覚のあるフライングディスクを楽しむプログラム。
〈 〃 〉 こども一日ドック	3.30	小児保健部との協力事業。

名 称	期 間	備 考
プール 一般開放	特別期間中	各曜日各時間帯で一般開放。
体力測定	特別期間中	健康開発室で7種目9項目の体力測定。男女別に全国平均値と比べることができる。

3) その他（野外活動など）

名 称	期 間	備 考
スポーツキャンプ	7.26～29	小学生80人参加。新潟県 グリーンピア津南。
新体操 合宿	8.1～4	小・中学生20人参加。福島県 ルネサンス棚倉（水泳合宿と合同）。
水泳 合宿	8.1～4	小・中学生45人参加。福島県 ルネサンス棚倉（新体操合宿と合同）。
スキースクール I	12.26～29	小・中学生80人参加。新潟県 妙高高原池の平三つ山。
〃 II	3.26～29	小学1～3年生40人参加。新潟県 グリーンピア津南。

4) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
幼児・母親水泳A	(組) 幼児・母親 (30)	(組) ① 31 ② 31 ③ 27	水曜日 10:00～11:00	1・2歳児と母親の楽しい水泳教室。プールの中でともに泳ぎ水慣れと運動刺激が得られるようアレンジ。
〃 B	〃	① 33 ② 33 ③ 28	土曜日 〃	
幼児水泳	(人) 3・4歳児 (50)	(人) ① 32 ② 34 ③ 28	火曜日 13:30～14:30	プールでの活動を通して、水に慣れ、バランスよく水に浮く感覚など、水泳に必要な運動の基礎を身につける。
〃 B	〃	① 44 ② 44 ③ 48	水曜日 〃	
〃 C	〃	① 27 ② 24 ③ 21	木曜日 〃	
〃 D	4・5歳児 (60)	① 60 ② 54 ③ 54	火曜日 14:30～15:30	
〃 E	〃	① 40 ② 38 ③ 36	木曜日 〃	
〃 F	〃	① 44 ② 48 ③ 47	金曜日 〃	
〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	水慣れから発展してより高い質と量の練習を行う。個人差に応じた班分けで上級者はクロール、バックにも挑戦する。

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
幼児体育	A (人) 3・4歳児 (40)	① 33 ② 21 ③ 24	火曜日 14:30～15:30	たくさんの友だちと一緒に思い切り体を動かし、運動遊び、リズム遊びなど楽しく動きながら健康な体の基礎をつくる。
"	B "	① 29 ② 24 ③ 20	水曜日 "	
"	C 4・5歳児 (40)	① 37 ② 29 ③ 25	木曜日 "	
小学生水泳	A 小学生 (60)	① 74 ② 66 ③ 62	水曜日 14:30～15:30	生涯楽しめるスポーツ「水泳」を基礎から学び、標準4泳法をマスター。シニアスイミングへのステップアップを目標。
"	B "	① 66 ② 58 ③ 51	火曜日 15:30～16:30	
"	C "	① 77 ② 74 ③ 76	水曜日 "	
"	D "	① 74 ② 70 ③ 62	金曜日 "	
"	E "(40)	① 42 ② 45 ③ 42	木曜日 "	
"	F 小2以上 (40)	① 44 ② 40 ③ 36	火曜日 16:30～17:30	
シニアスイミング	小・中学生 A (30)	① 26 ② 31 ③ 21	火曜日 16:30～18:00	個別のメニューを組んでより速く泳ぐことにチャレンジする上級者向けのコース。泳力差によるクラス編成。バタフライまで進んで個人メドレーに挑戦。水球で球技も経験する。
"	B "	① 30 ② 27 ③ 25	水曜日 "	
"	C "	① 16 ② 16 ③ 16	木曜日 "	
シニアスイミング フレッシュ	小3～中3 (35)	① 35 ② 29 ③ 28	金曜日 "	小学3年生以上で泳ぎが不得意な人のクラス。クロールで25m以上泳ぐことを第一目標に、練習を進める。
小学生体育	小学生 (30)	① 26 ② 21 ③ 17	木曜日 15:30～16:30	多種多様な運動経験をする中で苦手な種目を克服する。
小学生総合体育	小1～3 (40)	① 21 ② 16 ③ 14	火・木曜日 "	週2回、プール（木曜日）と体育室（火曜日）でバランスのとれた総合的な運動経験から楽しさを知らせ、苦しさを克服する気持ちを育てる。
ジュニア新体操	小1～3 (40)	① 18 ② 14 ③ 14	水・金曜日 15:30～17:00	跳ねたり、跳んだり、回ったり、リボンやボールを使って楽しく身体を動かす。基礎的な運動も含めた新体操の初歩を指導。

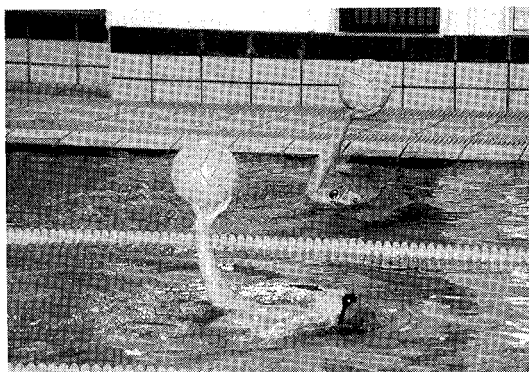
名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
シニア新体操	(人) 小3～ (35)	(人) ① 15 ② 14 ③ 15	水・金曜日 16:30～18:00	ジュニアから一歩進んで新体操独特の美しい表現ができるような練習。創作活動や発表会も開催。
手足の 不自由な子の水泳	小・中学生 (15)	① 15 ② 16 ③ 14	土曜日 17:00～18:00	身体に障害があり、水泳の機会に恵まれない小・中学生を対象にし、個人指導を中心に楽しく活動。
レディース スイミング A	女性 (70)	① 65 ② 60 ③ 44	火曜日 10:00～11:00	生活習慣の中に定期的な運動を入れることが健康づくりの第一歩。この健康づくりを主眼に4泳法の習得を目指す。
” B	”	① 66 ② 65 ③ 51	木曜日 ”	
” C	”	① 58 ② 49 ③ 46	土曜日 11:00～12:00	
レディース・ リズム &ストレッチ	” (30)	① 33 ② 27 ③ 27	水曜日 10:00～11:00	ゆったりと気持ちのよいストレッチと軽快なリズム運動、楽しく動きながら明日への活力を生み出す。
健康スポーツ教室	小学生(25)	① 25 ② 25 ③ 25	土曜日 16:00～17:00	小児保健部との協力事業。医師によるチェック、栄養士によるチェック、体育指導者による体力チェック、この3者が協力してトータルな活動を行う。
マタニティスイ ミング	妊 娠16週 以降の妊婦 (35)		火曜日 11:00～12:00 木曜日 ”	水泳プログラムを通して、妊娠中を楽しく過ごすためのクラス。医師が活動前後にチェックを行い、活動中も不測の事態に備えて常駐する。お産や子育てに関するレクチャーや栄養・心理の相談も受けられる。

<クラブ>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
ダイナミック・ヘ ルス・クラブ (D.H.C.)	成 人 メンバー ビジター 法 人 そ の 他	(人) 1年間 延べ 11,499 1,251 1,297 667 計 14,714	火～土曜日 12:00～13:30 18:30～21:00 日曜日・祝日 18:00～21:00	プール、体育室、ジムほかを利用。[こどもの城]が贈る、大人の時間。体力作り、健康管理のために最適な環境で楽しく活動。

＜講習会等＞

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
幼児・母親体育	(組) 2・3歳児 と母親 (30)	(組) ① 29 ② 30 ③ 28	水曜日 11:00～12:00	親子が体育室でリズムに合わせて跳ね、跳び、走るうちに運動神経を養い、楽しさを身につける。
幼児リズム運動	(人) 3・4歳児 (30)	(人) ① 13 ② 7 ③ 8	金曜日 14:30～15:30	リズムに合わせて運動体験。リトミックへ体育からのアプローチ。
母と子の すくすくランド	(組) お座りので きる子と母 親 (20)	(組) ① 19 ② 20 ③ 17	金曜日 10:00～11:00	はいはいから歩行へと成長していく時期の赤ちゃんを対象に、楽しい体操や親子での遊び、お母さんのシェーブアップも。
母と子の パチャパチャ スイム	1・2歳児 と母親 (30)	① 27 ② 16 ③ 7	金曜日 "	音楽に合わせて動物になったり、魚になったり、水慣れとともに母子のコミュニケーションを深める。
春休みこども 集中水泳講習会A	(人) 小学生(50)	(人) 50	4.1～5	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。
" B	幼 児(40)	42	"	
夏休みこども 集中水泳講習会A	小学生(50)	50	7.21～25	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。
" B	幼 児(40)	40	"	
" C	小学生(50)	40	7.31～8.4	
" D	幼 児(40)	44	"	
" E	小学生(50)	42	8.24～28	
" F	幼 児(40)	40	"	
ガンバ！'93	小学生(30)	30	"	体操の苦手な子の器械体操クラス



▲水球で球技も経験（シニアスイミング）

▼親子で輪くぐり（幼児・母親体育）



(2) 体育事業部の活動

体育事業部では一般利用、講座、グループ活動、ダイナミック・ヘルス・クラブを中心に野外活動や他事業部との協力事業を含め、多岐にわたる活動を行っている。本年度も昨年までの活動を下地に、内容の変更も含め強化を行った。

一般利用においては種目の見直しを図り、本年度の新しい種目を中心に活動を進めた。講座では指導体制の整備と人的な増強を図った。グループ活動は指導担当者の世代交代を行うための引き継ぎ期間とした。

一般成人を対象とするダイナミック・ヘルス・クラブ（D. H. C.）ではプログラムの種類の多様化を維持しながら、平成6年度から変更予定であるD. H. C. の受付業務を（現在はアトリウムで行っている）、体育事業部単独で管理するための準備を始めた。以上、主要活動それぞれに、充実を目指している。

1) 一般利用（平常期間）

定期的な利用ができる講座受講者や近隣に住む人々はもちろんのこと、年に数回程度の来館者に対しても、運動の楽しさを伝え、感激を味わってもらえるように工夫している。

また、親子関係の大切さが叫ばれている昨今、親子が運動を介してふれあいを持つ場を提供することも重要なポイントだと考える。これらの考え方を中心に、一般利用のためのいろいろなプログラムを企画し、対応している。

平常期間の一般利用は、昨年同様、プール、体育室、健康開発室を利用した土・日曜日・祝日の一般開放を中心に行った（平日の一部分にも、プールを一般開放）。本年度から新規のプログラムとして登場したフライングディスクとドッジボールは分かりやすく楽しめるので好評であった。

また、今まで単発であった日曜日のボランティア活動が定期的になり、毎回3・4人のボランティアリーダーが活動を行った。活動内容としては主に職員が行う指導プログラムの援助である（指導者の指示を聞いて子どもに先んじて行動し、見本になってもらったり、



▲新規プログラムの“的当てドッジボール”

子どものチームに入り手助けをしたり、指揮を取りながら試合をしたり、ともに汗を流しながら積極的に取り組んでくれた)。

子どもたちにとっては、より自分たちに近い存在であるボランティアリーダーと一緒に活動できることで、運動をまねしやすく、早く覚えて生かしやすい環境が整うことになり利点は多い。また、幼児から中学生までと一緒に活動するという難しい場面において、安全面やプログラムへの参加促進など、子どもたち1人1人に細かな声かけを行い、より楽しい時間を作りだしてくれた。

ボランティアリーダーにとっても、高学年の子どもたちとスポーツを通じて自分の人間性を開放しながら付き合うことは貴重な学習の機会でもあり、非常に有意義な活動であったようだ。今後、より積極的に、創造性にあふれたボランティアリーダーの活動を生み出すためにも、職員と彼らが良き信頼関係を結びながら、子どものための活動を構築していく場を提供できればと考えている。

2) 一般利用 (特別期間)

(ア) 児童福祉週間 (ゴールデンウィーク)

児童福祉週間には例年どおりプールの一般開放を行った。また、体育室ではA V事業部との合同企画「宇宙ステーションM96 (マックロー)」と銘打った、ロケット、スペースシャトルの模型や写真と使用した品々などの展示、映写会、講演会を主催(A V事業部)。宇宙体験コーナーでは、宇宙飛行士になるための疑似訓練や体力測定をしたり、廊下の装飾を行った(体育事業部)。

廊下の装飾はブラックライトと蛍光カラーを利用し、宇宙ステーションから見た宇宙がテーマ。展示会場は空のイメージでブルーに染めた布、体験コーナーはカラーロープをそれぞれ天井や壁からつるすなど宇宙空間のイメージを意識した。これらは講座指導の合間を縫って職員総動員で行ったもので、今までの体育事業部にはない大掛かりなものになった。

体育室では、キャプテン・マックローの案内のもと、次の各種トレーニングを行った。円の中で8回転した後まっすぐ歩く訓練は、ここで体験できる酔ったような感覚を取って「宇宙酔いトレーニング」と名付けた。厳密には宇宙酔いではないが、子どもたちははしゃぎながら行っていた。また、天井からつるしたゴムの束にぶら下がり、空中散歩を体験する「無重力トレーニング」は、ゴムのスベアをたくさん用意したり(期間中の交換が必要ないほど耐久性は高かったが)、子どもたちの足腰と胸にハーネス(体を固定するためのベルト)を付けてカラビナ(専用の金具)でザイルに固定するなど、安全性に気を配りながら行った。軽くけるだけで跳び上がる半面、バランスが取りにくいので皆、楽しく苦勞していた。

小さい穴をのぞき、視野が狭いという条件の中で、その前を通る物体を見分

ける「動体視力トレーニング」は集中力も同時に試されるが、子どもたちは意外に正確に当てていた。「船外活動トレーニング」はモニターテレビに映った物体をマジックハンドを使って移動させる内容であったが、カメラが間に入ることとで大人でも距離感が合わず苦戦していた。子どものほうが順応性が高く、すぐに慣れて器用に行っていたのが印象的である。

健康開発室では宇宙飛行士に必要と思われる体力（視力、身長、体重、全身反応時間、握力など）の測定を行った。期間中は無料ということも手伝ってか例年の3倍ほどの利用者数になった。

(イ) 夏休み特別期間

今年はドッジボールのバリエーションをメインに据えた。一般的なドッジボールに加えて、スタッフが考えた“中当てドッジボール”や“的当てドッジボール”で楽しんだ。いずれも本年度初めて試みた種目である。

ドッジボールという種目自身はゲームとしてよく認知されており、子どもたちも素直に対応し、スムーズに運営ができた。また、ルールを変え条件を付けることで年齢の区別なく楽しめるものになり、子どもたちのゲームへの取り組みが意欲的になることがみられた。例えば普通のドッジボールでは逃げてばかりいる子どもが、“的当てドッジボール”において、的を守るためにボールを捕りに行く気持ちが出ることなどがあげられる。

フライングディスクはボールゲームと違った感覚であり、普段の慣れや親しみが薄い割に参加しやすいようであった。的当てとディスクゲーム（主にアルティメットというディスクをパスでつないでゴール内の味方に渡すゲーム）を中心に進めた。ゲームではボールに比べて、ディスクの滞空時間は長く、落ちて行く時も放物線をゆっくり描く。この飛び方が予測ができるようになると捕りやすく、他のボールゲームとの隔たりもあまり感じずに行えた。

トランポリンは人気が高く、ここ数年夏休みには連続して行っている。空中でバランスを取ることが難しく、また、以外に運動量が多い。楽しみながら汗を流すことになってしまうスポーツである。幼児は小さなトランポリンを使用しているが、小学生以上は、トランポリンの選手権大会にも使用される本格的なものを使用している。

児童館対抗卓球大会は、昨年同様小学生36チーム、中学生22チームが参加して行われた。1日目は小学生、2日目は中学生



▲夏休み特別期間恒例のトランポリン

の試合と小学生の準決勝、決勝を行った。今年は審判を他のチームの子どもが行うようにして、より交流の場としての機能を持たせるようにした。今後も児童館の交流を重視した大会にしていく必要がある。

小学生の優勝は杉並区の桃井児童館、2位北区十条台児童館、3位北区豊島児童館、4位杉並区高円寺南児童館。中学生の優勝は武蔵村山市の中藤地区児童館、2位中野区大和児童館、3位は杉並区東原児童館、4位は羽村市の中央児童館であった。

プールの一般開放は昨年同様、5階屋上の特設ちびっこプールと、地下2階のプールの2か所で行った。水遊び中心の幼児や低学年の子どもたちは5階、しっかりと泳ぎたい高学年以上から大人は地下2階へと設定どおりに自然な流れができ、お互いに使いやすくなっていた。ちびっこプールは冷夏のため利用者数は低迷したが、10,000人近くが利用した。小さな子どもたちが安全にまた自由に水に親しみ、遊びを見つけだすことができる夏の遊び場の1つとしてこれからも施設の充実を図っていきたい。

(ウ) 体育の日及び開館記念特別期間

夏休みから続けているドッジボールをここでも行った。学校で経験している子どもが多いためか、館内放送を聞いて駆けつける子どもが大勢集まって活気のある内容になった。的当てドッジボールも知る人が増え、スムーズかつハードな展開が見られた。

(エ) 冬休み特別期間

体育事業部ではプールの改修工事を冬休み期間中に初めて行った。このため、プールの一般利用ができなくなり、体育室のみの利用となった。

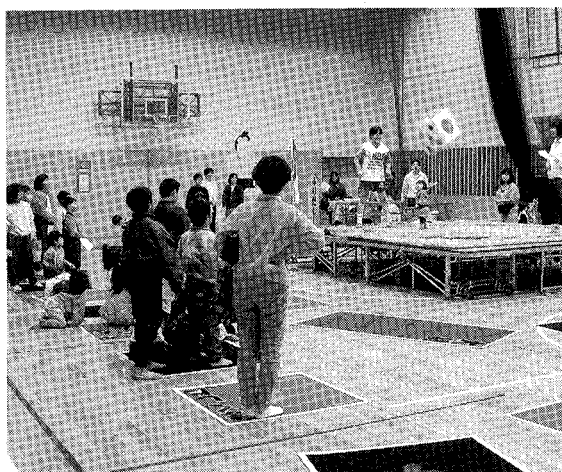
企画部が提示した「昔あそび」をテーマにしたジャンボすごろくは、自分自身が“こま”になり、さいころの目に従って進んで行く内容。相撲の出世になぞらえて、入門から横綱までの道のりを再現していく。止まった場所それぞれに運動的な要素を含んだ種目を楽しく行えるように配慮した。

運営面では受付後自由にゲームができる時間帯と、参加者全員で一斉に始め、上がりを競う時間帯を設けた。時間帯で内容を分けたことはプログラムにメリハリがついたことと、初心者同士で楽しめることができた点で効果的であった。参加者は家族単位での参加が非常に多く、両親が積極的にプログラムに取り組む光景は、[こどもの城]におけるプログラムには少ないものであったと思われる。問題点としては、小学生以上を対象に考えていたため、幼児には表示の理解が難しくなってしまった点、また、実施予定7日間の参加見込みを2,000人程度と考えていたが、かなり下回ってしまった点があげられる。参加者数については、来館者自体が少なかったことにも増して、3・4・5階との動線の悪さと、ポスター、館内放送などの広報の問題もあると考えられる。これ以外の

活動は通常期間にも行っているユニホックを行い、好評であった。

(オ) 春休み特別期間

フライングディスクを一般利用の時間帯に行った。2時と4時にはパスをつないでゴールを目指す、アルティメットという種目を中心にゲームを行った。初めて経験する子どもたちもすぐに慣れて、試合中の運動量はだいぶ多くなっていた。



▲相撲の出世になぞらえてジャンボすごろく

3) 講座・クラブ

体育事業部の中心となる活動の講座・クラブは、各曜日、各時間ごとに担当者を決め、それぞれの得意な運動種目を生かした味付けで行うなどの特徴を出しながら、幼児・小学生を中心としたプログラムを展開させている。

今年は、前年度までの参加人数の低迷からマックロー・スポーツクラブを廃止した。

(ア) 幼児・母親水泳と幼児のプログラム

「幼児・母親水泳」はやや参加者が減る傾向にある。しかし、参加者は子どもが母親を信頼していて、慣れないプールを嫌がらなかったり、怖くても母親と一緒に水の中に潜ることができたりするなど、母子関係の強さを感じる反応で元気よく参加していた。

「幼児水泳」の3・4歳児クラスは学期始めに泣く子どもも多いが、親が粘り強く続けて講座に連れて来ると、ほとんどの子どもは水中での活動を楽しむようになってくる。幼児のクラスは子どもの頑張りもさることながら、親の理解と協力も大きな要素になっている。

幼児の水泳では単に泳法の修得だけでなく、陸上と同じように水中でも楽しく活動できるように指導している。このためか全体にゆったりとした雰囲気の中で授業が行われている。水を怖がったり、泳ぐ前の段階でつまずき、他のスイミング・スクールに合わない子どもが移ってきた例も多い。逆に進み方が遅いという理由でこちらから他に移る子どももいるが、目指す目標は水泳の技術と体力の向上を図るという点では、他のスイミング・スクールとはほぼ同じである。運動が苦手な子どもから指導ができることを生かしこそすれ、運動が得意

な子どもが物足りなくなる内容ではない。

「こどもの城の体育プログラムは苦手な子どもだけを対象としている」というような、予期しない評判が独り歩きしないためにも的確で継続的な広報が必要だと感じる。

(イ) 小学生のプログラム

水泳講座は初心者から上級者まで入ることができる「小学生水泳」の6クラスと中級者以上の「シニアスイミングA」、上級者対象の「シニアスイミングB・C」、3年生以上の初心者からのクラスである「シニアスイミングフレッシュ」に分かれている。幼児プログラムからの継続者を中心に、外部からの入会希望者も多い。

今年は現在のプログラム内容をより充実させるため、見直しを図った。指導期間3・4年を一区切りとして、今まであったカリキュラム上の問題点（クロール中心で他の泳法は中級者以上から行うなど）や考慮すべき点（泳力進歩の度合い）を変えた。また、平泳ぎやバタフライを運動の1つとして早くから指導内容に取り入れるなど、改革への第一歩として動き始めた。これにより、指導者の目的も明確化され練習内容にも変化がもたらされた。

「シニアスイミングA」は、小学生水泳からの移行の場でありかつ「シニアスイミングB・C」へのステップとしての役割もあるため、基礎体力の向上と4泳法（クロール、バック、ブレスト、バタフライ）の完成を中心に行った。「シニアスイミングB・C」に移動する子どもが増えている。

「シニアスイミングフレッシュ」は高学年で水泳の苦手な子どもでも、積極的に参加できるクラスであるが、より開けた雰囲気作りを目指し、90分の練習と相まって上達の度合いが大きかった。

「シニアスイミングB・C」は〔こどもの城〕の水泳クラスでは一番強く高い能力を持つ子どもたちが参加している。精神面の強さを要求されることや、学年も高いため学校から帰る時間が遅く、練習時間があまり取れない子どももいて、進歩の度合いにかなり差がでている。

「小学生体育」などの体育講座は指導種目の研究が進み、指導方法などにも厚みが出てきているため、受講者個人それぞれに伸びが見られた。

「幼児体育」は遊びから運動への移行を中心に行ったが、特に4・5歳児のクラスでは走ることをベースに器械体操的なことと球技を楽しくできるようにした。球技は毎回サッカー、ユニホック、フライングディスクを行い、チームで協力できるようにするなど、さまざまな体験をさせる中で基礎的な身体の使い方や体力の向上を目指している。

「小学生総合体育」はプールとフロア（体育室）の双方の活動を生かし、身体活動を総合的に向上させるねらいである。体操では体力の向上を中心に基礎

的な技術の習得を、水泳では泳力のレベル別に分かれて個人のレベルアップを目指した。数年続けて参加している子どもたちは体力・技術ともに進歩している。

「ジュニア新体操」では、巧み性、柔軟性、瞬発力、持久力などを養い、新体操特有の美しく動くための意識を育てながら、練習を通して身体を動かすことの楽しさを知らせる。また、自主性を持って参加するよう促す。「シニア新体操」ではジュニアから一歩進み、自分で動きを作り出す“創作力”やイメージを正しく表現する“表現力”、“忍耐力”や“自主性”，グループでの動きをまとめる“協調性”など高い次元で身につけることが目標。

ジュニア、シニアともに当初の目標を達成できたが、講座の人数が減ったため活気に欠け、雰囲気の上昇がいきなり足りなかった。来年度は底辺をより大事にまた、拡大を図るため、ジュニアの指導に力を入れていきたい。

「手足の不自由な子の水泳」ではボランティア・リーダーと一緒に、自分に合った泳ぎを見つけることから始め、浮き身・背浮き、そして独りで立つことができるようになり、泳ぐ練習に入っていく子どもが多くなった。特に小学生水泳のクラスに変更して続けている子どもが出てきたことは特記される。

(ウ) 水泳大会と新体操発表会

講座・クラブ参加者を対象に行っている水泳大会と新体操発表会は毎年趣向を変えながら3学期に年度のまとめとして行っている。今年もそれぞれに成果が現れた。

水泳大会は、昨年までは水泳講座とは独立した色彩が強く、講座生自身の水泳大会に対する意識も希薄であった。そこで今年は「講座の一貫としての水泳大会」という位置づけで講座内容に反映させ、父母を含めた講座生たちに我々の目的と意識を知らせることにより参加者増をねらった。この結果「泳げる人の水泳大会」から「チャレンジの場としての水泳大会」に変えることができ、参加者総勢 250人という活気のある大会になった。

また、大会を目的とした雰囲気作りが普段の講座に対する、より積極的な参加を促し、大会後にはその経験が練習にフィードバックされるなど、大会・講座ともに充実した結果となった。

新体操発表会は、魅せるスポーツ「新体操」を体験する絶好の機会である。子どもたち1人1人が出演することで本来の良さを味わうことができる。講座生の家族にとどまらず一般の人たちにも観覧していただき、一層の理解を深めてもらう。特に今年は初の試みとして幼児体育講座の有志による体操を組み込んだ。

当日は観客数も多く講座のOGや日本女子体育大学新体操部の学生2人の演技もあり、活気のある中で進んだ。何よりも父兄の協力のもとで行えた幼児た

ちの体操は、なんともほほえましく発表会を和ませてくれた。幼児の体育室での講座紹介とともにジュニア新体操への橋渡しの意味でも有意義であった。

(エ) 成人のプログラム

現在成人向きで年間を通じた講座形式をとっているプログラムは、健康作りとシェープアップを中心としたレディース・エクササイズ・コースのみで、水泳3コースとリズム&ストレッチ1コースの2種類、4コースから2つまで取れるようになっている。このほかに、妊娠16週以降の妊婦を対象に月単位で実施しているマタニティスイミング（小児保健部との共同事業）がある。

スイミングの希望者は昨年同様に多く、ほぼ定員で実施。成人集中水泳とともにレディースからもダイナミック・ヘルス・クラブへ移行する流れが徐々にでき、各個人の健康作りに貢献できているようである。

リズム&ストレッチは、昨年から1クラスになった後はほぼ定員で活動しており、充実した内容の講座を実施できた。

マタニティスイミングは妊娠週数や泳力が異なるので個々に対応するのは困難ではあるが、水を利用した運動で出産までのマタニティライフを楽しく充実させたり、体力の維持を図ったり、精神面の安定や妊婦に起こりがちな腰痛、肩こりの解消を目的にして活動している。また、冬期には寒さのためか、参加人数が減る傾向にある。しかし、参加している人は積極的でとても良い雰囲気の中で行った。

4) 講習会

「幼児・母親体育」「母と子のすくすくランド」「こども集中水泳」などの講習会は1年間を通じた発想でなく、5～10回で完結する考え方で行う。開始時期までに対象年齢に達していれば参加できるので、講座に入る前に経験したい人や地域的に通い切れない人なども参加できること、指導者を変えたり内容に変化をつけやすいことなども利用して講座には無い特徴を出すようにしている。「母と子のすくすくランド」は、お座りができるぐらいの乳児が歩行までの運動（特にはいはい）を自発的にたくさんできるようにしたり、幼児期に向けての精神的、体力的な土台作りをしたり、また母子のスキンシップと母親の体力維持などを図ることをねらいとして活動している。最近の母親の傾向として、ねらいを理解し、成果を上げようとする努力が見られるのはもちろんだが、母親の勉強の場としてよりも、サロンとして仲間作りの場と考える傾向も見られる。

講座終了後2・3か月には体育事業部主催で子ども及びその両親が集まり、思い出会として近況報告やゲームなどをして過ごす。ここでは、活動中に撮ったビデオを上映し、変化の大きなこの時期の記念として配布している。1時間半程度の会だが、父親の子育て論を聞くなど講習の中だけでは分からない部分

が垣間見えることもあり、指導者としてはこのような点も重視したい。

「幼児・母親体育」は、体育室で2・3歳の幼児と母親を指導。ピアノを多用し、リトミック的な内容と親子体操を中心に多種多様な運動を経験できるように考えた。子どもだけ、親子一緒、親中心の3種類に大きく分けて活動を行っている。親から離れる練習も続けていたので、数メートル離れたただですぐに後を追っていた子どもたちも少しずつ平気になり、体育室いっぱいに広がっても不安になる子どもは少なくなった。

「母と子のパチャパチャスイム」は、泳ぐことにこだわらず、水慣れを中心に母親とのふれあいや新たな関係づくりを目指した。1・2歳と変化の大きい年齢を対象にしているため、1歳児ではプールフロア（水深を調整するための台）1段に立てない子どもがいる反面、2歳児はどんどん独りで歩ける子どもがいるなど、個別に対応が必要であったが、最終回にはかなり水慣れが進み、差が縮まってきた。

「幼児リズム運動」は、ここ数年人数が安定せず、今年も10人に満たない学期があり、閉講の話が持ち上がっている。講座内容としては、人数が少ないため集団での良さは半減するものの、逆に子ども同士のかかわりや指導者と子どもとの関係が深くなり、アットホームな内容で行うことができた。

夏休みと春休みに行っている「こども集中水泳」は、普段の講座プログラムとは全く違う5日間連続という特徴を生かした内容で、学校授業の水泳とのバランスをも考慮した。このため、目標をはっきり打ち出すことができて、短期講習会の特徴を表すことができた。

5) 野外活動

明るい太陽の下で身体を動かし汗を流すことは、子どもにとって必要な経験である。運動技能や体力の向上を目指すことはもちろんだが、心を開いて仲間とのかかわりを持つことも重要であろう。季節に応じた内容で子どもたちに幅広い体験をさせたいと考えている。

夏には「スポーツキャンプ」「新体操合宿」、冬や春には「スキースクール」などを実施している。

「スポーツキャンプ」は昨年同様、球技中心で一般からの参加者を多くすべく、アウトドア指向も強く打ち出した。球技は主にサッカーを行い、学年別や男女別で練習内容と強度を変えながらより効果的な活動を目指した。また、ユニホック、フライングディスク、キックベースなどの中から子ども自身が1種目を選んで参加する形式で、楽しむこともできた。

雨雲のいたずらでナイトハイクや星座、流星群の観察は予定とは多少ずれたが、プログラムはすべて行えた。食事は今年も調理スタッフによる手作りで、

バイキング形式のパーティーも豪勢に行い、子ども、スタッフともども楽しんだ。

昨年までの「スポーツキャンプII」は、今年から「水泳合宿」として講座に参加している子どもたちを対象にした。ある程度泳力のある者を中心とすることによって、より一層の技術の向上を図っている。天候にはあまり恵まれなかったものの、参加者の意識の中にキャンプとは違うものを感じることができた点と個人個人の技術向上については特筆できる。

「新体操合宿」も昨年同様「水泳合宿」と同時に行った。目標として集中的に練習を行うことにより講座ではできないレベルの活動を経験、習得する。また、生活面、精神面での自立を促し、集団活動により協調性を養う——という項目を上げて開始。参加者1人1人が記録ノートを作り、新体操の勉強や練習内容を記録。小学1・2年生には少し困難な点も見られたが、上級生の手伝いもあり、全員が完成させた。ジュニアは集中的な練習ができたため、個人個人の精神面も含めた成長が見られた。シニアでは各自演技を創作して発表することができ、合宿の成果としては上々であった。

「スキースクールI」は高学年が多く、スキーレッスンを中心に置いたため、昼間の指導にプラスしてナイタースキーを取り入れたり、ミーティングもスキー色で行いスキー漬けの生活を送った。レベル別の班に分けた指導は、集団での指導の良い面が出て、班全体でのレベルアップが見られた。もちろん、参加者各自の技術向上は今まで以上に図られ、意識の上でもスポーツとしてのスキーが確立できたようである。

「スキースクールII」は、小学校1・2年生が中心。少人数でもあり雪遊びとスキーレッスンを通して自然との触れ合いを楽しんだ。スキー初体験の子どもたちもすぐに慣れ、楽しみながら練習ができた。生活面ではコテージを使用したため、一軒丸ごと自分たちの世界という設定になり、子どもたちにとっては魅力的で、想像力をかきたてるものとなったようである。カウンセラーを務めたボランティアリーダーにとってもグループの動きを把握しやすく、1人1人の子どもに適切なアプローチができたようだ。

雪や氷とろうそくを利用した雪見燈籠（とうろう）作りや雪上でのキャンプファイヤーは楽しく、スキーの場面では消極的になってしまう一部の子どもたちも積極的に取り組み、グループ活動の促進にも一役買うほど好評であった。

体育事業部、研修教養部、プレイ事業部の3部合同企画「ジュニア・スキー・キャンプ」は、初めての試みである。竜王のゲレンデはリフトの連絡が悪く、ゲレンデを横切らなければならない場所が多かったが、上下のエリアは分かれているのでゴンドラで上に行くことがうまく目標になっていた。

夜のプログラムはナイトゲーム、スタント大会など盛りたくさんであったが、

少しプログラムが多すぎた感は否めない。縦割りの生活班は班長がよくまとめている低学年の子どものめんどろはよく見られていた。

6) グループ活動

〔こどもの城〕の機能と内容を知ってもらうため、事前に参加するグループの目的や人数を把握して、午前中を利用して行う。ここでは、準備を含めて打ち合わせができていたため指導内容も思い切ったことができ、一般利用ではできないことを経験してもらえる。また講座やクラブとは異なる指導方法が必要になるので、職員の手腕をふるえる場としても期待している。

体育事業部では担当者が利用グループと打ち合わせを行い、そのまま指導も行っている。先方との意識のずれがでにくい方法を取っていたが、本年度は担当者を変更するために途中から引き継ぎを行い、打ち合わせと指導が別人になった。

今年も実施件数は減少。中身は小学生が減り、幼児、障害児が多くなるという近年同様の変化である。担当者会議では今後のPRについても話し合った。

7) ダイナミック・ヘルス・クラブ (D. H. C.)

〔こどもの城〕の大人のクラブであるダイナミック・ヘルス・クラブは、子どもの利用が少ない平日の昼とこども活動エリアが終了した後の夕方に、地下2階のプール、体育室、トレーニング・ジムなどを活用して行っている。このクラブ活動の場では、大人の健康作りを主眼として考え、個人会員、法人会員、ビジターなどいろいろな方法で利用できるようにしている。

今年は来年度の機構変更（機動力を高めるため、体育事業部単独で受付や会員管理を行えるようにする）のための準備を始めた。企画部のスタッフなどにも協力をあおぎ、銀行の振替による利用料徴収方法の検討やクラブ規約のまとめ、印刷物の発注など、多岐にわたる準備作業を行った。アトリウムに代わり、会員管理を行うためのコンピュータ利用もソフトの選定から始めるなど、ゼロからのスタートであった。

8) その他の活動

(ア) 協力事業

「こども一日ドック」「マタニティスイミング」「健康スポーツ教室」「夏休み健康教室（幼児）」「小児肥満のための指導者講習会」（以上小児保健部）「ジュニアスキーキャンプ」（研修教養部・プレイ事業部と合同）などを行った。

(イ) 研究活動

本年度は各学会ともに発表はせず、見学での情報収集を行った。また、著書

においては、運動をはっきり捉えてもらう必要性からVTRを使用したものを
出している。

【著書(VTR)】

「肥満を解消・予防する子どもの健康体操」 3・4歳向き

「 ” ” ” 」 5・6歳向き

「幼児の肥満もらくらく親と子の健康体操」一般・保護者向き

監修・指導・出演 羽崎 泰男 (体育事業部長)

推薦・出演 村田 光範 (東京女子医科大学第2病院長)

体操指導・出演 海老沢 孝子 (フィットネスインストラクター)

製作・販売 (株)青春出版社

9) まとめ

今年の講座も安定した人数で推移しているが、講習会の参加者数は昨年同様、
学期ごとに多かったり少なかったり、不安定になっていた。来年度に向けては、
指導形態を含めた活動内容の見直しとともに、より魅力のある活動を目指して
努力したい。

一般活動は今までになく大掛かりな準備が必要な内容と、今まで同様1日の
うちに数種類の利用形態がある条件の中で準備に時間がかからない内容とに大
きく2分された。それぞれの良さを大事に生かしていきたい。

ダイナミック・ヘルス・クラブの新規会員および継続者の定着化はある程度
の効果はでているが、数年前に比べ新規入会者数が半減しており、積極的なP
Rが必要であると感じている。法人会員の増加も昨年同様満足のいくものでは
なかった。また、時間帯も対象年齢も幅の広い設定で動いている体育事業部と
しては、子どもを対象とする活動はもちろんのこと、大人についても積極的に
取り組むことが重要であるとする。大人を対象とする活動についての環境整
備とともに、高齢者向けのプログラムの開発なども徐々に考える必要性が高ま
っている。

2 プレイ事業部

(1) 5 年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
おはなし紙しばいの 集い	毎週火曜日 15:00～15:30	青年・女性ボランティアを中心に34回実施。子どもとのかかわりを大切に、毎週2・3本の紙芝居を読んだ。紙芝居を読むことだけにこだわらず、見ている子どもと会話をしながら進めていくように心掛けた。常連の子どもも増え、年間を通して彼らの成長を見る貴重な経験を得ることになった。
おはなし人形広場Ⅰ	毎週水曜日 15:00～15:30	人形劇、影絵、パネルシアターのボランティアグループとスタッフによる運営。毎週違う種類の劇を楽しんだ。ただ“観る”のではなく、演じ手の呼びかけにより歌を歌ったり、掛け声をかけたりと、参加性の高い内容を多く取り入れた。広場の終了後は指人形で遊ぶ親子が増え、日常遊びに根ざすことができたようだ。
おりがみ遊び広場	毎週木曜日 14:00～15:00	女性・青年ボランティアの協力を得て38回実施。本年度は折り紙を楽しく折ること、完成した折り紙で遊びを深めることを目指した。みんなで作る壁飾り、季節のグリーティングカード作り、さまざまなごっこ遊びなども試みた。また、折り紙で季節の装飾を年5回作成し、プレイホールに彩りを添えた。
おはなし人形広場Ⅱ	毎週土曜日 14:00～14:30	土曜日の「おはなし人形広場Ⅱ」は外部の人形劇団体に依頼して行っている。毎回、親子でゆったりとした空間の中で人形劇を楽しむ姿が見られる。第2土曜日には学校が休みのため、小学生の参加が多く、客層にも幅がでてきた。
プラモデル 模型工作教室	毎週日曜日 10:30～12:30 (4～7月)	本年度は計10回開催、延べ216組が参加。プラモデルを中心とした工作を通し、制作の工夫や完成の喜びを体験することが主な目的。後援を日本プラスチックモデル工業協同組合にお願いし、教材を提供していただいた。開館以来7年続いた同教室も当初の目的をある程度達成できたとして、1学期の日程をもって一応の区切りとした。
<母の日> お母さんに 手作りプレゼント	5.8 13:00～ 16:00 5.9 11:00～ 16:00	お母さんへの感謝の気持ちをカードにしてプレゼントをするワークショップを実施。カーネーションの花を開くとお母さんの似顔絵が飛び出す立体カードを作った。幼児には作業が細かく、親の介助を必要とした。お父さんと一緒に作業をする姿が印象的だった。
<父の日> 親子でニュースポーツ	6.19 13:00～ 16:00 6.20 11:00～ 16:00	一緒に遊ぶ機会が少ない父子が、ニュースポーツを通して一緒に遊び、その中でお互いの認識を深める空間になればと考え、実施した。ニュースポーツは初めての人でも取り組みやすいものが多く、小さい子から大人までそれぞれの楽しみ方ができた。
<七夕まつり> 星にとどけ、 ねがいごと	7.3・4 11:00～ 16:00 7.6・7 13:00～ 16:00	「短冊に願い事を書くこと」に絞り、実施した。例年どおりカラフルな短冊で竹が彩られ、総参加人数は794人。なお、7月3・4日の両日には青年ボランティアによる「七夕クイズラリー」も行われた。
<敬老の日> 昔あそびで あそんじゃおう	9.15 11:00～ 16:00	土・日曜日が重ならず、15日のみの開催となったため、毎年ご協力いただいている渋谷区「老友会」の皆さんのご都合がつかず、ボランティアを中心に折り紙、おはじき、あやとり、おでまなどの昔遊びを行った。朝から何回も遊びに来る子どもの姿も多く見られ、温かい雰囲気となった。パネルシアターのお話の集いも実施した。

名 称	期 間	備 考
<秋分の日> バンパー大会	9.23 小学生の部 午前 中高生の部 午後	小学生の部、中高生の部ともに、15人近くの参加があり、高学年コーナーの常連が多く顔をそろえた。それだけにレベルも高く、息をのむシーンが何度もみられた。また観戦マナーが良かったのも今回の特徴。日常の活動の中でスタッフと信頼関係ができていることが大きく影響したようだ。
<体育の日> キャッスルJr. リーグ	10.9~11 11:00~16:00	今年から始まった「Jリーグ」にちなみ、サッカーを題材にしたゲームを5種目実施した。「イエローカードに注意!」「コロコロドリブル」など、サッカーのルールや技術を取り入れた、幼児から大人までだれでも楽しめるゲームをボランティアリーダーとともに考案。晴天の下、多くの家族がこれらのゲームを楽しんだ。会場は屋上ふしぎが丘。
<節分> 節分会大まめまき大会	2.5 ①15:00~ 2.6 ①13:00~ ②15:00~	家庭で行われなくなってきている節分行事を、分かりやすい劇仕立てにして行なった。青年ボランティア扮する鬼（けがや病氣など、悪いことの象徴）に向けて、豆をまき、健康と幸せを願った。恒例の催しとして毎年参加している家族も増えてきているようで、毎回300人近い参加者があった。
<ひなまつり> みんなでひなまつり	2.26 13:00~ 16:00 2.27 11:00~ 16:00	ひなまつりの起源が健康を願う祓い（はらい）の行事であったことを、流し雛（ながしびな）を作りながら子どもたちに伝えた。また、ボランティア手作りのオリジナル貝合わせで絵探しをして遊び、みやびな遊びであったこと、貝はひなまつりの縁起ものであることを伝える機会となった。
<春分の日> バンパー大会	3.21 小学生の部 午前 中高生の部 午後	秋の大会に引き続き、各部とも15人前後の参加者によって行われた。13回目を迎え、小学生から参加していたメンバーが高校を卒業、下級生から拍手で送られるという温かい場になった。学校、学年の違いを越え、バンパーを通しての友情が大会の底辺に流れていることを強く感じられた大会。
パソコンクラフト	6.8~7.4	コンピュータで設計をして、それを実際に工作することを楽しんでもらおうと、本年度から実施されたプログラム。工作の題材の選択に関しては「さらにその後、遊べるもの」と考え、「紙飛行機」とした。機体、主翼、尾翼の各部を幾つかの選択肢から選んで組み合わせ、印刷、工作を楽しんだ。
子どもたちの パソコンソフト作品展	10.30~11.28	小学生パソコン教室、そしてパソコンクラブのメンバーの子どもたちが、今までに制作したプログラムの作品展を実施した。コンピュータグラフィックスの作品が約70点、ゲームなどのプログラムが約20点と多くの大作が展示された。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<児童福祉週間> キャッスル・ファイト 「五龍大武闘大会」	4.29~5.5	キャッスルファイトは人気のテレビゲームをモチーフとしたごっこ遊び。テレビゲームでは機会を失いがちな人と人との交流をはぐくむことを大きなねらいとしている。「五龍大武闘大会」という架空のカンフー大会の中で、見知らぬ子とさまざまな種類のゲーム勝負を行い、カードを一番多く集めた子が優勝というシステムのゲーム。
< 〃 > ことばであそぼう (パソコン)	4.29~5.9	「言葉遊び」をパソコンを相手に楽しみ、コンピュータの機能、特徴を体験。さらにその体験において人間の考えるしくみや、その能力の高さを感じてみることを一番のねらいとし、このプログラムを行った。題材は、しりとり、アナグラム、暗号解読、クイズ、4W遊びなど。
<夏休み> スケッチしよう (パソコン)	7.21~8.8	マウスを使って、あらかじめ用意された木や花などの絵柄を選んで風景画を作るプログラム。今年は、絵柄を増やしたこともあり、作品のバリエーションが増えた。小さい子も簡単にに取り組めるプログラムだった。

名 称	期 間	備 考
<夏休み> ネイチャー・ウォッチ ング (パソコン)	8.10～9.5	野鳥と植物の写真や特徴を書いたクイズ形式の問題カードと検索のヒントを見ながら、パソコンのデータベースを利用して名前を調べるプログラム。高学年以上の子どもを中心に、物事を調査するためにパソコンを活用することを楽しめたようだ。幼児はグラフィックスソフトに読み込ませた鳥の絵を呼び出して彩色を楽しんだ。
<開館記念> 人形劇フェア	10.30・31, 11.3 ①13:00～ ②15:00～	毎年恒例の人形劇フェア。〔こどもの城〕にあれば何故人形劇を見ることができると、期待をして来館する人が多かった。子どもが参加できる人形劇を上演。生き生きとした子どもの声を聞きながらお話が進む人形劇に、親子で楽しむ姿が多く見られた。プロデュースは開館以来ご協力いただいている和気瑞江氏。
<冬休み> 人形劇フェア	12.23～26 ①13:00～ ②15:00～	都内近郊の大学の児童文化研究会・人形劇サークルで構成されている「じゃんぐるじむ」が企画・運営した。人形劇の上演とワークショップを行い、学生が積極的に子どもとかかわる姿が見られた。子どもたちへ人形劇を通して児童文化を伝承することがねらいだが、同時に伝えていく側の人間（学生）の育成にも力を入れた。
< 〃 > みんなであそぼう お正月	1.3～9	子どものころ遊んだ遊びの楽しさや技を来館者に伝え、また、その遊びを通して親子の交流の場をつくっていくことが目的。プレイホールでは変わりけん玉、ジャンボ福笑い、かるた、双六。屋上では独楽まわし、靴取りを行った。変わりけん玉は手作りし、競技けん玉への導入として幼児から大人まで気軽に楽しめた。
< 〃 > カードをつくろう (パソコン)	12.1～1.9	パソコンを使ってX'mas（12月のみ）やお正月のイラストを呼び出し、色を塗ってカードを作る。印刷をしたイラストを、カード用の台紙にはって仕上げるまでを1つのプログラムとした。期間中何回もパソコンルームを訪れ、年賀状をたくさん作る子どもの姿も見受けられた。
<春休み> 人形劇フェア	3.25～27 ①13:00～ ②15:00～	人形劇が始まると、大声で笑ったり、主人公を助けるために声援を送ったり、と人形劇の世界に引き込まれている子どもの姿が多く見受けられた。いろいろな所から来館した子どもたちが30～40分間のフェアの時間を一緒に過ごし、同じ体験をし、共有することができた。
< 〃 > 音であそぼう (パソコン)	3.25～4.6	ロゴを応用して作成した「動物ハンターゲーム」「簡単作曲マシン」のほかに、本年度は「ドレミファコンピュータ」を新たに作成。いずれもコンピュータに内蔵された音源を、簡単な操作で演奏させるというプログラムである。特筆すべき点は、ソフトの多様化に伴い、年少児から高学年までの幅広い層が楽しめるようになったこと。

3) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
小学生 パソコン教室 I	(人) 小4～6 (20)	(人) 20 20	IAコース 4.11～5.23 日曜日 10:30～12:30 IBコース 10.17～11.21 日曜日 10:30～12:30	小学生パソコン教室Iは、初めてパソコン教室に参加する子どものための初級コース。グループ活動によるコンピュータグラフィックスの共同制作がテーマ。5人程度のグループを作り、1人1人が絵の作品のプログラムを担当し、最後に部品を合体させグラフィックスを完成させた。
小学生 パソコン教室 II	小4～6 (20)	25 22	IIAコース 6.6～7.4 日曜日 10:30～12:30 IIBコース 1.16～2.13 日曜日 10:30～12:30	小学生パソコン教室IIはIを修了した子どものためのコースで、IIAはゲーム作り、IIBがシミュレーションのプログラム作りがテーマ。シミュレーションというテーマは本年度初めて実施したもので、動物の速さ比べとみつばちの8字ダンス（みつばちは8の字に飛ぶことによって、仲間に花のありかを伝える）のプログラムを作成した。

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
小学生 パソコン教室 III	(人) 小4～6 (20)	(人) 18	3.27～31 日曜日 10:30～12:30	小学生パソコン教室IIIは、IIを修了した子どものためのコースで、ロゴ言語のリスト処理機能を使って、しりとり、おみくじ、5W遊びなど言葉遊びプログラムを作った。
小学生 パソコン教室 スペシャル	小4～6 (20)	12	8.24～26 毎日 10:30～12:30	パソコン教室IIの修了者を対象に、参加者が自由にテーマを考えてプログラミングを楽しむ内容。ゲームやアニメーションなど参加者の個性が生かされたプログラムが完成した。

<クラブ>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
キッズクラブ	(人) 小1～4 (30)	(人) ①30 ②30 ③30	隔週日曜日 15:00～17:00 1・2期は6回。3期 は5回開講。	家庭や学校では体験できない活動を行う。地域や学校とは違う新しい人間関係づくりを目指す。(リーダーなど大人の援助を得ながら)子どもたち同士でプログラムの相談をすることで創造的な発想と発言力を養うことをねらいとした遊びのクラブ。
ユースクラブ	小5～中3 (40)	①39 ②40 ③38	隔週日曜日 13:30～15:30 1・2期は6回。3期 は5回開講。	①グループワーク的視点で新しい人間関係づくりを目指す ②自分たちで次のプログラムを相談することで、創造的な発想と発言力を養う ③家庭や学校では体験できない活動を行う—の3点を大きなねらいとした遊びのクラブ。
パソコンクラブ	小4～高3 (100)	36	火～金曜日 14:30～17:30 土曜日 13:00～17:30 日曜日 10:00～17:30	パソコン教室を修了した子ども、またパソコンに興味のある子どものための交流のクラブ。パソコンに関する情報交換のミーティングやソフトの使い方の講習会を実施。

4) その他(野外活動など)

名 称	期 間	備 考
キャスルキャンプ	7.22・23	親もとから離れて、所属する園とは異なった友だちと一緒にキャンプファイヤーや野外ゲームなど楽しいプログラムを体験しながら生活することによって、新しい人間関係や、自分の力で達成できたという自信をつけていくことを目的としたキャンプ。参加者は49人(年長児)、スタッフは職員3人、ボランティア18人。場所は横浜市三ツ沢公園青少年野外活動センター。
ちびっこ冒険団'93	1期 7.27～30 2期 7.30～8.2	スタッフは各期とも4人で行う。小1～3を対象とした舎営のキャンプ。本年度は霧が発生する時に現れるという「幻の沼」の物語を設定して、それを導入に、ハイキング、野外炊事、キャンプファイヤーなど、さまざまな野外プログラムを展開した。1期は参加者79人、ボランティア19人。2期は参加者78人、ボランティア18人。場所は福島県国立那須甲子少年自然の家。
ゆきんこ冒険団'93	12.25～28	本年度から3泊4日としたが、各学校の日程を考慮し、東京出発時間を早朝でなく13時、現地出発時間を昼過ぎでなく11時にしたことで、活動時間が昨年と同様となってしまったことが悔やまれる。雪には恵まれ、スキー、雪合戦、かまくら作りなど、冬の野外プログラムを十分楽しむことができた。参加者76人、ボランティア24人、スタッフ3人。福島県国立那須甲子少年自然の家で実施。

(2) プレイ事業部の活動

プレイ事業部の活動は、プレイホール、屋上エリアを中心とした活動とパソコンルーム、コンピュータプレイを中心とした活動の2つからなっている。プレイホールを中心とした活動は、人と出会い、そして仲間となって遊び、過ごす楽しさを体験すること、そしてパソコンルームやコンピュータプレイの活動は、コンピュータが子どものための遊具として、そして知的活動のツール（道具）としてどのように活用できるのか、その可能性を考えることがテーマ。

プレイ事業部の活動は、伝承遊びからパソコン、そしてキャンピングと多岐にわたっている。すべてに共通することは、子どものための遊びを考えることであり、仲間と楽しさを共有できる活動の実施である。本年度も、今までの活動を充実発展させることを目指した。

1) 平常期間の活動

(ア) 週間プログラム

平常期間には、曜日ごとに決められた週間プログラムを実施した。週間プログラムは、スタッフとボランティアが作り上げるプログラムであり、プレイホールの活動を活性化させるプログラムとなっている。また、開館以来、日曜日に実施していた「プラモデル模型工作教室」は1学期分の日程で終了し、新しい展開を検討することとなった。

(イ) 季節行事

家庭の中から、そして社会全体からも徐々に失われつつある、日本の伝統的な行事や歳時記を季節のプログラムとして実施している。昔から伝わる言い伝えや知恵などをさまざまな遊びを通して、参加者に伝えるプログラム。

以下、「父の日」「体育の日」のプログラムについて詳述する。

「父の日」は、父と子と一緒に遊べる空間を作り、その中で親子がお互いに知らなかった部分を発見し、認識を深めることを目的とした。運営方



▲父と子でニュースポーツに挑戦(「父の日」プログラム)

法は、幾つかのニュースポーツ（ゲートボール、ニチレクボール、羽根っこ、マールマニア、輪投げ）に参加してスタンプを集め、スタンプがいっぱいになると、親子で記念写真が撮れることとした。

ニュースポーツはオリジナルのルールを使うのではなく、対象年齢に合わせてルールを変えて運営した。今回、選んだニュースポーツは技術がなくても簡単に組み立てるので、小さい子も参加しやすく、お父さんも気軽に挑戦していた。特にゲートボールでのお父さんの活躍ぶりが目立っていた。

「体育の日」は、日本のプロスポーツとして今年から発足したサッカーのＪリーグをモチーフにした。子どもたちの間での人気の高さと話題性を考慮し、それをもじって「キャッスルＪr. リーグ」とし、幼児から高学年まで楽しめるゲームを用意した。ゲームは「コロコロドリブル」「イエローカードに注意！」「しっかりパスして」「得点王は君だ！」「ゴールを目指せ！」の計５種目。それぞれのゲームがサッカーの楽しさをうまく表現でき、自然に体を動かせる楽しい催しにというボランティアの工夫・運営により大盛況のプログラムとなった。

３日間の開催で総参加者は１,４２５人を数えた。

２）特別期間の活動

各特別期間には、平常期間の活動を集約した形のプログラムを運営した。年間４回実施する「人形劇フェア」も平常期間には実現できない大型の演目を上演した。それぞれのプログラム実施のスペースも、屋上ふしぎが丘、パソコンルーム、そして夏・冬の期間にはキャンプを実施するなど、大きな広がりをもって実施された。

（ア）児童福祉週間（ゴールデンウィーク）

（１）キャッスルファイト

テレビゲームをモチーフとしたごっこ遊び“キャッスルシリーズ”も、本年度で６シリーズ目。過去５シリーズはファンタジーロールプレイングと呼ばれる冒険ストーリー仕立ての物語を用意したが、本年度は対戦型カンフーアクションゲームが大流行したことから、ストーリーモチーフにはこれを採用した。

ゲームストーリーは「五龍（ウーロン）大武闘大会」という“ジャン拳”世界一を決める大会が「こどもの城」に来たことから始まる。腕に覚えのある武術家（ボランティア扮する）が世界各国からやってきて、子どもたちとの真剣勝負を繰り広げるというもの。

具体的なゲーム内容は①修行の場で見知らぬ子どもとゲーム勝負をしてカードを増やし ②最終決戦の大会で自分の所持するカードを元手に“ジャン拳”勝負を行って、負けた相手からカードを受け取るというものである。

武闘大会らしさを出すため、スタッフのコスチュームはすべてカンフー着。

各国からやってきた武術家もそれらしく見えるよう、チャイナドレス、柔道着なども用意した。入場行進や表彰式も行い、本物の大会のような雰囲気を出すよう努めた。表彰式では上位5人にスペシャルカード“ドラゴンの証”をプレゼント。1位の人には記念写真も渡した。



▲延べ2,500人が「キャッスルファイト」に参加

4月29・30日、5月3日と3日間も雨にたたられたが、それでも延べ2,500人(500人/日)参加があった。スタッフはボランティア延べ約120人、パートスタッフが延べ約40人であった。

(イ) 開館記念特別期間

(1)開館記念人形劇フェア

今回も前年度と同様に地下1階フリーホールで、[こどもの城]の活動に協力いただいている人形劇団の参加を得て実施された。子どもから出てくる声を拾って話が進む、演じ手と観客の一体感が得られる場となった。

	出演団体	演 目
10月30日	木ぐつの木	タマと遊ぼう・かくれんぼ・3匹のこぶた
31日	空中分解	サンカクくん宇宙へ行く
11月3日	HOPPY	何ができるかな・壺からでた鬼・まんじゅうの好きなお殿様・てるてる坊主てる坊主

(ウ) 冬休み特別期間

(1)クリスマス人形劇フェア

大学の児童文化研究会や人形劇団などによって構成されているネットワークである「じゃんぐるじむ」が企画・運営し、「パペットマーケット」と[こどもの城]が後援という形で行った。

現在衰退しつつある児童文化、とりわけ人形劇や人形遊びを守り育て、子どもたちに伝えていくことが大きなねらいである。また、その要と思われる学生の活動をも援助し、文化を伝えていく人間が育っていくことが我々の願いであり、今後の課題でもある。

	出 演 団 体	演 目
12月23日	東京家政大学ほうき星 創価大学、明治学院大学、青山学 院大学、国士館大学の4大学合同 法政大学児童文化研究会 創価大学児童文化研究部 大妻女子大学パネルシアター部 国士館大学へき地教育研究会	おばけのうんどうかい（人形劇） くまのこウーフ（大型絵本） 金をつむぐ小人（人形劇） シルエットシアター（影絵） クリスマス公演（パネルシアター） サンタクロース8号（児童劇）
24日	劇団べろ 大妻女子大学パネルシアター部	べろとゆかいな仲間たち クリスマス公演（パネルシアター）
25日	創価大学プラム座 明星大学児童文化研究会 創価大学、明治学院大学、青山学 院大学、国士館大学の4大学合同 創価大学児童文化研究部	君の目の中に（大型絵本） アラジンと魔法のランプ（人形劇） くまのこウーフ（大型絵本） コロタン（ボードビル）
26日	創価大学児童文化研究部 法政大学児童文化研究会 創価大学、青山学院大学、法政 大学、国士館大学の4大学合同 法政大学児童文化研究会	勇気の星みーつけた！（人形劇） ペープサートショー（ペープサート） くまのこウーフ（大型絵本） あかねやさん（ペープサート）

(2)お正月

子どものころ遊んで楽しかったお正月の遊びとして「独楽（こま）まわし」「けん玉」「ジャンボ福笑い」「かるた」「双六（すごろく）」「靴取り」などを行った。「独楽まわし」の会場では子どもの手をとって回し方を教える父兄の姿もあり、親子で遊べる場となった。

「けん玉」は従来のいわゆる競技用のものでは初心者や幼児には難しく、楽しむ前にあきらめてしまわれていた。そこで、フライパンに見立てたしゃもじとおもちゃの目玉焼きのしゃもじけん、輪を円錐のブロックに通すつりけん、カップ&ボールをヒントにしたゆで卵けん、木板を「めし」の字にくりぬいて字同士をひっかけるめしけんなど、手作りの変わりけん玉を用意したところ、見た目の楽しさもあり、幼児から大人まで何度も挑戦し、競技けん玉への橋渡しとなっていた。

(㊦) 春休み特別期間

(1)春休み人形劇フェア

子どもたちに一方的に見せる人形劇ではなく、子どもたちの反応を確かめな

がら演じる人形劇だった。子どもたちは、いつのまにか演じ手のペースに引き込まれて、演じ手と子どもたちも一体となって人形劇の世界で楽しんだ。

	出演団体	演 目
3月26日	コロソ団	大きなかぶ、ぐりとぐら
27日	劇団まねっこ	もののショー
28日	ばねるっぱ	そらいろのたね、小さな庭、くもの糸、 ふしぎなポケット

3) 講座・クラブ等の活動

(ア) クラブ (ユースクラブ、キッズクラブ)

子どもたちの遊びは「群れ型で体験的な野外遊び」から「孤立型で受け身的な室内遊び」に変化していると言われている。そこでユースクラブ、キッズクラブでは活動の大きなねらいとして、以下のような目的を掲げている。

- ①グループワーク的視点で人間関係づくりを中心とした集団活動を目指す。
- ②自分たちでプログラムを計画することで創造的な発想と発言力を養う。
- ③家庭や学校では体験できないダイナミックな遊びの体験をする。

平成4年の4月にスタートした「ユースクラブ」「キッズクラブ」も2年目を迎え、新しいメンバーが加わった。昨年から継続している子どもたちを中心に仲間意識は徐々に芽生え始めている。特にユースクラブでは新人の加入が上級生のリーダーシップを喚起したようであり、今後が楽しみである。

両クラブでは毎回活動の終わりに時間をとり、次のプログラムの意見やアイデアを話し合っているが、残念ながら子どもたちだけの手でプログラムを実現する段階にはまだきておらず、子どもたちの意見をリーダーが拾って構成するという状況である。メンバー全体で意見を調整したり、役割を決定し、自主的に運営していくためには、さらに上級生のリーダーシップが育ち、なおかつメンバー全体の仲間意識も向上することが必須であるが、これにはもう少し時間がかかりそうである。

以下に1年間のユースクラブ・キッズクラブのプログラム内容を記す。



▲夏休みに野外炊事体験(「ユースクラブ」の活動から)

(1)キッズクラブのプログラム内容

1 期	4月10日	楽しくゲームをやりながらお互いの顔と名前を覚え合った
	4月24日	「クロリティー」と「カンケリ」で思いっきり体を使って遊んだ
	5月22日	原宿の街を使った「オリエンテーリング」
	6月5日	寒天を使った「ゼリー」作りに挑戦
	7月3日	七夕にちなみオリジナルの「短冊」と「プロミスリング」作り
	7月17日	ヨーヨー釣り、くじ引きなど、縁日の模擬店体験
2 期	9月18日	「オリエンテーリング」の第2弾、渋谷の街で行った
	10月2日	「大運動会」。グループに分かれ三輪車リレーなどで競い合った
	10月23日	かぼちゃタルト作り、変装大会でハロウィンパーティーを行う
	11月6日	よく飛ぶ紙飛行機を作成。距離競技などゲームを楽しむ
	11月20日	砂絵で作った紙小皿を飾りにしたダンボールのツリーを作成
	12月18日	クイズ、手品、ダンスと盛りだくさんのクリスマスパーティー
3 期	1月22日	羽根つき、おせち、お年玉など正月にちなんだゲーム大会
	2月26日	きな粉あめ、べっこうあめ作りに挑戦
	3月5日	花いちもんめ、だるまさんがころんだなどの路地裏遊び大会
	3月12日	三軒茶屋の街で探偵ごっこを行った
	3月19日	1年間の振り返りパーティー

(2)ユースクラブのプログラム内容

1 期	4月11日	グループで知恵を絞る合う形の「親睦ゲーム大会」を行う
	4月25日	代々木公園でオリジナルゲーム「キラゲーム」を行う
	5月16日	今年もレクリエーション協会主催の「ウオークラリー」に出場
	6月6日	「ステンシルグッズ」作りに挑戦。すてきなハンカチができた
	6月27日	「御岳山登山」は好天に恵まれ、楽しいハイキングとなった
	7月11日	「縁日風選抜プログラム」と題して、数種の工作を楽しむ
	8月22日	夏休み後半には「野外炊事体験」の特別プログラムを行った
2 期	9月19日	新メンバーとの交流をねらいとした「新人歓迎ゲーム大会」
	10月3日	スタッフの結婚式に見学参加後、「メッセージビデオ」を制作
	10月24日	「世田谷線ウオークラリー」では三軒茶屋から下高井戸までを走破
	11月7日	クロリティーとユニカールを使った「ニュースポーツ大会」
	12月12日	「ポップアップカード」を作り、クリスマス会の招待状とした 父母や親しいスタッフを招待しての「クリスマス会」
3 期	1月16日	風船羽根つきや二人羽織などの「初笑い新春ゲーム大会」に興じる
	1月30日	次回に迫った風あげに向けて班ごとに「連風作り」を行う
	2月20日	二子玉川の川べりで「風あげ」。66枚の連風が空を舞った
	3月6日	次回に迫った館内宿泊に向けて作戦会議。内容を考え合う
	3月12・13日	炊事、親睦ゲーム、自分の夢を語るなど、中身の濃い「館内宿泊」 となる。13日には代々木公園で思う存分遊び、1年の活動を終了

(イ) 野外活動

本年度プレイ事業部では「キャッスルキャンプ」「ちびっこ冒険団」「ゆきんこ冒険団」の3つのキャンプを実施。3つのキャンプとも自然に親しむこと、キャンプという場で新しい仲間との活動を通して、社会性を養うことが目的である。参加する子どもたちの多くは、講座やクラブなどで年間を通して「こどもの城」の活動に参加しており、キャンプが年間の活動の大きなアクセントとなっている。

(1)キャッスルキャンプ

	1 日 目	2 日 目
朝	こどもの城出発 ↓	野外炊事 (カートンバッグをつくろう) 清 掃
昼	追跡ハイク (駅からじゃんけん大王の残したポイントを追って宿舎まで)	三ツ沢公園青少年野外活動センター出発 ↓
夕	じゃんけん大王とじゃんけんゲーム (カレーの材料をとりもどせ) 野外炊事 (カレーライス作り) キャンプファイヤー	こどもの城到着

(2)ちびっこ冒険団

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目
朝	こどもの城出発 ↓	冒険の旅 (幻の沼を探しにパノラマ展望台、剣桂の2コースに分かれて出発。1期は小雨にぬれながら、2期は晴天に恵まれてのハイキングとなった。幻の沼らしきものも無事発見)	野外ゲーム (野原に隠された動物カードを探したり、炊事のレシピを探したり)	清掃～後片づけ (片づけが終了した班から、表に出て自由時間)
昼	施設周辺の探検 (周辺を探検して、虫や花を観察したりスケッチしたり)	CMタイム (炊事のメニューを思い思いのパフォーマンスで発表する)	那須甲子少年自然の家出発 ↓	
夕	仲良しになる集い (とんぼや霧の多い年に現れるという幻の沼の話に子どもたちは騒然)	フリータイム (工作をしたり部屋をおばけ屋敷に改造したり班ごとに自由に過ごす)	野外炊事 (ませ寿司、焼きそばなど、全6品) キャンプファイヤー	こどもの城到着 (解団式では涙を流してリーダーとの別れを惜しむ子ども)

(3)ゆきんこ冒険団

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目
朝		歩くスキー (全員歩くスキーを履いて、施設周辺の林の中を散策する)	選択プログラム (そり、かまくら作り、雪中探検など班ごとに好きなプログラムを)	清掃～後片づけ 記念写真 那須甲子 少年自然の家出発 (車中弁当)
昼	こどもの城出発 ↓	選択プログラム (そり、かまくら作り、スキーなど)もちつき(館内で)	雪合戦 (どきどき村対わくわく村、リーダー対子どもに分かれて、待望の雪合戦を行う)	↓
夕	仲良しになる集い (歌やダンス、ゲームなどで、楽しいクリスマスの集いを行う)	フリータイム (工作をしたり部屋をお化け屋敷に改造したり班ごとに自由に過ごす)	室内キャンプファイヤー (炎を囲んで、歌やダンス、ゲームなどを行った)	こどもの城到着 (車中で昼食をとったため、城の到着は早く、5時となる)

4) パソコン活動

〔こどもの城〕の中には、パソコンを使って活動する場所がコンピュータプレイルームとパソコンルームの2か所ある。2か所ともコンピュータを使った遊びを土台にしているが、コンピュータプレイルームは、パソコンに慣れ親しむことを目的にパソコンを遊具としてとらえ、パソコンルームは、パソコンを道具として活用することを活動の主眼にしている。

(ア) コンピュータプレイ

コンピュータプレイルームは、お絵かきソフト、パズルゲーム、4人で同時に楽しめるヨットや熱気球のシミュレーションソフトなど幾つかの種類のソフトから自由に選んで楽しめるようになっている。童話をパソコンで楽しめるソフトもあり、幼児と母親の利用者も多い。パソコンを使った遊びも一般に定着し、今後のコンピュータプレイの在り方も検討の時期にきている。本年度の利用者は64,041人だった。

(イ) パソコンルームの活動

パソコンルームはパソコン教室、パソコンクラブ活動、一般活動の3つの活動で運営しており、単に既製のソフトで遊ぶのではなく、表現したり、調査したり情報を整理したりなどパソコンを知的活動のツール(道具)として活用することをねらいとしている。

一般活動は来館者が自由に参加できるプログラムであり、パソコンで音楽を楽しんだり、クリスマスカードをデザインしたり、野鳥や花のデータベースで遊んだりなど、定期的にプログラムを変更し運営した。

「パソコン教室」はロゴ言語（コンピュータ言語の一種）を使用し、小



▲小学校4～6年生を対象に「パソコン教室」

学校4～6年生を対象に5コースで計7クラスを実施。「パソコンクラブ」では、小学校4年生から高校3年生を対象に、各自の興味に沿った活動を実施しながら、メンバー間の交流を楽しんだ。コンピュータ言語を操作して、仲間と一緒にさまざまな試行錯誤を繰り返しながら、自分の考えや計画を実験できる活動は小学校高学年以上の子どもにとって、非常に楽しく、意義のある活動になりうると考えられる。

5) グループ活動

プレイ事業部では、幼児向け、小学生向け、高学年向けと、それぞれの発達に合わせたプログラムを数多く準備しているが、本年度希望があったプログラムは劇遊びのプログラムの「忍者修行道場」が9回、「森へ行こう」が2回、そして「パソコン体験」が2回、「五龍大武闘大会」が1回、「みんないっしょに」が1回の、計15回であり、利用団体のほとんどが幼稚園、保育園であった。

中学校1件、障害児グループ2件を除くすべてが幼稚園、保育園などの幼児団体であり、そのほとんどがリピーターであったのが特徴である。前年度新たに準備した小学生向けプログラムは、本年度は1件も利用がなかった。これは小学校団体の利用が減少していることに起因すると思われるが、プログラムの開発だけでなく、今後〔こどもの城〕全体で利用者の拡大を考えていくことが重要な問題であろう。

各プログラムは年々回数を重ね、充実してきている。特に前年度は、プレイホール内に「わくわくらんど」という大型の遊具が新設され、ファンタジックドラマの「忍者修行道場」や「森へ行こう」などでは、この遊具を効果的に使った展開がなされた。

また、子どもたちの期待感を高める工夫として、事前に幼稚園に劇遊びの小



▲ファンタジックドラマの「忍者修業道場」

たという声も幾つか聞かれた。

今後、利用の増えてきているインターナショナル・スクール、あるいは障害児向けのプログラムをさらに検討し、充実させていくことが課題である。

6) まとめと今後の課題

プレイ事業部の活動は、[こどもの城]の中央広場とも言えるプレイホールの運営を中心にした遊びのプログラムの実施、人形劇などの表現活動、科学的な分野であるパソコンプログラムの指導、そしてキャンプと多岐にわたっている。それだけにスタッフの資質向上に関しても相当の努力が必要となる。すべての活動に関して共通することは、やはり人と人とのかかわりを考えるのがプレイ事業部の活動の土台であり、スタッフとしてはグループワーカーとしての働きが不可欠である。

プレイ事業部のさまざまな活動の質の向上を考えると、そろそろ活動の種類
の整理が必要となるかもしれない。来年度以降の具体的な検討事項としては、プレイホールの遊具設備の整備、一般化しているコンピュータプレイ活動の見直し、そして親子の活動の充実が望まれる。

道具である“怪しい巻き物”を郵送したり、アトリウムの2階から忍者が登場したりと、子どもも保育者もわくわくしてプログラムに参加できるようにさまざまな工夫改良を行った。特に巻き物の郵送は好評で、これをきっかけに、幼稚園で事前に忍者衣装を作ったりさまざまな修行を行ってきた

3 造形事業部の活動

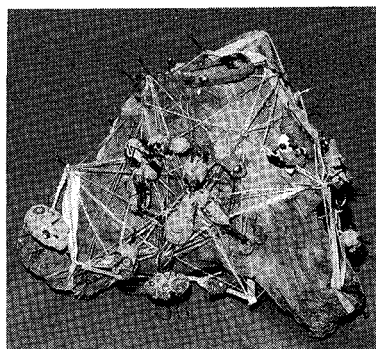
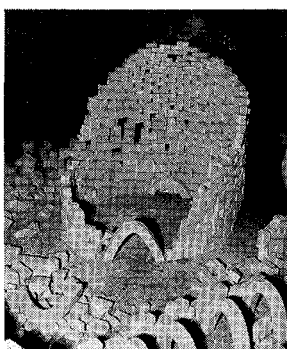
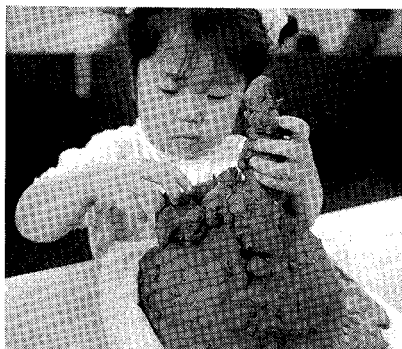
(1) 5 年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
やってみよう！ つくってみよう！ 「土とあそぼう」	4.8～25 5.7～7.16	夏休み特別期間の「土と造形～パートII」に向けて、素材としての＜土＞の可能性について、試行プログラムを実施した。今回は流動体の＜土＞、可塑性の＜土＞、固体の＜土＞と、様態の異なる＜土＞についてさまざまな角度から検討した。
やってみよう！ つくってみよう！ 「宝島へいこう！」	9.4～12.24 1.13～3.18	造形スタジオに＜宝島＞という架空の設定を行い、そこに含まれる物語の要素をきっかけにした造形活動を展開した。物語から生まれるイメージを具体化するために、さまざまな素材を用いたプログラムを冬休みと春休みの特別期間に実施した。
第5回 遊びと造形発想展	6.8～6.27	「遊びと造形発想の会」と共催で実施してきた展覧会。前回から会に参加している造形指導者が、テーマに基づきそれぞれの現場で実践した作品の展示を行っている。今回のテーマは「たしざん・かけざん」。造形を算数に置き換えて考える試み。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<児童福祉週間> こども歳時記 「こどもの日」	4.27～5.5	こども歳時記「こどもの日」のプログラムとして、2プログラムを実施した。子どもと親で作るコーナーでは頭にかぶる大きな“こいかぶり”を、3年生以上のコーナーではアルミ板を使った“メタリックごい”を制作した。
<夏休み> 素材との出会い展「土と造形～パートII」	7.17～8.31	昨年の夏に引き続き＜土＞をテーマに実施した。今回は、さまざまな様態の＜土＞について子どもたちが体験できるよう、展示・体験のコーナーも設定し、制作のプログラムが行われた。
<開館記念> 第8回造形スタジオ展	10.30～11.28	1992年9月から1993年10月までに造形スタジオで実施されたプログラムを、作品と写真などで紹介した。



▲子どもたちの作品から

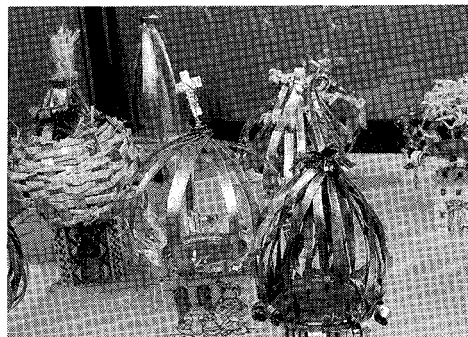
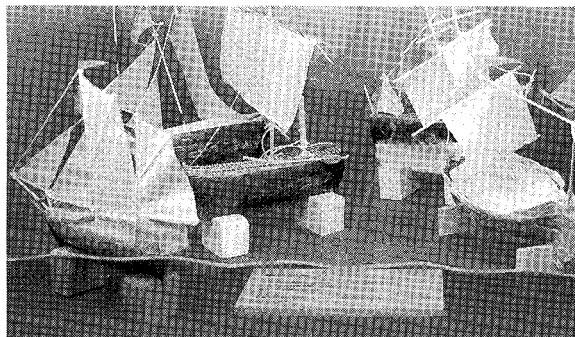
名 称	期 間	備 考
<冬休み> やってみよう！ つくってみよう！ 「造形宝島」	12.25～1.9	架空の場所<造形宝島>を目指して、船型の煉瓦（れんが）にマストや帆などの飾りを付ける「たからしまへいこう！」（一般親子対象）と、実際に安定して水に浮かぶ「帆船をつくろう」（小4以上）のプログラムを実施した。
< " > こども歳時記 「クリスマス」 こども歳時記 「お正月」	12.21～12.25 12.26～1.9	スタジオの一隅に、こども歳時記のコーナーを設けて実施した。クリスマスでは、さまざまな形をした発泡スチロールのかげらにトイレットペーパーをはり、さらに蛍光色紙などで飾りを付け、ブラックライトの部屋で光らせる「ひかるクリスマスワッペン」を制作。また、お正月には色画用紙を柔らかくもんで作る「パクパクししまい」を制作し、完成後は特設ステージでお囃子の音楽に合わせて獅子舞を演じた。
<春休み> オープスタジオ 「造形宝島」	3.19～3.31	9月から展開してきた<造形宝島>第1章の総まとめ。スタジオ全体に宝島探検のための環境設定を行い、その中でプログラムが実施された。またこれまでに実施してきたプログラムの作品群を展示した「宝島博物館」も開設した。

3) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
こどもクリエイティブクラブA クレイワーク	(人) 小1～高3 (10)	(人) ① 10 ② 8 ③ 8	火曜日 16:00～17:30 " " " "	造形素材としての<土>を改めて見直し、遊びを通してさらにその魅力が体験できるよう、過去3年間にわたって実施してきた内容に新プログラムを加えた。受講料年間 87,000円。
" B わくわくワーク	"	① 10 ② 9 ③ 9	水曜日 16:00～17:30 " " " "	子どもたちが新鮮な感動を持って、見慣れた素材と再び出合うために、全身を使った表現活動の遊びや、制作行為自体が興味を広げるプログラムを実施した。受講料年間 63,000円。
" C ゆかいな造形	"	① 10 ② 9 ③ 9	木曜日 16:00～17:30 " " " "	本年度は子どもたちにとって“タカラムノ”とは何かを年間のテーマとして実施した。素材採集のための遠足も行い、それをもとにしたプログラムも展開した。受講料年間 63,000円。
" D えいぞうたんけん	小2・3 (10)	① 4 ② 4 ③ 4	金曜日 16:00～17:30 " " " "	前年度まで実施された「アニメ体験」から展開をしたクラブ。写真、映画、ビデオなどの映像の仕掛けをきっかけに体験を深めた。AV事業部と共同で実施した。受講料年間 63,000円。
" E ハンズワーク	小4～高3 (10)	① 10 ② 9 ③ 6	土曜日 10:00～17:30 " (随時) " "	土曜日の〔こどもの城〕の開館時間中に、作りたいものを自分で計画をし、時間を気にせずに制作に取り組むことができる、高学年向けのクラブ。受講料年間 63,000円。

〔開講回数：1期 10回、2期 11回、3期 9回。講師はすべてこどもの城専門職員〕



▲子どもたちの作品から

(2) 造形事業部の活動

平成5年度の造形事業部では、前年度と同様、①一般来館児へのワークショップ活動 ②講座・クラブの活動 ③グループ活動を中心にスタジオ運営を行った。子どもたちに豊かな感性や発想力を育てていくためには、豊かな体験が必要になる。造形スタジオでのそれぞれの活動の中では、子どもたちの身近にある“モノ”や“コト”をきっかけにして、作ることだけではなく、見る、触る、



▲巨大な<土>のオブジェ『土のタイムトラベル』

聴く、話す、味わう、考える、手や身体を動かすなど、全身の感覚をフルに使った体験を目指して、さまざまな実践活動が行われている。

一般来館児へのワークショップ活動では、昨年に引き続き《土と造形》のプログラムを実施した(4月から夏休み特別期間)。今回は粘土状の土だけではなく、泥状の土から固体の土へと、多様な土の状態にまで幅広く視点を広げてプログラムを展開した。子どもたちは、1つの素材から広がるこれまでにはない、新鮮な土の造形体験ができたことと思う。

また9月から3月の春休み特別期間までは、《造形宝島》をテーマにしてプログラムを実施した。<宝島>という架空の場所で展開される<物語>から広がるイメージと造形活動を結び付けていこうとする試みである。ここでは、それぞれの内容をより具体化するために、さまざまな素材とその組み合わせによるプログラムが検討された。また、制作された作品は《造形宝島》の環境設定の一部となり、さらに<宝島探検>の行程は逐次「宝島博物館」に展示されていた。

講座・クラブの活動は、「こどもクリエイティブクラブ」として、それぞれ内容の異なる5種類のコースを実施した。前年度より1コース減となったのは、造形スタジオの活動スペースの都合によるものである。

1) 平常・特別期間の活動

(ア) 素材との出会い展《土と造形～パートII》

(平常期間=4.8～7.16「土とあそぼう」、夏休み特別期間=7.17～8.31)

1つの素材にテーマを絞り、その素材を造形的見地から見直し、素材自身を持っている特質、可能性を視点を変えてとらえなおしたワークショップが《素材との出会い展》である。

昨年の《土と造形～パートI》では、土の持つ“他の素材には見られない特異な可塑性”を生かしたワークショップを展開した。つまり、適度な水分を含んだ粘土の状態であればできない形態を陶芸の手法を使いながら、器を作らないで器作りに誘う＜土＞の造形を模索した。

今回の《土と造形～パートII》では、可塑性だけにこだわらず、“さまざまな様態の土”が持っているそれぞれの特質を生かすように心がけた。そして、造形素材としての＜土＞だけでなく、＜土＞という素材が持っている私たち人間とのかかわりを、造形活動を通して体験するためのワークショップを展開した。

陶芸用粘土をとってもその製造の過程で、さまざまな様態を持っている。山から掘り出してきたままの塊(かたまり)、それが乾燥した固体化状態、すりつぶして精製した粉末状態、水と練り合わせた流動体から粘土状態(水分の割合で異なる)、それを乾燥させると再度固体の状態に戻り、さらに焼成することで陶(とう)になっていく。＜土＞は可塑性のほかにもこのように、その姿を変化させていくという大きな特質を持っている。

さらに、＜土＞は陶芸に限らず、農業・建築などの世界でもその特質を生かして使われている。子どもたちが、＜土＞というものと改めて出合い、流動体・可塑体・固体と変化していく＜土＞を手を通して体験できるように、造形スタジオ

オを展示・体験・制作の3つのコーナーに分けて構成した。

4月から7月までに、流動体・可塑体・固体それぞれの様態の＜土＞が持っている特質を生かしながら、試行錯誤を重ねてプログラムを実施していった。＜流動体の土＞では「ドロ・ドロイング」「クレイ・フラッグ」



▲素材との出会い展《土と造形～パートII》の造形スタジオ

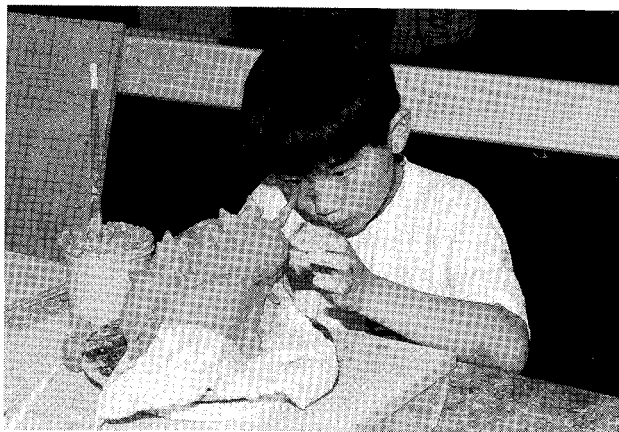
などのプログラムを、＜可塑体の土＞では「なににみえるかな」「クレイ・プリント」などのプログラムを、そして＜固体の土＞では「カリカリ・アート」「ブロックであそぼう」などのプログラムを実施した。この期間に実施したプログラムを検討し、夏休みの特別期間には、それぞれの＜土＞の様態が体験できるようにプログラムを組み合わせた。

夏休み特別期間のワークショップの導入部分に当たる展示・体験コーナーのはじめには、子どもたちが制作した「クレイ・プリント」「カリカリアート」の『作品パネル』をロビー壁面に展示した。各パネルの中の作品のそれぞれに、1人1人の子どもたちが体験した＜土＞とのかかわり方を読み取ることができる。しかし、共同制作として子どもたちの作品を1枚のパネルに集合させたとき、作品に内在している＜土＞の特質がより鮮明に現れてくる。

スタジオ入口に設置した『土のタイムトラベル』は、生土（なまつち）と焼成・焼き締めた陶で制作した高さ約2.5mの巨大な＜土＞のオブジェである。オブジェの周りに設置した双眼鏡をのぞくと、猿から人間に進化していく様子、狩猟をする原始人、崩壊した神殿、点在する化石や骨、黒く崩れかけたビル群などが迫ってくる。双眼鏡をのぞくという仕掛けに子どもたちは、時間も忘れてオブジェの中を探索していく。ふだんはなにげなく扱う粘土も双眼鏡を通すことによって、肉眼ではなかなか気付くことのない＜土＞のミクロの世界が見えてくる。

さらにスタジオ内には、左官職人・榎本新吉氏の協力による「手でみるつちかべ」を展示した。これは日本各地の土を使い、さまざまな塗り壁の技法で制作された22枚の触って見られる土壁パネルである。子どもたちは、そのパネルを手でたどりながら、＜土＞の持つ温度、粗さ、細かさ、その表情を感じ取っていった。併せて展示した7種の原土の塊と44種にも及ぶ日本各地の「土の標本」に見られる＜土＞の色や表情の豊かさは、視覚的にも子どもたちに刺激を与えていた。子どもたちは、自分が触っている土と標本瓶の土を何度も見返していた。

生と陶の状態の土を体験した次に、＜土＞と＜光＞、＜土＞と＜音＞を組み合わせたオブジェを展示した。新素材のグラス・ファイバーとペーパー・セラミックを組み



▲“さまざまな様態の土”の特質を生かしたプログラムを実施

合わせた透過光を扱った『陶・輝・球』。焼き締められた陶板の上を、自動的に吹き上げられた木のボールが転がって音を出す『土の音かご』。

いずれも子どもたちが触覚だけでなく、視覚と聴覚を通して〈土〉を体験するものである。子どもたちは、五感を使って〈土〉を体験したあと、実際に〈土〉のプログラムと取り組んでいった。また、焼成を前提としたプログラムや時間を要するものは、「造形教室」で実施した。

(イ) オープンスタジオ《造形宝島》

(平常期間＝9.4～12.24, 1.13～3.18, 冬休み特別期間＝12.25～1.9

春休み特別期間＝3.19～4.5)

造形スタジオではこれまでさまざまな企画の中で、それぞれの観点から子どもと造形のかかわりについて考えてきた。1素材を起点として展開した《木と造形》(1998～1990)、《土と造形》(1992～1993)などのワークショップ、あるいは道具と手仕事という観点から展開した《おじいさんの道具箱》(1991～1992)というふうに、切り口を変えてテーマやアプローチの方法を探っている。そして、《造形宝島》と題したこの企画も、子どもと造形とのかかわりを考えるうえでの新たな切り口からの試みである。

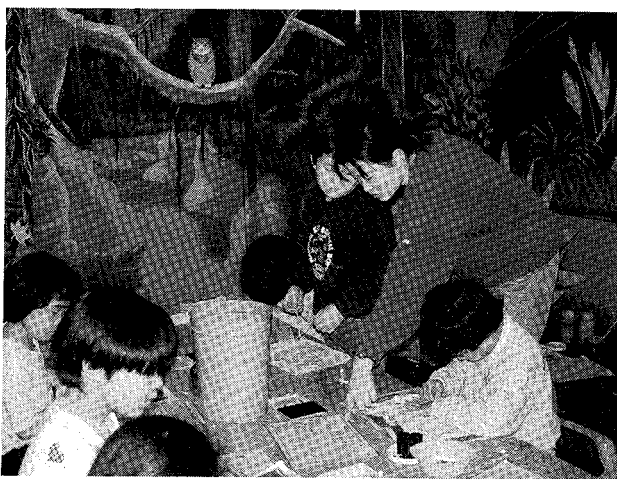
《造形宝島》の中での新たな試みの内容を簡単に説明すれば、“ある物語を設定し、その物語が含む要素をモチーフとして造形する”というものである。ある1つの〈物語〉の状況設定を与えられた時、わたしたちは物語の中の環境や風景をそれぞれにイメージする作業を行う。与えられた物語が自分にとって興味深く、刺激を多く含んでいればいるほどイメージを喚起する力が高められる。このイメージ喚起力と造形活動とを結び付けて展開しようというのが、この企画《造形宝島》の主旨である。

〈宝島〉という設定も、子どもたちの冒険心をかきたて、イメージの広がる空間を与えやすいということから、選ばれた〈物語〉である。ただし、ここでいう〈物語〉とは厳密に構成されたお話としてではなく、最小限の状況が把握できる程度の文脈として与えるにとどめたものである。というのも厳密な物語の設定によって狭められるイメージの限定をなるべく避けるためである。子どもたちは、われわれスタッフが提供する〈宝島〉を受け取ると同時にそれぞれの〈宝島〉を思い描いて制作や体験ができるようにした。

企画《造形宝島》のプログラムの始動は1993年9月から行われている。“どこか南の島に浮かぶ謎の宝島”という設定だけで幾つかのかぎとなる概念があげられる。〈海〉〈船〉〈宝石〉〈ジャングル〉などなどである。さらに冒険心をそそる状況を膨らませて、〈古代宮殿〉〈恐竜の化石〉〈島の住民との出会い〉など宝にたどりつく行程の中で出会う事象が設定されていった。これらはそれぞれに、さまざまな素材や手法の違う造形制作プログラムのモチーフとなって

いる。

1993年9月からシリーズとして平常期間に積み重ねられてきた《造形宝島》は、冬休みの特別期間、そして春休みの特別期間において総合的なプログラムとして提供できる形式を用いた。特に春休みのオープスタジオでは、造形スタジオがま



るごと宝島への冒険に参加できる環境づくりが行われた。

まず、造形スタジオ入口前には、架空の宝島が立体ジオラマとして展示されて、子どもたちは設置された双眼鏡でこのジオラマをのぞき、あたかもこれから上陸する宝島を俯瞰（ふかん）するような体験をしてスタジオ内に入ってくる。スタジオ内を囲む壁は、宝島の内側から見られる風景が描かれており、宝島の中に入り込んだ臨場感を作り出した。また、スタジオの各所にはダンボールでできたやしの木が立てられており、エキゾチックなムードを漂わせている。子どもたちの制作もこうした環境の中で行われていく。

春休みの特別プログラムの際には子どもたちが制作をする間にも音楽や効果音をスタジオ内に流して特別な空間としての演出が加えられた。一方スタジオの奥には「宝島博物館」と称して、架空の宝島の地図、そしてこれまでに制作された作品群を展示し、《造形宝島》で制作された作品を鑑賞すると同時に、宝島を探検する行程、あるいはその行程のなかで出会った出来事の全体像を読み取ることができる仕掛けになっている。

〔こどもの城〕を訪れる子どもは、必ずしもいつでも通えるという条件にはない。むしろ、住まいが遠隔地であるためまれにしか訪れることができないという子どものほうが多数であろう。したがって、シリーズとして物語を造形していく《造形宝島》の全体にすべての子どもが参加することはできないだろう。しかしながら、1人1人の子どもが制作していく作品が、そのまま《造形宝島》の環境づくりに加担する役割を果たしている。

すなわち造形スタジオに広がる宝島の空間は大勢の数知れない子どもたちの共同でできあがる1つの作品としてみるができるだろう。《造形宝島》で展開されるすべてを1つの作品としてみたとき、個人としての制作とは異なるダイナミズムを生み出すことができると考えられる。この《造形宝島》は春休

み以降1994年夏休みまで継続していくこととなる。

多くの子どもたちとわたしたちスタッフとの共同作品としての《造形宝島》は、今後ますます環境が充実していくことになる。そのなかで展開される子どもたちの制作する意欲にも強い影響を与えるものと思われる。春休みまでの経験を踏まえて今後も新たな試みを加えて、環境を含む〈物語〉と造形活動を効果的に絡ませる方法をさらに模索していくこととしたい。

2) 講座・クラブ等の活動

(ア) こどもクリエイティブクラブA「クレイワーク」

さまざまな造形素材があふれている現代に、造形素材としての〈土〉を見直し、〈土〉の持つ楽しさを子どもたちが遊びながら体験できるよう、過去3年間に実施した「クレイワーク」での体験をもとに、新たなプログラムを加えながら実施した。

1期では、子どもたちが〈土〉に慣れるように、できるだけ多くの量の粘土を使った。粘土の塊から表現できるもの～主に球体～を制作していった。粘土を扱うことに慣れていない子どもは、自分の体験した範ちゅうで作品を作ろうとしてしまいがちである。その大半の子どもは、手のひらのなかで作れるような小さな世界に止まってしまう。手にする粘土の量を多くすることで、子どもの手の動きがダイナミックになる。さらに粘土に含まれる水分も多く、触っていても乾燥しないので、より長時間粘土の持っている特質を知ることができる。

2期では、粘土の塊から道具を使って形を作りだすことから始め、粘土の板(平面)から立体を作り上げるプログラムを行った。また、1期ではワックスによる色付けや表面の加工をしてきたが、少しずつ釉薬(ゆうやく)を使った作品も制作した。

3期では、ひも作りから形を作れるようにプログラムを組んだ。粘土でひもだけを作り、次々につなげて部屋中を粘土のひもで埋め尽くしたり、ひも作りから大皿を作ったりした。最後の大皿作りでは1年間で体験したさまざまな技法を生かして、動物と木を作り、ガラスを釉薬代わりにして焼成した。

これまで毎年行ってきた「野焼き」が、管理上の都合でスペースがなくなり、実施できなくなってしまったことは残念である。次年度からは、別の方法で野焼き体験に代わるものを考えていきたい。さらに今後は対象年齢とプログラム内容を再考しながら実施していきたい。

(イ) こどもクリエイティブクラブB「わくわくワーク」

このクラブでは、〈土〉〈木〉〈紙〉など、日常生活のなかで身近にある素材を用い、それら見慣れた素材との新しい接点をつくることで、子どもたちが本来持っている自由な発想や創造力を発揮することができる、そんな造形活動を

目指した。

1期では、机の上での制作をする前に、身体を使った表現活動を体験させた。はだしになり、服まで泥だらけになりながら、粉→粘土→泥と、水の量によって変化する＜土＞という素材に触れたり、自分がくもだという設定で、色とりどりの紙テープの巣を屋外に張りめぐらせたりする遊びの要素を取り入れた内容である。こういった活動が大きな要因となり、その後の普段使わないような大量の粘土による制作や、自分の小さな虫とそのすみかを作るなどという、視点を変えた制作にもちゅうちょしないで意欲的に取り組めた。

2期では、制作行為自体がおもしろく、発想や視点の変化を体験しやすいように、＜包む＞という行為をテーマにした2種類のプログラム（「新聞紙で身体を包んで変身する」「石膏帯で自分の足を包み、その中に小宇宙を作る」）を行った。次の廃品の電気機器などを使って、まったく別の何かを作り出すというプログラムでは、既成の物を変化させるおもしろさだけではなく、分解することそのものに大変興味を示した。

3期では、好きな形の額縁を作り、内側も独自に世界をつくるというプログラムを行った。サイズを変えて1本1本木材を切り、角を取り、組み立てるといふ、根気のいる作業にも、子どもたちは熱心に集中をし、マイペースで制作に取り組んだ。最後のプログラムは、竹で蕎麦猪口（そばちょこ）と菜箸（さいばし）を作り、うどんを打って食べるというもの。竹を丹念に削らなくてはならない仕事も、自分で刃を研ぎながらこなすことができた。その手作りの食器で食べたうどんのおいしさで、制作するおもしろさが印象に残ったようだ。

(ウ) こどもクリエイティブクラブC「ゆかいな造形」

たとえガラスのかけらや、ただの石ころであったとしても、子どもたちはそのものの自体が放つ魅力を敏感に感じ取る力を持っている。本年度は“子どもたちにとって＜タカラモノ＞とは何か？”を年間のテーマにしてプログラムを実施した。

1期には家庭電気器機の分解・解体をきっかけにして、さまざまな素材を組み合わせたロボットのような「甲冑（かっちゅう）の手」を制作した。これは実際に制作した子ども自身が手にはめて動かして遊べる作品である。制作の工程には、ブリキ板やアルミ板や銅板をはじめ、多様な素材の加工・接着・装飾をするための技法や用具の体験がふんだんにあった。

2期の最初に九十九里海岸へ、素材の採集のための遠足を実施した。そこで採集をした大量の貝殻や流木を材料にして3種類の制作を行った。「貝殻から絵の具をつくる」では牡蠣（かき）の貝殻を細かく砕き、さらに乳鉢ですりつぶしてメディウムを混ぜたものをチューブに詰めるという、白の絵の具の原始的な制作方法を体験した。木炭を焼いて作った黒の絵の具と合わせてワンセット



▲＜タカラモノ＞をテーマに「ゆかいな造形」

ナイフ」では、刃になる部分に貝を削って研いだものを取り付けたあと、その切れ味を実感させるために、鶏肉を切る体験も行った。

3期には「フェルトの飛行帽」を制作した。単に原毛からフェルトの帽子を作るだけではなく、その制作過程のなかに、飾りボタンや耳当てやゴーグルを取り付けるなど、いろいろな体験の要素を追加していった。飾りボタンは紙粘土と木を材料にして絵の具で着色した。ゴーグルはハーフミラーとゴムプレートなどで制作した。完成した作品をそれぞれの子どもがかぶると、不思議なかわいらしさが漂う「飛行帽」となった。

(エ) こどもクリエイティブクラブD「えいぞうたんけん」

前年度まで実施したクラブ「アニメ体験」を継承して、アニメーションという表現形態にこだわらず、映像一般を広く見渡すクラブとして始められた。現代社会は、写真、映画、テレビ、ビデオとさまざまな映像文化に満ちており、日常生活そのものに深い影響を与えている。

特に現代の子どもたちは、テレビなどの映像文化が当然のごとく身の回りにはんらんしているという状況の中で生まれ育ったという条件にある。しかしながら、この日常に埋もれて、さまざまな映像を作り出す素朴なしくみや仕掛けに目が向けられるということはまれである。こどもクリエイティブクラブ「えいぞうたんけん」では、映像が映ったり、動いたりするしくみについて注目し、ハードウェアの（映画に到達する）成り立ちを歴史を追うように体験する内容として構成した。

導入は＜映像＞をつくりだす基本として＜光と影＞に親しむところから始めた。音楽スタジオBの室内を暗やみにして、照明にあふれたふだんの生活には今やめったにない真のやみを体験した。暗やみの怖さやわずかな光によって物が映像として目に映るという、原初的な発見のできる環境として与えたも

としたこの絵の具箱は、使いたくてももったいなくて使えない、貴重な1本の絵の具となった。

「魔法のつえ」と「貝のナイフ」では、奇妙な形をした流木を、つやが出るまで丹念に磨き、着色し、さらに貝殻を使った螺鈿（らでん）の技術や焼きゴテで装飾を行うなどをした。特に「貝の

のである。また、手作りカメラ（カメラオブスクラ）の制作も行った。その他、古典的な視覚玩具の「ソーマトロップ」「驚き盤」「ゾートロップ」「プラキシノスコープ」などの制作も行っている。これらは、カナダの実験的なアニメーションの鑑賞をはさみながら技術的な体験として試みたものである。

今回の「えいぞうたんけん」は、スタッフ側にとっても初めての試みとしての実験的なプログラムが多くあった。そのため、こちらの予測と子どもの反応が必ずしも合致せず、試行錯誤の繰り返しだけで1年を終えてしまったという反省がある。映像（文化）に関するハード面、ソフト面とも子どもの頭の中に段階的に取り入れられるプログラムの構成を検討しなければならないという課題を残した。

(オ) こどもクリエイティブクラブE「ハンズワーク」

小学4年生以上の子どもたちを対象に“つくりたいものを、つくりたいときに、つくりたいだけつくれるクラブ”として平成3年度から開設された。前年度にはこれを土曜日だけのクラブとし、今回もこれを継承した。

1人1人の子どもたちがそれぞれに、制作したいもののイメージから計画を立て、その計画に基づいて具体的に制作に結び付けていく過程での体験が最も大切なものとする。子どもたちが時間を気にせずにじっくりと試行錯誤を繰り返しながら、自分のテーマによる制作を進めていける環境設定を行うことは容易なことではない。

本年度は材木を使った船や組み木パズルや大きないす、電気器機の部品の廃材・ガラス・石膏・アクリル板などを使ったいろいろなジオラマ、粘土の素焼きによるミニチュアの家、各種の金属素材を加工した飾りパネルなど、それぞれの子どもなりに主体的に取り組んだ個性的な作品が次々と制作された。

3) グループ活動

「木をつくろう」「かげをうつそう」の2プログラムと障害児用プログラムとして「粘土とあそぼう」を実施した。「粘土でジャングル旅行」は要望がなく実施されなかった。

「木をつくろう」「かげをうつそう」は固定したプログラムとして、安定した内容で進行できた。しかし、昨年同様にインターナショナル・スク



▲グループ活動プログラム
「木をつくろう」

ールに対しての実施場面では、通訳によるプログラムの流れの中断や日本語で雰囲気盛り上げても通訳する人のキャラクターで流れが変わってしまうときがあった。今後はインターナショナル・スクールの場合もプログラムがスムーズに流れるように検討していきたい。

障害児用として試行を始めた「粘土とあそぼう」のプログラムは相手校にも好感を持たれたようである。今後も子どもたちの様子に合わせて、できる限りのプログラム開発を行っていきたい。

4) その他の活動

(ア) 第8回《造形スタジオ展》(10.30～11.28)

第8回《造形スタジオ展》は、1992年9月から1993年10月までに造形スタジオで実施されたプログラムを、写真と作品で紹介したものである。展示内容としては、春休み特別プログラム《こんなかおがおもしろい～面～》，夏休み特別プログラム《土と造形～パートⅠ》といった企画展の作品群、そして各季節の行事をテーマに展開した「こども歳時記」のプログラム、その他平常時のプログラムや、1年間の活動を写真と作品で紹介した「こどもクリエイティブクラブ」のコーナーといった構成となった。

造形スタジオ展では、1年間のほとんどの実施プログラムを一堂にみることができ、プログラムどうしの関係や広がりを見ることが出来る機会となっている。第8回《造形スタジオ展》も、プログラムに参加した子どものみならず、親や造形指導者がプログラム作品を通してコミュニケーションできる交流の場となった。

(イ) 第6回《遊びと造形発想展》(6.8～27)

《遊びと造形発想展》は昭和63年から毎年〔こどもの城〕ギャラリーを会場として、遊びと造形発想の会（おもしろ発想の会を改称）と共催で実施してきた展覧会である。

遊びと造形発想の会は、高山正喜久氏（元筑波大学教授）の活動に賛同する造形教育関係者で構成されたグループである。第5回展からは、会のメンバーがそれぞれの造形教育の現場で実践しているプログラムやカリキュラムのなかから、テーマに添った内容の作品を中心に展示を行っている。

今回のテーマは「たしざん・かけざん」。前回のテーマ「ひきざん・わりざん」に引き続き、造形の発想や制作の方法を算数の考え方に置き換えてみたときに、これまでには気づかなかった新鮮な視点や関係が見えてくるのではないかという試みである。今回は来場した子どもたちがこの内容をさらによく理解できるように、「ものの見方・考え方コーナー」を設置したほか、分かりやすく解説をした子ども向けの小冊子も準備された。

またこのテーマを身近に体験できる「作ってみるコーナー」も設けられた。この展覧会は8月8～22日〔ぐんまこどもの国児童会館〕でも巡回展示され好評であった。

また11月27日には、〈折る・開く・動く・変わる～紙からの発想1993〉をテーマにした、第4回〈遊びと造形発想セミナー〉を〔こどもの城〕研修室で開催し、造形指導関係者約20人が参加した。

(ウ) 平成5年度第3回〈児童厚生員等実技指導講習会〉(1.28～30)

〈児童厚生員等実技指導講習会〉では、造形事業部のスタッフが実際にプログラムを作成する時に体験した具体的な事例をスライド、ビデオ、制作実技を通して紹介した。それぞれに異なる児童館の状況を考慮に入れながら、参加者と造形スタジオのスタッフ全員で、造形環境やプログラムの創案、作成について、お互いに意見を交換しながら考えようとしたワークショップ。

料理のイメージから、造形活動を「造形メニュー」とし、プログラムを「造形レシピ」(料理の作り方)として内容を展開した。初対面の参加者が和やかな雰囲気の中で活動ができるように、また、制作とはまさに献立表を立ててクッキングすることに似ているという点からの発想である。

例えば、手元にある身近な材料によって考える場合、それは冷蔵庫に残った有り合わせの材料で工夫しながら作る料理のようであり、アイデアが先行して具体的なプログラムになっていく場合は、作りたい料理のために材料を新たに買いそろえるのに似ている。今回は土・金属・紙・布・木などの造形の基本的な素材はもとより、アレンジ・レシピの視点で、造形スタジオの今までの内容を総論として、楽しく伝えることができたと思われる。

造形することは楽しいものであり、いろいろな人や物との相互の関係が積極的に取り交わされる中から創造性が養われるのである。講習会での出会いが、日常の中での発見や想像の新たなきっかけにつながる点が重要な点であった。

5) 実施プログラム一覧

(ア) 素材との出会い展《土と造形～パートII》実施プログラム一覧

プログラム名	実施期間(対象)	内 容
わくせいをつくろう	4.8～25 (一般親子対象)	3～5kgの粘土の塊を転がして大きな球を作る。指でつまんだり、押ししたり、引っかけて、大きな丸い球の表面に山や川などを作り、表情豊かな惑星を作り上げていく。粘土の量に比例して水分の量も変わる。子どもたちは大きな粘土の塊を使うことで乾燥する前に何度でも惑星の形を変えていくことができる。
「造形実験室」 なんにみえるかな?	4.17～25 7.17～31 (小3以上対象)	河原から拾ってきた大きささまざまな石の中から気に入った形の石を選ぶ。石にさらし布を当て、5mm厚の粘土の板を乗せ、石の形に整える。粘土のひも、球、板などをつなぎ合わせて、石の形の粘土は、虫や動物そして乗り物に変身していった。
かぶせてベッタン	5.7～16 (一般親子対象)	平たく切り取った粘土の板をひっくり返したボールの器に乗せると、だれにでも簡単に半球の立体ができる。その形が何に見えるか考えながら、粘土を丸めたり、転がしたりして半球体の粘土は島や冠などに変わっていった。
「造形実験室」 クレイプリント	5.7～16 8.16～31 (小3以上対象)	丸めた粘土の塊を、板で押し当てて粘土板を作る。いろいろな道具を押しつけて、レリーフ模様を作る。その粘土板の上に絵具をたらし、湿らせた紙を当て、プレス用の板で押すと、自分だけのクレイプリントのできあがりである。
かぶせてベッタン ～かおをつくろう	5.18～30 (一般親子対象)	粘土の板をボールの器のへこんだ面に押し当て、器より一回り小さな形を作る。しかし、これは器ではなく、粘土のひもや球を足して顔を作る。へこんだ形の中からはユニークな顔たちが飛び出してきた。
「造形実験室」 あなあきブロック	5.18～30 (小3以上対象)	粘土の塊を何度でも板の上に落として形を整え、大きな直方体のブロックを作る。その表面に一筆描きで模様や絵を描き、その絵をかきだしで掘り出していく。穴は5つの面からつながり、不思議な空間を持った穴開きブロックができあがった。
ブロックであそぼう	5.29～6.27 7.17～8.31 (一般親子対象)	子どもたちは、スタッフが作った大きささまざまな素焼きのブロックで遊ぶ。四角いブロックは、積み上げて塔や家を作ったり、つなげて長い堀(へい)にしてみたりと、子どものアイデアでいろいろなものに作り上げられていった。
リング・リング・ リングII	6.1～13 7.17～31 (一般親子対象)	半球体のボールの器の上に、粘土のひもで作ったリングをつなぎ合わせていく。粘土のリングで覆われた器は、王冠、塔、顔、動物などに作り上げられる。何本も粘土のひもをつなぎ土に親しみながら、1つの形ができてくるプログラムである。
「造形実験室」 クレイフラッグ	6.1～13 8.2～14 (小3以上対象)	土の隠べい力を使ったプログラムである。どろどろに溶いた粘土をチューブに入れ、布に絵を描く。布を半分に折ってよく粘土を布に食い込ませ、乾燥させる。布を染めて、水洗いをし、竹ひごに接着して「クレイフラッグ」の完成である。
ドロ・ドローイング	6.15～27 8.16～31 (一般親子対象)	どろどろに溶いた粘土をラシャ紙に筆で薄く延ばす。塗った粘土を竹ひご、へら、櫛(くし)などでひっかけて絵や模様を描く。ひっかいた粘土の下からラシャ紙の色が浮かび上がってくる。
「造形実験室」 カリカリ・アート	6.15～27 7.17～31 (小3以上対象)	鋏(こて)で平らに塗って乾燥させた土の板を釘(くぎ)などの先のとがったもので引っかけて虫の絵を描く。描き終えたら、その上に薄い紙を当ててクレヨンでこすりだす。何色も重ねてこすりだしていくと、土に刻まれてた虫は今にも動き出しそう。
クレイクッキー	6.22～27 8.2～14 (小1以上対象)	2色の粘土を使った象眼技法で粘土のクッキーを作る。手のひらくらいの大きさの粘土を球にして、板で押し当てクッキーの生地を作る。その上に色の違う粘土でひもを作り、つなげて絵や模様にする。もう一度板を当てて、クッキーの完成である。
デコボコ虫をつくろう	6.29～7.16 8.2～14 (一般親子対象)	粘土には物の表面を写し取る力がある。貝や床材などのでこぼした表面を写しとりながら、粘土の球やひもをつないで虫を作る。造形スタジオのデコボコ虫は自然の虫にはない新種の虫に生まれ変わっていった。

プログラム名	実施期間(対象)	内 容
「造形実験室」 土に絵をかこう	6.29～7.11 8.16～31 (小3以上対象)	15cm角の段ボールの板に、粉状の粘土と藁(わら)を水で溶いてペインティング・ナイフで塗り付け、乾燥させる。その上に赤、青、白の色土で絵を描いていく。糸や葉っぱを置いてステンシル技法を使ったり、いろいろな方法で仕上げていく。
「夏休み造形教室A」 クレイ・ アート・ボックス	2日間、小3以上 7.27・8.17, 7.28・8.18, 7.29・8.19, 7.30・8.20	粘土をこねる、切る、丸める、延ばす、型押し、絞り出しなどの＜土＞の基本的な技法を使って、象眼技法を使ったタイル板作り、絞り出しの方法で作った木、粘土の角棒を使った家などを作る。大きな木箱に収めて完成である。
「夏休み造形教室B」 つくってならそう！ 土笛・ケン	2日間、小3以上 8.3・18, 4・18, 5・18, 6・18	卵のとがった先に吹き口を付けたような形の土笛「ケン」を作り、焼成後に吹くためのワークショップも実施した。幾つもの卵型の土笛を作っていくうちに、子どもたちはだんだんと粘土の扱いに慣れていった。音楽事業部と共同で実施した。
「夏休み造形教室C」 土の家をつくろう	2日間、小3以上 8.10・24, 11・25, 12・26, 13・27	ベニヤ板に成形した金網を打ち付け、ジオラマの芯(しん)材を作る。土と藁を水で溶いて芯材に塗り付けていく。色土や粘土で家、川など細かい起伏をつけていく。できた土の環境にミニチュアの人物を接着し、芝の種をまいて完成である。

(イ) オープンスタジオ《造形宝島》実施プログラム一覧

プログラム名	実施期間(対象)	内 容
どうぶつねどこ	9.4～10.1 (一般親子対象)	企画《造形宝島》の手始めとして、宝島の環境設定の1つであるジャングルの様子を造形するためのプログラム。焼成した不定形の土の塊に目や模様を描くと不思議な生き物のようである。それを色ラシャ紙で作った巣の中に納めて完成させる。土の形の歪みを生き物として見立てる作業を重視している。
やきいんブロック	9.14～10.1 (小3以上対象)	企画《造形宝島》の中で、ジャングルに隠された古代宮殿を設定。この古代宮殿は装飾模様を電熱ペンで刻み付けたブロック(角材)で積み上げて作り上げられた。1つ1つのブロックはこのプログラムに参加した子どもたちの手による。
ゆめのたからじま	10.2～31 (一般親子対象)	架空の場所＜宝島＞を想定しての地図作り。台紙の真ん中から指でちぎって島の輪郭となる形を切り抜く。台紙に白い紙を重ねて張り付けると海と島ができあがる。スタンプによる記号や、書き込みの線で島やその周りの様子ができあがる。
宝島の地図	10.5～11.3 (小3以上対象)	布の巻き物として作り上げる宝島の地図。紙を島の形にちぎり、布の上に乗せて、紙の周りを絵の具で塗る。紙をはがすと島の形が影のように残るので、島の内外の様子を書き加えていく。布の周りを焼き鋺(ごて)で焼くと、古びた歴史のある地図。
フロタージュ ジャングル	11.2～23 (一般親子対象)	表面の凸凹した面に紙を当て、その上からクレヨンでこすると、凹凸の模様が現れる。このこすりだし(フロタージュ)の技法を使っていろいろな植物が生い茂る宝島のジャングルの風景を作り出す。ジャングルの中には動物たちも書き込まれた。
いしのおまもり	11.24～12.19 (一般親子対象)	危険な宝島探検の想定での、身の安全を守るお守り作り。素材はただの石ころであるが、蛍光クレヨンで彩り、造形スタジオ内に置かれたブラックライトを仕掛けた箱の中で見ると、神秘的な輝きを放つ。布でくるみ、ひもでつるして首に掛けた。
かみさまのおちゃわん	11.24～12.19 (小4以上対象)	企画《造形宝島》内で出会う古代宮殿から発掘された神器の数々という設定。丸いパイプや四角い棒に石膏を流し込んで固まらせたものを、彫刻刀で掘り出して器の形にする。その後染料に浸けて蠟(ろう)で磨くと、彩りも鮮やかな器になる。
たからじまへいこう！	12.21～1.16 (一般親子対象)	宝島へ向かう航海の様子をジオラマふうにする。あらかじめ用意した船型のレンガに、竹ひごのマストや、色ラシャ紙による帆を取り付けた帆船を作る。それを海原に見立てた台紙に据え付けると、パノラマふうの立体造形になる。
帆船をつくろう	12.21～1.16 (小4以上対象)	水に浮かべて風を受けると進む本格的なミニチュア帆船作り。ベニヤ板で甲板の形を切り取り、金網で船腹を作る。船底には鉛の重りをはめこんで、浮かべた時の安定を図っている。竹ひご、トレーシングペーパー、風糸などでマストや帆を作る。

プログラム名	実施期間(対象)	内 容
キョロキョロ しゅうちょう	1.18~30 (一般親子対象)	宝島島内の探検の行程で出会う島民という設定。ストローに竹ひごを通し、その先に発泡スチロールの頭を取り付けると、竹ひごを動かすたびに頭が動いてキョロキョロ回りを見渡す動作になる。色紙や毛糸で体や髪飾りを作るとできあがる。
キョロキョロ族の村	1.18~30 (小4以上対象)	宝島島内の探検の行程で出会う島民の家屋という設定。空き缶の胴部を細い短冊状に切って開き、それぞれ折り返して頂点を結ぶと、玉ねぎ形の屋根ができる。これを角材のかげらの土台に打ち付けると、エキゾチックな家になる。
まぼろしのたからばこ	2.1~13 (一般親子対象)	色紙、色セロハン、風糸といった、幼児にとっても比較的扱いやすい素材を用いた宝箱と宝作り。長い紙を折って作った箱の中を、色とりどりのセロハンや金紙、銀紙で作る宝物で飾り付ける。
かいぶつ ポリエチレノドン	2.15~27 (一般親子対象)	ぬれ傘などを包むポリエチレンの袋を利用して、宝島の中で出会うという設定の怪物作り。ポリエチレン袋の中に新聞紙を詰め込み、首やしっぽなどの間接部をセロハントープで作る。色画用紙で目鼻や、怪物らしい角や鱗(うろこ)も張り付ける。
宝島コイン	2.1~27 (小4以上対象)	石膏の塊を彫刻刀で彫り出して、コインの雌型を作る。そこに電熱器で溶かした鉛を流し込んだ後冷やすと、铸造されたコインができあがる。これは宝島で発見される宝の一部という設定である。
ジュラシックパズル	3.1~18 (一般親子対象)	宝島には「化石の森」という地点が設定されており、ここでは古代生物の化石が発見される。紙くずの中に隠された恐竜の化石のパーツを掘り出し、各部を接ぎ合わせて台紙に全体像として張り付ける。トレーシングペーパーを重ねて肉付け再生も行う。
宝石細工	3.1~13 (小3以上対象)	ビーズ玉を宝石として用い、装飾する作業を行う。ビーズ玉は色とりどりであるが、粒が細かいため、ピンセットで取り出しては、ボンドを塗った台紙に並べていく。ルーベの台をのぞいて拡大して見ながら作業する職人仕事のような試みも行った。
ひかるたからもの	3.19~4.5 (一般親子対象)	春休み特別プログラムとして、先行プログラムの「いしのおまもり」と「まぼろしのたからばこ」を組み合わせた内容で実施。紙を折って作った箱の中に、蛍光クレヨンで色付けした石を張り付け、ブラックライトを仕掛けた暗箱の中で輝かせる。
宝島の地図	3.19~4.5 (小3以上対象)	春休み特別プログラムとして、10.5~11.3実施のプログラム「宝島の地図」を対象年齢を下げて制作できるように再構成して提供。前回と同様に布を用い、スタンプ記号で地図の中味をにぎやかにできるようにした。
帆船をつくろう	3.19~4.5 (小5以上対象)	春休み特別プログラムとして、12.21~1.16実施のプログラム「帆船をつくろう」を再構成して提供。完成後、船を浮かべてみることのできる大きなプラスチックパイプでできた水路を用意し、制作と同時に進水させて遊ぶ体験も加わった。

4 音楽事業部

(1) 5年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
みんなでライブ!	毎週火曜日 14:30~	季節にちなんだ童謡やアニメソングなどをスタッフが演奏し、それに合わせて子どもたちが歌や歌遊び、ダンスなどで参加するプログラム。特にダンスでは、前年度に引き続き、親と子がペアになって楽しめる振り付けを工夫している。
リズムで遊ぼう	毎週火曜日 16:00~	3~5歳までの子どもとその親を対象としたリズム遊びのプログラム。今年で2年目となった。使用する楽器はキーボードのみ。演奏に合わせて身体を動かしたり音や言葉に反応することによってリズム感を育てていくことをねらいとしている。
水曜コンサート	毎週水曜日 15:30~	最初に、スタッフが主に打楽器による演奏を行い、子どもたちがいろいろなリズムや音を聞き分ける。次に、子どもたちがその音とリズムから自由にイメージを広げ、音楽に合わせてリズムカルに体を動かせるようになることを目標としている。
木よう広場	毎週木曜日 14:30~	親子を対象としたプログラム。音楽を聴き、体を使って遊び、体を動かして自由に表現することをねらいとしている。聴くことに重点をおき、使用楽器も固定せず民族楽器などを用いている。
木ようワンダーランド	毎週木曜日 16:00~	音楽スタッフ扮する「楽器屋さん」では世界各地の楽器を素材別に取り上げ、店長(司会者)と子どもたちのリラックスした交流のなかで、音楽や楽器の楽しさを伝えていくことをねらいとした鑑賞型のプログラム。希望者は楽器の体験もできる。



◀バンブーオーケストラ(竹楽器)のコンサート



冬休みと春休みには、音楽スタジオAが▶
「箏之館」になった

名 称	期 間	備 考
楽器で遊ぼう	毎週金曜日 15:00～	「サンバ」音楽を基本に、参加者には楽器を媒介としたさまざまな体験（合奏遊び）を提供することをねらいとしたプログラム。今年で4年目となる活動であるが1学期ごとに新しいプログラム、新しい楽器を取り入れ活発な活動を展開している。
ワールド・ミュージック・チャレンジ	毎週土曜日 13:30～ 15:30～	〔こどもの城〕所蔵の楽器を毎回2～4つに絞って紹介。演奏を聴く・楽器に触る・演奏してみるという体験を通して、さまざまな楽器の持つ面白さ、豊かさを実際に感じ、音・楽器で遊ぶという楽しさの原点を子どもたちに発見してもらうことが目標。
うたってHappy	毎週日曜日・祝日 13:00～ 14:00～ 15:00～ 16:00～	弾き語りの幅をダイナミックに広げる活動。レパートリーは童謡のほかに、テレビアニメのヒットソングや、ドラマの主題歌など、子どもからのリクエストも多く子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる時間になっている。
サンバコンサート	わいわいスタジオが、音楽事業部担当でない日曜日・祝日（週替わり）	今までどおり、コンサートのオープニング、楽器紹介、ダンスの3部構成になっているが、楽器紹介とダンスの部分は来館者の状態を判断して、毎回説明を変えてみたりしながら、少しずつ新しいことを試みて、マンネリ化を防いでいる。
音楽広場	14:30～	手遊び、歌遊び、リズム遊びを中心にして豊富な内容で展開するプログラム。担当職員1人1人の個性とレパートリーを生かした内容を行い、またパネルシアターやダンスなども豊富に加えたバラエティー豊かなプログラムである。
いろいろ楽器コンサート	毎週日曜日 16:00～	世界各地の楽器を演奏し、紹介する鑑賞型のプログラム。世界のさまざまな楽器を演奏し、リズムを感じさせ、楽器の特長を紹介し、居ながらにして音楽の豊かな世界を実感するプログラム。今後も新しい音楽を紹介していく予定。
わいわいバンドと遊ぼう	日曜日・祝日 16:00～	オリジナルの手遊び・歌遊びが中心の参加型コンサート。幅広い年齢の子どもたち（主に3歳～小学校低学年）が一緒に遊べるようにプログラムの流れを工夫し、後半は親子で組になって遊べる部分も入れ、親も参加して遊ぶように構成している。
わいわいスタジオ	日曜日・祝日 ①13:30～ ②15:30～	来館している親子全般を対象にしているコンサートで、特に幼児でも楽しめるような内容に構成している。アフリカ、インドネシア、ブラジル、中国などの民族音楽、絵書き歌やロックなど、さまざまなジャンルの音楽を取り上げるように努めている。
〈季節行事〉 みんなでひなまつり	2.26・27	「ひなまつり」をテーマに、和楽器の体験を中心とした活動を行う。「トントコトントン！五人囃子」（和太鼓体験。箏との合奏もあり）。26日は「ワールド・ミュージック・チャレンジ」（箏の体験）、27日は「いろいろ楽器コンサート」（箏、三味線など）を実施。平常活動に季節感を加え、まとまった良い雰囲気となっていた。

「わいわいスタジオ」（場所＝音楽スタジオB）を除き、他のプログラムは音楽ロビー

2）特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
〈春休み〉 春風箏之館	4.5・5	時間制と定員制とを採用し、落ち着いた雰囲気になれた音楽スタジオA内で伝統楽器「箏」を体験。楽器の弾き方を習った後、「さくらさくら」の曲を練習し、スタッフの伴奏とともに合奏も行った。
〈 〃 〉 ジェンベ王国の コンサート	4.2～5	アフリカのある王国のお祭りの日という設定で、子どもたちが王様に音楽事業部手作りのアフリカの太鼓（アフリカタンタム）の打ち方を習ったり、宮殿のダンサーに踊りを習うというプログラム。
〈児童福祉週間〉 親子であそぼう 音楽広場	4.29 5.1～5	音楽スタジオAで3～5歳児とその親などを対象に親子の触れ合いを大切にした音楽遊びを行った。手遊び・パネルシアター・ダンスを中心としたプログラムとスカーフを使い「ももたろう」を題材としたリトミック的なプログラムの2種。

名 称	期 間	備 考
〈児童福祉週間〉 音楽の世界旅行	4.29～5.5 (4.30は除く) 11:00, 13:00, 15:00	子どもや大人がゆったりとさまざまな国の音楽で世界巡りができるようにした。基本的には元気で明るい性格を持った音楽に、ユニークな形や特徴的な音を持った楽器が日替わりで登場し、子どもたちに大いに興味を持たれた。
く 〃 〉 おながくがスキ!	5.4・5 11:00, 13:30 15:00	音楽事業部の職員とオブザーバーによるトリオバンドのコンサート。楽器でおしゃべりをしたり、いろいろな打楽器の紹介、スプーンの演奏、きらきら星をさまざまな国の雰囲気気でアレンジした演奏、観客参加の手遊びなどで構成。(青山円形劇場)
〈夏休み〉 みんな集まれ! 音楽広場	7.21～8.8	来館児が架空の広場的な空間に入り込み、スタッフ扮する大道芸人たちとの出会いを通じて、いろいろな国の楽器やパフォーマンスに身近に触れることができるようにすることを目指した。
く 〃 〉 南洋音楽座	7.21～31 8.1～8	サンバのプログラムは初めてであったが、幼児向けの回は、子どもも親もリズムに乗って動物になったり行進したりした。小学生向けの回は、初めてサンバの打楽器に触れる子どもにいきなりダイナミックな響きを楽しんでもらえるかを配慮した。 ガムランプログラムは2年目ということで内容も洗練され、幼児向けの踊りをよりシンプルな形に改良したり、小学生向けのストーリー設定をより分かりやすく変えるなどした結果、子どもたちにとって満足感のあるプログラムとなった。
〈冬休み〉 うたってばかばか	12.25～28 14:00～, 16:00～	わらべうたや童謡、アニメ・ソングを中心に家族みんなに楽しく歌を体験してもらうプログラム。今回は特に「わらべうた」に焦点を当て、箏や三味線、胡弓などの日本の楽器にも親しんでもらえるよう内容を工夫した。
く 〃 〉 初春箏之館	1.3～9	内容は春休みとほとんど同じで、年齢の高い子ども用に新たに伴奏のパートを作り、合奏できるようにした。そのため、さまざまなできぐあいの子どもの柔軟に対応ができるようになり、活動の幅が広がった。
く 〃 〉 太鼓道場	1.3～9 1回につき20人	締め太鼓、うちわ太鼓、桶胴、大太鼓などの和太鼓を演奏するリズム遊びのプログラム。さまざまな年齢の子どもたちが一緒に演奏する。年齢は幼児から中学生まで幅広いので、どちらにも楽しめるようにリズムや担当する楽器などを工夫した。
〈春休み〉 ほくらのサウンド	3.26 ①13:30 ②16:00 3.27 12:30 3.27 15:30 3.28 15:00	「こどもの城児童合唱団」「リトミック～お母さんといっしょ」の3つのクラス、「エレクトリック・アンサンブル」が合同でコンサートを行った。出演者の人数が多いために座席数が多く作れずに、1日で2回の公演を行った。(青山円形劇場) 「リズム・ムービングA, B, C」「リズム・ムービング&パーカッション」「パーカッション・アンサンブル」の合同コンサート。1本の本をめぐるストーリー“おおきな木のした だれかさんがとる”をもとにしたコンサート。(青山円形劇場) 邦楽と民族音楽のコンサート。「三味線講座」の3つのクラスは「ガムラン講座」と合同で“スダ民謡”をジョイント演奏。「集まれ! みんなのリズム」(ブラジルのサンバ)は受講生のほかにボランティアが参加した。ガムランは音楽と踊り。(青山円形劇場) 「和太鼓グループ」と「ユースバンド」。和太鼓は外部出演などで自信をつけ初心者から経験者まで活気に満ちて演奏した。ユースバンドは、最後の公演となるので、悲喜こもごもの情感に満ちた快いコンサートであった。(青山円形劇場)
く 〃 〉 オーレ! 100人サンバ	3.29～4.5	参加した子ども全員に打楽器(子ども用タンバリンからジングルを抜きバチでたたく)を持たせ、リズムで遊ぶことを目的とした新しいもの。1人でたたくと小さな音の楽器でも、100人で合奏した時は全く違ったパワーを持つ音になることを実感した。
く 〃 〉 春風箏之館	3.29～31	冬休みと同様、箏のプログラム。なるべく多くの子どもたちが体験できるように、短い時間でも習得しやすい形式で『さくらさくら』の曲を短縮し、より満足感のある合奏ができるようにした。

3) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
リズムムービング A	(人) 3 歳児 (12)	(人) ① 13 ② 11 ③ 11	火曜日 13:30～14:30 (全32回)	自分の名前を使ってリズム遊びをすることから始まって、身の回りのさまざまなことからリズムを感じさせ、子どもたちの眠っている感覚を揺り動かし、創造性を引き出し、はぐくむことを目指した活動を行っている。主にコンガ、ボンゴなどの打楽器、リズムやメロディー、ハーモニーを即興で演奏できるオルフ楽器を使用しているが、幼児のクラスは全身でリズムを表現している。
" B	4 歳児 (15)	① 18 ② 13 ③ 13	" 14:30～15:30 (全32回)	
" C	5 歳児 (15)	① 8 ② 8 ③ 8	" 15:30～16:30 (全32回)	
リズムムービング & パーカッション	小1～3 (20)	① 24 ② 22 ③ 21	" 16:30～17:30 (全32回)	リズムによる自己表現も行う。さらに読譜力など音楽的基礎力の理解、打楽器演奏法の導入、オルフ楽器を使った即興演奏をするなど一歩踏み込んだ指導を行っている。
おかあさんもいっ しょ リトミック初級	(組) 3～5 歳児 と母親 (20)	(組) ① 22 ② 20 ③ 18	水曜日 13:30～14:30 (全32回)	子どもの発達段階に即したリズム遊び、歌遊び、簡単な造形活動を通して親子のコミュニケーションを図り、音楽を楽しむ心と豊かな感受性を養うことを目指している。
おかあさんもいっ しょ リトミックII	4 歳児と母 親 (20)	① 19 ② 20 ③ 16	" 14:30～15:30 (全32回)	初級と同じく、引き続き、初級で培ってきた感性や音に対する感受性を、子ども固有の成長の実際に合わせながら、個性豊かな発達を促すように活動に高めている。
おかあさんもいっ しょ リトミックIII	5 歳児と母 親 (20)	① 17 ② 21 ③ 16	" 15:30～16:30 (全32回)	就学を控えるころになると子どもの感受性も親離れが始まり、子ども同士の接触の機会が多くなり、生き生きと目を輝かせて音楽を楽しみ、遊んでいる子どもたちが印象的。
おんがく星 みつけた	2 歳児と母 親 (30)	① 30 ② 30 ③ 29	木曜日 10:30～11:30	就園前の児童と母親が対象で、リズム遊びや手遊びを中心に、造形活動や身体表現なども取り入れた活動を行っている。スキップをしながら楽しく音楽と遊べることを目指す。
和太鼓グループ	(人) 小3～高3 (12)	(人) ① 17 ② 17 ③ 17	土曜日 14:00～15:30 (全32回)	日本の伝統音楽の1つ、湯島に伝わる“助六太鼓”のコース。大太鼓、中太鼓、締め太鼓の3種の太鼓を使って演奏する組み太鼓。楽譜は一切使わずに、口唱歌で指導している。
集まれ! みんなの リズム	小3～中1 (10)	① 9 ② 10 ③ 9	" 15:30～17:00 (全29回)	ブラジルの独特な打楽器を使い、サンバのリズムを楽しくアンサンブルするコース。合奏だけにとどまらず多彩なリズムを生かし、体操、ゲームなどの体を使う活動も取り入れている。
合唱講座	小1～4 (30)	① 31 ② 31 ③ 31	" 13:30～15:30 (全32回)	遊ぶことを通して無理なく声を出し、身体表現なども取り入れて、上手に歌うことだけではなく、体全体で音楽を表現するユニークな合唱活動プログラム。
混声合唱	高校生以上 (15)	① 23 ② 23 ③ 23	" 19:00～21:00 (全32回)	子どもたちに豊かな音楽や表現のすばらしさを伝えることを目指している。コンサートや合宿などのときは、常に「こどもの城児童合唱団」と活動をとみにしている。

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
エレクトリック アンサンブル	(人) 小5～高3 (8)	(人) ① ー ② 7 ③ 7	日曜日 10:00～12:00 (全20回)	アンサンブルの中での各楽器の役割が分かりやすいバンド形式のプログラム。無限の音色が操れるシンセサイザーを活用し、さまざまなジャンルの音楽にチャレンジ。9月から開講。
三味線講座 初級	小1～高3 (10)	① 7 ② 5 ③ 5	〃 10:00～11:15 (全32回)	あまりにも庶民化されているので誤解されやすいが、日本の伝統音楽“三味線”。童謡や数え歌などから始めて、進むにしたがい、長唄なども演奏できるようになる。
〃 中級	〃	① 7 ② 7 ③ 6	〃 11:15～12:30 (全32回)	
〃 上級	〃	① 10 ② 10 ③ 10	〃 12:30～13:45 (全32回)	
ガムラン講座	小1～高3 (10)	① 4 ② 6 ③ 7	〃 15:00～17:00 (全32回)	インドネシアの青銅の打楽器の合奏音楽。内包する音楽世界が豊かで、世界的な広がりを持っている。丁寧な指導の下に“ガムラン”のおもしろさを学ぶ本邦唯一の子どものための講座。
大人のための ガムラン講座	大人 (10)	① 10 (1期のみ)	〃 18:00～20:00 (全10回)	“ガムラン音楽”の幅広い世界を見聞し、既成の音楽感にとらわれずに、音楽の多様な可能性を体験する入門的なコース。9月から「ガムラングループ」と混成で実施。

〈クラブ〉

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
パーカッション アンサンブル	(人) 小4～高3 (15)	(人) ① 18 ② 17 ③ 17	火曜日 17:30～19:30 (全32回)	さまざまな打楽器をふんだんに使い、演奏したり、身体を楽器にしてリズム打ちを行ったり、子どもたちのはじけるようなリズム感を表現する。
こどもの城 児童合唱団Ⅰ	小2～3 (30)	① 38 ② 38 ③ 38	土曜日 15:30～17:30 (全32回)	音楽を通し、協調性・創造性・幅広い知的好奇心を養い、豊かな音楽性を育てることを目的としている。合唱演奏だけでなく野外活動、シンセサイザーやリズム楽器による合奏なども体験するユニークな総合プログラムを展開。
こどもの城 児童合唱団Ⅱ	小4～中3 (60)	① 52 ② 52 ③ 52	〃 17:00～19:00 (全32回)	
ユースバンド	小5～高3 (28)	① 19 ② 17 ③ 15	日曜日 10:00～12:00 (全32回)	英国スタイルの金管楽器のブラスアンサンブル。クラシックからポップス、童謡、アニメソングなどさまざまなジャンルの曲に取り組んだ。
ガムラングループ	小2～高3 (15)	① 10 ② 11 ③ 5	〃 16:00～18:00 (全32回)	「ガムラン講座」の継続者のコース。年齢の差を超えて、子どもたちは打楽器の合奏を楽しむことができる。初級卒業者と経験者が一緒になってアンサンブルをして練習している。

4) その他（野外活動など）

名 称	期 間	備 考
和太鼓グループ パークヒルズ子供会 夏まつり	7.29	横浜市戸塚区のパークヒルズ子供会主催の夏まつりに出演した。子供会の運営の大人から、地区に在住の子どもたちに日本の伝統的な芸能を身近に楽しめたいという要望があり、受講生15人が参加出演した。
おまつり劇場'93	8.11・12	今年は「こどもたちによる日本の四季」というタイトルで青山円形劇場において開催され、「三味線グループ」から受講生20人とOB4人、「和太鼓グループ」から受講生18人が出演した。
平成5年度 こどもの城児童合唱団 夏期合宿	8.24～27	毎年行っている夏期合宿を富山県で行った。富山市の呉羽少年自然の家で合宿して、26・27日には富山県こどもみらい館のホールでコンサートを行い、小杉町ラ・ポールコーラスの小学生とジョイントコンサートも実施した。
第6回三味線のつどい	9.15	三味線講座の田島講師の主宰の「佳の会」と「こどもの城」の共催で今年も青山円形劇場で開催された。今年で6回目。三味線グループの受講生及びOB26人が出演し、初めて古典曲に本格的に取り組み「元禄花見踊」を演奏、好評を得た。
おんがくがスキ！ 宮城県名取市公演	9.12 10:00～12:00	音楽事業部のオリジナルプログラムが、宮城県名取市館腰児童センターの母親クラブから依頼され、同市館腰小学校での出張演奏を行った。1回だけの公演であったが、小学生の親子を中心に430人が参加。



◀最後のコンサートで、力いっぱい演奏をする「ユースバンド」
（「ぼくらのサウンド」）

バラエティーに富んだ「わいわいスタジオ」は日曜日の定番プログラム



(2) 音楽事業部の活動

本年度の音楽事業部の活動で特筆すべきことは、音楽事業部の職員が中心になり、アルバイトとして日常活動に協力してくれている音楽家たちとともに“おんがくズキ”というグループをつくり、5月の連休の〈こどもフェスティバル〉の期間に青山円形劇場でコンサートを行い大好評を受けたことである。



▲“おんがくズキ”の「おんがくがスキ！」のコンサート

音楽ロビーにおける一般来館児対応プログラムを基盤にした地道な活動が、質の高いコンサート形式のプログラムに結実したのである。親子を対象にした従来の聞かせる鑑賞型のコンサートと異なり、コンサートの中で観客が舞台の音楽家と一緒に音遊び、手遊びをしながら、一体となって音楽を楽しむという画期的な試みのコンサートで、今後の展開が一層期待されるプログラムである。青山円形劇場での公演記録ビデオを見た名取市の児童厚生員が強い印象を受けて、“おんがくズキ”の「おんがくがスキ！」というコンサートを企画した。派遣事業のシュミレーションとして宮城県名取市の館腰児童センターで親子を対象にしたコンサートが実現した。

このような地道ではあるが、積極的な活動は、職員自体の止揚へ向かう意識を刺激し、一般活動をより高めるものとして大切な行為であると思われる。しかしながら、目的に向かい常に意識的に活動し、計画を立てて行わなければ、このような成果は望めないし、質の高い画期的な〔こどもの城〕らしいプログラムは蓄積されていかないであろう。

1) 平常期間の活動

平常期間には、一般来館児活動と並行し、音楽スタジオAとBで講座・クラブを運営しているために、一般に使用するスペースは、日曜日・祝日などに音楽スタジオBで行うコンサート、イベントなどを別とすれば、基本的に音楽ロビーに限定されている。

平日のプログラムが特に職員の固有のレパートリーや得意な楽器などに負っているところが多いために、各々のスタッフの特長を生かした日替わりのプログラムが主になっている。特に幼児の多い週日は、手遊び、リトミック、音楽遊びなど、親子が一緒になって楽しめるプログラムを中心とした“子育て支援”あるいは“家族ぐるみ”が基本となっている。これらのプログラムは、おおむね来館者の多い午後の時間帯、2時から3時に行われ、イベントやコンサートの形態を採用している。

イベント以外の時間は、ロビーに配置してあるさまざまな楽器（マリンバ、ガンザ、ボンゴ、シンセサイザー、タンバリン、コンガ、アフリカタンタムなど）をだれでも自由に利用できるように「いろんな楽器やってみよう」の時間にしている。親子で自発的に楽しんだり、スタッフの弾き語りに合わせて、合奏参加したり、活動内容はさまざまである。音楽遊び、音楽体験への導入的な活動と位置づけている。

高学年の子どもたちが多く来館する土・日曜日、祝日などには、音楽スタジオBを利用して、年齢層にかかわらず楽しめるプログラム「わいわいスタジオ」を実施し、さまざまな音楽が体験できるコンサートを行っている。

(ア) 火曜日から土曜日の日替わりプログラム

火曜日から土曜日の日替わりのプログラムは過去の経験を積極的に生かして、子どもばかりの参加形態には、付添いの保護者も参加するように呼びかけ、あるいは親子が対象のプログラムにするなど改善に努めている。本年度、日替わりのプログラムは次のような改善を行った。

火曜日の「みんなでライブ」では、1月からは、特に“スカーフを使って楽しくダンス”というテーマに基づき『北風小僧の寒太郎』などスカーフを1人1枚ずつ使って踊る振り付けを考案したところ、子どもだけではなく父や母もこれまで以上に熱心に参加してくれるようになった。また「リズムであそぼう」では、毎回0～5歳までの15～20組の母と子が参加し、この時間を楽しみにして繰り返し遊びにくる子どもも増えた。前年度に比べると、子どもと一緒に参加する親も増え、プログラムのねらいがより達成された実感がある。

水曜日の「水曜コンサート」では、従来のプログラムに季節の歌や、親子で楽しめるダンスや遊びを毎回1つ織り込んだので、子どもがリラックスして楽しめるプログラムになっている。

木曜日の「木ようワンダーランド」は、青年ボランティアとの共同プログラムである。木曜日のこの時間帯を受け持っていた青年ボランティアの活動に低迷の兆しが見えたために、9月にスタッフはボランティアと話し合い、その結果、活動の軸にサンバの音楽を導入し、かつ青年ボランティアが自ら音楽を楽しみながら、子どもたちとかわるという、音楽のおもしろさを根源的に体

験できる試みとした。その成果として、年度末のプログラム「ぼくらのサウンド」のサンバの講座の出演に賛助出演することができ、十分手ごたえのある活動になった。金曜日の女性ボランティアの活動「楽器であそぼう」とともに、ボランティア活動の1つとして、今後注目される可能性のあるものである。

金曜日の「楽器であそぼう」は、女性ボランティアとの共同プログラム。3年の間に、ボランティアが習得したものは、楽器を上手に演奏する単なる技術や音楽的な経験だけではない。音楽事業部の活動に大きく貢献し、日常活動の一部となっている。ボランティア活動の1つのモデルになるべきものとして今後の展開を見つめていきたい。

土曜日の「ワールド・ミュージック・チャレンジ」は、本年度は特に日本や中国、インドネシアなどアジアのものを中心に、弦楽器の紹介にも力を入れた。幼児から大人まで幅広い層の人たちが興味をもって充実した音楽体験を持つことができた。

(イ) 日曜日・祝日のプログラム

毎日曜日の「うたって Happy」は、イベントとそれ以外の時間をはっきりと区別するため、弾き語りの時間枠を設け、演奏者はもとより、聴くほうも目的意識をもってコンサートを楽しむようにした。演奏面でもスタッフを増やし、よりバラエティーに富んだステージを目指している。

今まではイベントと「わいわいスタジオ」の時間帯がうまく調整がとれず、混乱が生じていた。しかし、意識的に両者の時間的な整合をしたため「わいわいスタジオ」の行われる日には、積極的にイベントの誘いと案内を行い、今まで以上にスムーズに利用者の誘導ができ、人の流れもとても合理的になった。

「わいわいスタジオ」を音楽事業部が担当しない日曜日・祝日には、「サンバコンサート」と「音楽広場」を週替わりで実施している。

「サンバコンサート」は、“サンバ”という名前だけ知られていて、音楽そのものについては知らない人が多かったが、長年の積み重ねが実り、最近では来館者にもよく知られるようになった。多くの子どもと一緒に楽器をたたくさまは圧巻であり、特に最近ではサッカーのJリーグ人気もあって、これに参加するために来館する子どもも増えている。



また「音楽広場」では、プログ

▲みんなで楽しく「うたって Happy」

ラムの基本に今年はわらべうたを多く取り入れ、親子で楽しめ、かつ家に帰ってからでも親子で遊べるようにプログラムを工夫し、参加者の気持ちを刺激した。そして、歌やダンスの部分では、バンドユニットを生かし、より楽しい雰囲気をつくることに成功した。

日曜日・祝日の「いろいろ楽器コンサート」は、来館者に音楽の多様な世界を職員のレパートリーを十分に生かした〈ライブ〉形式で直接体験してもらう試みである。

今年は、同じ太鼓でも和太鼓と異なり“ばち”ではなく、直接手でたたくジェンベ（西アフリカ）、廃品の石油のドラム缶を利用して楽器にしたスチール・ドラム（トリニダード・トバゴ）、起源はアフリカにあると言われている民族楽器ピリンバウ、サンバの打楽器（ブラジル）、二胡（中国）、インドネシアの竹の楽器アングルン、ガムランの楽器ジョゲット・ブンブン（インドネシア）など、さまざまな民族の楽器を中心に取上げた。

定番になっている、バラエティーに富むプログラム「わいわいスタジオ」は、昨年と同じく音楽事業部とAV事業部との共通スペースである音楽スタジオBで、毎週日曜日・祝日にAV事業部と共同で行った。音楽事業部担当のプログラムでは、AV事業部は、音響・照明・映像による特殊な効果など、音楽固有の領域は別として、プログラム全体の演出がより高まるような共同作業を行った。年間の活動をAV事業部と折半して使用するために、1年間で音楽事業部は全20タイトルを担当した。

(2) 特別期間の活動

(ア) 春休み

春休みの特別期間は、年度変わりの休暇なので、学校の宿題などがなく子どもたちが自由に遊べる時間があるので比較的高学年の児童が来館する。そのため、大きな子どもたちでも十分参加できるようなプログラムを考え、実施している。

「春風箏之館」という箏の体験コーナーを音楽スタジオAで実施した。おもしろさだけでは、子どもを引きつけるのは難しい。そのために、さまざまな工夫を凝らして、プログラムを組み立てることになる。楽器で望みの音を出し、それが1つの曲になるのは困難なことであるが、それにあえて挑戦したのが箏プログラム。参加者全員が15分間箏の音に集中できるプログラムは、繰り返して利用する子どもも多く、充実したものとなった。簡単に曲が弾け、豊かな音が出る箏は小学生以上にも十分満足できる“音遊び”となった。

「ジェンベ王国のコンサート」は、スタッフが演奏するジェンベ（アフリカの太鼓）のリズムが全イベントを通じて迫力あるビートをたたきだし、それに

乗ってリズム遊びやダンスを展開した。リズムは音楽の基本であることが知らず知らずのうちに体験でき、多くの友だちと一緒に一層おもしろくなる音楽事業部のオリジナルプログラム。

(イ) 児童福祉週間（ゴールデンウィーク）

音楽ロビーでの活動のほかに、5月4・5日の2日間、青山円形劇場で「おんがくがスキ！」の公演も行った。

「親子であそぼう音楽広場」では、来館者の多いゴールデンウィークなので、平常期間のロビーでの活動をより充実した形で実施し、子どもと親をともに対象にした。参加者はピアノの音に巻き込まれ、音と動きが一体となり、生き生きと親子で遊ぶ楽しいプログラムとなった。



▲音楽スタジオAで「親子であそぼう音楽広場」

子どもの日常生活に題材をとった歌遊びやリズム遊び、パネルシアターなどを通して、親子のコミュニケーションを図り、家庭に帰っても家族みんなで楽しめる音楽遊びを紹介することをねらいとしている。1回目と2回目は違ったプログラム内容で行ったが、今年は特に親子の触れ合いを大切にした遊びを中心に構成した。参加者は毎回ほぼ満員となり、どの親子も積極的に楽しんでいった。

「音楽の世界旅行」は、昨年に続く企画で、「わいわいスタジオ」規模のコンサートを実施した。昨年の経験から、青山円形劇場の公演とかけ合わないよう試みたが、同じような内容の企画は実施しにくく、今後の検討課題として残っている。なお、6日間のプログラムは以下のとおり。

4月29日＝「アメリカの旅」。多種類のラップによる合奏。ビッグバンドジャズ。

5月1日＝「アフリカの旅」。ジェンベなどの太鼓とダンス。

2日＝「中国の旅」。中国の伝統的な曲芸である雑技とその音楽。

3日＝「ブラジルの旅」。ブラジルの歌手、ネルソンさんのサンバコンサート。

4日＝「南米アンデスの旅」。中南米の民族音楽フォルクローレのコンサート。

5日＝「日本の旅」。和太鼓の助六太鼓のコンサート。

「おんがくがスキ！」は、音楽事業部が平常期間や特別期間、音楽ロビーや音楽スタジオBで培ってきたプログラムを凝縮し、より楽しめるように演出した。2日間6回の公演で、延べ約1,200人の親子が観覧した。

(ウ) 夏休み

「みんな集まれ！ 音楽広場」は、架空の広場で大道芸人に扮したスタッフに刺激を受けて、子どもたち自身もパフォーマーとしてマーチや祭りなどの表現活動に積極的に参加できるようなプログラム作りを目指した。ロビー全体を“森の中にある広場”として素材ごとに楽器を分類して自由に体験できるコーナーを幾つか設け、イベント以外のフリーの時間もより充実したものになるよう設定を工夫した。「みんなでマーチ」、スタッフによる「大道芸」、「紙しばい」などのミニ・パフォーマンスを小イベントとしてそれぞれ30分ずつ1日に2・3回行った。好評だったのは、午後1時から約20分ほど行った「みんなでマーチ」のプログラム。

イベントのないフリーの時間帯にいろいろな素材のコーナーを全部開放して対応するのは困難なことが分かり、今後は、時間帯ごとに楽器の素材や種類を限定した対応の仕方に変えるなど、より改善を重ねていきたい。そのほか「音楽広場のカーニバル」「夕焼け広場コンサート」などを行った。

「南洋音楽座」は音楽スタジオAで開催。スタジオ内を南国的な雰囲気の見世物小屋のように演出し、期間の前半はブラジルのサンバ、後半は昨年に引き続きインドネシアのガムランに題材をとった内容。南国の音楽を演奏するとともに、楽器の体験ができる場とした。プログラム全体を通じて幼児は、音楽に合わせて体を動かすこと、小学生以上は楽器の演奏体験を中心に行った。それぞれの音楽の持つ特性、個性を生かしたプログラムとなり、参加者は貴重な体験を得たようである。

サンバのプログラムでは、3～5歳の幼児向けと小学生向けの2つ行ったが、小学生向けのプログラムでは、サンバの楽器の特異な音を楽しませるのはなかなか困難なことであることが分かった。

(エ) 冬休み

「うたってぽかぽか」のプログラムのもとに、親子で歌遊びを楽しむ「音楽広場」、日本の楽器を使つてのわらべうたの演奏を聴く鑑賞型プログラム「いろいろ楽器コンサート」の2つを行った。そのほか、1日3回「うたって Happy」というキーボード弾き語りとドラムによる演奏を行い、子どもたちは好きな歌をリクエストしたり、一緒に大きな声で歌ったりと存分に歌を楽しんでいた。

「初春箏之館」は、音楽スタジオAを使ったプログラムで、ほかの音と入り交じらないように環境を整えて、正月の日本の音を積極的に子どもに紹介した。

子どもばかりでなく大人にも十分手ごたえのある内容。好評であり、今後の活動の広がりを開拓できるものとなっている。

(オ) 春休み

「ぼくらのサウンド」は、音楽事業部の運営する講座・クラブの受講生が1年間の練習の成果を青山円形劇場で発表する年度末の合同コンサートである。来館した人々に「こどもの城」の音楽活動を広く知ってもらうことを目標に実施しているものだが、最近では受講生の保護者や親類縁者が観客として増加している。

音楽ロビーでは「オーレ！ 100人サンバ」を実施。今までのサンバのプログラムは、ダンスで子どもたちが参加するのが中心であったが、今回は特にリズムで遊ぶことを目的とした新しい内容のものである。毎回50～100人の子どもが参加し、後半はカーニバルのようにリズムを打ち鳴らしながら全員で行進をした。

「春風箏之館」は、家庭や普通の環境ではなかなか接触しがたい箏が、分かりやすい指導のもとに十分体験しながら、日本の響きを堪能できるということで、親にも喜ばれていた。音楽スタジオAで開催。

3) 講座・クラブの運営

講座・クラブ全体としては、2つの注目すべきことがあった。平成4年3月で「シンセサイザー&コンピュータミュージック」を取りやめ、9月から職員が指導する「エレクトリック・アンサンブル」という講座を開講した。1人1人が機械を用いると、とかく1人の世界に埋没しがちであるが、この新しい講座は、シンセの機材を活用して皆で演奏することを目的で生まれたものである。年度末に練習の成果を発表する「ぼくらのサウンド」における演奏をみると、この講座の開講目的は十分に達成されており、成功したものとなった。

もう1つは、開館以前から活動を続けていた「ユースバンド」が、初期の役割を全うし、3月の年度末で講座を閉じたことである。

講座・クラブの運営は、大義名分だけでは運営できず、そのかたわらで必ず経済的に収支のバランスが必要である。ガムラン講座は、その存在意図にもかかわらず、受講生が極めて少ない時期があったが、講座とグループを1つのクラスに混成したり、受講生を募るために「ワークショップ」などを再三行い、継続維持をしている。

4) 交流活動・協力活動

合唱団は、5月の恒例の厚生省児童福祉文化審議会推薦の授賞式の日、コンサートを要請されて、出演した。そのほか職員の外部派遣も増えてきている。

また、講座・クラブの活動が外部から注目を受けて、外部の組織や団体から派遣の要請を受けて、出張してコンサートなどを行う機会が増えてきている。本年度は、和太鼓のグループが横浜市戸塚区のパークヒルズ子供会に招かれて演奏活動を行った。演奏会に来た幼児・小学生から中学生までが体験コーナーに参加し、和太鼓の受講生との交流も好評だった。和太鼓の受講生にとっては、外部に出て演奏することは初体験であったが、よい刺激となった。

合唱団は、9回目の合宿を富山県の呉羽少年自然の家で行い、ナイトウォークラリー、池遊び、すきやき作り、竹のコップ作り、キャンプファイヤーなどのプログラムを体験した。富山県こどもみらい館のホールで小杉町ラ・ポールコーラスの小学生とのジョイントコンサートも実施し、こどもみらい館のスタッフの方々のコーディネートによる交流ゲーム大会なども開かれた。

5) その他（共同プログラム・職員派遣）

「母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」は、ダウン症児とその親を対象とした小児保健部との共同プログラム。開講して今年で6年目に当たるが、音楽事業部からは3人のスタッフが音楽的な内容においてプログラム実践にかかわった。カスタネットを使ったりリズム遊びやリトミック活動、リラックス、歌遊び、仕上げのリトミック体操などである。どの活動においても親子のスキンシップを十分に図ることと、それらを通して特に母親の気持ちが解放される場であることを目指している。

神奈川県城山町から「城山町平成5年度生涯教育学習講座・幼児期の部」の講師派遣の要請があり、「ライフサイクルにそった心とからだの健康について」というテーマのなかで「親子で楽しむうたあそび——声と音を使ったふれあい作りのヒント——」というタイトルで音楽遊びを紹介した。

5月21日に行われた城山町生涯学習講座・幼児期の部には、約30組の親子が参加。子どもの年齢は0～5歳にわたり、特に2・3歳児が多かった。「子守歌を子どもに歌ってあげる機会があるか」という問いかけに「歌ってあげたことがある」と答えたのは2・3人だけであり、今の子どもが、母親の肉声に触れる機会が少なくなっていて、それよりもテレビの音声になじんでしまっているという状況がみえてきた。プログラムの中で親子の反応が特によかったのは「身近な材料を使つての楽器作りと音遊び」。フィルムケースの中に米を入れビニールテープで止めただけの“ガンザ”（マラカスのような楽器）という楽器を作り、『おもちゃのチャチャチャ』の合奏や『ちいさな世界』の曲に合わせての行進をどの親子も生き生きと楽しんでいた。

5 A V 事業部

(1) 5年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
ビデオ玉手箱	毎週木曜日 15:30～17:30	2画面をMSXコンピュータに取り込み、それを交互に表示する、実写による“繰り返しアニメ”のワークショップ。手を上げたポーズと下げたポーズを取り込めば、手を上げたり下げたりする動作が再生できる。ソフトは映像作家の岩井俊雄氏から借用したものを使用している。
おもしろビデオ館	毎週金曜日 15:30～16:00	一般に市販はされていても、目に触れることが少ない優れたビデオ作品は多く存在する。それらの中で上映可能なものをセレクトし、紹介するプログラム。世界の絵本を基に丁寧にアニメ化した「世界絵本箱」「マドレーヌ」シリーズ（ヤマハ）、日本の昔話や世界のおとぎ話をち密な人形アニメで表現した「人形アニメシリーズ」（学研）を紹介。
ばたばたアニメをつくろう	毎週土曜日 16:00～17:30	子どもたちが自分で描いた2枚の動画をその場で撮影、簡単なアニメを作るワークショップ。
こどもの城映画劇場	日曜日・祝日 (隔週～月1回)	故・武藤行雄氏の遺族の方からの寄付を基に設立した「武藤行雄記念文庫」収蔵の16mmフィルムライブラリー、カナダのアニメーションを中心に上映。音楽スタジオBに仮設の映写設備を設置し上映。開催時間＝①13:30～14:00②14:30～15:00③15:30～16:00の3回上映。
AV実験室改め 不思議な映像実験室	日曜日・祝日 (隔週～月1回)	昨年までAV実験室と総称していたワークショップ系のプログラムを本年度から不思議な映像実験室と改めた。通常実施している「ばたばたアニメ」と「ばらばらまんが」、「紙シネマ」など高学年対象のものを組み合わせている。また、写真技術に関連した「光の魔法ーうつる」など新しいプログラムも実施。
AVライブラリー 宇宙特集 「宇宙の中の地球編」	10.9～29	地球上で見られるさまざまな物理（宇宙）現象にスポットを当てた作品の視聴促進プログラム。
バンダイビデオ試写会	日曜日・祝日 スペースの使用が可能な日に実施。	AVライブラリーの待ち利用者を対象に、玩具メーカーのバンダイと提携して行っている人気ビデオ作品の上映会。場所はフリーホールまたは研修室。開催時間は12:45～17:15。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<春休み> 環境特集「総括編」	3.25～4.5	平成4年度に実施した環境特集の締めくくり。次代を担う子どもたちに環境の大切さを知ってもらいたいという願いから環境全般をAVライブラリーのテーマとした。

名 称	期 間	備 考
<春休み> こどもの城映画劇場 「こどものための アニメーション」	4.2～5	日本の若手アニメーション作家の中で積極的に活躍しているやまむら浩二氏にスポットを当て、自主制作から商業ベースで作った作品までを集めて上映。広島国際アニメーションフェスティバル・子ども向け部門第1位『ふしぎなエレベーター』は関東地区初上映。
<児童福祉週間> 宇宙特集 「宇宙の乗り物編」	4.29～5.5	宇宙の乗り物であるロケットやスペースシャトルに関する作品の視聴促進活動。
< " > 宇宙ステーションM96	4.29～5.5	宇宙開発事業団や宇宙科学研究所の協力を得て、大型のロケット模型や実際に宇宙で使われた品々を展示。また「宇宙のお話会」なども併せて実施。体育室が会場。
< " > ばたばたアニメをつく ろう・ばらばらまんが をつくろう	4.29～5.5	2枚の絵を描き簡単なアニメを作る「ばたばたアニメ」(低学年対応)、アニメの動画のように少しずつ動きを変えた絵を連続して描き、本のようにとじて作る「ばらばらまんが」(高学年対応)を実施。
<夏休み> "	7.21～25	低学年対応として「ばたばたアニメ」、高学年対応として「ばらばらまんが」を実施。
< " > 宇宙特集 「星と星座編」	7.21～8.8	星座やそれにまつわる伝説などにスポットを当てた作品をカタログやポスターで紹介。
< " > 不思議な映像実験室 ビデオアスレチック	7.28～8.4	ビデオの技術を使って電氣的な像の変形や合成を再生して楽しむ遊び。背景に絵や別の映像を合成する「クロマキー合成」、モニターとカメラを2セット組み合わせた「簡易テレビ電話」、モニターテレビの中に合わせ鏡状に映像が連なる模様を楽しむ「フィードバック」など、参加しながら映像効果を体験できるような構成を心掛けた。
< " > AVフェスティバル '93「すばらしいアニ メーションの世界」	8.10～22	国内外の優れたアニメーション作品の上映を中心に、カナダNFB Cの作家、ディアンヌ・シャルトラン氏による自作のメイキングと体験作画ワークショップ、シンポジウムなどを開催。「キンダー・フィルムフェスト・ジャパン」(主催:同実行委員会)が実施する映画祭との企画協力を得て実施。
< " > 自由研究に役立つかな 「マクロスコープ 工作コーナー」	8.10～31	AVライブラリー内に設けた制作コーナーで、塩化ビニールパイプ、黒紙、レンズなどを利用した簡易天体望遠鏡を制作。対象は小学校4年生以上、参加費(材料費)800円。1日2回、12:00と15:00に実施(所要時間90分程度)。
< " > 光の魔法 「うつる」	8.24～31	写真を素材にして、映像が写るといえるのはどういう現象なのかを体験する。カメラの元祖の写生器「カメラオブスクラ」(復元品)を用いて人物画を描くコーナーは自由参加。その場で撮影したフィルム(印画紙を使用)を現像してみるワークショップ(13:30と15:30から)を開催。
<冬休み> 宇宙特集 「宇宙SFヒーロー編」	12.23～1.9	宇宙特集の低年齢向けプログラムとして、宇宙などを舞台とするSF作品を重点的に紹介。
< " > ウルトラクイズかるた 大会&ウルトラマング レート写真撮影会	12.23～1.9	自作のウルトラマンかるたを使得点を競う。一定の得点に達するとウルトラマンG(グレート)との記念撮影ができる。
< " > ばたばたアニメをつく ろう・紙シネマを作ろ う	12.25～28	低学年対応としてばたばたアニメ、高学年対応として紙シネマを実施。紙シネマは、フィルム状の紙帯に動画を描き、専用ビューアーで見ると、間欠運動のコマ送り機構で絵が動いて見える。

名 称	期 間	備 考
<春休み> ばたばたアニメをつくろう	3.25～28	毎週土曜日に実施している「ばたばたアニメをつくろう」の春休み版。春休み特別期間のみ音楽ロビーで実施。
< " > こどもの城映画劇場 「鉄道に生きる人々」	3.29～31	記録映画の老舗的存在の岩波映画製作所が制作した、鉄道（国鉄）の記録映画の中から、優れた作品『ある機関助手』と『つばめを動かす人たち』の2本を上映。写真、解説のパネル展示も会場内に設置。迫力ある蒸気機関車、本当の鉄道員の姿を伝え、現在では全く見る事ができない貴重な映像に来場者の関心が集まった。
< " > 宇宙特集 「総括編」	3.25～4.5	平成5年度の年間テーマである宇宙特集の総括編として、人類に最もなじみの深い「月」を取り上げ、視聴促進を実施した。開催時間は10:00～17:30。
< " > 光の魔法「うごく」	4.1～5	盤を回転させてスリットから像を見ると動いて見える「驚き盤」、スリットの向こう側に仕掛けられた絵が動くとき動いて見える「オンプロシネマ」などのいろいろな視覚玩具の展示、盤を回転させると2つの絵が重なって見える「ソーマトロープ」、1枚の写真に針で穴を開け、表と裏からの光の調節で昼から夜への時間の変化を表現する「ライトパノラマ」のワークショップ、映像が動いて見えるしくみが脳の動きと関係があることを伝えるショーを実施。
バンダイビデオ試写会	スペースの使用が可能な日に実施。	A Vライブラリーの待ち利用者を対象に、玩具メーカーのバンダイと提携して行っている人気ビデオ作品の上映会。場所はフリーホールまたは研修室。開催時間は12:45～17:15。

3) 講座・クラブ

< 講座 >

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
こどもクリエイティブクラブ えいぞうたんけん	(人) 小2・3 (10)	(人) ① 4 ② 4 ③ 4	金曜日 16:00～17:30 " " "	造形事業部と共同で実施。映像が写ったり、動いたりする仕組みを簡単な実験や工作で体験実習し、映像への興味を深める。1学期は暗闇で光を発光させたり、鏡で光を伝導したりする実験、カメラオブスクラを作って、印画紙に像を定着させたりして、映像が写るしくみを体験。2学期～3学期は、驚き盤やばたばたアニメづくりを行い、像が動いて見える仕組みを体験。
保育とビデオ 継続研修会	保母、保育 研究者 (16)	12	隔週金曜日 18:30～20:30 (5.14, 28, 6.11, 25, 7.9の5日間)	保育研究開発部と共同で実施。対象は、保母および保育研究者。保育現場で実際にビデオを活用する場合のノウハウを伝える実践的ビデオ講座。ビデオの基礎知識から、見せる対象や目的を限定し、何を伝えたいかを明確にして撮影に臨むといったビデオの取り組み方までを伝える講義と撮影実習、受講者が撮影したビデオの講評も交え、ビデオ撮影から簡単な編集までが体得できるように構成。

4) その他（野外活動など）

名 称	期 間	備 考
劇場公演及び館外活動 などの記録		劇場で行われた公演などを収録し、A Vライブラリー用に編集するとともに一部を有料頒布した。

(2) AV事業部の活動

AV事業部は映像に関心を持つ子どもを対象とする講座・クラブ活動と、一般利用者を対象とする活動に大別できる。さらに、後者は「見せる活動」と「参加させる活動」から構成されており、本年度はこの両活動ともに新規プログラムの投入や、既存プログラムの改良が数多く図られた。また、このほかにも前述の活動を後方から支援する活動や映像記録活動、そしてプログラムPR用の機関紙発行等々と勢力的な活動を行った。

1) 平常期間の活動

(ア) 見せる活動

(1) AVライブラリー

AVライブラリーは35のブース（ビデオを視聴する小部屋）と1万タイトルのビデオソフトを保有するセクションである。単に市販のビデオを見るだけでなく、双方向対話型のオリジナルソフト（＝インフォビジョン）や青山劇場・青山円形劇場で行われた記録作品も視聴することができる。

本年度に特筆すべき事項は、6歳未満の幼児でも独りで視聴できるようにしたことである。以前は、安全管理の面からも幼児独りの視聴は認めていなかったが、スタッフによる安全管理の強化や保護者への注意の呼び掛けなどを行うことで、この制限を廃止した。

ライブラリーの利用件数は、昨年より5,000件少ない69,624件であったが、特に減少したのが8月と3月である。しかし、8月の総視聴時間数を見ると、昨年とほぼ同じ（＝満杯状態）である。このことは、テレビで人気のあった一部の



の作品（『美少女戦士セーラームーン』や『クレヨンしんちゃん』など＝25分程度の作品）に低年齢の使用が集中したため、昨年まで多く視聴された15分程度の低年齢向け短編作品の視聴が減少し、結果として平均視聴時間が伸びた（約3分）ことが原因と考えられる。

▲1万タイトルのビデオソフトがあるAVライブラリー また、3月の減少は機

器の更新に伴い、ライブラリーを完全閉鎖（3月1～9日）したことによるものである。

ビデオライブラリーは、新しい分野でもあり、将来に向けていろいろな試みを考えていかなければならない。その1つとして、本年度から江戸東京博物館（東京都墨田区）や川崎市民ミュージアム（川崎市中原区）とともに2か月に1回の勉強会を開いている。ここでは、お互いの施設の見学や情報交換・諸問題などが話し合われる。本年はビデオ調達の際に発生する著作権クリアーの問題、さまざまなソフトをどのように分類すれば利用者にとって親切かなどについて活発な意見が交わされた。今後も、さらに多くのライブラリーを持つ施設と交流や相互協力を深めていきたい。

(2)おもしろビデオ館

おもしろビデオ館は見るプログラムの中で平常期間の平日（毎週金曜日）プログラムとして定着している。チラシの配布、スタンドアローンビデオによる内容紹介で来館者に関心を持ってもらえるように配慮し、上映内容は、幼児が無理なく楽しめるものを選んでいる。絵本を丁寧にアニメ化したヤマハの「世界絵本箱」シリーズ、人気テレビ番組のキャラクターがガイド役で登場する「ひらけ！ポンキッキのいきもの探検隊」、昔話や童話を基にした学研の人形アニメシリーズ——これらが定番プログラム。ビデオソフトは上映許諾が難しいので、なかなか新しいものを上映できないのが難点である。

(3)こどもの城・映画劇場

こどもの城映画劇場では毎月1回、16mm映画を上映している。「武藤行雄記念文庫」に収められているカナダの短編アニメーション63本の中から2・3本を組み合わせ、上映時間が約30分程度になるようにプログラムを組んでいる。カナダのアニメは、いろいろな技法を使い、内容豊かで芸術性が高く、幼児から楽しめる作品が多い。今後も作品タイトル数を増やしていきたいと考えている。

アニメ以外の映画作品の上映回数が少ないので、本年度から少しずつ記録映画（ドキュメンタリー）など、実写の映画を取り上げようと考えた。そこで手始めに、科学技術週間にちなんで、科学技術



▲音楽スタジオBで「こどもの城映画劇場」

庁からフィルムを借用して上映を行った(4月18日)。カタログから作品を選び、試写後、1本に絞り込んだ。作品は『あそぶ一狐狗狸(こっくり)さんの事』(岩波映画)。心霊現象的な不思議な遊び“こっくりさん”を中学生が行った実験の様子を紹介しながら、科学的に物事を判断する過程や意味を問う内容。

上映前には実際に“こっくりさん”の実験をして来館児の興味を引きつけ、上映後には、自分たちで“こっくりさん”で遊べるスペースを設けた。対象年齢が小学校高学年から中学生向けの映画なので、来館児の興味が持続するか心配だったが、小学校低学年の子どもたちにも好評で、途中退場者はほとんどなかった。ただ、上映するだけでなく、見せる工夫を考えれば、多少難しい記録映画などの実写も十分に見せることが可能なようだ。

11月21・23日には実写とアニメを合成した短編劇映画『金魚の一生』(犬童一心監督)を上映した。1匹の金魚が生まれてから死ぬまでを描いた絵日記のような画面は最新のデジタル合成技術で仕上げたもの。淡々としたナレーションと相まって、人間的な温もりが画面からあふれる独特の味わいを持っている。93年の「キリンコンテンポラリーアワード」(キリンビールが主催する芸術作品のコンテスト)グランプリ受賞作。国内での上映が未定になっていたため、作者に直接交渉して作品を借用して上映した。

(4)バンダイビデオ試写会

年間の上映総日数は80日(前年度より26日間減)、上映回数は541回(前年度より200回減)。総利用者数は15,571人(前年度比35%減)。

日数が減じたのは、単純に場所の問題。利用者の多い冬休み期間にも、場所を確保できず、上映を行わなかった。

また、上映回数が減った理由には、日数が減ったことのほかに長編作品の上映を行ったこともある。通常の短編上映では1日7回の上映を行えるが、10・11月に上映した長編アニメ『メロス』では2回が限度であった。

(4) 参加させる活動

(1)ビデオ玉手箱

毎週木曜日に実施しているこのプログラムは、ビデオを使って幼児でも楽しめるような内容を考え、前年度から開始したもの。ずっと実施しているのは自分の姿が「ばたばたアニメ」の画像になって動く「人間ばたばたアニメ」。これはコンピュータに2つの画像を記憶させ、それを交互に再生させて動きをつくる。その画像をビデオ・プリンターで出力し、参加した子どもたちにお土産として手渡している。

(2)ばたばたアニメをつくろう

ばたばたアニメをつくろうは2枚の絵を描いて簡単なアニメを作るプログラムであり、平常期間の毎週土曜日に実施している。描き上がった絵はビデオカ

メラで撮影され、参加した子どもはテレビで自分のばたばたアニメを見ることができる。このプログラムはAV事業部の“つくる”プログラムの中でも、作業行程などにおいてかなり完成されたものの1つであり、また主力プログラムでもある。

しかし、完成度が高く比較的問題点が少ないプログラムであったがために、平成4年度に抽出された問題点（＝低年齢層の参加増への対応）を積み残したまま実施してしまったという反省が残る。

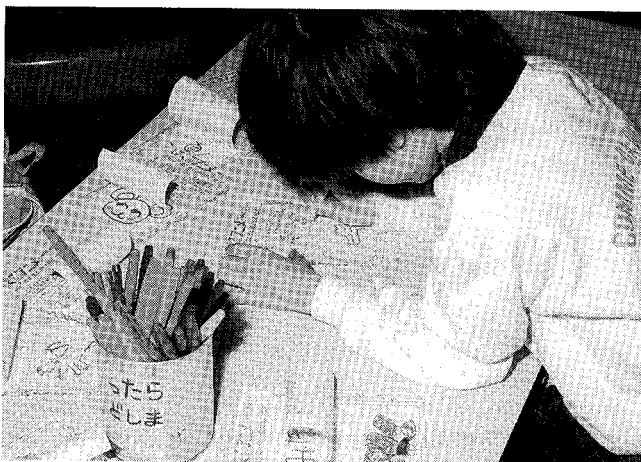
(3) AV実験室改め不思議な映像実験室

平常期間の日曜日に行われるワークショップ系プログラムの総称を昨年まで「AV実験室」としてきたが、①“AV”という言葉が昨今、映像と音を想起させる言葉として適当ではない ②ここで扱うプログラムの内容が“AV”の示すオーディオ&ビジュアルといった先進的な“ハイテク”イメージよりむしろ“ローテク”なイメージを持っている ③“AV”がオーディオ&ビジュアルを指すにもかかわらず、ここで扱う要素のほとんどがビジュアルのみに関するものである——ということから、名称を「不思議な映像実験室」と改めた。

今年新しく実施したプログラムに、写真技術に関連した「光の魔法—うつる」、円錐状の鏡などに映したときに正常な絵が見えるように歪んだ絵を描く「アナモルフォシス」、フィルムペインティング（フィルムに直接作画・彩色して作る映画技法のひとつ）を紙で代用し、さらに発展させた「紙シネマ」、風景写真に針などで夜景のイルミネーションを想像して穴を開ける「ライトパノラマ」がある。

「光の魔法—うつる」が夏の特別期間に、「紙シネマ」が冬の特別期間に、「ライトパノラマ」が春の特別期間に組み込まれたほかはそれぞれ1回限りの実施で終わっている。今後これらを含めた新規プログラムの定着化が必要であると考えている。

また、新規プログラムではないが、「くるくるアニメ」が前年まで「ばたばたアニメ」などのプログラムの添え物的存在だったのに対し、単独のプログラムとして実施しても参加者が満足できるよう進行方法と用紙の改善を行った。



▲「くるくるアニメ」は進行方法と用紙の改善を図った

2) 特別期間の活動

(ア) 見せる活動

(1) A V ライブラリー

A V ライブラリーでは前年度から年間のテーマを設定し運営を行っているが、本年度は〈宇宙〉をテーマに視聴促進を行った。

ここ1・2年の間に、日本人として秋山豊寛、毛利衛両氏が相次いで宇宙に旅立った。そこで、A V ライブラリーでも、宇宙に関するソフトの視聴促進や情報提供などを通じ、子どもたちに宇宙をより身近な存在として捉えてほしいと考えた。

視聴促進の方法としては特別期間のポスター・パソコン・展示物などによるものと、平常期間のカタログなどによるものがある。その結果、通常の2倍以上の利用者に、宇宙関連のソフトが見られた。

【宇宙の乗り物編】

ゴールデンウィークの期間中には宇宙特集「宇宙の乗り物編」を行い、該当作品の視聴促進活動をさまざまな形で行った。中でも体育事業部との共同企画である宇宙ステーションM96（体育室使用）は他部と提携するイベント形式のプログラムであり、A V 事業部では初の試みとなった。

宇宙開発事業団の協力で3.5mもあるロケットやスペースシャトル、人工衛星など20数点の模型や、NASAで実際に使われている宇宙グッズ、毛利氏の写真などを展示した。

また、5月5日には、文部省宇宙科学研究所の的川泰宣教授を招き、「宇宙のお話会」を開いた。事前のはがきなどで100人を超える子どもからの参加申し込みがあり、当日参加を含めると200人近い子どもたちが、的川教授の話を熱心に聞いた。質問時間には、“ロケットはどうして飛ぶの？ 宇宙はどのようにしてできたの？ ブラックホールはあるの？”など大人顔負けの質問があり、予定時間をオーバーして行われ、宇宙に対しての関心の高さを知らされた。さらに、体育事業部では宇宙体験コーナーを設け、子どもたちに遊びを通し宇宙での疑似体験をさせるなどの趣向も凝らした。

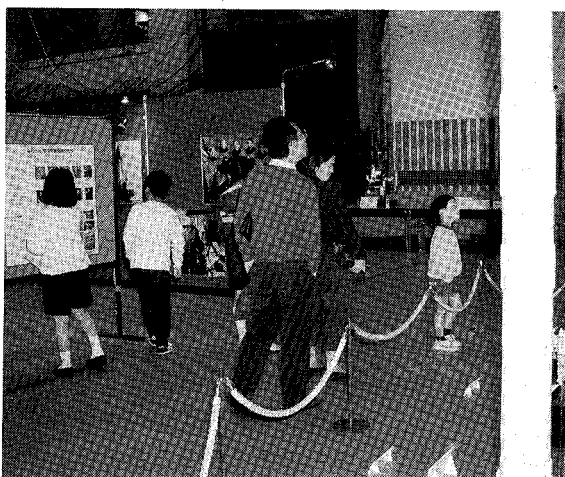
以上のように、数か所のコーナーを配置したが、誘導経路にも装飾を加え、フロア全体を宇宙一色にまとめることができた。

このプログラムの直接的なねらいはA V ライブラリーでの視聴促進であった。このため、会場にはライブラリー用カタログを置いたり、ビデオによるライブラリー紹介コーナーを設けるなどの工夫をした。結果的に利用者をA V ライブラリーへ誘導できたか疑問は残るが、広義な意味での目標（＝宇宙への関心を高めさせる）は達成されたと考えられる。

【宇宙SFヒーロー編】

年間を通じて行われた宇宙特集では比較的に高学年対象の内容が多かった。このため、幼児などの低年齢を対象とした特集企画として「宇宙SFヒーロー編」を考えた。

宇宙SFヒーローにも、昔のナショナルキッド、鉄腕アトムから今のガンダム、ダイレンジャーまでいろいろなヒーローがいる。その中で、20



▲「宇宙ステーションM96」では体育室に模型など展示年以上も活躍しているヒーローと言えば、ウルトラマンである。そこで、正月ということもあり、ウルトラクイズかるた大会のコーナーを設けた。勝者には、玩具メーカーのバンダイから借用したウルトラマンガレートの着ぐるみと一緒に写真が撮れる撮影会を行った。

かるた大会は、司会者が問題を出し、子どもたちが写真でできているウルトラマンかるたの獲得を競い合うというもの。1日3回実施して、100人程度が参加し、ほとんどの子どもが記念写真を持ち帰った。ただし、参加した2・3歳の子どもや女の子にとっては、題材に無理があったことは否めない。

参加者の意識を考察してみると、かるたに参加したい子ども、ウルトラマンガレートと写真を撮りたい子ども、その両方の子どもがいる。写真を撮りたい子どもにとっては、かるたは余計なものという感じがした。以前から低年齢向けのプログラムが不足していたので、今回の経験を今後に生かしていきたい。

(2) こどもの城映画劇場

特別期間に開催日が数日にわたるこの催しでは、作品選定や上映プログラムの組み方などが重要である。平常期間に比較して高学年の来館児が多いので、それをターゲットにした作品選定も可能であるが、幼児を連れた親子の来館者も無視できない。

アニメの場合は、対象とする子どもの年齢が小学校低学年から高学年までをカバーしている作品が多いが、その他のジャンル、児童劇映画や記録映画では、対象年齢の層は比較的狭いようである。特に記録映画（科学映画、教育映画を含む）は、学校の教材として使用される目的で作られるものが多い。見る子どもたちの学年（年齢）を設定した上で制作を行っているものがほとんどなので、就学前の子どもには理解できない言葉遣いや構成になっている。

本年度から積極的に取り上げようとした記録映画は実際、作品を選ぶ作業に

なると相当困難であった。また、短編の作品が少ないことも選択のネックである。そこで本年度は記録映画を取り上げる切り口を見つけたことを目的とすることにした。

記録映画は以前にも上映したことはあった(『サイエンスグラフィティ〜科学と映像の世界』科学映画のエッセンスを集めた入門的内容のもの)。また、本年度の平常期間に一度上映を試みた(『あそぶー狐狗狸(こっくり)さんの事』平常期間の項・参照)。

上記の映画はいずれも岩波映画製作所が作ったもの。記録映画の老舗的な制作会社である岩波が作った作品は、その多くが優れた内容を持っている。過去にこの会社が作った鉄道の記録映画を素材にしたビデオソフトが最近発売され、そのうちの数本を見る機会があった。蒸気機関車や電車といった子どもたちに人気の高い乗り物が画面を走る。内容は、輸送の安全や新しい技術を紹介するPR的なものだが、これなら、内容が多少難しくても、子どもたちは見てくれるのではないかという考えがよぎった。

そこで、岩波映画へ問い合わせ、シリーズの作品のほとんどを借用し、試写。ほとんどが昭和20年代後半から40年代にかけて作られたもので、内容的に古くなってしまっているものが多かったが、現在見ても感動が沸き、記録映画の魅力を伝える作品があった。それが、今回春休み特別期間に上映した2本の作品。『ある機関助手』と『つばめを動かす人々』。16mm原版のニュープリント・フィルムを借用した。

会場には、作品のスチール写真や作品に登場する蒸気機関車、電気機関車に関する資料や写真をパネルにして展示。また、記録映画とは何かを説明するパネルを作り、会場と入口に掲示した。[こどもの城]で例えば、鉄道を描いた映画を取り上げる場合、交通博物館などでの取り上げ方とは、異なった切り口が必要だと思ったからだ。それは、描かれている鉄道とともに、それを描いた作り手の人々やその映画が生まれた時代背景をここでは伝える必要があるし、それが記録映画というものへの理解につながるのではないかと思った。

我々も記録映画をたくさん見て、資料収集など努力を続けていかなければならないと感じた。

(イ) 参加させる活動

(1) AV フェスティバル '93

「AVフェスティバル」は、アニメーションの上映やワークショップを特集して夏休み特別期間に開催する催し。本年度は、「キンダー・フィルムフェスト・ジャパン」(日本で開かれる唯一の子ども映画祭)との企画協力で、例年より規模を拡大して実施した。

「キンダー・フィルムフェスト・ジャパン」は、ドイツのベルリン映画祭・

子ども向け映画部門の「キンダー・フィルムフェスト・ベルリン」公認による子ども向け優秀映画のフェスティバル。2年目の今年は、渋谷の東邦生命ホールで開催された。

今年の「AVフェスティバル'93」は、このフェスティバルで選定された、世界の短編アニメーションの上映と、その中の上



▲ディアンヌ・シャルトラン氏を招いてワークショップ

映作品の1本『オレンジ』を制作したカナダのアニメーション作家、ディアンヌ・シャルトラン氏を招いてのワークショップを行った（8月10～12日）。これは、ガラス板に絵の具を直接塗り付けて透過光で見る作画技法を子どもたちが体験するもの。アニメーションそのものの制作体験には届かないが、実際に見た作品の作画技法を理解するのに有効であった。また、シャルトラン氏が選定した最新のカナダ作品を借用し、[こどもの城]の《武藤行雄記念文庫》と併せて上映した。

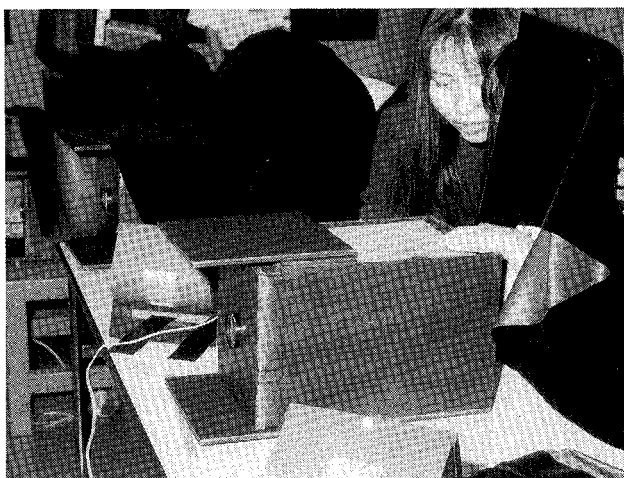
さらに、新しい試みとして、大人を対象としたシンポジウムを開催（8月11日、有料1,500円）。シャルトラン氏と日本のアニメーション作家（石田卓也氏、やまむら浩二氏）、研究者（小出正志氏／日本映像学会アニメーション研究会）、映像教育者（黒坂圭太武蔵野美術大学講師）をパネリストに招き、現在の日本とカナダのアニメーション制作状況、後進の育成などをディスカッションした。参加者は40人で、作家自身の制作裏話が盛り上がるなど、全体的に熱心な討議が交わされた。

今年のように、映画祭との企画協力や長期間にわたってのいろいろな催しを併設したのは初めてであったので、準備に手間取ったところもあり、反省点も多い。今後もこのような催しを行っていくには、準備期間を長くして、余裕を持った取り組みを行っていききたい。

(2)光の魔法

夏期特別期間プログラム「光の魔法—うつる—」の開催に当たっては以下のことを考えてみた。

今日、私たちの身の回りの映像はかつての銀の化合物を用いたもの、つまり写真からしだいに電子画像によるものに移り変わりつつある。また写真を用いる場合でもその写真機の多くは自動化され、以前、といってもほんの少し前な



▲「カメラオブスクラ」の体験コーナー

行われているのかを正確に理解している人は少ないのではないだろうか。もちろんそれを理解することがどれほど重要なかは分からない。あるいはまったく必要のないことなのかもしれない。

この催しでは、そのように“便利”になることを否定したり、流れに逆行することを目的とするのではなく、現在のものを、あるプリミティブな形態を体験することで見直すということ、そして歴史の研究ではなく、歴史のなかでさまざまな人々が体験し思考したことの追体験を試みた。

具体的な実施内容は以下のとおり。

①カメラオブスクラ体験コーナー＝昔の画家はデッサンの練習にカメラオブスクラという器具を使用していたといわれる。このカメラオブスクラという原始的なカメラをやや簡略化して4台再現し、実際に焦点面に映る像を鉛筆を使ってトレースしてみるコーナー。

②古式肖像写真撮影＝前述のカメラオブスクラを使って、現在のように全自動カメラとパトローネ入りのロールフィルムがまだなかった時代の様式で肖像写真を撮影してみようというワークショップ。

③ピンホールカメラ・クイズショー＝針穴写真機の原理をさまざまなクイズを通して考えてみるショー形式の催し。

これらのプログラムを①をベースに②と③をそれぞれ日替わりで組み合わせ、1時間弱のプログラムを1日2回開催した。すべてのコーナーに関して夏休みという混雑が想定される時期であることも考慮して、参加に関する年齢制限は一切行わなかった。

内容的には小学校中学年から高学年以上を対象とするのが好ましいプログラムであったが、実際に開催してみると低年齢の子どもはその年齢なりの“驚き”を感じていたようだ。

らば当然のことだった“露出”を計測し、それに基づきレンズの絞りと撮影時間を決定する、撮影距離を測定し、焦点を合わせる、といったことは写真を撮るという行為のなかでほとんどの場合、機械の仕事となってしまっている。写真を撮る多くの人のなかで、自分が手にしたカメラの中で何が

この催しが前記のように「歴史の研究」ではなく、「歴史のなかでさまざまな人々が体験し思考したことの追体験」にポイントをおいていることを考えると、低年齢児でもプログラムの内容を十分に体験できたのではないかと考えられる。



▲視覚玩具のひとつ“驚き盤”の展示

「光の魔法」はシリーズとして構成されるプログラムとして考えている。夏に続いて '94年春には“うごき”をテーマにしたものを開催、ここでは映画発明以前の動きに関する視覚玩具を取り上げている。映画やテレビが発明される以前の人々がどのような“映画”を体験していたのか、ということを中心に夏の「光の魔法—うつる」とほぼ同一の形態で実施。夏の企画の①がここでは視覚玩具の展示。②は1日2回の開催のうち、1回目が、ライトパノラマという1枚の風景写真から昼と夜の風景を作り出す遊び、2回目がソーマトロップといわれる2枚の絵を素早く交互に見せることでそれらが合成されて見える簡単な視覚玩具の工作。③は公開実験スタジオと題して絵が動く不思議を幾つかの実験を通して考えてみるショー的な催しに当たる。

今後、“映写”をテーマとしたものを開催し映画誕生100年に当たる1995年にはこれらを総括したプログラムとして、フィルミング（映画作り）をテーマとしたプログラムへ至るシリーズとして今後も展開していきたいと考える。

(3)マックロースコープ工作コーナー

毎年恒例になった「自由研究に役立つかな」の工作コーナーも、前回は、虫眼鏡を使って立体眼鏡（3D）を工作したが、今回は簡易天体望遠鏡“マックロースコープ”の工作コーナーを開設した。

今回、マックロースコープを実施した理由は、今年のテーマである宇宙の入口とも言える「月」に関心を持たせ、中でも、肉眼でははっきり見えない月のクレーターを、自分で作った天体望遠鏡で確認するのがねらいである。そのため、クレーターが確認できる15倍～20倍程度の望遠鏡を制作させた。

マックロースコープの材料は、レンズ3枚・黒紙・塩化ビニールパイプなど、ごく身近にあるものを使った。

子どもたちの様子を見ると、のこぎりやカッターの使い方、持ち方が分からずまっすぐ切れない子どもが何人もいた。極端な子どもは、カッターを鉛筆の

ように持ち、ちょうど絵を書く時、小刻みに線を引くような感じに紙を切っていた。

そのほか、のりの付け方、紙の巻き方などのところで、上手下手はあるものの全員(172人)が、完成できた。今回は、平凸レンズ3枚を組み合わせで作ったので逆さに見えるが、天体を見るのには関係ないことを説明しプログラムを終えた。

視聴促進についても工作コーナー設置後、AVライブラリーで「月」のビデオが多く見られるようになり、成果を実感した。

3) 講座・クラブ等の活動

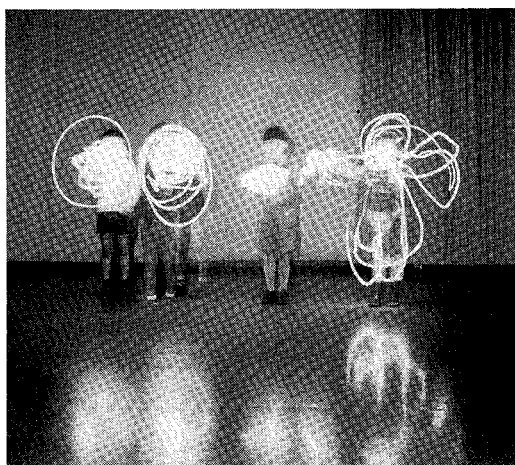
(ア) クリエイティブ・クラブ「えいぞうたんけん」

「えいぞうたんけん」は造形事業部と共同で進めている講座であり、前年までは「アニメ体験」という名称で実施していた。本年度はアニメだけにこだわらず、映像が写ったり、動いたりするしくみを解き明かし、映像がハイテクなものばかりでなく、身近な道具や工作でも成り立つということを伝えていきたいと考え、実施した。

写真や映画などが撮影されたり、映写されたりするしくみについてを1学期に、止まっている絵や写真が動いて見えるしくみについてを2・3学期に取り上げた。低学年(2年生)でも無理なく楽しめるよう、簡単な作画や工作をすれば、結果が現れるように進め方や教材の準備を考えた。

映像の動きについてのワークショップは開館以来行ってきたので、2学期以降に実施したカリキュラムは立てやすかったが、1学期に実施したものは、初めての内容であり、実験と試行錯誤の繰り返しであった。

写真や映画などの撮影に不可欠な光の存在を教えることから始めて、レンズ



▲ “光” で遊ぶ「えいぞうたんけん」

や鏡の特性など光学的な事柄、現像やプリントなどの化学的処理に関する事柄など、どのようにしたら分かりやすくなるかを考えるのは、興味深い作業であった。しかし、子どもたちの理解度を越えてしまって本質が伝わらない(学校の授業で習った知識が最低限必要となる内容があり、2年生と3年生とでは、差が出てしまう)という反省も残り、今後とも経験を積んでいかなければならないと感じた。

また、その場で現象が確認できて作業の手ごたえがすぐ得られる工夫（ポラロイド写真を使うなど）をしたが、映像の原理を伝えるためには、時間の短縮やスムーズな理解を促すためにブラック・ボックス化する部分が出てくる。どのような部分をブラック・ボックスにするかが重要なポイントであり、今後の課題としていきたい。

(イ) 「保育とビデオ」継続研修会

保育園に勤務する保母や保育研究者を対象とした、ビデオの講習会。保育研究開発部とA V事業部との共同プログラムで、隔週、計5回実施。園の活動を記録したり、活動を紹介したりする目的を持った撮影でのノウハウを中心にした内容で、ビデオ機器の基本的な知識から、目的に応じた撮影方法、簡単な編集方法などを講義した。なるべく特別な機材を用いなくても手持ちのものを最大限に活用して、園で活用できるように実践的な内容を心掛けた。講義の内容を基に受講者が園で撮影してきたテープを見ながらの講評も行った。参加者は12人と多くはなかったが、機材や撮影法などに関する熱心な質疑応答が交わされ、熱気のこもった充実した講義が展開された。参加した方々からは、「目的に応じて撮影するポイントを明確にすることで、見る相手に内容が伝わりやすくなるということをこの講義を通して体得してからは、園でビデオを積極的に活用している」という声も寄せられ、好評であった。今後も同様な講座を検討していきたいと考えている。

4) その他の活動

(ア) 劇場公演及び館外活動などの記録

本年度の劇場公演収録回数は自主・外部公演（有料対応）ともに増加傾向を示し、全体的に見た場合には5割近い伸びとなった。

今回もこれらの記録素材からA Vライブラリーでの使用に適した（＝低年齢向け）ものを18タイトル選択し、編集するとともに一部を有料頒布した。

収録回数が増加したことにより、一見編集素材の幅が広がったかに見える。ところが近年劇場で行われる公演は人気のあるものを再演するというケースが増えており、新規に作品化を考える場合には、逆に選択可能な範囲が狭まっているともいえる。今まではA Vライブラリーの最多利用層である小学生

平成4・5年度収録状況

		5年度	4年度
青山劇場	自主公演	1	2
	外部公演	1	2
青山円形劇場	自主公演	42	26
	外部公演	10	5
館内活動等		7	7
収録回数計		61	42

を念頭に置き作品化してきたが、今後は対象年齢の幅を広げ作品化を図るなど、新たな方向性を見いだす必要があるものと思われる。

5) まとめと今後の課題

冒頭でも述べたとおり、本年度は新規プログラムの投入や改良を数多く手がけた。主要なものを見直してみても――

- 映像の原点に立ち返り、先達の思考を追体験するという「光の魔法」(シリーズ化を志向)
- 海外からのゲストを招いてのワークショップ
- 作家や研究者をパネリストとするシンポジウム
- 他部と提携し、AVライブラリーの視聴促進をねらいとした「宇宙ステーションM96」
- AVライブラリー類似設備を有する他施設との交流(将来的にはネットワーク作りを志向)

など、1年間に多くの試行錯誤を重ねた。

このような動向は、開館以来8年もの歳月が経過した現在、タイムリーであったともいえるが、反面限られた人員を考慮に入れば、発想⇒準備⇒実行という過程に負担がかかり、本文でも触れたごとく、細かな反省点が生じたことも事実である。

次年度以降は今回の試行錯誤や反省を糧に、新しく生み出されたプログラムや生まれ変わったプログラムを成長させ、今後の新たなAV事業部を築いていきたい。

6 保育研究開発部

(1) 5年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
親子遠足	5.15	保育クラブ、幼児グループ2～5歳児の親子プログラムとして実施。63家族が参加した。特に週休2日制に伴う父親の参加が増えた(28人)。東京都立砧公園へ。
動物とのふれあい	6.11 12.17	㈲日本動物病院福祉協会の協力により、幼児と動物が出合い触れ合う体験をプログラム化することを試みた。保育クラブ、幼児グループの親子37組が参加。
青空プレイ大会	10.2	保育クラブ、幼児グループ2～5歳児の親子プログラムとして実施。55家族が参加。特に週休2日制に伴う父親の参加が増えた(25人)。東京都代々木公園にて。
保育活動展	2.26～3.5	1年間の保育クラブ、幼児グループの保育活動について、写真や子どもの作品を中心に展示紹介、保育クラブスタッフが年間の保育クラブ展開について説明や解説。家族連れで訪れ、展示写真の頒布も好評を得た。保育室Ⅰ・Ⅱと4階ロビーで開催。
保育室の一般開放	土曜日 14:00～17:00 日曜日・祝日 10:00～17:00	保育室Ⅱに遊具や玩具を用意して一般来館の親子が自由に遊べる場を提供した。父母そろっての利用や祖父母の姿、また中にはベビーシッターによる利用もみられた。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
保育室の一般開放	土曜日 14:00～17:00 日曜日・祝日 10:00～17:00	平常期間と同様に、保育室Ⅱを幼児と保護者(父母や祖父母など)の遊び場として一般開放。板の間の部屋で絵本やおもちゃと一緒に遊べるようにした。
幼児グループ宿泊保育	8.27・28	5歳児の保育の一環として〔こどもの城〕保育室で宿泊保育を行った。参加8人。

3) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
母子教室 26期 27期 28期	(組) 1歳児母子 (各期13)	(組) ① 13 ② " ③ "	月曜日 10:15～12:30	1歳児と母親を対象に全12回(3・4か月)の講座。母子遊びを中心に医学、心理面からの講師による講義など。応募者は定員の2・3倍になることが多かった。受講料は、30,000円。

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
幼児グループ	(人) 4 歳児 (10) 5 歳児 (10)	(人) 9 8	火曜日～金曜日	〔こどもの城〕を保育の場として週4日、2年間にわたる継続的な保育活動。保育クラブの3歳児と一緒に異年齢混合のグループ保育。学生、主婦や社会人、また外国人などのボランティアも参加。60～70歳代のシニアボランティアなど数多くの人と出合い一緒に遊ぶ場面が多く見受けられた。 母子教室、保育クラブからの継続参加者に加えて新規登録者も受け入れたが、少子化時代を反映して定員充足には至らなかった。保育料は月額33,000円、給食費4,800円（月額）。
保育クラブ	2～5歳児 (登録児童 数 437)	12 10 (1日当 たり)	月曜日～土曜日 (2歳) 火曜日～金曜日 (3～5歳)	子どもの集団への参加、母親の社会参加のための保育などを主な目的とした育児支援策として、日時を選べる保育プログラム、イベント、通信、育児相談などの家族プログラムを行った。 3歳児以上については4・5歳児の幼児グループと統合した異年齢混合形態で保育を進めた。2・3歳児の需要が高く応募者が定員を上回った。入会金5,000円、年会費3,000円。保育料として、2歳児1,200円（1時間）、3歳児以上850円（1時間）。昼食代600円、おやつ代200円。

< 講習会等 >

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
第7回こどもの城 保育セミナー ぐるみ子育て論II	(人) 保育関係者 親など (150)	(人) 118	8. 9 10:15～17:30 10 10:00～17:30	基調公演「家族について考える」山崎美貴子（明治学院大学） シンポジウム「社会が家族の子育てを支援するために」 山田美和子（全国社会福祉協議会・高年福祉部）／若山剛（村山中藤保育園）／御厨 貴（こどもの城保育クラブ元保護者）／西嶋美那子（IBMイコールオポチュニティー推進担当）／巷野悟郎（こどもの城小児保健部）／長尾立子（元厚生省社会局） フロアディスカッション 分科会 I. 地域ネットワークの中で保育所はどう機能するか II. 病児保育について考える III. 地域の中で保育所は家庭に対してなにができるか IV. 企業は家族をどう支えるか V. ワークショップ・家族を理解するために
育児相談	育児相談担 当者 (20)	31	7.6, 11.6, 2.19 14:00～20:00	スーパーバイザー 山崎美貴子（明治学院大学）／山田美和子（全国社会福祉協議会・高年福祉部）
保育内容継続研修 会	保育関係者 (100)	130	7.17 14:00～17:00 9.11 " 11.13 " 12. 4 " 1. 8 " 2.26 "	個と集団を考える＝阿部明子（東京家政大学） こどもの遊びをどう見るか＝戸田雅美（鶴見大学） 保育における援助とは何か＝小川博久（東京学芸大学） 何をどう記録し、どう読みとるか＝斉藤こずゑ（国学院大学） コミュニケーションを深めるために＝大場幸夫（大妻女子大学） 保育現場における研究と研修＝後藤節美（別府市教育委員会） 【プログラムコーディネーター】 森上史朗（日本女子大学）／大場牧夫（昭島台幼稚園）／吉村真理子（松山東雲短期大学）

(2) 5年度の保育研究開発部の活動

本年度も、保育実践活動として「母子教室」「保育クラブ」「幼児グループ」を行い、情報活動として「保育セミナー」「育児相談研修会」「保育内容研修会」「ニュースレター」の発行を行った。

保育実践報告としては「家庭育児支援のための調査研究・その1」を平成5年度日本児童学会に報告した。また過去8年間の実践をまとめて「母子教室の手引き」を作成し各方面に配布、頒布した。

1) 保育事業（母子教室）

1歳児の母子を対象とした「母子教室」は、育児や子どもの対応に悩んでいる母親のために、親子遊びや母親同士の話し合いを通して、もう一度新たな視点で育児を見直すことをねらいとして開館以来開講している講座。さまざまなプログラムの試行段階を経て1988年、第11期の母子教室を開講するあたりから、ほぼ現在の形に定着してきた。

このプログラムの内容について検証し今後の展望を得るために、1988年(11～13期)と1993年(26～28期)の参加者の「母子教室参加理由と育児の悩み」「母親の就労経験と住環境」についての意識を比較してみた。

(ア) 母子教室参加理由と育児の悩みの変遷

応募者の参加理由が徐々に変化してきている。それは企画側が意図的に視点を定めて(例：育児休業中の人、フリーの仕事の人、夫の関心度など)選考していることにもよるが、社会における子育ての環境が変わりつつあることも見逃すわけにはいかない。

88年の主な応募の理由は次のとおり。

同年齢の子と遊ばせたい／近所に子どもが少ない／友だちをつくりたい／初めての子育てで戸惑っている／育児について他の母親と話し合いたい／転居のため／参加経験者の勧め／専門家のアドバイスを受けたい／仕事をしたいが子育てがあ



▲親子で笑いだすコチョコチョあそび
(親子あそびのプログラムから)

る——など。

93年になると、88年と応募理由は変わらないが記述が詳細になり、より具体的な表現で参加を希望してくる母親が多くなり、応募理由も幅広くなった。88年になかった理由として次のものがあげられる。

周辺に子どもがいない／公園ジプシーをしている／家事が思うようにできない／父親のプログラムがある／両親が参加できるのが魅力／母親がフリーの仕事をしている／異文化を知りたい／幼児教室はいや／刺激が欲しい——など。

育児についての悩み、気になることは、88年では次のようなことがあげられている。

自己主張が強い／乱暴(たたく、かみつキ、物を投げるなど)／情緒不安定(泣く、だだこねなど)／くせ(指しゃぶり、左ききなど)／しつけの仕方／母子密着／トイレトレーニング／食事(小食、むら食い)／健康(アトピー、アレルギーほか)／甘やかし(祖父母同居)／早期教育と幼稚園——など。

93年になると、子どもの自己主張や情緒不安定に対する対応の仕方に一段と悩みが深まり、育児の重圧を感じると書いてくる人がぐっと増えた。

(イ) 参加者の特徴——特に母の就労経験・住環境を中心に——

参加者の母親は高学歴、高年齢で第1子での参加が多かった。以前は就労経験が全くなく、卒業後すぐ結婚、出産する母親も多かったのに比べ、本年度はほとんどがOLなどの就労経験を経て、現在専業主婦の母親が大多数を占めている。中には少数ではあるが、現在も主婦業の合間を縫って仕事を続けている母親(39人中4人)や、以前していた仕事を再開したいと思っている母親も現れてきている。

参加者のほとんどが就労経験・社会経験を経ているということもあってか、知的で人づきあいが上手で、話もうまく、母子教室プログラム中の自主企画では、母親同士話し合いを通してよくまとまっていた。

しかし一方で、家事が嫌いな母親や、子どもがあまり好きではない母親(汚い、うるさい、うっとうしいなど)、子どもにベッタリせず、週1回はベビーシッターに預けリフレッシュする母親、育児書を熱心に読んでいるが実際の育児はうまくいかないと悩む母親などが、増えてきているのも特徴的なことであった。

住環境についてみると、港区、渋谷区、品川区、世田谷区などの都心に住み、マンションやアパートなどの集合住宅に住んでいる家庭(39人中24人)が圧倒的に多い。93年はこのほかに、参加者の両親が所有しているビルやアパートに住んでいるという家庭(39人中3人)も目立っていた。

また、39人中10人と比較的多かった「一戸建て」の中には「親族同居」(どちらかの両親と同居、もしくは2世帯住宅に住んでいる)の家庭も見られた。こ

れは都会の核家族化が進む中での“都会の大家族”である。一戸建てに住む都会の大家族の中で親族関係の複雑さが子育てに影響している兆しも、現れてきている。

このような年代別の対比から、母子教室参加者（都会に住む限られた親子）の子育てに、社会環境の変化が直接的、間接的に影響していることを読み取ることができる。

子育ては従来個人的なものとして行われてきたが、母子教室参加者のさまざまな姿から、これからの子育ては社会とのつながりを持つことで成り立っているのではないかと、このささやかな母子教室のデータから感じている。

(ウ) 母子教室に参加して何が得られたか——参加者の事例から——

母子教室の成果の1つとして、事例を紹介する。

【事例 父親の育児参加がなく、母子ともにストレスがたまったケース】

父(30)会社員、母(30)出産前まで歯科衛生士、本児（1歳11か月）。

父は仕事が忙しく休日出勤も多く、ほとんど母子2人っきり。本児は言葉が十分でないので意志を伝えられずかんしゃくを起こす。講座中も他児に手を上げたり、玩具を投げたりする姿が見られた。

母に育児のストレスがたまるが、父に相談に乗ってもらえない。2度の父親参加プログラムにも父は参加できず、母はイライラが募った。

心理士とのディスカッションで、母は本児の攻撃性について発言。最近はそのことで夫婦間も気まづくなっていることを話した。他児の母の体験談や心理士のアドバイスにより、母は少しリラックスしたようだ。

本児の攻撃に周囲の母親も温かく応じたこと、本児も身体を使う遊びをするようになったこともあり、かんしゃくを起こさなくなってきた。

母子教室参加者のほとんどは、講座終了後も2歳児の保育クラブに定期的にまたはフリー予約で参加し、他母子、スタッフとのつながりを継続している。母子教室スタッフが2歳児の保育クラブを兼務しているため、受け入れがスムーズであり、母子ともに安心感を持って参加できていると思われる。

なお、事例の父母は観察日に連れ立って観察室から我が子を見、家庭内も落ち着いたように見受けられた。

2) 保育事業（保育クラブ・幼児グループ）

保育実践活動は2年間定期的継続的に保育参加する幼児グループと1年ごとに会員登録を更新する保育クラブを統合して行う。2～5歳児が対象である保育クラブは会員約400人が登録しており、2歳児の保育、3～5歳児の保育や親子プログラム、育児相談などプログラムを選択して参加するようになっている。

保育クラブのシステムは右のページの表のとおりである。

(ア) 2歳児の保育

保育クラブ2歳児の保育は、週1回3時間、4か月を1単位とする継続的保育を核としている。また、フリー予約や緊急予約の枠を2割程度設け、できるだけ多くの保育需要を受け止め、かつ個人的な対応を十分に行う保育方法を実現しようとしている。

2歳児の保育を希望する需要は相変わらず高い。それは年間を通じて保育クラブ2歳児のプログラム内容についての問い合わせが多いことから分かる。

多数の親子が申し込み理由として訴えているのは次のような事項である。

兄姉が保育クラブを利用しており有益である／大勢の友だちの中で遊ぶ経験をさせたい／親から離れることに慣れさせたい／子ども自身が友だちとのかかわりを求めている／言葉が出ないのが気になっている——など。

母親自身の理由による申し込みも多く、次のような理由があげられている。

全面的に保育園に預ける必要性はないが部分的に預かってほしい（仕事のため）／子どもの生活が大人に振り回されて不規則（上の子の用事など親のスケジュールにつきあわせるため）／高年齢出産で親が疲れぎみ——など。

当部で行った「家庭支援のための調査研究」（後述）の結果をみると母親は育児の相談相手の第1位に父親をあげている。父親が子どもの日常の世話や教育的な働きかけ、家族全体に対しての働きかけなどの役割を果たしていることが現れており、実際に保育クラブの父親のプログラム参加率も高くなってきている。

また、祖父母など同居している大家族のなかの母親の悩みや、親自身が1人っ子や2人きょうだいであるために、老親の介護の問題も具体的に目立ってきた。それぞれの事情に応じた育児支援が求められ始めている。

以上の実態を踏まえ、次の点に重点を置いて実践活動を行った。

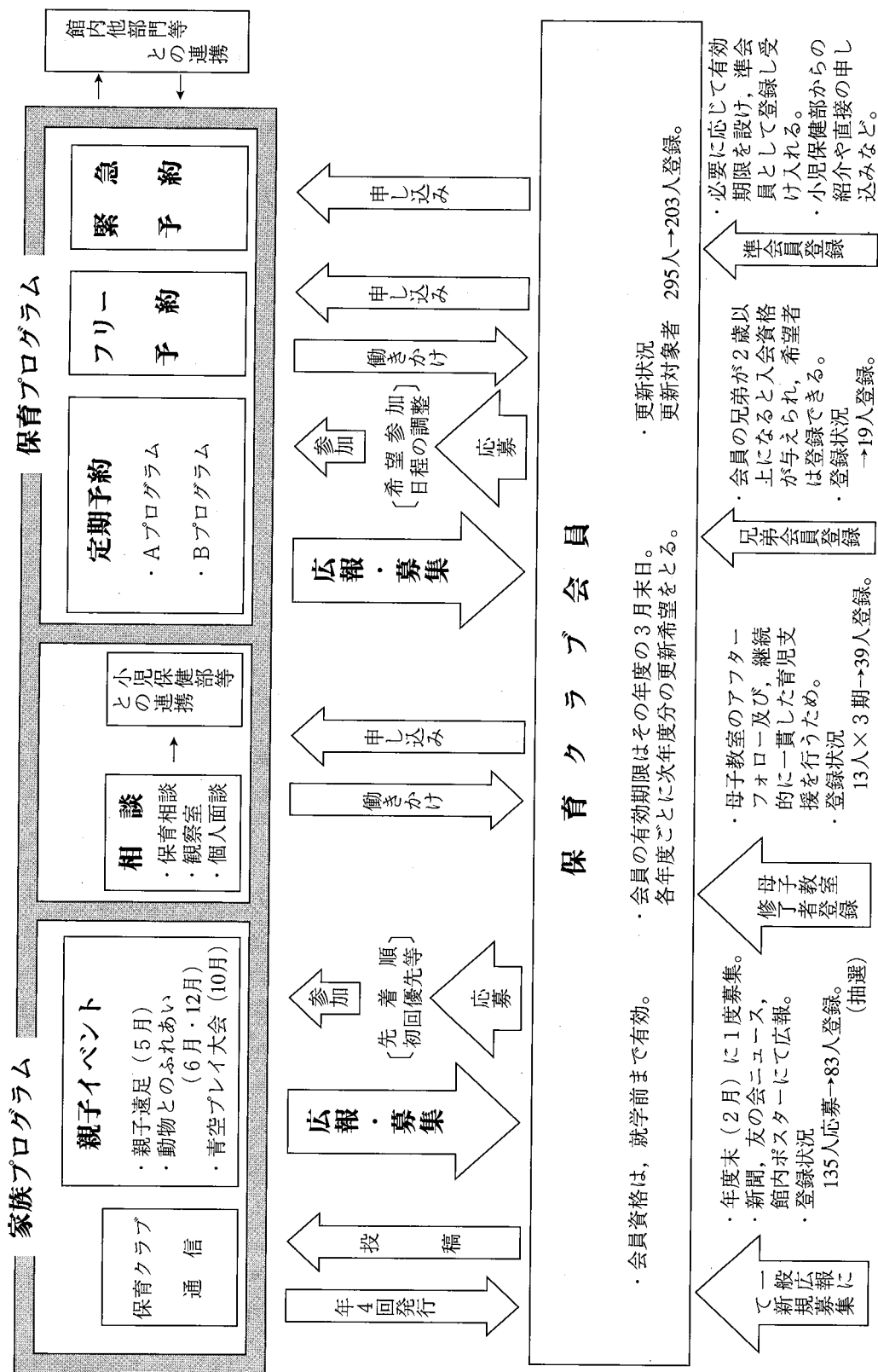
子どものためには、子どもの持つ好奇心を育てる、いろいろな子どもや保育者と触れ合って友だち遊びを深めていく、家庭の中では不足しがちになった経験や体験の場を用意すること。

親のためには、保育者



▲「すみません、ジュースください」と保育者。「はいどうぞ」と子どもたち（2歳児の保育から）

保育クラシシステムチャート



との信頼関係を築く、母親同士のコミュニケーションのきっかけづくりをする、子どもの育ちを客観的に見る機会を用意する、他の親子の様子も見ながら子どもについて具体的に伝える、親自身の時間を作る支援をすること。

(1)保育の実際——子どもの遊びをどう進めたか

2歳児は母親から離れて保育室の環境に慣れ、気持ちをリラックスさせて遊べるようになることがまず第1のステップと考えている。それには子ども自身が興味を持ち楽しめる遊びを見つけることがポイントとなる。保育者はそれらの遊びを想定して用意し、一緒につきあいながら遊びに導入することから始める。その幾つかの例を示す。

○個別のかかわり

なじみにくい子どもには保育者が個別にじっくりつきあい、積極的に遊んでいる子どもや保育者が遊んでいる様子を見せ、そばで雰囲気を感じ取ってもらうことも環境になれるために大切なことであることを、保育スタッフ間で共通理解しておいた。

○外遊び

外遊びは年間を通じて保育計画の中に積極的に取り入れた。朝入室してから1時間ぐらいの時間帯に、屋上遊園で三輪車、アスレチックなどで遊んだ。多くの子どもが遊べるように屋上遊園のログハウスに粘土コーナーを用意することもあった。外に出ることは母親と離れて大泣きしている子どもの気分転換にも効果があった。

都会の中の小さな自然を求めて〔こどもの城〕の周りの木々があるところや広場などに散歩に行き、ありにえさをやったりかたつむりを見つけたりした。

○テーマ活動

保育室や保育者、友だちにも慣れてきたころ、皆で一緒に楽しむ「テーマ活動」を取り入れる。嫌がる子どもには無理強いせず、雰囲気を楽しめるようにした。

曜日ごとに違うメンバーが来るので、テーマ活動は原則として1週間の単位で展開。子どもに合わせて、曜日ごとに変化を加えるなどの工夫をした。

「テーマ活動」の内容は触る、聴く、見るなど五感に働きかけること、体を動かすこと友だちや保育者と交わることなどが楽しく体験できるように、また季節の変化や季節行事を知ることなどを配慮しながら組み立てた。主なテーマは次のとおりである。

フィンガーペインティング～絵の具に親しむ(5月)／ペーパー粘土(6月)／お団子作り(9月)／野菜スタンプ(10月)／みのむし作り～落ち葉を拾って(10月)／切り紙遊び～はさみ、のりづけを経験する(11月)／クリスマスツリ

一作り～親子で（12月）／和太鼓に親しむ（1月）／鬼のお面を作る（2月）
(2)親に対するはたらきかけ——コミュニケーションをどのように進めたか

育児支援プログラムは、親の悩みを受け止め、積極的に子どもの育ちについて伝えていくことが重要だと認識している。そこで次の4点をあげて親とのかわりを進めている。

○オリエンテーション

集団保育グループの期の開始時に、またフリー予約で初回利用の母親対象に1日の保育の内容、スタッフの紹介を行う。親からは親子の自己紹介、子どもの様子を語ってもらい、保育者と親とが互いの信頼関係を深め、安心して利用し相談できるようにするため、初めに十分コミュニケーションをとる。

○受け入れ時、お迎え時

週1回の保育なので親からの利用ノートを受け取り、丁寧に1週間の家での様子やその日の体調、朝の様子や最近育児で気になること（食事、排せつなど）を聞き1日の活動を始める。お迎えの時は1日の活動（遊び、食事、排せつなど）を親に知らせ、気付いたことを伝え相談し、また、翌週の活動紹介、準備する物を知らせる。

○観察室の利用

保育室（48㎡）は、マジックミラーのある観察室（10㎡）があり、10人程度入ることができる。毎月1回、保育室の活動の様子（受け入れ後、保育活動中、食事前後）を観察、保育者が活動場面や子どもの姿を解説する。

我が子の様子を観察室から見ながら、他児と物の取り合いをする姿や独り遊びの姿、他児と遊んでいる姿など日常見られない姿に不安がる親の姿やほえむ姿が見られる。

保育者は場面を通し、2歳児の姿や保育者のかかわり方などを十分に伝える。毎回楽しみにしている親が多い。

○利用ノートの活用

受け入れ時の親とのコミュニケーションに活用すると同時に、いつもの送迎者以外（父親、祖父母、ベビーシッターなど）が送迎する場合はいつも子どもを見ている母親などに子どもの様子を利用ノートに記入してもらう。

また、育児日誌として活用してもらうようにしている。

○父親の送迎参加

父親も積極的に育児に参加しようとしている流れを最近感じる。当保育クラブでも、観察室の入室や休日の送り迎えも見受けられるが、実際には仕事上、コンスタントな参加はまだ難しいようだ。

(イ) 3～5歳児の保育

3～5歳児の保育は、週4日2年間の単位で行う4・5歳児の幼児グループ

と、週1・2回4か月を1単位とする3歳児の保育クラブを統合した保育。

4・5歳児の幼児グループは〔こどもの城〕を保育の場とし、少人数で行う異年齢混合の保育に期待して、新規登録児と母子教室や保育クラブからの継続参加児17人が在籍。3歳児は各曜日14人の保育クラブ登録児を受け入れた。

複数担当制、ボランティアの保育参加、〔こどもの城〕各部門との連携などを特徴とし、中でも3歳児が非定型的に4・5歳児グループに保育参加していることが最も大きな特徴といえる。

保育クラブ3歳児については以下のような特徴がある。

- ・子ども自身に友だちと遊びたいという欲求が出てきている。
- ・毎日幼稚園に行くのは体力的、精神的に無理があると母親が感じている。
- ・週に1・2回集団参加する場が欲しい。
- ・幼児教育について多くの情報の中で何を選択するか母親が迷っている。
- ・3歳児の時はいろいろな方法を試みてみたいと母親が考えている。
- ・2歳児の保育クラブに参加していたので同じ方針で続けたい。

これらの理由による需要が多く、本年度は79人の3歳児の申し込みがあり、抽選によって57人を登録した。

(1)保育の実際——定型的なグループと非定型的なグループによる異年齢混合保育の進め方

本年度は特に3歳児側からの保育の実際を中心に報告する。

○グループ編成

- ・定員30人の年齢構成は本年度は3歳児14人、4歳児8人、5歳児9人。
- ・3歳児は2歳児の保育クラブからの継続児と新規登録児がいる。
- ・本年度は定期的に週2回参加する3歳児と週1回参加する3歳児の2タイプを意図的に登録した。
- ・年間を3期に分け、保育クラブ児が2期は定期的な参加ができるよう保障し他の1期はフリー予約の形を混ぜ込むようにした（なるべく多数の応募者が登録できるようにするため）。

○プログラム展開の工夫と実際（3歳児の視点から）

- ・4・5歳児（幼児グループ）の保育を1週早く開始し、グループの核としての安定を図り、保育者も子どもも3歳児の受け入れ体制を整えた。
- ・安心して保育クラブに来ることができるよう、プログラム開始前に担当保育者と母親、子どもの面談を個別に行った。

○3歳児はどのようにしてグループに溶け込んでいったか

- ・第1段階＝担当保育者との信頼関係を結ぶ

初めのうちは4・5歳担当者が活動のリーダーとなり、3歳の担当者は子どもに身近に接する（遊び、トイレ、身支度、食事など）ことができるよう

にし、信頼関係を結ぶ。

- ・第2段階＝3歳児同士が集団として結び付いてくる

「キリンググループ」（3歳児のグループ名）の意識を声を掛けて持たせていく。トイレに行ったりお茶を注いだり、生活面でまとまって行動する場をつくり3歳児同士結び付きができていく。

- ・第3段階＝4・5歳担当保育者と親しみ4・5歳児との関係もできてくる

「一緒にサッカーにおいで」「せんせいがトイレ連れてってあげようか」「靴のひも結んであげるね」など活動の中で声をかけられ保育者との結び付きが生まれる。また、遊びの中やテーマ活動の場面で4・5歳児ともかかわりが生まれる。

(2)親に対するはたらきかけ——コミュニケーションをどのように進めたか

- ・情報が多い中でさまざまな迷いと期待を持ちながら保育クラブを選択した親は、保育者に対して特に深いコミュニケーションを求めていると考えた。
- ・毎日通って来るのではないこと、異年齢混合グループの最年少であることから親への情報は具体的に細かく伝えるよう心がけた。
- ・受け入れ時、お迎え時の話を中心に電話連絡やお手紙など個々に対応した。
- ・親同士のコミュニケーションを図ることを意図して懇談会の場を持ち、また観察室から保育中の様子を見る機会を設けた。保育クラブ親子イベントへの参加も積極的に働きかけた。

(3)異年齢混合保育の中の子どもの姿（3歳児の視点から）

- ・3歳児は、4・5歳児からの援助や思いやりを受け取る機会が多く、家庭では経験できない人間関係を体験し、集団参加の楽しさが深められた。
- ・4・5歳児と一緒にいることでつられて自分たちもやったような気分になり、年齢別活動の中で3歳児らしく確かめ直している場面も見られた。
- ・4・5歳児の姿を見ていることは、やってみたい、という意欲につながる（その際3歳児の1人1人に密な配慮は必要になる）。

(4)異年齢混合保育の中で3歳児がどのようにイメージを膨らませていったか——劇ごっこの事例を通して

10月13日＝年齢別保育形態の中でテーマ活動（3歳児）

「3匹のこぶた」の紙芝居を見て導入。保育者のおおかみの耳と子どもたちのこぶたの耳を用意。部屋の隅をそれぞれの家にする。小道具など使わなくても、「ここがレンガの家だよ」と決めると、それで十分ようだった。

11月18日＝異年齢混合形態の中でテーマ活動（3～5歳児）

「おむすびころりん」の配役を自分たちで決めると、リーダーとなる4・5歳児が机の下をネズミの家に見立てて、「ネズミはここに入るんだよ」と耳をつけて大喜びの3歳児に声をかける。保育者の促しもあって机の下に入り、

3歳児同士で固まって、4・5歳児と同じように寝そべってほほづえをついている。ネズミがおじいさんに食事を出す場面では、4・5歳児がサッとままごと道具を出すのを見て、3歳児もまねをしようとするがなかなかできない。

4・5歳児にしてみるともどかしいと思うところもあったのではないかと
思うが、「3歳児だから仕方ないか…」という表情で見ていた。

11月25日＝異年齢混合保育形態の中で自由遊び（3歳児）

先週「おむすびころりん」の活動をした3歳児が数人でネズミの家をつくりだす。ままごと道具を運んで食事の用意をするなど、先週の4・5歳児の様子をしっかりと見ていて、まねしている場面も多くみられた。「お姉さんたちのようにしてみたい」という気持ちを持つ一方で、3歳児だけでごっこ遊びすると自分たちのペースで遊べる、自分のなりたい役になれるなど、対等な立場で遊べる楽しさを分かっているのか、4・5歳児は仲間に入ってほしくないようだった。

同日＝異年齢混合形態の中でテーマ活動（3～5歳児）

「3匹のこぶた」の配役が決まると4・5歳児を中心として、家の構造を相談して作り始める。驚いたのは「おおかみがしたい」という子どもが現れたこと。今までは逃げる楽しさを味わっていたのが、今度は自分が追いかける立場になってみようという意識に変化したようだった。今までおおかみを怖がっていた3歳児も、4・5歳児につられて自らおおかみを体験することができた。

しかし、つられておおかみを体験する3歳児もいれば、保育者の後ろに隠れて一緒に逃げまわる3歳児もいる。

(5)ボランティアの保育参加

学生、社会人、主婦、シニアボランティアを登録し定期的継続的に保育に受け入れ、保育者とは違った視点で子どもとのかかわりが展開された。世代の違いや、体験や経験の違いにより子どもとの間に、友だち感覚がみられたり、子育て経験による余裕がみられた。

子どもたちはボランティアと遊んだりおしゃべりをしたり、時には甘えて、いろいろなタイプの大人に巡り合うことができた。また保育者もディスカッションを通じて、また日常触れ合う中で気付かされる点もありボランティアの受け入れは保育活動にとって有意義であった。

(6)各部門との連携

本年度は専門的な助言を受けたり、材料や用具、器具を使わせてもらうなどを中心とした連携となった。例えば粘土遊びを行う場合に、粘土の性質や造形事業部が行う粘土のプログラムの考え方などについて尋ねた。また、接着剤の

使い方を、子どもと一緒に聞きに行ったりした。

(7)課題と問題点

子どものメンバー構成が非定型的であり、担当保育者が複数でチームを組むことが特徴であるが、この場合保育者間のコミュニケーションを十分にとることが条件となる。チームがよく機能するためのミーティングの持ち方、分担のしかた、共通理解の育て方については次年度の検討課題である。

(ウ) 親子イベント

(1)親子遠足

毎年5月に行われる親子遠足は、親子のスキンシップを深める、親と保育者のコミュニケーションを深める、会員同士の交流を図ることが目的。親子イベントの第1弾。本年度は、2～5歳児の64家族が参加した。土曜日とあって父親・祖父母・兄弟姉妹の参加も多く、年々、父親の活躍が多く見られてきている。

親子遠足では、コミュニケーション・交流を重視し、公園の広い敷地を利用してゲームなどを取り入れた。ただし、子どもが2～6歳という年齢差があるので、参加者の年齢を考慮し、親子で楽しむゲームや他の親子・スタッフとの交流を深めるゲームを工夫した。

例えば、本年度は「かくれんぼ」を工夫して、次のようなゲームを実施し好評を得た。2～5歳児親子の混合グループ（1グループ約10家族）を作り公園内に隠れている保育者を捜すのだが、ただ保育者を捜すのではなく、保育者とのコミュニケーションを図るために見つかった保育者が問題を出し、できたら次の保育者を捜すというようにした。はじめに、グループ内で親子の自己紹介を行いグループ単位で行動するようにした。

(2)青空プレイ大会

青空プレイ大会は4年前から代々木公園の一角で行っている。

「青空の下で日ごろ仕事で忙しく、子どもとかかわりをもちにくいお父さんも含め、さわやかな汗を流そう」と始められたこの企画も、年を重ねるごとに充実したものになりつつある。

徒競走、玉入れなど、子どもを中心とした競争的ゲームではなく、親子が一体となり楽しめる親子体操、レクゲー



▲ウォーミングアップを目的に「どんとこい 親子体操」（「青空プレイ大会」から）

ムを中心に、広々とした代々木公園を利用して自然の素材に親しむゲームも楽しんだ。

本年度のプログラムを下記に紹介する。

- どんとこい 親子体操＝ウォーミングアップを目的とした親子体操。親子1組になり、飛ぶ、跳ねる、走る、はうを取り入れた体操約20種類。
- みんな友だち 親子ゲーム大会＝全員で円陣になって行うゲーム。互いの紹介を兼ね、コミュニケーションを図った。
- ぼくは動くの大好き。パパ・ママ動け動け大会＝全体の親子を3グループに分け、各グループに1つずつ万歩計を渡す。スタートの合図で万歩計をよりたくさん動かし（親や子どもが万歩計を付けて動く。疲れたらほかの親や子に交代）、歩数の多さをグループごとに競うゲーム。
- 私を木の精にしてェーゲーム＝3グループに分け、木の精になるお父さんを選出。あらかじめ用意しておいた大型ビニール袋に両面テープをすき間なく張り付けたチョッキを着てもらい、スタートの合図で各グループの親子は代々木公園に落ちている、木の葉や枝を拾ってきてチョッキに張り付ける。一番木の精に近いものを参加者全員で評価する。
- 風船ちょうだい、イイヨゲーム＝ビニール袋に風船、輪ゴム10個を入れ、そのビニール袋を10袋用意しておく。林の中に（子どもの手が届かない高さに）ぶら下げておく。親子は林の中に入り、子どもが袋を見つけ、親は子どもを肩車やおんぶをして、子どもが取った風船を膨らませてゴムで子どもの手首に付ける。3個以上付けたらスタート地点に帰ってくるゲーム。

(3)動物との触れ合い

現在、子どもたちは、成長の過程でいろいろな人と出会ったり、生活の中で小さな動物に触れるなどの豊富で多様な経験をする環境が乏しくなっている。特に都会では、生き物に触れ、世話をし、直接“いのち”を感じる経験は意図的に用意しなければ得られない状況におかれている。

そこで(社)日本動物病院福祉協会と連携してこのプログラムを実施した。4・5歳児の幼児グループは“継続プログラム”とし、動物に対する理解を深められるように、また2・3歳児の保育クラブは“出会いのプログラム”とし、動物に親しみが持てるようにした。

来年度も引き続き実施し、検討・熟考を重ね、1つのプログラムとして完成させ、全国の育児支援活動の1つの方法として紹介したいと考える。

3) 研修事業

(ア) 保育セミナー

女性の就労が一般的になり、それに伴い家庭の形態も変わってきた。子ども

を育てることについても、保育所、地域社会をはじめ、男女が働く企業も変わらざるを得ない状態になっている。保育セミナーでは「ぐるみ子育て」のテーマで過去2年間「施設間の連携」「地域の果たす役割」について検討してきた。本年度は、家族や家族を支える社会について、「家族をみなおす」をテーマに取り上げ、昨年同様に、厚生省、日本保育協会、全国社会福祉協議会、全国保育協議会、日本小児保健協会、全国保母養成協議会の後援のもとに8月9・10日の両日青山円形劇場・研修室で開催した。

【プログラムの日程・内容】

○基調講演＝「家族について考える」

○シンポジウム＝「社会が家庭の子育てを支援するために」

司会から社会の家族支援体制を考えるに当たって、伝統的家族観を見直してみようとテーマ発言があり、それを受けて立場の異なるシンポジストから話題が次々と提言された。

保育サービスの必要性は感じながら、やはり実施には限界があると述べられた（保育園の立場）。また、家庭支援に努力している事例が報告された（企業の立場）が、一般的には日本企業の家庭支援は弱いと痛感した。子どもの減った保育園を地域に開放するといった「地域に向かった福祉の形」の必要性（行政の立場）や、学校教育で赤ちゃんに触れる機会や、母親が自由に息抜きできる場などの必要性（医師の立場）が述べられた。

受講者は企業の実態について具体的な情報を得、また児童福祉施設が家庭支援にどのような役割を果たしたらいいのかを考える糸口になったようだ。

○分科会

（第1分科会）＝ネットワーク論：地域ネットワークの実践 パートⅢ
「地域ネットワークの中で保育所はどう機能するか」

（第2分科会）＝ネットワーク論：こどもの健康と保育を考える パートⅢ
「病児保育について考える」

（第3分科会）＝ネットワーク論：家庭援助と保育所
「地域の中で保育所は家庭に対してなにができるか」

（第4分科会）＝「企業は家族をどう支えるか」

（第5分科会）＝ワークショップ

ここでは第4分科会の内容について報告する。企業の立場から就労形態に応じた多様な保育の必要性、企業委託型サービス・事業所内保育所などについて紹介された。その後ベビーシッター・幼稚園・母子寮などからそれぞれの育児支援サービスの実態について報告し合い、それに対して活発に論議・質疑応答がなされた。働く母親と専業主婦がともに地域でいい連携を持てるようにしていく必要があるとの意見が多かった。

【課題と展望】

本年度の保育セミナーは平成3年から行ってきた「ぐるみ子育て論」の総まとめの意味があり、「家族」を見直すと同時にさまざまな角度から、家族に対する育児支援の考え方について総合的に見てきた。来年度はさらに発展させて家族支援体制について具体的に、検討を深めていく予定である。

(イ) 育児相談研修会

近年、保育所などの保育実践の場では、育児相談や遊び場の提供、一時的または非定型的保育など、育児の援助者としての役割がいろいろな形で試みられるようになってきている。平成元年度に開設された育児相談の研修会の内容充実を図って、本年度は研修時間の延長を行った。特に本年度は電話相談に加えて保育所などで行う育児相談の在り方を探る方向に内容を膨らませて、事例検討を中心にしながら実施した。

講師は昨年同様、明治学院大学山崎美貴子教授と全国社会福祉協議会山田美和子高年福祉部長。

【プログラムの内容】

- 第1回＝保育所で行う相談活動についての基礎を学び、相談をする時に「よく聴く」ことの重要性を学んだ。
- 第2回＝実際の相談ケースを持ち寄り、それぞれの事例研究を行った。問題点として保育者自身の保育観、育児観をいかに広げるか、専門外の相談についてどう対応するか、特に医学的な問題や障害が疑われるような場合の対応のしかたなどがあげられた。
- 第3回＝前回の問題点を受けて、「家庭支援のスキル」や「関連機関の連携」について学び、本年度のまとめとした。

【課題と展望】

本年度も少人数の参加者と講師によって、具体的で受講者の参加度の高い研修が行われ、時間の延長に伴いより多岐にわたった内容が学べた。この研修に関しては多数の反響があり、今後もこのような自己チェック機能のある研修が全国で取り上げられ、ベテラン保育者だけでなく若手保育者にも広げる必要性があると思われる。

(ウ) ニュースレターの発行

最近、保育所が行う育児相談事業に対する期待と関心が高まっており、そのために各地で育児相談についての具体的な情報が望まれている。これらのニーズにこたえるために、平成3年度に続いて前述の育児相談研修会の内容紹介と、育児支援の周辺について行政の方向や社会情勢についての情報を載せた「保育所の育児相談・ニュースレター」を、年2回発行した(3・4号)。

本年度は「家庭支援の視点から」という特集を組み、行政、海外企業の育児

支援対策情報、ハンガリーの子育て事情などの記事を掲載した。

ニュースレターの体裁をA4版にし、研修会参加者、全国児童・保育関係主管課、見学者、主任児童委員などと発送先も増やしたところ、「具体的な方法を示したものと、広い視点からのニュースの両方が掲載されていて、とても役に立つ」などとの好評を得ることができ、追加送付の申し込みなども多くあった。

来年度はさらに内容を充実させて有料化を図るとともに、全国の各市にも配布先を増やしていきたい。

(エ) 保育内容継続研修会

平成3年度から5年度にかけて、保育の実践者や研究者を対象に、保育内容研修会を実施した。本年度は、保育者の研修が、知識や技術を習得したり心構えを習ったりする受動的な内容のみではなく、保育者自身が自分の力で成長していく方向づけをする能動的なものであるという意図から、演習形式の全6回にわたる研修会を試みた。

【保育実践のビデオによるカンファレンスをする方法】

保育実践を記録したビデオにより、場面のイメージを共通にしたうえで、バズ形式のディスカッションを行い、多様な視点から実践を検討することを試みた。ディスカッションの論点をあらかじめ提示し、バズグループの人数を最低8・9人にしメンバー構成をいろいろな立場の人が混在して入るように、意図的に配慮するなどの工夫をした。

保育内容研修会は、定員100人を上回り、各回130人の受講登録があった。園内研修として園全体での参加、また園単位で申し込み、各回ごとに参加者を変えて出席し、研修で学んだことを園内研修で報告してカンファレンスをするなど、参加にもさまざまな形態があった。

保育内容研修会は、本年度において一応の完結をみたが、セミナー形式で検討された課題を各論に下ろしてさらに詳しく検証し、その後受講者の自主的な参加を期待して演習形式にするなど、長期にわたって継続的に行われた。詳細については、平成6年度日本保育学会第47回大会において学会報告をした。

【課題と展望】

保育内容の変化に伴い、現任者の研修制度も工夫が必要とされてきている。研修参加者が主体的に発言し、参加する研修システムを検討することが重要である。情報を受け取ることが主体の研修から脱皮し、現場からの発信を増やし、高めていけるような研修の在り方を考える必要があると思われる。

(オ) 保育とビデオ研修会

AV事業部と「保育とビデオ研修会」を行った（詳細はAV事業部の項参照）。

4) 実践報告

(ア) 家庭育児支援のための調査研究

都心に住む子育て家庭は育児支援プログラムに対して何を期待するのかを明らかにするために、保育クラブの会員にアンケート調査と家庭環境調査を行いその生活実態と保育クラブの利用実態について調べ分析を試みた。

調査の対象は平成4年度の保育クラブ登録会員315人の両親である。利用実態・生活調査のアンケート調査については48%の回収率であったが家庭環境については、ほぼ全員について把握している。

まず家庭環境の特徴的な点をあげると、3・4人の核家族が約8割。7割の子どもが同年齢の子どもの通うおけいこに通っている。保育クラブ会員の母親は7割が専業主婦であり概して学歴が高く、年齢も高めである。

育児の相談相手はそれぞれ夫であり妻である割合が9割に達し家族単位での孤立が目立つ。夫婦が育児について良い協力関係にあることはうかがわれるが、同時に具体的な育児の手立てについて助言を必要としていることも分かる。

保育クラブのプログラムに満足している点は——親子ともに友だちが得られたこと／いろいろな人との交わりができたこと（男性保育者・ボランティア・シニアボランティア・異年齢の友だち・外国人など）／小さなグループの中で子どもの1人1人の成長をじっくりみる保育への信頼などがあげられている。一方保育料金が高いことへの不満の声もあった。

詳細については平成5年度日本児童学会に「家庭育児支援のための調査研究・その1」として報告した。

(イ) 母子教室の手引き

母子教室は、本年度末で28期を重ね、各方面からの問い合わせも多く8年間の実践をまとめて「母子教室の手引き」を作成した。母子教室は〔こどもの城〕開館以来のものだが、当初あげられていた母子教室の主旨（子育て情報の提供や母親のためのリフレッシュの場など）が時代とともに少しずつ変化せざるを得ない状況が起きていることや、参加者の期待をプログラムにもっと生かしていく必要があることから、従来の母子教室には一応のピリオドを打つことになった。

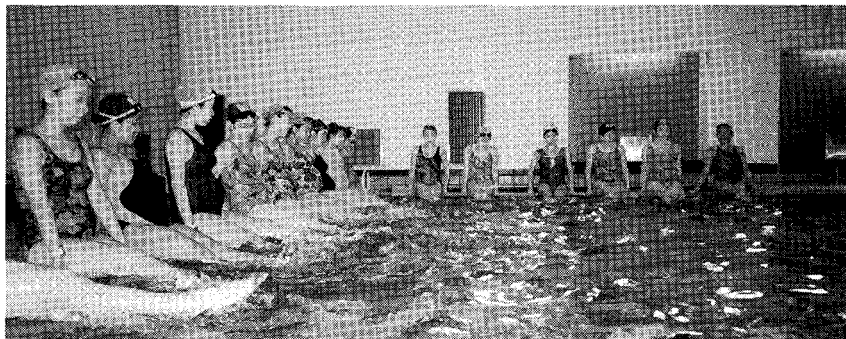
〔こどもの城〕の母子教室は、その立地条件からも都会型の保育（地域に密着しない）ととらえることができる。今、社会の中の保育をみる時、母子教室でのプログラムは時代の先取りをしているとも言え、各地に広まり利用されることを願っている。

7 小児保健部

(1) 5年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
診療・相談 小児科診療 小児総合健康相談 育児・生活相談 保健相談 乳幼児健診 心理相談 栄養相談 小児肥満相談 言語相談 発達相談 ※専門相談 耳鼻科・言語相談 小児精神相談 小児神経相談 ダウン症相談	月曜日を除く毎日 9:30～16:30 週2・3回 月1回 土・日曜日	診療・相談はすべて予約制である。原則として健康保険が適用される。健康保険が適用されない場合には相談料扱いとなる（相談料1回5,000円）。 小児保健部の小児科医師、看護婦、保健婦、臨床心理士、栄養士、臨床検査技師、言語療法士が診療・相談を行う。また聴力検査・脳波検査、各種心理検査が可能。専門相談と連携しつつ行っている。 専門医が担当。
赤ちゃんサロン	毎月第2・第4火 曜日 13:30～15:30	対象は0～2歳までの子どもとその親、あるいは妊婦。入館料対応。育児支援事業の一環として平成3年から実施。育児情報の交換や、医師、保健婦、栄養士、臨床心理士による育児相談が行われる。平成5年度は延べ1,736人が参加した。
マタニティ・シアター	10.11 (月) 13:30～16:00	妊婦に、妊娠中の生活を楽しんでもらう、それによっておなかの赤ちゃんも健康に成長するからという趣旨のもとに行った。スポンサー（P&G）の好意で、妊婦を招待し、演劇を見ていただいた。プロジェクトナビ「いっぽんのキ」（作・演出、北村想）。メデイカルゲスト＝野末源一山王病院理事、巷野悟郎こどもの城小児保健部長、市川英子日本赤十字社医療センター助産婦。企画・制作＝こどもの城劇場事業部、小児保健部、参加188人。



◀体育事業部との協力事業「マタニティスイミング」

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<夏休み> こども一日ドック	7.22・23 12:00～17:30	対象は小学生と中学生。小児保健部と体育事業部との共同事業。内容は、医師による診察、検査(呼吸機能、聴力、尿検査、血圧測定)、身体計測、生活習慣調査、食生活調査、心理検査、体力測定の結果に基づいた診断・指導。受診者は16人。
< " > 健康教室集中講座 (幼児太りすぎクラス)	8.24～26 14:30～16:30	太りすぎの幼児(5・6歳)とその親を対象とする太り過ぎ改善のための集中講座。親には栄養分析に基づいた栄養指導と、食事、医学、運動の各専門分野からのレクチャーが、子どもには、体育指導が行われた。12組が参加。
<開館記念> 第8回小児保健セミナー「早期教育を考える、平成5年版・子育ての論点」	11.6 10:00～17:00	乳幼児を育てている親の関心が高い早期教育を取り上げ、3つの分野から講師を招いて活発な講演会。「小児精神科医の立場から」渡辺久子慶応大学医学部小児科医師(精神科医)、「教育学の立場から」汐見稔幸東京大学教育学部助教授(教育学者)、「発達心理学の立場から」岡 宏子聖心女子大学名誉教授(心理学者)。受講者133人。
<春休み> こども一日ドック	3.30 12:00～17:30	受診者10人。

3) 講座・クラブ

<講座>

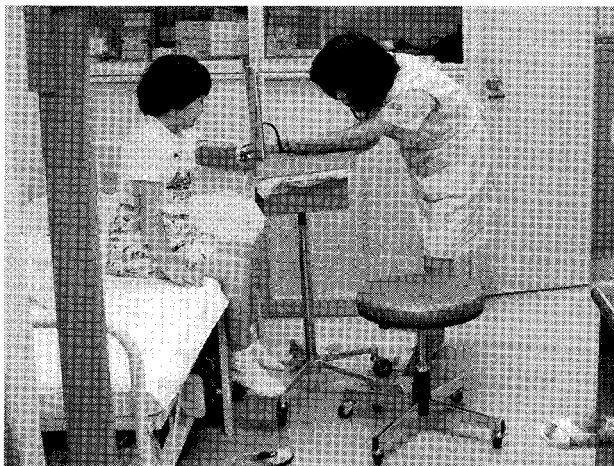
名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
健康スポーツ教室 <太りすぎクラス> 第10期	(組) 小1～6年の太りすぎ 児童とその 親 (25)	(組) ① 25 ② 25 ③ 25	土曜日 14:00～17:00 " " " "	小児保健部と体育事業部との協力事業。太り過ぎの改善のために医学指導・栄養指導・体育指導を行う。外部講師として、東京女子医科大学村田光範教授・山崎公恵講師、和洋女子大学坂本元子教授・小林幸子教授・石井荘子助教授・藤澤由美子講師。
マタニティスイミング	(人) 妊 娠16週 以降の妊婦 (35)	(人) 4.24 5.21 6.16 7.20 8.21 9.22 10.25 11.24 12.25 1.22 2.24 3.20	水泳(火・木曜日、月 7回) 10:00～12:00 レクチャー(火曜日ま たは木曜日、月1回) 13:30～14:30	小児保健部と体育事業部との協力事業。水泳という活動を通して妊娠中を心身ともに健康に過ごすことをねらっている。講師として、日本赤十字社医療センター産科医師、助産婦。 月1回水泳終了後に助産婦や産科医師などによるレクチャーを行った。質疑応答の時間も設けている。
母と子のリトミック<ダウン症クラス>第10期	(組) 3～5歳の ダウン症児 とその親 (12)	(組) ① 9 ② 11 ③ 10	木曜日 13:30～15:30 " " " "	小児保健部と音楽事業部との協力事業。リトミック活動を利用し、子どもたちが親やスタッフと一緒に活動する中で、自分の気持ちを表現できることをねらっている。外部講師として吉村温子玉川大学講師。

<講習会等>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
小児肥満のための 指導者講習会 (第14回)	(人) 養護教諭, 栄養士, 保 健婦, 教育 委員など (50)	(人) 39	8.27 10:00~17:00	小児肥満の指導を実際に行っている人, あるいはこれから行おうという人が集まった。保健所などで幼児肥満の指導も開始されていることから, 関心が高まっており, 講習会は活気のあるものとなった。内容「肥満の判定と指導」山崎公恵東京女子医科大学講師, 「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授, 「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長
小児肥満のための 指導者講習会 (第15回)	養護教諭, 栄養士, 保 健婦, 保母 など (50)	51	3.11 10:00~17:00	全国から肥満児の指導について学習したいという人が集まった。内容「肥満の判定と指導」村田光範東京女子医科大学教授, 「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授, 「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長
「新しい時代の育 児」10期 —家族—	保健婦, 保 母, 看護婦, 助産婦など (30)	21	5.19, 26, 6.2, 16, 23 の毎週水曜日 (5回) 18:30~20:30	子どもが育てられ成長する最も身近な環境である家族を取り上げて講習会を行った。変動する家族, 家族の機能, 現代の家族の状態などの話題が提供された。大橋薫聖徳大学教授「家族とは」, 狩野力八郎東海大学医学部講師「家族の機能—健康な家族」, 庄司洋子立教大学教授「日本の家族—夫婦関係を中心に」, 矢谷安紀子家庭裁判所調査官「家族の現状」, 岩崎雅典(映画)監督「ニホンザル・モズの家族」
「新しい時代の育 児」11期 —話題の医学—	保健婦, 保 母, 看護婦, 助産婦など (30)	29	9.22, 29, 10.6, 13, 20 毎週水曜日 (5回) 18:30~20:30	近ごろ話題になっている医学を取り上げ講習会を行った。二木武世田谷区総合福祉センター所長「噛むとは何か—噛まない子, 噛めない子の問題」, 田中哲郎東京医科大学八王子医療センター助教授「子育て必須—これからの事故と救急処置の知識」, 南谷幹夫杏林大学医学部客員教授「エイズの知識—これだけは知っていよう」, 馬場実同愛記念病院副院長「アレルギーとアトピー」, 言葉の内容を整理しよう」, 多田裕東邦大学医学部教授「未熟児のその後—子育ての中で—」
「新しい時代の育 児」12期 —障害を持つ子ど もの歩み—	保健婦, 保 母, 看護婦, 助産婦など (30)	27	1.26, 2.2, 9, 16, 23 毎週水曜日 (5回) 18:30~20:30	さまざまな障害を持っている子どもたちのその後の成長, 人生について, 専門家から具体的な話を聞く講習会。講師, 森永良子白百合女子大学教授「学習障害」, 佐々木正美神奈川県児童医療福祉財団小児療育相談センター所長「自閉症」, 日暮眞東京大学教授「ダウン症」, 矢戸和成文部省教科調査官「行政の立場から」, 井口由子こどもの城小児保健部臨床心理士「知的障害」
アレルギー講習会	保健婦, 保 母, 看護婦, 一般 (30)	37	9.4 14:00~16:00	アトピー性皮膚炎といわれる子どもたちが増えている。アトピーとは何か, どのように理解し, どのように対処したらいいのかなどについて分かりやすい内容の講習会。 高嶋宏也日本アレルギー研究所副所長・帝京大学医学部客員助教授

(2) 小児保健部の活動

小児保健部の活動は、クリニック活動、講座活動や育児支援活動、研修会などの啓もう活動、そして研究活動の4領域である。講座活動や育児支援活動、研修会などの啓もう活動については活動一覧表で紹介したので、ここでは、小児保健部の中心的活動であるクリニックの診療・相談活動と研究活動について詳しく報告することにする。



▲春休みと夏休みに「こども一日ドック」

1) 診療・相談活動について

診療・相談活動は、5階のクリニックスペースで行っている。ほかの診療機関と違う点は、身体面に対して診断と治療を行うことを目的としてはいないことである。これは、〔こどもの城〕の開館当初以来のことである。したがって診療・相談の対象は以下のようになる。

親の育児不安、肥満のように子どもの体の発育に関係した問題、言葉や運動面の発達に関係した問題、落ち着きがない・癖がある・友だちと遊べないなどの性格や行動面での問題、不安が強い・学校に行けない・夜眠れないなどの神経症的な問題である。

いずれの問題も、身体的な問題を除外するために、あるいは身体的な面からの治療を並行して行うために診察が必要であるが、これだけではなく、症状理解のために、生育歴、生活環境、家族関係、幼稚園や学校での生活などについて詳しく情報を収集することが欠かせない。さらに生活面の指導も欠かせない。このような診療・相談を行うためには、患者と信頼関係を形成し、時間をかけて患者としっかり話をすることが必要である。そのために、診療・相談はすべ

新規来所者数

	実数(人)
診療	193
検診・相談	128
マタニティスイミング	78
合 計	399

て予約制とし、時間は約30分から1時間ずつ確保している。

また、対象とする診療内容は、前述したように診療・相談が長期間にわたるものばかりである。そのために、一度診療と相談の時間が決められると、ある患者が毎週水曜日の午後1時からの1時間を2年間にわたって専有するといったように、特定の患者が長期間にわたって診療と相談の時間を専有することになる。

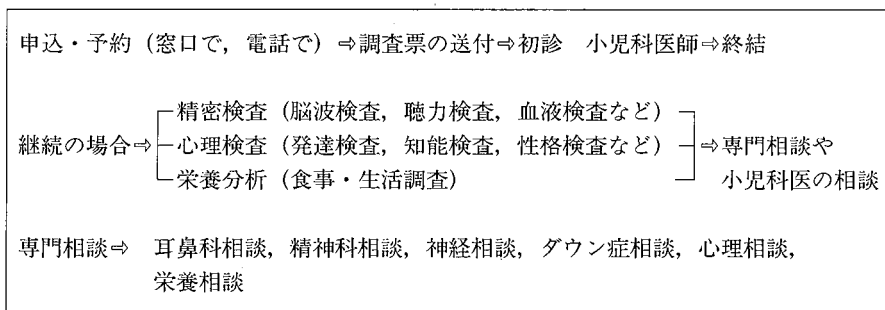
初回来所時年齢内訳

	(人)
0	54
1	24
2	40
3	31
4	25
5	18
6	25
7	22
8	17
9	18
10	15
11	6
12～17	16
18歳以上	88
合計	399

来所者の居住地域内訳

居 住 地 域	人数	%
渋谷区	66	16.5
世田谷区	60	15.0
新宿区	7	1.8
港区	26	6.5
目黒区	20	5.0
その他の23区	104	26.1
都内(市部)	17	4.3
神奈川県	55	13.8
千葉県	16	4.0
埼玉県	21	5.3
その他の都道府県	7	1.8
合 計	399	100

具体的に診療・相談の流れを示すことにする。



このような診療活動だけを行っている診療所は、我が国では少ない。そのため、〔こどもの城〕小児保健クリニックがこのような診療と相談を行っていることが近隣に知られるようになり、着実に初診の申し込みが増えている。

それではなぜ、一般の診療機関では、このような医療を必要としている子どもたちと親に対応できないのであろうか。それは、いうまでもなく経営の問題である。経営を考えたなら、〔こどもの城〕で実施しているような医療を行ってはいられないのであろう。

〔こどもの城〕では、開設に当たり、将来の小児科の医療は身体的な問題に対処するばかりではなく、心身の両面がかかわっているような問題に対応する

月別診療・相談件数（特別期間の無料相談コーナーの相談者を除く）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
診療	205	211	221	179	146	187	199	214	178	199	174	197
相談	18	20	61	24	13	13	13	19	12	14	14	24
合計	223	231	282	203	159	200	212	233	190	213	188	221

※診療合計＝2,310件，相談合計＝245件，総合計＝2,555件

ことが要求されるであろうという将来展望の下にクリニック事業を行うこととされ，これまでに至っている。子どもをめぐってさまざまな要素が複雑にかかわる社会構造は，今後も変わらないばかりか，一層複雑さを増すと考えるのが妥当であろう。そうすると，小児科領域での心身問題は，今後も減ることはないと予想される。

小児科医療を単に経営的な観点（医療経済的な観点）だけから考えるならば，「こどもの城」のクリニックが実施している医療はそもそも成り立たないことになるが，重要性からいうなら大きなものであると考える。こ

れからも，ほかの機関と連携しつつ活動を充実させていきたい。

なお，診療・相談の統計的資料については，表を参照されたい。

新規来所者の主訴・問題内訳（重複あり）

	人数	%
ぜんそく・アトピー・湿疹	8	2.0
肥満	45	11.1
神経症・習癖・情緒障害など （遺尿・夜尿・緘黙・恐怖症など）	49	12.1
言語発達遅滞（疑いも含む）	40	9.9
精神・運動発達遅滞（疑いも含む）	3	0.7
自閉症	3	0.7
微細脳障害・学習障害・多動	1	0.2
育児・健康相談・健康診断	128	31.7
その他・心理面の相談 （遊べない，社会不適応など）	11	2.7
その他・身体面の相談（斜視，てんかん，脳性まひ，低身長，頭痛等）	24	5.9
ダウン症，その他の先天異常	14	3.5
マタニティスイミング受講者	78	19.3
合 計	404	100

2) 研究活動

研究活動も小児保健部が力を入れている活動の1つである。忙しい合間をぬって，事業の中から研究としてまとめたものを論文の形や学会報告として発表している。以下に目録を紹介する。

(ア) 論文

- 巷野悟郎ほか「母子保健における情報の整理と育児への応用に関する研究」厚生省心身障害研究班，少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究，

平成4年度研究報告書, 356-364, 1993.

- 巷野悟郎, 井口由子, 吉田弘道ほか「一般児童における『動物家族画』の研究(第3報)」

安田生命社会事業団研究助成論文集, 第28号, 218-226.1993.

- 井口由子「紹介, 動物になった家族, L. Brem-Graser 要約・解題」

臨床描画研究, VIII, 146-168, 1993.

- 井口由子「ドイツにおける投影法, 特に家族画の動向」

臨床描画研究, VIII, 224-229 1993.

- 巷野悟郎「電話による育児相談—その現状と問題点—」

保健の科学, 第35巻, 第8号, 549-554.

- 巷野悟郎「親の役割と治療への参加—親教育のプログラム—」

小児内科, Vol.25, 増刊号, 113-117.

- 巷野悟郎「離乳食を食べない子の指導」

周産期医学, Vol.22, 増刊号, 432-436.

- 巷野悟郎「現代子育ての問題点—育児不安と子育て支援の必要性—」

周産期医学, Vol.23, No6, 769-771.

(イ) 学会報告

- 太田百合子, 吉田弘道, 柳谷真知子, 巷野悟郎ほか「肥満児教室の追跡調査」
第40回日本小児保健学会, 1993.10, 金沢.

- 植松紀子, 吉田弘道, 中澤恵子, 巷野悟郎ほか「早期教育と子どもの心理的発達について—事例を通して—」

第40回日本小児保健学会, 1993.10, 金沢.

- 中澤恵子, 植松紀子, 太田百合子, 樋川洋美, 巷野悟郎ほか「こどもの城『赤ちゃんサロン』における子育て支援, 第2報—参加者の育児の実態—」

第40回日本小児保健学会, 1993.10, 金沢.

- 梅田幸恵, 中澤恵子, 巷野悟郎ほか「総合児童センター施設内における保健室の救急対応の実際について」

第40回日本小児保健学会, 1993.10, 金沢.

- 吉田弘道「シンポジウム, 小児期におけ



▲「赤ちゃんサロン」を開催して, 子育て支援

る成人病（小児成人病）－小児肥満の心理学的理解と対応－」

第40回日本学校保健学会，1993.11，横浜．

- 吉田弘道，井口由子「プレイセラピーにおける言葉の使用について」

第12回日本心理臨床学会，1993.12，沖縄．

- 井口由子，吉田弘道，齋藤由香ほか「児童の『動物家族画』の調査から（第2報）－地域（沖縄，北海道，東京）による動物選択・表現の違い－」

第12回日本心理臨床学会，1993.12，沖縄．

- 植松紀子「教育ケースワークとは？－ある長期不登校児との3年間の関わり－」

第12回日本心理臨床学会，1993.12，沖縄．

8 企 画 部

(1) 5年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
アフリカン・ チルドレン・ フェスタ	9.21~10.11	日本での「アフリカ開発会議」開催を記念して行われた「アフリカ・ウィーク」の一環イベント。日本ユニセフ協会企画制作の「こども；アフリカの未来と開発」写真展および、第7回カナガワビエンナーレ国際児童絵画展に応募された、アフリカの子どもが描いた絵画などを展示した。
900万人セレモニー	12.18	こどもの城開館以来、来館者が900万人を迎えたことを記念したセレモニー。幸運にも900万人目となった横浜市に住む前田浩彰くん（3歳）とご両親には、〔こどもの城〕のキャラクター“マックロー”のグッズ一式などの記念品が贈呈された。アトリウム大きなテレビの前で実施。
NTT 夢のテレコムスタジオ	第1ステージ 10.9~11 第2ステージ 10.17, 24, 31, 11.3, 7	電話の通信回線を利用して〔こどもの城〕とていぱーく（通信総合博物館）を結び、同時に楽しめるイベントを実施した。 【第1ステージ】両会場に大型モニターを配置し、各会場に分かれて演奏しているバンドのメンバーを画面の上で合成し、同じ場所にいるように進める音楽のショーや会場ごとがチームとなりCGで作られた迷路を早く抜けるゲームなどを実施した。また、通信を使ったゲームなどを自由に体験できる通信体験コーナーを併せて実施した。 【第2ステージ】両会場を結んだ回線を使って、離れた会場にいる来館者同士で相手の姿を見ながら、ジャンケンゲームを楽しんだ。（各日とも2~3回実施） 共催は、NTT、ていぱーく（通信総合博物館）

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<児童福祉週間> こどもフェスティバル	5.1~5 ①11:30 ②14:00 ③15:30 (5.1のみ②③)	入館券だけで家族で楽しめる、劇場プログラム（整理券配付）。 1・2日＝『なやたけのかぐや姫』天童企画（ミュージカル） 3 日＝素劇『とんとむかし』劇団ひまわり 4・5日＝『おんがくがスキ！』おんがくズキ
<夏休み> 世界の子どもたち アジアの仲間と遊ぼう	7.21~8.31	日本の近隣の国々だが、あまり知られていないアジアの子どもたちの生活を紹介したギャラリー展示。ユネスコ・アジア文化センター編の絵本『どこに いるか わかる？』を大きく引き伸ばしたパネル、アジアの子どもたちの写真、各国の民族衣装や玩具などを展示した。遊びのワークショップも行った。
< 〃 > おはなし広場	7.31~8.8	幼児とその家族を対象にしたプログラム。人形劇公演のほか、映写・素話・絵本などを通して、楽しくお話に触れる機会を提供した。また、親子で簡単に作れる人形ワークショップを行った。出演は駒松戸市おはなしキャラバン。

名 称	期 間	備 考
<夏休み> 人形劇見本市 ザ・人形しばい	8.10～15	「子どもたちに身近に人形劇を見てもらおう」という願いを込めて実施した人形劇見本市。青山円形劇場、フリーホール、音楽スタジオAを会場に、20のプロ劇団による公演。観客も一緒に参加する人形劇、腹話術、一人だけで演じる人形劇などバラエティーに富んだ公演となった。同時に、フリースペースでは、時間を決めて「人形劇パフォーマンス」の実施や8階研修室を使用した「人形作りワークショップ」、指導者や保護者の方々に向けた「人形劇相談コーナー」などを併せて行い、人形劇をさまざまな角度から紹介した。日本人形劇人協会との共催。
< 〃 > こどもフェスティバル 『中国の音楽と雑技』 (王さんと仲間たち)	8.16～17 ①11:00 ②13:30 ③15:30	中国の音楽と雑技(中国ふうサーカス)のプログラムを行い、参加者は目の前で演じられる中国の伝統的な文化を肌で感じる事ができた。「洋琴(やんちん)」「琵琶(びわ)」「二胡(にこ)」「笛子(でいず)」などの演奏とお椀(わん)を使った「頂碗(ちようわん)」の雑技を行った。(1回約45分・青山円形劇場)協力:音楽事業部。
<開館記念> 開館8周年 記念セレモニー	11.3	音楽ロビーで、マックローと遊ぶコーナー(クイズ)と記念セレモニーを行った。[こどもの城]と11月生まれの参加者の誕生日を祝い、ハッピーバースデーを合唱した。また、マックローが館内を歩き、子どもたちにグリーティングして回った。
<冬休み> お正月の遊び大集合	〔みる〕 12.23～1.16 〔つくる〕 1.4～9, 1.14～16 〔あそぶ〕 1.3～9	〔伝承あそび〕を「みる」「つくる」「あそぶ」というさまざまな角度から紹介し、普段遊ぶことの少なくなった〔伝承あそび〕を、世代を超えて体験するプログラム。5回目を迎える今回は、「みる」コーナーはギャラリーで実施。「あそび対決 たこVSこま」と題し、代表的なお正月のあそびである「たこ」と「こま」を比較しながら紹介した。「つくる」コーナーでは、毎年恒例のたこ作りコーナーを行った。「あそぶ」コーナーでは、さまざまな伝承あそびに挑戦できるコーナーをプレイホール、屋上に設置し、友達同士や親子で楽しむ風景がみられた。併せて、音楽スタジオBでは、「紙相撲新春場所」を行い、自分で作った力士で紙相撲を多くの子どもたちが楽しんでいた。(「あそぶ」コーナーについて詳細は研修教養部・プレイ事業部のページを参照)

3) その他(野外活動など)

名 称	期 間	備 考
「おもちゃ図書館マックロー」	年末、年始を除く 毎週水曜日 11:00～16:00	心身に障害のある子どもたちを対象として作られた、全国に約400か所ある「おもちゃ図書館」の1つとして、昭和62年に[こどもの城]に開設された。おもちゃの貸し出し事業のほか、その場でおもちゃを使って遊ぶこともできる、障害のない子どもたちも含めた共同の遊び場。十数人のボランティアによって運営されている。平成5年度には48回開催され、利用者は延べ706人、おもちゃの貸し出し数は232個、活動に参加したボランティアは延べ224人にのぼった。ほかに10月13日から24日まで[こどもの城]ギャラリーを使い、おもちゃ図書館活動の紹介と市販されて使いやすい玩具の紹介を兼ねた「豊かな遊びを広げるおもちゃ展」を開催した。[こどもの城]11階会議室を利用して開設されている。

4) アトリウムギャラリー使用一覧

名 称	期 間	備 考
「アートスケープ'93」	4.12～18	インターナショナル・スクールの生徒が制作した美術作品の展示。主催は東京・横浜地区のインターナショナルスクール7校
「遊びと造形発想展」 ーたしざん・かけざんー	6.11～26	遊びと造形発想の会、財日本児童手当協会（こどもの城）の共催。
「世界の子もたち」 ーアジアの仲間と遊ぼうー	7.21～8.31	アジア地域の子もたちの遊びと生活風景の紹介。主催は財日本児童手当協会（こどもの城）。
「アフリカン・チルドレン・フェスタ」	9.21～10.11	アフリカ地域の子もたちの生活の紹介と子もたちの制作作品の展示。主催はアフリカウィーク実行委員会、財アフリカ協会、財日本ユニセフ協会、財日本児童手当協会（こどもの城）。
「豊かな遊びをひろげるおもちゃ展」	10.13～24	おもちゃ図書館活動と市販されている玩具の紹介。主催は財おもちゃ図書館、財日本児童手当協会（こどもの城）。
「ニッサン童話と絵本のグランプリ 原画展」	11.16～28	童話と絵本のコンクール入賞作品の展示。主催は日産自動車㈱広報部。
「Smiling Face'93」	12.4～12	子どもをテーマにした写真コンクールの入賞作品。主催はSmiling Face '93実行委員会。
「お正月の遊び大集合」 ーみんなに伝えたいあそび'94ー	1.3～16	お正月にちなんだ代表的伝承遊び、凧と独楽の紹介。主催は財日本児童手当協会（こどもの城）。
「小さな美術展 ベスト・セレクション」	1.25～2.6	かまぼこ板絵コンクール入賞作品のベスト・セレクション。主催は小さな美術展実行委員会・鈴廣蒲鉾工業。
「第41回全国小中学生優秀作品 コンクール」入賞作品展	3.12～21	全国の小中学生による絵画、書写、作文の入賞作。主催は財児童憲章愛の会。
「ジュニア・デザイン・ コンペティション」	3.25～4.5	子どもたちが制作したデザイン作品の入賞作品展。主催は美育文化協会。

▼ギャラリーの一角には、独楽で遊ぶ
コーナーも設けられた



▲「お正月の遊び大集合」のギャラリー展示

(2) 企画部の活動

企画部の重要な役割の1つは、体育・プレイ・造形・音楽・AVなど事業部が実施する「子ども活動」のプログラムを調整することである。平成5年度も、各部ともそれぞれの専門性を生かした事業を計画・実行してきたが、企画部では、プログラムの対象年齢や混雑する時期、来館者の傾向などを考慮し、それらがバランスよく行われるように全体を見渡して調整した。その上で必要があると判断した部分については、企画部が事業を行って充実に努めた。

そのほか、外部団体から事業共催や協力の要請があった場合の受け入れ・協力窓口としても機能した。

具体的なプログラム以外の部分では、来館者にいかに快適にかつ楽しく過ごしてもらえるかに心を注いだ。行事の掲示、放送、総合案内、休憩室の確保がその主な内容である。

日常業務として、「週間事業予定」のまとめと「デイリー版」の作成を行った。前年度に出された事業計画案の実行段階において、各部から毎週「週間事業予定」を提出してもらい、それをまとめて管理・行事確認などに利用している。また、それらを組み直し「デイリー版（土・日曜日、祝日などの10時開館時の行事案内）」を、内部用と掲示用に作成し、案内の充実に努めた。

そのほか、アトリウムでは、講座・クラブなどの受付業務や運営状況の把握、友の会運営、グループ活動や視察・見学の受け入れなどを行った。

1) 平常期間の活動

平常期間中には、各部のまとめや調整などを中心に業務を進めているが、次の2つのプログラムは外部から働きかけがあり、企画部で協力して実施に至ったものである。

(ア) アフリカン・チルドレン・フェスタ

「こども；アフリカの未来と開発」写真展・アフリカこども絵画展

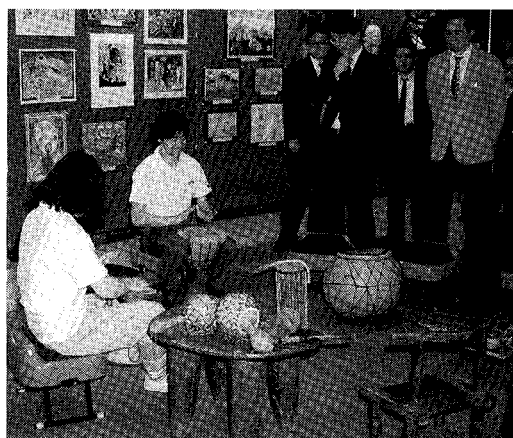
日本での「アフリカ開発会議」開催（10月）を記念したイベント「アフリカ・ウィーク」の一環で、「こども；アフリカの未来と開発」写真展・アフリカこども絵画展を〔こどもの城〕ギャラリーで開催した。

写真展は2部構成（第1部「アフリカ」、第2部「開発とこども」）で、勸日本ユニセフ協会で企画・制作したもの約100点を展示。困難な状況下でも笑顔で生活している子どもや自然の姿を見て、アフリカのネガティブなイメージを一掃し、未来をともに考えようというのがそのねらいであった。

絵画展は、第7回カナガワビエンナーレ国際児童絵画展の応募作品のうち、

アフリカの21か国の子ども(5～15歳)の作品約200点を国ごとに展示。同世代の子どもたちが生活や夢について描いた絵を鑑賞し、来館児・者にその国々を身近に感じてもらうことをねらいとした。

そのほか、アフリカの大きな掛け地図、5つの部族の仮面、ガーナの民族衣装、太鼓や親指ピアノなどの楽器、さまざまな装飾品などを展示した。絵画に描かれているものの実物に触れられること、どんな民族がいて、幾つの国がどこに位置しているかなどの知識を得ることなどをねらいとした。



▲「アフリカン・チルドレン・フェスタ」の会場には太鼓や親指ピアノなどの民族楽器も展示

また、10月6日は、ウガンダ共和国のジャネット・ムセベニ大統領夫人が視察に訪れた。

主催は、アフリカウィーク実行委員会、(社)アフリカ協会、(財)日本ユニセフ協会、(社)国際文化協会、(財)日本児童手当協会(こどもの城)、後援は外務省。

(イ) NTT夢のテレコムスタジオ

〈実施に至る経緯〉

NTTから「通信を遊びながら体験できるプログラムを共同企画したい」と呼びかけがあり、子どもたちが科学遊びに触れる一環として、NTT、[こどもの城]、ていぱーくの3者の共同主催で、「テレコムスタジオ」を行うこととなった。NTTは事業の経費的な負担とソフトの提供を行い、[こどもの城]はプログラムへのアドバイスと場所の提供を分担した。

〈実施内容〉

プログラムは2つのステージ(期間、内容)に分かれ、第1ステージは[こどもの城]でのイベントを中心に展開し、第2ステージはていぱーくを中心とした展示型プログラムで、その一部のイベントを[こどもの城]が担当。

【第1ステージ】(10月9～11日)

[こどもの城]地下1階フリーホールとていぱーくとを通信回線で結び、2会場に集まった参加者全員でコンサートや1つのゲームを楽しむイベントと、2会場をつないでパソコンゲームやデータベースを利用できる「通信体験コーナー」を実施した。

実施に先立ち、10月8日には港区内の小学校に依頼し、シミュレーションとして各イベントを実施した。

イベントコーナー中央に大型のシステムプロジェクターを設置し、実施中はそのモニターを通して他方の会場を見ることができ、CG（コンピュータ・グラフィックス）でできたイメージキャラクターが進行役として登場し、一体感を出して盛り上げていた。メインのプログラムは、各会場を1つのチームにして対抗で争う大画面CG迷路ゲーム「電脳空間迷路」と、1つの音楽バンドが各会場に分かれて登場し、画面上で1つになって演奏をするコンサート「異次元ライブステージ」の2つであった。

通信体験コーナーでは、ていぱーくと結んだ回線を使ってゲームをしたり、データベースからサッカー・Jリーグの情報を自由に引き出して楽しむことなどを実施した。

夢のテレコムスタジオ来場者数

	招待者数	一般来館数	計
10月9日	3 5 5	1 2 7	4 8 2
10月10日	2 5 7	2 3 2	4 8 9
10月11日	3 2 9	4 5 3	7 8 2
計	9 0 9	9 4 1	1, 7 5 3

※招待者はテレコムスタジオ事務局で事前に申し込んだ人

※一般来館者は〔こどもの城〕に遊びに来て、参加した人

【第2ステージ】(10.17, 24, 31, 11. 3, 7)

日曜日・祝日に時間帯を決め、〔こどもの城〕とていぱーくの展示会場とを通信回線で結び、ジャンケンゲームを実施（1回30分程度、1日2・3回）。

2) 特別期間の活動

(ア) 児童福祉週間（ゴールデンウィーク）

4月29日から5月5日までを「児童福祉週間特別期間」とし、普段にもましてプログラムの充実を図っている。なお、5月5日の「こどもの日」は18歳未満の児童の入館は無料。

入館者がある一定数を超えたり、一部のエリアだけ混雑しているなどの状況（混雑時）や、けがや事故があった場合（緊急時）の対策について、企画部が中心となり、各部が連携して対応できるようにした。

(1) こどもフェスティバル

青山田形劇場をこども活動エリアの一部として使用し、親子に質のよいプロ

グラムを提供することを目的とした公演。

この時期は活動エリアが混雑するため、300人程度収容できる青山円形劇場を一般に開放して混雑緩和に努めるという意味も含んでいる。今年のプログラムは次のとおり。

○『なよたけのかぐや姫』（天童企画・5.1・2 ①11:30②14:00③15:30※1日は②③のみ）＝「竹取物語」を子ども向けミュージカルにアレンジしたもの。観客の想像力に働きかけながら、ともに愛や優しさについて考えさせる内容。

○素劇『とんとむかし』（劇団ひまわり・5.3 ①11:30②14:00③15:30）＝越後のある村で代々歌い継がれてきた唄（うた）をベースにした民話10話を5話ずつに分けて上演。10人の俳優が少ない小道具と体だけで表現したもので、観劇側に想像の余地が十分にあり、民話の世界を堪能できた。

○『おながくがスキ!』（おながくズキ・5.4・5 ①11:30②14:00③15:30）＝音楽事業部の協力。おもしろい楽器の紹介や手遊びなど参加性の高い内容。

(イ) 夏休み特別期間

この時期の企画部の重要な役割は、ほかの特別期間同様、プログラムの調整と混雑時の対策である。

幼児と母親が多く来館する傾向にある7月下旬、幼児向けプログラムを充実させるため「おはなし広場」を実施。8月に入ると小学生以上も家族や友だちと来館し、また遠方からの来館者も多くお盆前後にはその人数はピークに達した。

この時期に、幼児のみならずその家族・指導者を含め、たくさんの人に質の高い児童文化に触れてもらうため、「人形劇見本市」と「子どもフェスティバル」を実施した。

また、平常期間にも外国の演奏家を招へいたプログラムなどを実施しているが、来館者の多い夏休みに子どもたちの目や体験を通して異文化を知ってもらうようなプログラムを充実させたく、ギャラリー展示を実施した。

(1) 世界の子どもたち～アジアの仲間と遊ぼう～

21世紀を担う子どもたちに国際人になってもらいたい、との願いを込めて、国際理解のひとつのき



▲在日ネパール人のお母さんが遊びの指導
（「世界の子どもたち～アジアの仲間と遊ぼう」展）

っかけとして行った展示。まずは日本の近隣の国々について知ろうというもの、アジアの子どもたちの遊びや生活を紹介し、理解を深めてもらうこととした。

『どこに いるか わかる?』パネル(8点)の展示。子どもの目を引くように、楽しい絵による参加性を持たせたものを冒頭に配置した。絵の中の主人公を捜すという遊びを通してさまざまな文化をかいま見ることができる。同タイトルの絵本(ユネスコ・アジア文化センター編)を大きく引き伸ばしたもので、各国の画家が描いており、個性豊かなものであった。

次に配置したものは、アジアの子どもたちの写真パネル(17か国67点)。10年以上さかのぼる古い作品もあったが、各国のアマチュアによる作品で素朴なものが多く、子どもたちの日常の姿を見るために選んだ。

ほかに、民族衣装を紹介する目的で、「横浜人形の家」の協力で民族衣装を着た人形(17か国23点)を展示ケースに陳列したほか、横山恵美子氏(写真家)のご好意で、タイ・メオ族の4・5歳の子どもが自分で刺しゅうした民族衣装を、実際に手に取って見られるように展示した。

絵や写真に出てきた玩具を実際に使って遊べるよう、インドネシアほかの玩具、原語の絵本(17か国95点)の展示も行った。吹き抜けの部分にワイヤーを張り、アジアの代表的な玩具である凧(10か国30点)を“飛ばし”、来館者のアイキャッチに効果的だった。

また、外国人と接する機会を持つ目的で、遊びのワークショップを実施。在日ネパール人のおかあさん3人がボランティアでおはじきなどの室内遊びを指導してくれた(8月3、19日)。在日外国人が増加しているとはいえ交流の機会が少ないようで、子どもたちは緊張しながらも楽しんでくれた。ほかの国についても企画していたが、日程の調整がつかず実現に至らなかったのが残念である。そのほか、タイの子どもたちについてのお話会を実施した。実際に現地で写真を撮った横山氏(前出)がスライドを見せながら、子どもたちの様子を話してくれた(8月22日)。(財)ユネスコ・アジア文化センター、(社)横浜国際観光協会横浜人形の家、凧の博物館ほかの協力。

(2)人形劇見本市 ザ・人形しばい

開館以来、「人形劇」は児童文化の1つの分野として、〔こどもの城〕の活動の中にさまざまな形で取り上げられてきた。今回、日本人形劇人協会(人形劇にかかわる人が個別に加入し構成している団体)から共催で“人形劇を職業としている劇団の見本市(PR公演)の実施”について提案があり、『人形劇見本市 ザ・人形しばい』を実施することとなった。

『人形劇見本市 ザ・人形しばい』は、来館児・者にさまざまな種類の人形劇の上演だけでなく、ワークショップなどを併せて実施し、いろいろな角度か

ら人形劇のすばらしさを紹介し、直接触れる（体験の）機会とした。

また、都内とその周辺部の児童教育・福祉の施設（学校、幼稚園、保育園、児童厚生施設など）の指導者に向けて『人形劇見本市 ザ・人形しばい』の案内を行った。子どもたちが鑑賞している姿を含めて鑑賞していただき、人形劇に対する理解を深め、今後の各団体の活動に役立ててもらうことも目的の1つとした。

なお、各会場とも入館料のみで（ワークショップは材料費実費）自由に人形劇を楽しんだ（青山円形劇場は定員管理のため整理券を発行）。

『人形劇見本市 ザ・人形しばい』の《人形劇公演》

8月 10日	『おかしな家』ほか（高津人形座） 『さるとうさぎのだいくさん』ほか （人形劇団 テアトロ天気）	☆①11:00 ②14:00 ★①12:30 ②15:30
11日	『がらくたサーカス』ほか （クレヨンカンパニー） 『タマと遊ぼう』ほか（人形劇木ぐつの木）	☆①11:00 ②14:00 ★①12:30 ②15:30
12日	『赤ずきんちゃん』（エツコワールド） 『たのきゅうさん』ほか（人形劇団 木偶） 『歌のファンタジー』ほか（人形劇団 じろっぼ）	☆①10:40 ②14:00 ☆①11:30 ②14:50 ★①12:40 ②16:00
13日	『王様の耳はロバの耳』（人形劇団 ひとみ座） 『パペットBOXのびっくり箱III』（パペットBOX） 『アラジンの冒険』（人形劇団 ばんび） 『満月狸御殿』（中西トーシロー一座） 『人形バラエティと腹話術』（らんぶ座）	青山円形劇場 ①11:00 ②13:30 ③15:40 ☆①12:00 ②16:40 ★①12:30 ②13:30 ③14:30
14日	『くるみ割り人形』（人形劇団 プーク） 『こぐまのコロンくん』（人形舞台 エミ） 『つの太郎』（人形芝居 夢見鳥） 『アラジンの冒険』（人形劇団 ばんび） 『むぎわらぼうし』ほか（人形劇 童心座）	青山円形劇場 ①11:00 ②13:30 ③15:30 ☆①11:00 ②14:30 ★①12:30 ②14:30
15日	『スーホの白い馬』（劇団 貝の火） 『赤ずきんちゃんと森のこもりうた』（人形劇団 くれよん座） 『トロトロとガアガ』（人形劇団 ポポロ）	青山円形劇場 ①11:00 ②13:30 ③15:40

『ねずみのフーフー君とひとみ座のおじさん』 (ひとみ座幼児劇場)	☆①11:00 ②14:30
『人形バラエティと腹話術』 (らんぶ座)	★①12:30 ②13:30 ③14:30

☆フリーホール ★音楽スタジオA

『人形劇見本市 ザ・人形しばい』の《人形劇パフォーマンス》

8月 10～13日	パペットBOX (人形を使ったボード ビルショーや足長ピ エロ、リングのパフ ォーマンスなど)	3F 円形劇場前ロビー 1F ピロティ・ アトリウムロビー B1F フリーホールなど	随時 (人形劇開演前などにP Rを含めて実施)
8月12日	エッコワールド (歩く人形劇のパフ ォーマンス)	3F 円形劇場前ロビー 1F ピロティ・ アトリウムロビー B1F フリーホールなど	随時 (人形劇開演前などにP Rを含めて実施)

『人形劇見本市 ザ・人形しばい』の《人形づくりワークショップ》

8月 10～12日	ひとみ座幼児劇場	ウレタン人形(怪獣・た ぬき・うさぎ・わに)	参加者数 1日平均250人
8月 13～15日	人形劇木ぐつの木	ウレタン人形(たぬき・ うさぎ・ぶたなどを自由 に作る)	参加者数 13・14日 180人 15日 220人

場所 8F 研修室803・804号室 実施時間帯10:00～17:00

(3)夏休みこどもフェスティバル

世界各地の文化に触れてもらう活動の一環として「中国の音楽と雑技」(出演＝王さんと仲間たち)を青山円形劇場で実施した。

(ウ) 冬休み特別期間

(1)お正月の遊び大集合

冬の伝承遊びを紹介する恒例のプログラムの。全体のテーマを「お正月の遊び大集合」とし、「みる」「つくる」「あそぶ」の3つの視点から、伝承遊びを多角的に捉え、世代を超えた遊びとして紹介。遊ぶための動機づけを行った。

【ギャラリー展示『あそび対決“たこ”vs“こま”】

お正月の代表的な遊びである“たこ”と“こま”を比較し、観察することにより、それぞれの遊びの持っている偉大さや意外な一面を発見し、身近に遊んでもらうきっかけづくりとしてテーマを設定し、アトリウム・ギャラリーで実

施した。

展示は見るだけでなく、実際に触って遊びを体験できるコーナーや、科学的に実験をしてみるコーナーも設置。日本の凧の会、凧の博物館、日本独楽の会、日本独楽博物館の協力をいただき、貴重な展示品の作品やコメントの監修にご助力いただいた。

また、この展示は、館内で行われている伝承遊びプログラムの導入部とし、伝承遊びに興味を持ってもらう「動機づけ」のエリアと考え、実施した。

○展示コーナー一覧

エントランスゾーン（大たこの展示3点・趣旨文・凧の博物館と日本独楽博物館館長のあいさつ文）／どんな遊びかな～いつごろから遊んでいるの～どんな国で遊んでいるの／どんな所で遊ぶの／日本のたこ50選／日本の独楽50選（ほかに、投げごまのいろいろ）／たこ、こま実験室／どうやって作るの／どんなものがあるの／どんなことができるの／だれが遊ぶの／なんでもチャンピオン／遊びの体験コーナー

【たこ作りのワークショップ】

伝承遊びを紹介する中で、おもちゃ作りに挑戦するコーナーを地下1階フリーホールに設けた。自分の手で作り、それで遊ぶ楽しさを体験し、これを機会に伝承あそびに興味を持ってもらうことを目的とした。

実施内容には、恒例の“えいだこ”を取り上げ、日本の凧の会の会員に指導をお願いした。日ごろからたこに親しむ姿がにじみだし、作り方の指導のみならずたこの持つ魅力や揚げ方のコツなど、子どもたちが作ってみたいくなるように、親しみやすく指導していただいた。また、1月8日は、特別プログラムとして、大橋栄二氏（日本の凧の会）のオリジナルのたこ（Tシャツ凧、新型江戸凧）を題材に実施した。

お正月の遊び大集合 たこ作りワークショップ参加人数

実施日	1/4 (火)	1/5 (水)	1/6 (木)	1/7 (金)	1/8 (土)	1/9 (日)	1/15 (土・祝日)	1/16 (日)	合計
参加人数	108	130	111	155	76	93	126	109	908

【こま名人きたる】

お正月の企画には欠かせなくなった、こま名人の技の披露。出演は“こまのおっちゃん”の愛称で親しまれている、藤田由仁日本独楽博物館館長。今年で3回目。セールスポイントとも言える江戸時代の大道芸人ふうの衣装を着け、おもしろいおしゃべりでこまについていろいろと説明をしてくれた。

高価なものより100円で買えるこまのほうが技がたくさんできるそうで、いく

つもの技に関心した子どもたちはじっとしていられず、ステージににじり寄ってしまうこともしばしば。扇子や刀の刃の上で回す高度な技や“超能力”まで披露。「こまの手のせができてこそ、日本の子ども！」とこま名人。後半では、初めてこまを回す子どもも手を取り指導し、子どもたちは“日本の子ども”になるべく、こま回し体験ワークショップを楽しんだ。1ステージ、約1時間。音楽スタジオBで開催。

【新春もちつき大会】

伝統文化を伝えることや体験することを大事にしようと、臼（うす）と杵（きね）で餅（もち）つきをする恒例のお正月行事。子どもたちと一緒に屋上遊園で毎年行っている行事。

せいろで蒸かすのはスタッフが担当。屋上に設置した臼でつくのは子どもたち。1回でも杵を握った子どもは、つきたてのもち（あんときなこ）が食べられる。約2時間で30kgのもちがつき上がった。晴天でも強風の屋上で順番待ちをするのは幼児には辛いことだが、自分でついたもちを食べたいからか、みんな頑張った。文字どおり“昔とった杵づか”とばかり奮闘するお父さんの姿もあり、世代を超えて楽しめる伝統行事となった。

3) グループ活動

開館以来、平日午前中の子ども対応活動としてグループ活動を実施してきた。これは、保育園、幼稚園、小学校、特殊学級、養護学校、さらには自主保育グループなどを単位とする児童を10人以上のグループで受け入れ、〔こどもの城〕独自のプログラムによって活動してもらうもの。一般来館、講座・クラブと並ぶ主要な事業として運営している。

本年度の参加は62団体、1,670人で、前年度の77団体、1,692人を下回ったが、PRに努め、この活動の普及に努めたいと考えている。プログラムは前年度行ったものを踏襲し、内容の充実を図った。

(ア) プログラム一覧

担当部門	プログラム名	対象	定員(人)
音楽 事業部	忍者ってほんとうにいたの？	3～5歳	30
	スカーフであそぼう	〃	〃
	まつりばやし	〃	〃
	ガムランで遊ぼう	3歳以上、障	〃
	めずらし楽器大集合	小1以上、障	〃
	サンバでおどろう	4・5歳	〃
	たたいてみよう日本の太鼓	〃	25
	タムタム大王と遊ぼう	〃	30

	わいわいバンドで遊ぼう インドネシア・アングルン	3～5歳 小1以上	30 "
造形 事業部	かげをうつそう	4歳～小6, 障	24
	木をつくろう	"	30
	粘土でジャングル旅行	5歳～小2 "	15
A V 事業部	みんなでつくろうぱたぱたアニメ	4歳以上	30
	フィルムに絵を描いてみよう	"	"
	ビデオであそぼう	小3以上	"
体育 事業部	すてきな新体操	3歳～中3	30
	たのしい体育・運動	3～5歳, 障	"
	レクリエーション	小1以上, 障	"
	マット・てつぼう・とびばこ	小1以上	"
	体力測定	小1以上, 障	"
	球技で楽しく汗を流そう!	小3以上	"
プレイ 事業部	みんないっしょに	3歳～小2	45
	スペシャルじゃんけんゲーム	小1以上	"
	こどもの城オリンピック	"	"
	ニューススポーツで遊ぼう	小3以上	30
	森へ行こう	4歳～小2	"
	忍者修行道場	"	"
	五龍(ウーロン)大武闘大会	"	45
	楽しいコンピュータ グラフィックス	5歳以上	30
	カードを作ろう	小1以上	"
	ロゴで遊ぼう	小3以上	40
	パソコンミュージックに挑戦	"	"

※「障」は養護学校・特殊学級など

(イ) グループ活動利用状況 (18ページの表参照)

(ウ) まとめと今後の課題

依然として利用団体数が低調であるため、今後は新しい利用団体の開拓が、より重要な課題となってくる。PRについては、今までのような広い窓口で申し込み団体を待つ方法から、対象を絞って重点的に案内していく時期にさしかかっていると考えられる。

児童数の減少など、このような状況の中で、開館以来継続して利用している団体の中にも閉園が予定されているという連絡も受けている。プログラム開発については、新規団体を引きつけるもの、継続団体も次回を期待するものが必要であり、今まで以上に申し込みなどのシステムも変えていくことが、課題としてあげられる。

4) その他の活動

(ア) アトリウム・ギャラリー

アトリウム・ギャラリーの利用状況は135ページの表のとおり。

5) まとめと今後の課題

前述してきたように事業調整が企画部の主要な役割の1つであるが、正確な情報をできるだけ早い時期に収集することが今後の課題である。入館者の層や増加する時期などを予測し、事前に効果的に調整するため、また、外部広報について広報部への協力を円滑にするためにも必要である。しかし、そのためには各部の事業計画案作成が先行するため、[こどもの城]全体の課題でもあると言える。

現状を見ると、類似した情報や資料を繰り返し調査しているなど、重複した作業があることが分かる。無駄なく、正確な情報を集めることができるよう、関係各部と協議のうえその方法を見直し、改善する必要があるとも考えられる。

各部では専門性を生かした事業を実施しているが、全体を見渡すことが困難であるという一面は否めない。企画部では、全館統一したテーマで事業を実施する場合（お正月遊びなどはその1例である）やその雰囲気づくりに対する各部への働きかけについて、今後さらに力を注ぎたいところである。

また、世界の子どもを取り巻く状況の変化、日本での社会的な子どもの立場や役割の変化などの問題に目を向け、いち早く反応し[こどもの城]で紹介するという役割も、企画部が担っていくことができると考える。例えば子どもの問題について語る時、「児童の権利に関する条約」を知らずにいるわけにはいかなかった。各部がそれぞれに情報を得ることもできるが、[こどもの城]全体としてそのような問題を前向きに受け止める姿勢を保つためにも、広く全体を見渡せる立場である企画部が機能することは大切である。

[こどもの城]はいかなる状況にも対応しつつ、常に「子どもの健やかな育成」「子どもにとっていちばんいいこと」に取り組んでいける施設でありたい。そのため、内部・外部からを問わず、情報収集とフィードバックのためのアンテナや窓口として、企画部は機能していけたらよいと考える。

9 劇場事業本部

(1) 演目一覧表

1) 青山劇場

公 演 名 称	期 間(日)	回数	料 金	総席数	入場者数	入場率	備 考
<自主公演>		(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
マリウス・プティパ生誕175年記念 第8回青山バレエフェスティバル ～プティパ175～	8.2～4(3)	3	A:6,000・B:5,000	3,234	3,010	93.1	
(小計) 1		3		3,234	3,010	93.1	
<貸し館>							
ファミリーミュージカル 「ピーターパン」 (ホリプロ)	4.1～7(7)	13	S:7,500・A:5,500	14,274	12,717	89.1	3.15から続演
ミュージカル「アニー」 (日本テレビ)	4.8～5.5(28)	34	S:7,500・A:5,000	37,740	33,529	88.8	
ミュージカル「魔女の宅急便」 (関西テレビ)	5.9～6.6(29)	28	S:9,000・A:6,000	30,784	29,218	94.9	
ミュージカル「阿国」 (アトリエ・ダンカン)	6.7～27(21)	17	S:9,000・A:7,000	18,938	16,415	86.7	
曙会公演「妖」「戸隠」	6.28～29(2)	1	A:8,000・B:3,000	1,196	716	59.9	
山本禮子バレエカンパニー 「バレエ・コンサート」	6.30～7.1(2)	1	S:6,000・A:5,000 B:4,000	1,192	924	77.5	
少年隊ミュージカル プレゼンVIII 「ウィンドウ」 (ジャニーズ事務所)	7.2～8.1(31)	33	10,000均一	35,714	35,060	98.2	
ミュージカル・アドベンチャー 「ウィンドインザウィロー」 (ホリプロ)	8.5～9.1(28)	33	S:9,000・A:7,000 B:5,000	35,574	31,320	88.0	
Kaho Shimada 1993 Concert	9.2～5(4)	3	S:5,000・A:3,500	3,600	2,938	81.6	
石川さゆり音楽会 '93秋 「夢をみましよう」	9.9～12(4)	5	SS:10,000・S:8,000	5,210	4,751	91.2	
ミュージカル「ダンサー」(I・S・P)	9.13～15(3)	3	A:6,500・B:5,500	3,600	1,169	32.5	
クリスティーナ・オオス舞踊団 (キョードー東京)	9.16～26(11)	10	S:12,000・A:10,000	11,600	10,141	87.4	

公 演 名 称	期 間(日)	回数	料 金	総席数	入場者数	入場率	備 考
		(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
ミュージカル「レディ, ビー・グット!」 (東宝)	9.27~10.28 (32)	42	S:11,000・A:7,000 B:4,000	50,400	47,240	93.7	
につぼんのオリジナル・ミュージカル 「夢から醒めた夢」 (劇団四季)	10.29~11.9 (12)	11	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000	11,594	10,672	92.0	
につぼんのオリジナル・ミュージカル 「ユタと不思議な仲間たち」 (劇団四季)	11.10~21(12)	11	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000	11,594	10,734	92.6	
につぼんのオリジナル・ミュージカル 「李香蘭」 (劇団四季)	11.22~12.2 (11)	11	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000	11,594	9,950	85.8	
服部克久「音楽畑」 10周年記念コンサート (東京放送)	12.3~5(3)	2	6,000 均一	2,308	2,044	88.6	
ミュージカル 「ラ・カージュ オ・フォール」 (東宝)	12.7~29, 1.2~31(53)	75	S:12,000・A:7,000 B:4,000	75,460	68,112	90.3	休演5回
ビッグバンドフェスティバル in TOKYO '94 (東京都)	2.4(1)	1	A:3,000・B:2,000	1,164	1,054	90.5	
オリジナル・ミュージカル 「夢から醒めた夢」 (劇団四季)	2.5~20(16) 3.15~27(13)	30	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000	31,620	24,590	77.8	
オリジナル・ミュージカル 「ユタと不思議な仲間たち」 (劇団四季)	2.21~3.14 (22)	25	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000	26,350	19,658	74.6	
ミュージカル「ピーターパン」 (ホリプロ)	3.28~31(4)	—					4.24まで続演
(小計)	22	389		421,506	372,954	88.5	
青山劇場 計	23	392		424,740	375,964	88.5	

2) 青山円形劇場

公 演 名 称	期 間(日)	回数	料 金	総席数	入場者数	入場率	備 考
		(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
<自主公演>							
五線譜のなかの動物たち⑩ 音楽物語[おとこ一匹, 犬一匹~フレデリック・ショパン物語~]	4.1~4(4)	6	2,000	1,901	1,583	83.3	3.29から続演
ファミリーランドの宝物	5.7~9(3)	5	1,200	1,410	1,285	91.1	国際交流企画
五線譜のなかの動物たち⑪ サティの音楽遊園地 [パリのいんげん豆]	7.27~8.1(6)	8	2,000	2,256	1,848	81.9	
こどもの城 おまつり劇場 「こどもたちによる日本の四季」	8.10~12(3)	4	無料	1,108	423	38.2	
キリン・ファミリー劇場 「さっちゃんのヘンテコリン大冒険!」	8.25~31(7)	10	2,500	2,500	1,935	77.4	

公 演 名 称	期 間(日)	回数	料 金	総席数	入場者数	入場率	備 考
		(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
第7回青山演劇フェスティバル ～夢みつづける力1993～ プロジェクト・ナビ「いっぱんのキ」	10.5～11(7)	8	3,300(前売3,000)	1,911	1,541	80.6	
青年団「暗愚小傳」	10.12～18(7)	7	3,000(前売2,700)	2,485	1,504	60.5	
日本テレビプロデュース 「ブリズンホテル」	10.19～31(13)	14	4,200(前売4,000)	4,368	3,853	88.2	
かもねぎショット「婦人ジャンプ3 ～いつをさかりと咲く花か～」	11.1～7(7)	6	3,000(前売2,700)	1,674	1,331	79.5	
笑殺軍団リリパット・アーミー 「天下御免の馬侍～紅葉城奇談～」	11.8～14(7)	8	3,300(前売3,000) (特別プログラム1,500)	2,400	2,222	92.6	
サードステージ公演「トランス」	11.15～12.5 (21)	24	3,800	9,072	8,417	92.8	
サンタズ・トイボックス	12.10～12(3)	5	1,200	1,645	1,476	89.7	国際交流企画
ア・ラ・カルト—— 役者と音楽家のいるレストラン	12.19～26(8)	9	5,000	3,312	3,137	94.7	
第6回こどもの城・キリン・ファミリー オペレッタ「トンガリぼうしの魔法つか い ～海賊ハックのちょうせん～」	12.27～29 1.2～9(11)	13	2,500	4,563	3,882	85.1	
五線譜のなかの動物たち⑫ モーツァ ルトの音楽遊園地「ババゲーノ！」	1.13～16(4)	5	2,200	1,716	1,639	95.5	
オブジェクト・シアターVol. 3 「人形姉妹」	2.10～13(4)	5	4,000	1,360	660	48.5	
五線譜のなかの動物たち⑬ ベートー ヴェンの音楽遊園地「月光探偵団」	3.29～4.3(6)	9	2,200	1,026	858	83.6	
(小計)	17	146		44,707	37,589	84.1	
<貸し館>							
さねよしいさこ——唄と朗読の会	4.6(1)	1	4,120	402	364	90.5	
アデランス無印コントライヴSpecial	4.12(1)	1	1,800(前売1,500)	377	370	98.1	
東京ギンガ堂 「マインド・ストレンジャー」	4.13～18(6)	7	3,300(前売3,000) 中・高生割引2,000	1,785	1,462	81.9	
青空美人「アトム」	4.19～25(7)	6	一般2,800(2,500) 学生2,500(2,300)	1,640	1,391	84.8	
アニメ・フェスティバル A Story for a Song	4.26～30(5)	5	3,500	1,310	899	68.6	
COMPANY 貴明 THE・SCENE'S	5.10～12(3)	4	3,800(前売3,000)	1,172	1,004	85.7	
AOYAMAダイナマイトバレエ団公演	5.13～16(4)	6	5,000	1,764	1,198	67.9	

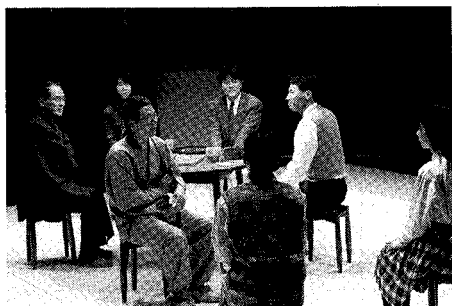
公 演 名 称	期 間(日)	回数	料 金	総席数	入場者数	入場率	備 考
		(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
シェイクスピアシアター「夏の夜の夢」	5.17～27(11)	10	3,800(前売3,500)	2,618	1,944	74.3	
シェイクスピアシアター「間違いの喜劇」	5.28～30(3)	3	3,800(前売3,500)	750	599	79.9	
青い鳥スペシャルプレゼンツ 「今日はニャンの日」	6.2～13(12)	13	4,000(前売3,800) 老人・学生3,500	3,386	2,802	82.8	
北村真実ダンススペース舞踊公演 「迷宮の扉」	6.14～16(3)	3	3,800(前売3,500)	717	475	66.2	
劇団そとばこまち「ビデオマン」	6.17～27(11)	10	3,500(前売3,300)	2,669	2,275	85.2	
Dance show-case「だんすにGONE」	7.1～4(4)	5	4,500	1,230	1,165	94.7	
劇団21世紀FOX「私の青空！」	7.5～11(7)	9	3,000 中・高生割引2,800	2,682	2,437	90.9	
劇団冒険物語「美しき野獣たちの伝説」	7.12～18(7)	8	3,500・ペア6,500	1,958	1,586	81.0	
やってきたアラマセンせい	7.20～24(5)	6	3,500(前売3,200)	1,680	1,084	64.5	
MODE「家族の肖像」シリーズ「魚の祭」	8.2～8(7)	7	S:3,500・A:3,000	2,144	1,993	93.0	
性——その演劇的アプローチII ほんとのこと教えて！	8.19～22(4)	5	大人3,000・ 子供2,500	925	458	49.5	
廖英昭モダンダンス「メランコリー」	9.4・5(2)	2	4,500(前売4,000)	492	330	67.1	
古舘伊知郎Talking Blues Vol. 6	9.6～12(7)	7	5,000	2,237	2,055	91.9	
テリーを巡る八人の男！	9.13(1)	1	5,000	344	225	65.4	
谷山浩子 101人コンサートスペシャル'93	9.16～27(12)	9	5,000	3,546	3,304	93.2	
タキオンネットワーク トリックスター 秋の祭典	10.2・3(2)	3		843	718	85.2	
シャイニイ ストッキング コンサート	10.4(1)	1		300	233	77.7	
第8回創作舞踊展	12.7～9(3)	2	5,000	486	393	80.9	
'93美歌ブランド SHOW UP Vol. 4 ジュース	12.13～15(3)	3	6,000	714	625	87.5	
三矢直生コンサート	12.17・18(2)	3	5,500(前売5,000)	804	519	64.9	
ドナインシタイン博士の世紀末学会#4 演劇発表会「イワザリー」	1.17・18(2)	1	2,800	281	201	71.5	
MOTHER#4「ジャンキースクエア」	1.19～23(5)	6	3,300(前売3,000)	2,067	1,587	76.8	
プラチナ・ペーパーズ 「ザ・中学教師'94」	1.24～30(7)	8	3,300	2,443	2,022	82.8	

公 演 名 称	期 間(日)	回数	料 金	総席数	入場者数	入場率	備 考
		(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
劇団一跡二跳「ONとOFFのセレナーデ」	1.31～2.6(7)	6	3,300(前売3,000) ペア5,800	1,304	913	70.0	
鶴瓶嘶'94冬	2.7～9(3)	3	3,090	1,107	1,026	92.7	
亀淵友香ドラマチックコンサート ムーブオーバー (ジャニスにささぐ)	2.14～15(2)	3	5,000(前売4,500)	897	571	63.7	
東京インターナショナル プレーヤーズ ビッグマリオン	2.16～20(5)	5	一般3,500・ 学生2,000	1,410	1,186	84.1	
彼女たち一次の季節ー	2.21～23(3)	4	4,500(前売4,000)	1,004	880	87.6	
日本映画学校卒業公演 盗作——味噌樽で縮んだズボン	2.24～28(5)	5	2,000	1,261	542	43.0	
東方舞台地図 天使的愛の主題による狂詩曲	3.1～6(6)	8	3,300(前売3,000) 中・高生割引2,000	1,840	1,348	73.3	
劇団☆新感線「スサノオ」	3.7～20(14)	15	4,120	4,164	3,877	93.1	
劇団冒険物語「さよならの贈り物 ——ハムレット殺人事件」	3.21～25(5)	5	3,500, ペア6,000	1,012	942	93.1	
(小計) 39		209		57,765	47,003	81.4	
<こどもの城事業部企画>							
こどもの城ファミリーフェスティバル かぐや姫	5.1～5.2(2)	5	無料	1,230	1,058	86.0	企画部
” とんとむかし	5.3(1)	3	無料	654	569	87.0	”
” おんがくがスキ!	5.4～5(2)	6	無料	1,980	1,627	82.2	”
父の日コンサート	6.28～30(3)	5	2,500	1,126	659	58.5	音楽事業部
保育セミナー	8.9(1)	1	無料	188	108	57.4	保育研究開発部
人形劇見本市 ザ・人形しばい	8.13～15(3)	9	無料	2,390	1,865	78.0	企画部
夏休みこどもフェスティバル 中国の音楽と雑技	8.16～17(2)	6	無料	1,980	1,433	72.4	音楽事業部
田島佳子「三味線のつどい」	9.15(1)	1	大人3,000・ 子供1,500	338	207	61.2	”
ぼくらのサウンド	3.26～28(3)	5	無料	1,089	982	90.2	”
(小計) 9		41		10,975	8,508	77.5	
青山山形劇場 計	65	396		113,447	93,100	80.0	
劇場総計	88	788		538,187	469,064	87.2	

平成5年度
の
劇場公演から



▲第8回青山バレエフェスティバル
(青山劇場) (撮影・小川俊一)



▲第7回青山演劇フェスティバル
青年団「暗愚小傳」(青山円形劇場)



▲第7回青山演劇フェスティバル
プロジェクト・ナビ「いっぽんのキ」
(青山円形劇場)



▲五線譜のなかの動物たち①
サティの音楽遊園地「パリのいんげん豆」
(青山円形劇場)



▲キリンファミリー劇場
「さっちゃんのヘンテコリン大冒険！」
(青山円形劇場)



▲ア・ラ・カルト「役者と音楽家のいるレストラン」
(青山円形劇場)



▲オブジェクト・シアターvol. 3「人形姉妹」
(青山円形劇場)

(2) 劇場事業本部の活動

1) 本年度のまとめ

慢性的な景気低迷が続く中、劇場の運営面でもしだいにその景気低迷による影響が強くなり始めた。1つは貸し劇場面での100%フル稼動にかげりができたこと、そして自主公演における企業のメセナ支援の減少と、公的助成機関の助成金額の減少などだ。このように困難な現象に当面する中で、その打開策を探りながら、自主公演や劇場経営の質・量の維持・充実に努めた年度であった。

〈自主公演の本数と日数〉

		平成3年度	平成4年度	平成5年度
青山劇場	本数	2本	1本	1本
	日数	12日	4日	3日
青山円形劇場	本数	22本	17本	16本
	日数	132日	102日	140日

〈本年度の共催・助成・協賛などの実績〉

【青山劇場】

- ①第8回青山バレエフェスティバル＝芸術文化振興基金（助成）

【青山円形劇場】

- ①ファミリーランドの宝物＝ファミリア（協賛）
 ②五線譜のなかの動物たち 11・12＝芸術文化振興基金（助成）
 ③第8回こどもの城・キリンファミリー劇場「さっちゃんのヘンテコリン大冒険！」＝キリン記念財団（共催）
 ④第7回青山演劇フェスティバル＝日本テレビ（共催）
 ⑤サンタズ・トイボックス＝松下電器（協賛）
 ⑥ア・ラ・カルト－役者と音楽家のいるレストラン＝キリンビール（協賛）
 ⑦第6回こどもの城・キリンファミリーオペレッタ「トンガリぼうしの魔法つかい」＝キリン記念財団（共催）

以上のように、青山劇場の自主公演はこれまでの企業による支援も望めなくなり、芸術文化振興基金の助成によって日数をさらに減少して実施した。この芸術文化振興基金も、民間の芸術文化への支援が減少するにつれて申請者が増

え、その分、各団体やアーティストへの助成額が減っているようである。

また、青山円形劇場における自主公演は継続して支援してくれている企業は減りこそしなかったが、新しい支援企業の獲得という目的は本年度も達成することができなかった。こちらでもやはり公的助成機関である芸術文化振興基金への申請が増える傾向にある。

企業による支援も難しくなり、公的助成金も目減りしている中、私たちは何をなすべきか？ 劇場事業における自主公演のあるべき姿などを、開館10周年を控え再検討しなければならないが、それらへの問題提起は後段に述べる。

2) 本年度の主な演目

(ア) 青山劇場

(1) 「第8回青山バレエフェスティバル～プティパ175～」

今年の青山バレエフェスティバルは、バレエ芸術に輝く金字塔を打ち立てた偉大な振付家マリウス・プティパの生誕175年に当たり、プティパに捧げる企画とした。我が国にクラシック・バレエが興った時から現在まで、ほとんど毎日のように全国どこかで踊られているといっても過言ではないマリウス・プティパの作品の意義を考え、鑑賞することが目的のこの公演は、ロシアから招いた元ボリショイバレエ団のプリンシパル、ニコライ・フョードロフ氏の卓抜な構成・振付によって大好評を博した。また、プティパの我が国においての初演作品なども紹介されて、その上演意義は大きなものがあった。

(イ) 青山円形劇場

(1) 「五線譜のなかの動物たち 11～13」

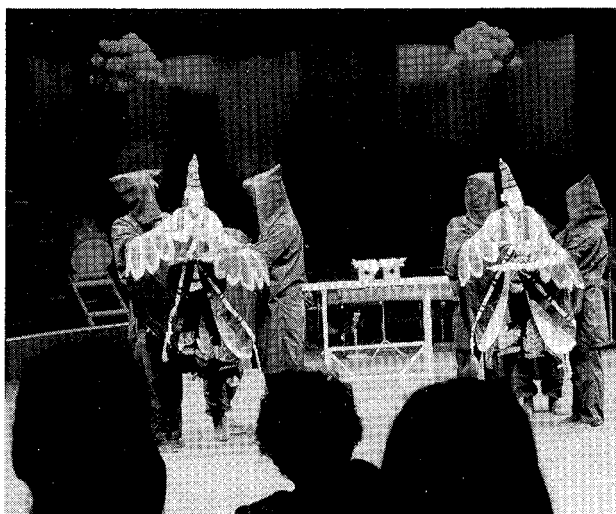
クラシック音楽の中から動物や虫や鳥を描いた曲を集めてお芝居仕立てに構成したファミリーコンサートシリーズ。前年度、ファールブル、ライト兄弟、ショパンと続けた伝記ふう音楽物語の手法を離れ、「音楽遊園地」と銘打った新手法で年3回の公演を展開させた。出演者も、従来のピアニストと役者の2人にクラウン(道化)、オペラ歌手、フルート奏者を加えて変化をもたせたことがシリーズの活性化につながった。

シリーズ第11弾は、エリック・サティの曲を中心に構成した「サティの音楽遊園地——パリのいんげん豆——」。クラウンの白井博之が加わって軽妙な舞台となり好評を博した。なおこの作品は、石川県主催「'93動物フェア」に招かれ、金沢市の石川県立中央児童会館でも上演した。

シリーズ第12弾は、オペラ「魔笛」に登場する“鳥さしパパゲーノ”を題材に構成した「モーツァルトの音楽遊園地——パパゲーノ！——」。バリトン歌手の山本隆則、クラウンの児玉順子を加えてオペラ仕立てに構成した内容が好評を博した。

シリーズ第13弾は「ベートーヴェンの音楽遊園地——月光探偵団——」。ピアニスト、役者、2人の道化に加えフルート奏者の齊藤佐智江が加わり、曲目編成に大きな変化を持たせることができた観客に喜ばれた。

(2)「こどもの城・おまつり劇場'93——こどもたちによる日本の四季——」



▲相模人形芝居を演ずる厚木東高校のみなさん

日本の伝統芸能や郷土芸能を伝承する子どもたちの活動を紹介するとともに、〔こどもの城〕の三味線グループや和太鼓グループとの交流・交歓を目的とした夏恒例の企画で、今年は標題のように日本舞踊、わらべうた、邦楽などに描かれた日本の四季、風俗、自然を紹介した。

郷土芸能のゲストとしては、相模人形芝居を伝承する神奈川県立厚木東高校人形浄瑠璃部と沖縄の芸能を伝承する川崎沖縄芸能保存会の2団体が来演し、それらに初めて接した子どもたちを喜ばせた。

(3)第8回こどもの城・キリンファミリー劇場「さっちゃんのヘンテコリン大冒険！」

宮澤賢治の「猫の事務所」を題材に、劇団青い鳥が自分たちの感性を巧みに織り込みながら“さっちゃん”という5歳の女の子を主人公にした冒険物語を創作した。子どもは話の展開の軽快さと舞台装置の巧みな仕掛けに目をみはり、大人は忘れかけていた大切なコトを思い起こし、どの年齢層にもそれぞれ心に残る作品となった。

(4)「第7回青山演劇フェスティバル～夢みつづける力1993～」

今年の青山演劇フェスティバルは、開局40年記念の日本テレビとの共催で行われ、期間は例年の2倍、2か月とし、テーマは昨年の続編として＜夢みつづける力＞とした。

今まであまり考えられなかった小劇場系演劇とテレビ局という組み合わせは、何百人から何千人という単位を相手にする小劇場の表現と何百万人という単位を相手にするマスメディアとの接点を探す作業でもあったが、日本テレビ側の「いいものであればメディアの違う表現も応援したい」という共催の基本姿勢に支えられて、内容的にも経済的にも成功を収めた。上演6作品は次のとおり。

■プロジェクト・ナビ「いっぽんのキ」

舞台上にある1本の木の下で繰り広げられる不条理、サスペンス、ほのぼの話など5話のオムニバス。またこの公演のうち、1公演を例年行っている「こどもの城マタニティ・コンサート」のバリエーションとして「こどもの城・マタニティ・シアター」と銘打って開催し、新しい試みとして注目された。作・演出＝北村想。

■青年団「暗愚小傳」

高村光太郎と智恵子の、1910年代から40年代までの4つの時代の日常を描き、それぞれの時代で変わっていくものと変わらずにあるものを浮き彫りにして感動を呼んだ。作・演出＝平田オリザ。

■日本テレビプロデュース「プリズンホテル」

日本テレビのさまざまなセクションで活躍する若手たちがプロデュースした作品で、任侠＋ハードボイルドふうのエンターテインメント色の濃い舞台は観客を楽しませた。原作＝浅田次郎／構成・演出＝鈴木勝秀。

■かもねぎショット「婦人ジャンプ3～いつをさかりと咲く花か～」

職場や家庭の中で生きる女性の姿を、女性ならではの視点で描いて定評のあるかもねぎショットの新作で、演劇とダンスの境界線的な作風は注目を集めた。作＝かもねぎショット／演出＝伊藤多恵。

■笑殺軍団リリパット・アーミー「天下御免の馬侍～紅葉城奇談～」

大阪で活躍中の異色文化人たちが納得のいく“お笑い”を求めて結成したリリパット・アーミーの新作。時代劇のお家騒動を舞台に、歌あり、ダンスありのにぎやかな舞台となった。作・演出＝わかぎえふ。

■サードステージ公演「トランス」

今ふうのギャグを多用しながら、若者の感覚と心にシリアスに迫っていく手法で人気がある劇団第三舞台の作・演出家、鴻上尚史が3人だけの役者を使ったプロデュース公演。現代人の抱える孤独や病の問題を追求した話題作であった。作・演出＝鴻上尚史。

(5)「ア・ラ・カルト——役者と音楽家のいるレストラン」

クリスマス企画として定着した人気公演。内容はマイナー・チェンジを行いながらも例年どおり、あるレストランの楽しい一日と人間模様を、演劇と音楽が融合したエンターテインメント・ショーのスタイルで描く。出演は、遊●機械／全自動シアターの高泉淳子と白井晃、バイオリニストの中西俊博で、大阪・近鉄アート館でも公演。

(6)第6回こどもの城・キリンファミリーオペレッタ「トンガリぼうしの魔法つかい～海賊ハックのちょうせん」

〔こどもの城〕のスタッフで作る正月恒例の人気オリジナル・ファミリーオ

ペレット。魔法使いのプリンさんとその仲間たちの活躍を通して＜素直な気持ちと勇気を持つことの大切さ＞を描いたもので、映像、レーザーも加わったファンタスティックな舞台は、歌と踊りもあいまって楽しく夢いっぱいの舞台が展開された。



(7)オブジェクトシアター ▲「トンガリぼうしの魔法つかい～海賊ハックのちょうせん」
VOL. 3「人形姉妹」

大人の鑑賞にも耐えうる斬新な人形劇の開発を目指すオブジェクトシアターの第3弾は、常磐津の舞踊劇＜戻橋＞を組み入れ、人形と人間が錯そうする独自の世界をつくりだした。動員において苦戦したが、新しい人形劇支持の輪を広げるためには、公的助成や企業協賛獲得は不可欠で、そのためにも不断のPRの必要性を感じた。作＝富岡多恵子 演出＝遠藤啄郎。

3) 今後の課題

劇場が単に“ハコ”ではなく文化事業機関であるために不可欠な自主企画の先細りを防ぐためにも、外部資金の導入ということが前年の年報で課題としてあげられたが、この1年間の実績としては前年度から減りこそしないまでも決して増えてはいない。これは冒頭にあげたように景気の低迷に大きな要因があるが、ある見方からすれば、文化芸術に対する企業協賛や協力は見せかけの好景気に支えられていただけであって、現状が平常というように視点を変えねばならないであろう。その上に立ってどのような課題に取り組まなければならないか？ 幾つかの提起をしてみたい。

(1)ソフトの再演

青山円形劇場での自主事業の多くは、シリーズものが多く、そのために毎年新作を提供している。各作品ともファミリーを中心に多くの観客に支えられ内容の面でも年々評価が高くなってきているが、仕込経費もそれにつれて増えてきている。このように評価の高い作品が1回限りで倉庫に眠らせてしまうのはもったいなく、リメイクを含めた再演を考えるべきである。

(2)ソフトの巡演

前にあげた再演と同時に、これらのソフトを積極的に地域の文化施設に売り込むこと。これは既に＜ア・ラ・カルト＞＜五線譜のなかの動物たち＞などが

実施していることだが、もっと組織的なPRやプロモーションキットの準備などが必要になってくるであろう。

(3)文化事業機関のネットワーク作りと共同制作

全国に300席以上の劇場が1,700館以上あると言われているが、それぞれが文化事業機関たるようにさまざまな企画を生み出している。しかし、抱える問題はいずれも同じで、ソフト作りの経費難である。これは早急にできることではないが、国などが提唱している〈地域のステージ作り運動〉などと連動して、ソフトを共同で作るとか共同で仕入れるとかの方法も考えるべきであろう。

21世紀を間近にした今、文化芸術は各文化事業機関が点として展開していくのではなく面や線であるような展開をしていかなければならないであろう。そしてこれからの文化事業機関は公演などの事業だけではなく、いかに芸術が社会とかかわっているかとか、芸術への理解と共感を培うような活動をも考えていかねばならない。文化事業とはこのようなArts in Educationも活動として行わなければならないし、そうすることによって将来の観客獲得にもつながるのだから。

III 各部の活動(2)

1	広報部	161
2	研修教養部	167
3	国際交流部	177
4	営業部	182

1 広報部

(1) 5年度の活動

〔こどもの城〕を一言で説明することは難しい。新生児から高校生までの全児童を対象にしていること、幅広い文化と福祉活動を行っていること、他に例を見ない施設であることなど、活動範囲が広すぎて一言で表すのが困難なく総合施設だからである。体育、造形、プレイ、音楽、AV、保育、小児保健、劇場などさまざまな＜木＞が集まって〔こどもの城〕という＜森＞を作っているのだが、しばしば「木を見て森を見ず」になってしまう。

より多くの人に〔こどもの城〕を理解し、支援してもらうためには、1本1本の＜木＞と同時に全体の＜森＞も見てもらわなければならない。また、＜森＞だけでなく、それを構成する1本1本の＜木＞も見てもらわなければならない。＜木＞と＜森＞の両方をバランス良く、多くの人に伝えることが広報部の基本的な役割だと考えている。

昭和60年11月に開館して以来、他に例を見ない施設であるということから、無我夢中でさまざまな部門でさまざまな活動してきた。開館前に考えていた＜森＞と、開館してからの＜森＞と一致するところもあれば、違うところもある。それらを踏まえて、今の、そしてこれからの＜森＞を作り上げていく時の「橋渡し」をするのが広報部ではなかろうかと考えている。まさに、Public Relations (PR) である。

広報部では〔こどもの城〕をより多くの人に理解してもらうために、『こどもの城ニュース』や『児童手当』などの定期刊行物と『事業年報』の編集・発行のほか、新聞・雑誌などの各種媒体への情報提供と広告の掲載、特別期間のちらし・ポスターなどの制作を行っている。

1) 機関紙・誌の編集と発行

年6回発行の『こどもの城ニュース』（ランケット判2ページの新聞スタイル）と『児童手当』（B5判16ページ。年4回カラー4ページ追加）の2つの活字媒体を編集・発行している。主な配付先は別記のとおりで、『こどもの城ニュース』がこどもの城の利用者など一般向け、『児童手当』が児童館などを含む行政機関向けと読者対象を区別している。

(ア) 『こどもの城ニュース』の編集・発行

隔月（偶数月）で発行しているもので、1面が4色（カラー）、2面が1色印刷。第47号は夏休みのため、1か月繰り上げて発行。来館者も多い時期なので、通常より1万部増刷している。平成6年2月15日号で通巻50号を数えるに至った。

〔こどもの城〕では、小さなものから大きなものまで毎日さまざまなプログラムが行われている。そこには、プログラムを考えるスタッフの苦心、参加した子どもたちの反応などさまざまなドラマがある。このようなドラマにスポットライトを当てて、多くの人に伝えていくという積み重ねが、〈関係=Relation〉を広げるのに役立つのではなかろうか。

広報部として刊行物を作る意味は、単なる情報の伝達だけではなく、情報を伝えることによって新たな〈関係=Relation〉を生じさせることにあると思う。

しかし、限られたスタッフ、限られた時間、限られた予算の中で作業していくには、難しい問題も少なくない。各事業部との関係を密接にするなど、協体制作りを考えていかなければならないだろう。

各号の主な内容は以下のとおり。

	発 行 日	内 容	発行部数
第45号	平成5年4月15日	夢と冒険のメルヘンアスレチック誕生	25,000部
第46号	平成5年6月15日	こどもの数だけ夢がある	25,000部
第47号	平成5年7月15日	どろんこアート〈土と造形〉	35,000部
第48号	平成5年10月15日	ちょっと変わったドッジボール	25,000部
第49号	平成5年12月15日	元気に遊ぶお正月 たこVSこま	25,000部
第50号	平成6年2月15日	ぼくが わたしが アニメを作った！？	25,000部

※第47号は、夏休みのため発行を1か月繰り上げた。

【こどもの城ニュースの主な配付先】

ネットワーク会員……………4,380部
 こどもの城友の会会員……………約3,800部
 都道府県民生部（全国57か所）……………1,150部
 保育園、幼稚園、小学校、中学校（渋谷区、港区）……………438部（219件×2部）
 渋谷町会、渋谷区ボーイスカウト、ガールスカウトほか…284部（142件×2部）
 その他（一般入館者、招待者、視察・見学者等）…約15,000部

(イ) 『児童手当』の編集・発行

『児童手当』は、発行が日本児童手当協会（こどもの城）、監修が厚生省児童家庭局。B4判16ページで、表紙はカラー印刷。年4回「ネットワーク」のページが差し込まれ、カラー4ページが増える。「ネットワーク」のページは6月、

9月、12月、3月の各月にこどもの城全国連絡協議会機関誌のページとして作られているもの

平成4年度の『児童手当』の主な内容は下記のとおり。

平成5年 4月号	児童手当	No.23-1	子どもの水の事故「全国調査」についてほか
	こどもの城	No.62	産休サンキューと言ってもおられずほか
平成5年 5月号	児童手当	No.23-2	子どもの遊びと住環境ほか
	こどもの城	No.63	「ついでに見る人形劇」の成功ほか
平成5年 6月号	児童手当	No.23-3	新しい時代の社会保障ほか
	ネットワーク	No.34	理屈ぬきで〈音楽〉を楽しむ
平成5年 7月号	児童手当	No.23-4	新しい時代の福祉施設ほか
	こどもの城	No.64	子どもの〈遊び〉空間と遊具
平成5年 8月号	児童手当	No.23-5	少子化時代の子育て支援ほか
	こどもの城	No.65	まず“ねらい”を明確に!!〈保育とビデオ〉
平成5年 9月号	児童手当	No.23-6	子どもの健全育成と児童館ほか
	ネットワーク	No.35	大切な「プレ・キャンプ」ほか
平成5年 10月号	児童手当	No.23-7	保育行政の現状と展望ほか
	こどもの城	No.66	心に残る映画上映の場を
平成5年 11月号	児童手当	No.23-8	子どもの生み方はどう変わったかほか
	こどもの城	No.67	保育クラブ「青空プレイ大会」ほか
平成5年 12月号	児童手当	No.23-9	「国際家族年」についてほか
	ネットワーク	No.36	8回目を迎えた「造形スタジオ展」ほか
平成6年 1月号	児童手当	No.23-10	ボランティアの新しいうねりほか
	こどもの城	No.68	フライング・ディスクを楽しむ
平成6年 2月号	児童手当	No.23-11	「保育問題検討会報告書」についてほか
	こどもの城	No.69	みんなに伝えたい遊び—お正月の遊び大集合
平成6年 3月号	児童手当	No.23-12	漫画は子どもの活字離れ対策の切り札になりうるかほか
	ネットワーク	No.37	児童厚生員等実技指導講習会

【主な配付先】

都道府県市町村 ……3,760部 関係省庁等 ……251部 その他……401部
社会保険事務所 …… 287部 関係各団体 ……151部

(ウ) その他

定期刊行物のほかにも、パンフレットやちらし、『事業年報』などの印刷物の制作も行った。作成した印刷物は下記のとおり。

「こどもの城のご案内」(和文、英文)のように、現在使用しているものをそのまま増刷したものもあれば、「平成6年度講座一覧」のようにスタイルを一新して制作したものもある。

講座・クラブ一覧は、事業部別に整理していたものを対象

年齢別に整理しなおした。また、新聞折り込み広告の実施に併せて、折り込みしやすい形式(タブロイド版)を採用し制作コストなどを下げる工夫をした。

その他各種チラシ類は、夏休みなどの催物案内や講座・クラブの募集案内など。特別期間や募集時期に合わせて制作した。



名 称	発行部数	内 容
平成4年度事業年報	1,300部	4年度の〔こどもの城〕の活動記録 (B5, 222ページ)
平成6年度講座一覧	100,000部	6年度全講座・クラブの案内 (タブロイド判, 4ページ)
こどもの城の案内(和文)	250,000部	〔こどもの城〕の館内案内
〃(和文)	10,000部	〔こどもの城〕の館内案内の英語版
その他(各種チラシ)	約80,000部	GW, 夏休み, 冬休み, 春休みなどのチラシ (日本語・英語)

2) 宣伝・広告関係

経費削減に伴い、必要最小限の広告を行うにとどめた。限られた予算で有効な広告活動を行うには、専門的な知識が要求されるが、広告代理店などと相談

しながら実施した。特に、6年度の講座・クラブ受講生募集に際しては、近隣地域に新聞折り込みを行うなど新しい試みを行った。

(ア) 新聞等

夏休み特別期間の催し物の案内と、平成6年度第1期の講座・クラブ受講生募集を中心に、新聞広告を以下のとおり実施した。

掲 載 紙	掲載形式	掲 載 日 時	掲 載 内 容
世界日報 朝日小学生新聞 毎日小学生新聞 毎日新聞 東京新聞 読売新聞 朝日新聞	半5段 " タブロイド3段 半5段 全5段 半5段 "	平成5年7月14日 " " 16日 " " " " " " " " " " " " " " 17日	夏休み特別期間 の催し物案内
東京新聞 朝日小学生新聞	全5段 "	平成5年12月22日 " " 26日	冬休み特別期間 の催し物案内
朝日新聞 読売新聞 東京新聞 朝日小学生新聞	全7段 全5段 半5段 " 全5段 " 半5段	平成6年2月14日(都心・南部・西部) " " 19日(南部) " " 10日(西部) " " 15日(北部) " " 14日 " " 15日 " " 18日	平成6年度第1 期講座・クラブ 受講生募集
毎日小学生新聞	タブロイド3段 1/2	平成6年3月18日	春休み特別期間 の催し物案内

(イ) その他

講座・クラブの受講生の居住地をみると、その多くは港区、渋谷区、目黒区、世田谷区、新宿区などの近隣地域。日常の生活圏内(買い物、通学、勤務など)に〔こどもの城〕が含まれるであろう地域といえる。それ以外の地域から、講座・クラブのために、〔こどもの城〕を利用する人は数少ない。そこで、初めての試みとして、これらの地域を中心に、講座・クラブの受講者募集の折り込み広告を実施した。

折り込み広告は、経費の都合で読売新聞と毎日新聞の購読者(渋谷区、目黒区、世田谷区、港区、新宿区の一部)を対象に、約70,000部配付した。折り込み広告を行った当日やその翌日には、電話での問い合わせも多数あり、効果的な宣伝を行うことができた。

3) 取材関係

開館当初に比べると、年々取材件数が減少している(前年比13件減の159件)。「目新しさ」がなくなってきたと同時に、類似の情報が増えたことが原因と考えられる。メディアのパイの大きさは変わらないので、必然的に取り上げられる機会が少なくなる。

しかし、デイリーなメディア(新聞等)での取材は少なくなっているが、ミニコミや単発の雑誌(特に、子どもや若い家族を対象としたもの)の取材は、さほど減少していない。「こどもびあ」などの<子ども>をキーワードにした情報誌の増加、学校5日制に伴う小・中学生のための施設の紹介など、的を絞った取材になっているのが目につく。こどもの城という施設全般の取り上げ方から、子ども向けの特徴ある施設としての取り上げ方に変わってきているような気がする。

取材を受けた媒体には、定期的に催し物の情報などを送るようにしている。宣伝(広報)予算の限られている〔こどもの城〕のような施設にあって、取材＝パブリシティーというのは大切なこと。各媒体と良好な関係を保っていけるように努力していきたい。

4) その他

(ア) 渋谷スタンプラリー

夏休みには恒例となった「渋谷スタンプラリー」に参加した。今年が10回目。参加施設は「こどもの城」「NHK展示プラザ」「電力館」「たばこと塩の博物館」「東京都児童会館」「五島プラネタリウム」の6館。約1万人が参加した。

このスタンプラリーは、渋谷周辺にある各館が共同して施設の存在と活動をPRすることを目的としている。<点>ではなく<面>でPRするところが大きな特徴といえる。また、NHK展示プラザのように各館のポスターを常時掲示してくれる所もあるなど、相互のネットワークも生まれつつある。

2 研修教養部

(1) 5 年度活動一覧

1) ボランティア関係の活動

〈平常期間の活動〉

名 称	期 間	備 考
手足の不自由な子どものスイミング (体育)	土曜日 17:00～18:00	ハンディキャップを持つ子どもたちを対象とする活動。定期的に活動しているボランティアが増えているので、マンツーマンで指導補助ができるようになった。
体育室の活動 (体育)	日曜日 14:00～17:00	本年度から、日曜日の体育室プログラムへボランティアが定期的にかかわるようになった。週替わりで実施されるニューススポーツゲームの審判やチームリーダーが役割。
おはなし紙しばいの集い (プレイ)	火曜日 15:00～15:30	5年以上続けている女性ボランティアに、新しい期のボランティアが加わり定期的に活動している。紙芝居の持つ温かさを伝えることを目的としている。
おはなし人形広場 (プレイ)	水曜日 15:00～15:30	女性ボランティアの人形劇・影絵グループと青年ボランティアのパネルシアターグループが週替わりで公演。毎週の練習も欠かさず、充実した活動を展開している。
おりがみ遊び広場 (プレイ)	木曜日 14:00～15:00	女性ボランティアと青年ボランティアで1つのグループを形成する数少ない活動。そのことが効果をあげ、子どもたちのみならず保護者にも人気が高い。
マックロー人形劇場	第3土曜日 15:00～15:30	〔こどもの城〕のキャラクター“マックローとその仲間たち”が繰り広げる人形劇を中心に公演をしている。子どもたちは毎回マックローの大冒険を楽しみにしている。
キッズクラブ (プレイ)	隔週土曜日 15:00～17:00	小学校低学年30人の遊びのクラブ。ボランティアは、グループワーカーとしての視点からプログラムの立案・準備にもかかわっている。
ユースクラブ (プレイ)	隔週日曜日 13:30～15:30	小学校高学年から中学生までの40人が対象。グループリーダーとしてのボランティアは、思春期の子どもたちにとって“モデル”的な大きな存在となっている。

▶ 青年ボランティアの人形劇グループが演じる「マックロー人形劇場」はちびっ子たちに大人気



名 称	期 間	備 考
絵本のよみかたり	日曜日 15:00～15:30	プレイホールまたは保育室IIで、幼児を対象に絵本の集いを実施。絵本を媒介に、子どもたちとコミュニケーションをとることを目標にしている。
さよならのつどい	日曜日 16:00～	その日〔こどもの城〕で遊んだ子どもたちとボランティアが集まり、じゃんけんゲームやダンス、時には「だるまさんがころんだ」などで遊ぶ。
プラモデル模型工作教室（プレイ）	日曜日 10:00～12:00	1学期だけで終了したプログラムだが、子どもたちに工作の指導、援助をしながら、完成した時の喜びを分かち合った。
造形スタジオの活動（造形）	土曜日 10:00～17:30	美術を専攻しているボランティア1人が、一般米館プログラムの準備と指導補助の活動をしている。
木ようワンダーランド（音楽）	木曜日 16:00～16:30	手遊び中心のプログラムを実施していたが、参加者の低年齢のため運営が難しく、現在は音楽のスタッフが運営する“サンバ”のリズム遊びの補助をするようになった。
楽器で遊ぼう（音楽）	金曜日 15:00～15:30	6人の女性ボランティアが定期的に活動。音楽のスタッフと一緒に“サンバ”を素材としたリズム遊びのプログラムを運営している。
手作り人形	木曜日 11:00～15:00	女性ボランティアのグループが、週に1度集まり、プレイホールの抱き人形や、保育の廊下のタペストリー（壁掛け）を制作している。

※（ ）は主催事業部

＜特別期間の活動＞

名 称	期 間	備 考
＜春休み＞ 春休みチャレンジゲーム大会～ポカポカビョンビョン～	3.27～4.4 11:00～16:00 (受け付け)	「春」をテーマに実施したチャレンジゲーム大会。会場は屋上ふしぎが丘。今年は、雨天のため館内で実施した日も多かったが、企画の段階から天候のことを考慮していたので、参加者も十分楽しんだ様子であった。
＜児童福祉週間＞ キャッスルファイト～五龍大武闘大会～（プレイ）	4.29～5.5 11:00～16:00 (受け付け)	子ども同士がさまざまな種類のじゃんけんに勝ち進みながら、手持ちのカードのレベルを上げ、伝統ある武闘大会に出場する、というのが目標。運営するボランティアが“劇遊び”の世界に入り込めるか否かにかかっている。屋上ふしぎが丘で開催。
＜ 〃 ＞ マックロー人形劇場	5.3～5 ①13:00 ②15:00	5月5日はマック・マックローの誕生日ということから、毎年この時期に「マックロー人形劇場」（場所は保育室I）の公演を行っている。マックローは、幼児を中心に子どもたちに大人気であった。また、5月5日には、ボランティア人形劇グループのメンバーが、マックローの着ぐるみを着て館内のグリーティングも実施した。
＜夏休み＞ ウォーターアドベンチャー'93～水の魔神をやっつけろ～	8.14～22 11:00～16:00 (受け付け)	屋上ふしぎが丘を使って、5人程度のグループを組んだ子どもたちが、水鉄砲と盾を駆使して、数々の難関を突破しながら大敵「水の魔神」を倒すというストーリーのもとに実施。ボランティアは、魔神の手下、子どもたちを率いる隊長、魔神の宮殿の門番などの役割を演じながら、子どもたちとともにずぶぬれになった。天候不順で中止した日が多かったのが残念であった。
＜開館記念＞ グーチョキパークへようこそ	10.30・31, 11.3 11:00～16:00 (受け付け)	今年大流行した「恐竜ブーム」をいち早く取り入れ、恒例のチャレンジ・ゲーム大会を「恐竜のテーマパークを巡る」という設定にして、実施した。ゲームの素材は「じゃんけん」だったため、だれにでも取り組みやすく、子どもたちだけでなく、大人までもが一緒に参加していたのが印象深かった。場所は屋上ふしぎが丘。
＜ 〃 ＞ あそびのおもちゃばこ	11.21・23 ①11:00 ②13:00 ③15:00	人形劇、影絵、紙芝居、パネルシアター、音楽、絵本のグループの合同公演を実施した。公演のみならず合間の時間には、手袋で作る簡単な人形で遊ぶワークショップを運営した。日常一緒に活動する機会が少ないので、ボランティアにとってお互いによる経験となった。フリーホールで開催。

名 称	期 間	備 考
〈冬休み〉 お正月あそび (プレイ)	1.3~9 11:00~16:00 (受け付け)	プレイホール内で「かるた」「福笑い」「けん玉」、屋上ふしぎが丘で「こま」を実施。混雑の様子を見計らって、さまざまな遊びを展開した。
く 〃 〉 紙相撲初場所 '94	1.4~9 11:00~16:00 (受け付け)	毎年恒例となったこの行事は、村杉紙相撲道場の村杉輝治氏の協力で行われている。自分で力士を作りけいこを積み、みごと大関になった力士は「横綱決定トーナメント」の出場権を握る。トーナメントは全館放送されることもあり、緊迫した雰囲気が流れた。伝統文化「紙相撲」を大切に伝えていきたいと実感した。音楽スタジオB。
〈春休み〉 チャレンジ・ザ・ 大相撲	3.26~30 11:00~16:00 (受け付け)	「年齢や体力差に関係なく、だれもが楽しめるゲーム」をモットーに企画している「チャレンジ・ゲーム大会」。今回は、「呼びだし」「塩まき」「チャンコなべ」など、「大相撲」にちなんだゲームを考案した。チャレンジカードを5枚集めた「スーパー横綱」も誕生し、充実したプログラムとなった。屋上ふしぎが丘。

〈L. I. T. の活動〉

名 称	日	時	備 考
年間計画立案 ※昨年度からの継続者	4.18	11:00~16:00	高校2・3年生が中心となり、本年度のプログラムを計画。新入生の受け入れについても話し合った。
開講式、個人面接	5.9	13:00~16:00	新規・継続者を含め、面接。活動に対する熱意、期待が感じられた。
全国一斉ウオークラリー 大会出場	5.16	10:00~14:00	参加者2人。試験と重なったためか、参加者が少なかった。しかし、優勝した。浜町公園会場（東京都中央区）。
夏の活動ミーティング	6.6	13:00~17:00	夏の活動の説明。小グループに分かれグループワークトレーニング。
夏合宿	7.10・11		夏の活動に向けて、L.I.T.としての心構えを再確認をする意味で、野外活動の修得と話し合いを実施。千葉県・小林牧場。
ジュニア・アウトドア・ スクール	8.4~10		10人が参加。本部と班活動の補助を2グループに分かれ行う。群馬県鹿沢国民休暇村
ウォーターアドベンチャー のオリエンテーション	8.13	10:00~12:00	【こどもの城】でのボランティア活動を体験する目的で参加。事前に活動内容の説明会を実施。
ウォーター・ アドベンチャー	8.14~22	11:00~16:00	毎日平均10人が参加。日ごろ接することのできない小さな子どもたちのめんどろをみる活動にとっても興味をもって意欲的に参加していた。
夏休みの活動反省	9.19	14:00~17:00	夏休みに各々が参加した活動について1人ずつ発表した。
冬休みの活動計画①	10.31	13:00~16:00	12月に予定している館内でのプログラム活動の計画を始めた。「作って遊べるもの」を予定。
冬休みの活動計画②	11.21	13:00~16:00	ワークショップ「すすめ！カタ郎」を企画。おもちゃを作り、遊ぶ行事に決定した。
冬休みの活動準備	12.11・12, 14・15 13:00~16:00 (11日のみ 10:30~16:00)		ポスター作り、材料の買い出し、準備を行った。人数が少なく、仲間同士の呼びかけがひんぱんになされた。
冬休みの活動	12.18・19, 23 11:00~15:30 (18日のみ11:00~15:30)		プレイホールを借用して、「すすめ！カタ郎」を実施。小さな子どもたちに説明したり、一緒に遊ぶ活動に1人1人役割分担しながら、自分たちで運営をしていた。

名 称	日 時	備 考
冬合宿	1.29～30	「座禅」の体験と、1年間L.I.T.活動を静かに振り返るひとときとなった。埼玉県・高福寺で参禅。
来年度の計画①	2.6 13:00～17:00	1年間を振り返り、自分たちの活動の停滞や、仲間同士の関係について何度も話し合いがされた。
来年度の計画②	2.11 13:00～17:00	来年実施したい活動について意見交換をした。
来年度の計画③	3.21 13:00～17:00	新入生を迎えるに当たり、自分たちの活動についてどう説明をしていくかが話し合われた。

<ボランティア講習会>

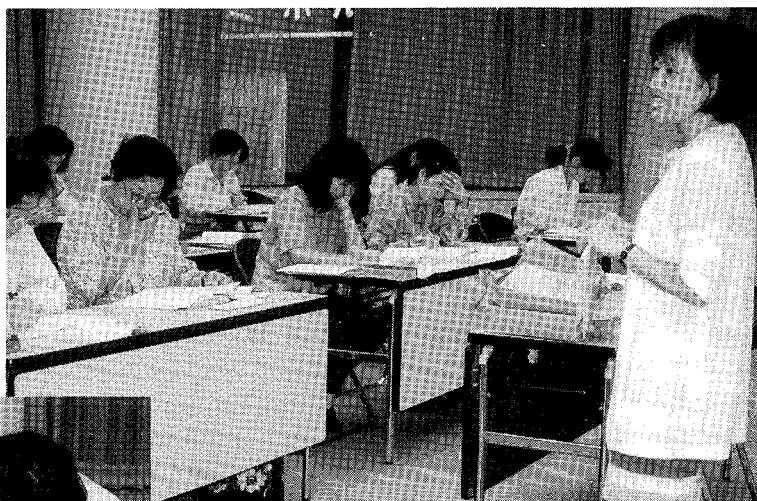
名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
第27期 ボランティア 講習会	(人) 18歳以上 (50)	(人) 48	5.29～6.24 18:00～20:30 (6.11～13宿泊研修)	講習会修了後すぐに実施された野外活動に多数が参加を希望。同時に、夏休みの大型プログラムにも、企画の段階から積極的に参加した。宿泊研修は千葉県・市川市少年自然の家で実施。
第28期 "	18歳以上 (50)	48	11.6～12.2 18:00～20:30 (11.26～28宿泊研修)	第28期の特徴としては、受講生の半数以上が社会人であったこと。社会人の、ボランティア活動への関心の高さがうかがわれた。宿泊研修は千葉県・市川市少年自然の家で実施。
第29期 "	18歳以上 (50)	54	2.5～2.26 18:00～20:30 (2.18～20宿泊研修)	来年度進学予定の高校3年生も4人参加。学生が多かったためか、活発な意見交換がなされた。修了後すぐに「こどもの城」のさまざまな活動に溶け込んでいった。宿泊研修は千葉県・市川市少年自然の家で実施。
第9期女性 "	女性 (20)	12	10.8～14・15・19 14:00～16:00	既に地域などでボランティア活動をしている人が、活動の場を拡大すべく受講しているケースが多く見受けられた。また、20代の若い世代の女性ボランティアが増えてきている。

<ボランティアグレードアップ講習会>

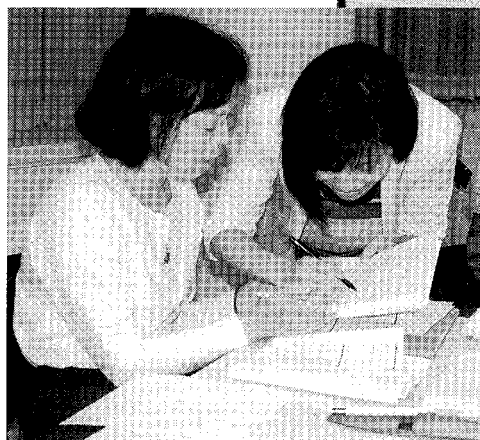
名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
日本赤十字社 救急法短期講習会	(人) 職員・ボラ ンティア (30)	(人) 67	6.27・29 18:00～20:30	短期講習なので、三角市などの実技を中心にして実施した。理論講習では、特に子どもの傷害やそれに対応するための応急処置にスポットを当てた。講師は日本赤十字社救急法指導員。
野外活動講習会	野外活動に 参加するボラ ンティア (20)	36	6.17～7.11 18:00～20:30 (7.9～11宿泊研修)	講義は「こどもの城とキャンプ」「キャンプカウンセラーと子どもたち」「キャンプ生活とプログラム」の内容で実施。宿泊研修（千葉県・小林牧場キャンプ場）では、キャンプ生活で必要な技術を中心とした実技講習や自然をテーマとしたプログラムの企画・実施などを行った。
スキー講習会	スキーキャン プに参加 するボラン ティア(10)	15	2.23 オリエンテー ション 18:30～20:30 3.6・7 実習	実習は、スキーの個人的な技術の向上および、スキーの指導体系の把握を目的にして新潟県ファースト石打スキー場で実施。そのほかに、「キャンプカウンセラーの役割」などの講義を実施。

2) 講座・クラブ

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
手話講座（前期）	(人) 高校生以上 (30)	(人) 30	火曜日 18:30～20:00	4月から7月までの4か月間、全15回の講座。講師は(社福)トット文化館貞広邦彦館長。指導への人気が高く、継続して手話を学ぶ受講者が多いのが特徴である。
手話講座（後期）	高校生以上 (30)	28	火曜日 18:30～20:00	10月から2月までの5か月間、全15回の講座。講師は前期と同じく貞広邦彦館長。社会人がほとんどのため、15回中10回以上出席した修了者が全体の半数以下だった。
点訳入門講座	高校生以上 (30)	25	火曜日 18:30～20:00	1年間、全24回の講座。講師は(社福)日本点字図書館の河井久美子氏。新聞掲載によって情報を得た受講者が多く、視覚障害者福祉への関心の高さを再認識した。
点訳サークル （クラブ）	点訳入門講座修了者 (30)	26	火曜日 18:30～20:00	毎月1回、全12回。昨年は17人だった受講者が、今年は26人と充実したサークルとなった。講師の河井久美子氏の指導の下、和気あいあいと点訳奉仕活動を継続している。
子どもの心を考える講座	20歳以上の 子育てに関心のある人 (60)	64	①6.26 ②7.23 ③7.11 14:00～16:00	講師は平井信義大妻女子大学名誉教授。今回のテーマは「子どもの心を育てる家族」「親の子どもへの語りかけ」「孤立は自立に至らない」であった。大変熱心にメモをとる受講者の姿が印象的だった。



熱心に点訳を勉強する「点訳入門講座」の受講者



3) その他（野外活動など）

＜主催キャンプ＞

名 称	期 間	備 考
ジュニア・アウトドア・スクール	8.4～10	Aコース6泊7日（中学生のみ）38人，Bコース4泊5日（小学4年生～中学生）68人，スタッフ40人，合計146人で実施。Aコースは湯の遺百体観音を1泊2日かけて完歩する。天候不順で雨天続きだったが，大幅なプログラム変更はなく実施できたため子どもたちの満足度が大きかった。群馬県鹿沢国民休暇村。
ジュニア・スキーキャンプ	3.31～4.3	小学生3年生～中学生の69人，スタッフ18人，計97人で実施。スキー指導に横浜スキー同好会から3人の講師を依頼。昨年より1泊減ったが，班活動は，中学生を中心に初日から仲間づくりのための活発な交流があり，活気ある生活を送れた。長野県北志賀竜王。



◀ナイトウォークラリーにチャレンジ
（「ジュニア・アウトドア・スクール」で）

＜児童厚生員等実技指導講習会＞

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
平成5年度 第1回児童厚生員 等実技指導講習会	(人) 児童館職員 ほか (50)	(人) 30	5.20～23	講師は東京小中学生センターの柴田俊明氏（日本キャンプ協会専門委員）ほか。屋外活動を展開するためのさまざまなプログラムを紹介。東京YMCA山中湖センターで開催。
平成5年度 第2回児童厚生員 等実技指導講習会	〃	60	10.22～24	講師は横浜レクラフト研究所の兼松ムツミ氏，遠藤弘子氏（日本レクリエーション協会上級指導者）ほか。室内レクリエーションを中心に，クラフト，ダンス，ゲーム，読み語りを実習した。〔こどもの城〕で開催。
平成5年度 第3回児童厚生員 等実技指導講習会	〃	50	1.28～30	講師は〔こどもの城〕造形事業部のスタッフ。造形スタジオで展開してきたプログラムについて紹介，実際にワークショップを展開し，さまざまなプログラムへの試みを実感してもらった。〔こどもの城〕で開催。

(2) 5年度の研修教養部の活動

本年度、研修教養部の活動は、①ボランティア関係 ②野外活動関係 ③福祉講座関係 ④実習生・研修生関係の4点を柱に活動が展開された。

1) ボランティア関係の活動

本年度のボランティア講習会修了者は162人。実際に〔こどもの城〕で活動を希望し登録をしている人は、前年からの継続者も含め462人となった。

週休2日制が社会で定着をしてきたせいか、年々社会人ボランティアの人数が増加し、土・日曜日の活動にはたくさんのボランティアが活動をする姿が見受けられた。反面、大学生のボランティアで平日活動をする人が減少している。また、主婦層を中心にした女性ボランティアが活発に活動を展開するようになった。これは、女性ボランティアを対象に人形劇や影絵といった児童文化の指導を外部講師を招いて行い、指導・育成の充実を図ったためと思われる。

今後増加する社会人ボランティアを受け入れるに当たり、スタッフの体制(遅番など勤務時間のシフトなど)を考える時期にきていると考えられる。

(ア) 平常期間プログラムの中での活動

各事業部から要請を受け、〔こどもの城〕のボランティアは定期的に平常期間のプログラムの活動に参加している。各活動ともに長く継続しているものも多くメンバーの技術の向上や、そのための準備・練習の活動も充実し始めている。反面、固定メンバーだけで運営されているものは、マンネリ化現象も見受けられたが、新メンバーの参画・新しいプログラムへの試みもなされ、今後の充実を目指し始めている。

社会人ボランティアが増加し、土・日曜日の活動がより活発化した。また平日は、女性ボランティアの参加が著しく増加し、子どもたちと直接かかわる活動に、お母さんたちの優しい対応が手本となって、青年ボランティアにとってもよい影響を与えた。



(イ) 特別期間プログラムの中での活動

子どもたちの長期休みや来館者が集中する期間を利用して、

▲「母の日」プログラムでも女性ボランティアが活躍

より多くの子どもたちが、一度に参加し遊ぶことができるプログラムを計画。スタッフとともにボランティアも企画段階から参加し、[こどもの城]オリジナルのユニークな行事を実施した。

毎年恒例となった行事を目当てに来る来館者も増え、“屋上でのプログラム”を楽しみに来館する声も多く聞かれた。一方、平常活動と同時並行して計画されるため、準備不足やマンネリ化が表面化することもあった。今後、これらの行事に対して、スタッフがどうボランティアを導き、励ましながより新しく、楽しいプログラムを生み出すかが課題となる。

その他、「節分」「ひなまつり」「母の日」などの季節行事の運営補助も行った。

(ウ) L. I. T. (Leader In Training) の活動

L. I. T. は、Leader In Trainingの略で、[こどもの城]で活動をする高校生のグループ。メンバーは、いずれも過去に[こどもの城]の講座やクラブ、キャンプ活動に参加をしていた子どもたち。高校生になってからも[こどもの城]を活動の基盤に、スタッフや経験の豊かなボランティアリーダーとともに、学校生活だけでは体験できない活動を自主的に計画しながら活動をしている。活動の根本には、将来的にボランティア活動をしてみたい、[こどもの城]に遊びに来る子どもたちと遊びを通してリーダーとしての心得や社会参加の活動を学んでいきたい、という気持ちがある。

本年度は33人が登録。月約2回程度の活動を進めてきた。

(エ) ボランティア講習会

(1) 青年ボランティア講習会

本年度も、学生および社会人を対象にして3回の講習会(第27～29期)を実施した。これには、8回の講義と2泊3日の宿泊研修が盛り込まれている。

週休2日制が定着したせいも、回を追うごとに社会人の参加が増加。ついに受講者の半数を社会人が占めることとなった。熱心に受講する社会人の態度に、ともに参加している学生たちも刺激され、宿泊研修などでも意欲的に取り組むメンバーが増え、講習の雰囲気もしだいに活発になっていった。活動に関しても土・日曜日を中心に参加するボランティアが増加した。年

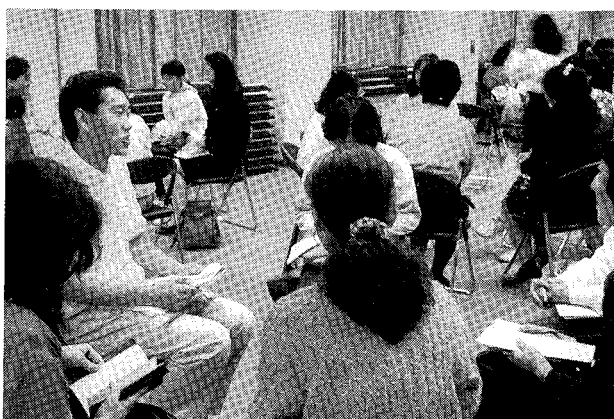


▲青年ボランティアが中心となって「グーチョキパークへようこそ」

間を通して150人が修了した。

(2) 女性ボランティア講習会

家庭の主婦を対象に全4回の講義を中心とした講習会。募集記事が新聞に掲載されたこともあり、広範囲の地域から参加、また年齢幅も20代から60代までとバラエティーに富んだ人材が集まった。



▲班付きカウンセラーとして野外活動にも参加
（「ちびっこ冒険団」の事後講習会で保護者と話し合い）

主に季節行事への定期的な参加が多く見られた。

(エ) ボランティアグレードアップ講習会

〔こどもの城〕で活動をしているボランティアのメンバーを主な対象として、その資質の向上を目的に実施。本年度は「日本赤十字社救急法短期講習会」「野外活動講習会」「スキー講習会」を行った。

2) 野外活動

「ジュニア・アウトドア・スクール」「ジュニア・スキーキャンプ」のほかに、他事業部主催の下記の野外活動へもボランティアが参加し、班付カウンセラーや本部運営を積極的に行った。

キャススルキャンプ（プレイ事業部）／スポーツキャンプ（体育事業部）／ちびっこ冒険団（プレイ事業部）／合唱団合宿（音楽事業部）／ゆきんこ冒険団（プレイ事業部）／スキースクールⅡ（体育事業部）

3) 福祉講座

本年度は「手話講座」「点訳入門講座」「点訳サークル」「子どもの心を考える講座」の社会福祉講座を実施した。これは（財）広げよう愛の輪運動基金の協賛を得ている。

4) 実習生・研修生の受け入れ

大学・短期大学や専門学校などから依頼があった実習生の受け入れを行った。本年度は保育研究開発部、体育事業部、プレイ事業部、音楽事業部へのコーディネートをした。

研修生に関しては、全国から児童館単位での職員研修の依頼を受けた。主に

〔こどもの城〕の事業概説や館内見学。また最近では、各事業部のプログラムや運営について実際に現場での研修を希望する児童館も増えてきた。

5) その他の活動

(ア) 児童厚生員等実技指導講習会

こどもの城全国連絡協議会をネットワークに、全国から児童厚生員などの関係スタッフを集め、年3回の講習会を実施した。研修教養部は、本講習会の事務・実施に際しての運営をこどもの城全国連絡協議会と連携して行った。

野外活動が活発になる夏休み前に行われる1回目の講習会は、年度当初ということもあり、参加者が少ない傾向がある。しかし、全国で同じ活動をし、日夜同じような悩みを抱えて頑張っている者同士が集まり、さまざま



▲児童厚生員等実技指導講習会を年3回開催

な情報交換をすることは大きな意義がある。各回とも、多くのものを得て、励まされ全国へ帰っていく参加者が多く、好評であった（詳しくは、全国連絡協議会の項を参照）。

3 国際交流

(1) 5年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
アートスケープ展	4.13~18 (12日はレセプション)	13回目を迎えた、東京・横浜地区のインターナショナル・スクール7校の生徒の美術作品展。インターナショナル・スクール(7~12校)の生徒たちの美術作品を展示しクリエイティビティーを育てるために1980年に始まった。[こどもの城]では7年前から行っている恒例の展覧会。外国人の来客を増やし美術をととして国際交流に役立っている。作品約400点は、70か国を超える国籍の生徒によるもの。生徒たちによる演説を含むレセプションや一般客のための陶芸のワークショップなども行われた。入場は無料。
ファミリーランド の宝物	5.8・9 ①11:00 ②13:30 ③15:30 (9日は①、②のみ)	バイリンガル・ファミリー・プログラム第19弾。幼児から小学低学年とファミリーを対象に青山円形劇場で開催。ピーターラビットの誕生100周年も兼ねて着ぐるみたち、王様、女王様、パフォーミング・アーツ・グループ(海賊、ファミリーランド登場人物役)、Teen PAG (lost kids役) が出演。ゲーム、パラバルーン、ファミリーディスコを盛り込んだストーリー仕立て。聖心インターナショナル・スクールの教師によるバンド(イギリス・アメリカ)の演奏も。料金は1,000円(3歳以上同一)。
サントズ・トイ・ ボックス	12.11・12 ①11:00 ②13:30 ③15:30 (12日は①、②のみ)	バイリンガル・ファミリー・プログラム100回記念公演(第20弾)。幼児から小学低学年とファミリーを対象に青山円形劇場で開催。サントクロースのおもちゃ箱から出てきたおもちゃのダンスや父母のためのゲーム、ディスコを盛り込んだストーリー仕立て。衣装はお母さんの手作り。オリジナルのクリスマス・ソングはすべて中川ひろたか、しもはたかおる、テリー・スザン(アメリカ)の作詞・作曲。振付はメリー・サインズ(イギリス)。料金は、1,200円(3歳以上同一)

2) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
	(人)	(人)	(回)	
パフォーミング・ アーツ・グループ	小1~6 (各期30)	33 34 28	4.14~7.14 12 9.29~12.22 12 1.19~3.23 10 水曜日 16:00~17:30	講師はテリー・スザン(アメリカ)、奈良なぎさ(1期)、メリー・サインズ(イギリス、2・3期)。 さまざまな年齢(6~12歳)と国籍の子どもたちが一緒にダンス、うた、演技、表現力をバイリンガルで覚える。

(2) 国際交流部の活動

〔こどもの城〕での国際交流部の役割というものは、まだ十分に認識されているとはいいがたいが、日本人と外国人コミュニティーを結ぶ架け橋となることだと考えている。また、〈国際的〉という言葉の中には〈人〉と〈人〉との〈関係〉が含まれると考え、そのふれあいと交流を大事に活動している。

国際交流部ではちらし・パンフレットなどの英語版作成、各事業部の英語表示などの作成協力、外国人視察・見学の案内などの活動のほかに、在日外国人と日本の子どもたちとの交流を図るためのプログラム（「アートスケープ展」や「バイリンガル・ファミリー・プログラム」など）、小学生を対象とした講座「パフォーミング・アーツ・グループ（PAG）」を実施している。外国人利用者が年々増えていることもあり、外国人も参加できるようなプログラムの必要性が高まってきている。

1) 平常期間・特別期間

(ア) アートスケープ展

参加校は、アメリカン・スクール・イン・ジャパン、清泉、聖心、セント・メリーズ、横浜、セント・ジョセフの各インターナショナル・スクールとキニック・スクールの7校。70か国を超える国籍の、小学校5年生から高校3年生（12年生）の生徒の水彩画・油絵・版画・陶芸・ガラス工芸・建築・写真など400点以上の作品がアトリウム・ギャラリーに展示された。

最終日には〔こどもの城〕来館者との国際的な交流を深めるために、参加校の生徒によるシルクスクリーンや陶芸の体験コーナーを設けた。好評だったの



▲「アートスケープ展」の陶芸ワークショップは大人気

で、また来年も参加したいという生徒たちの声もあったが、インターナショナル・スクールのクラブ活動やイベントが土・日曜日に重なり、参加できる生徒数が少なかった。

「アートスケープ展」に普通の日本人の生徒たちにも参加もしてもらおうと各学校と交渉をしているが、日本の学校とイ

ンターナショナル・スクールの学期スケジュールが合わないため、なかなか実現には至っていない。日本の学校は4月から3月までが1年、インターナショナル・スクールは9月から6月までが1年で、学年が替わる時期が異なるからだ。4月か5月に開催するとなると、日本人の生徒たちの作品は前年のものになってしまう。展示を秋に移すと、今度はインターナショナル・スクールの側に同じ問題が出てきてしまう。

「アートスケープ展」の開催前日の夜に、フリーホールでレセプションを行った。今年は各学校のイベントと重なったため、例年に比べてレセプションの参加は少なかった。レセプションの食事は毎年聖心インターナショナル・スクールの家庭科の生徒たちが作っている。

(イ) バイリンガル（2か国語）・ファミリー・プログラム

日本人の英語に対しての興味・関心が高まってきたこと、日本語以外の言葉による外国人向けのファミリー・プログラムも少ないことから、バイリンガルのプログラムが行われるようになった。家族全員が楽しく参加でき、日本人家族と外国人家族が交流するチャンスを提供しようというもの。恒例のファミリーディスコが人気を集めている。

音楽、ドラマ、ダンスを通して家族の触れ合いを深めるためのバイリンガル・ファミリーシアターは、日本人と外国人の家族と一緒にステージに登り、共通の体験を通して理解し合う絶好の機会といえる。また、ファミリーシアターを通して、いろいろな国々の習慣や考え方（例えば、クリスマスやハロウィーンなど）を知ることができる。

ファミリーシアターは日本ではまだ珍しいが、[こどもの城]には劇場が2つもあるので、それも活用して外国人家族との交流の機会をもっと増やす必要があるのではなかろうか。しかし、このようなプログラムは多大の経費を必要とする。“バブル”がはじけて、今までどおりの協賛各社の協力は困難になってきているので、内容・経費などを検討していかなければならなくなっている。

(1) ファミリーランドの宝物

バイリンガル・ファミリー・プログラム第19弾。ピーターラビットの誕生100周年に合わせ、不思議な島「ファミリーランド」の王子役でピーターラビット（着ぐるみ）が登場。ほかにファミリアの協力で、ファミ、リア、スノーピーの着ぐるみと王様、女王様、海賊、そしてさまざまなファミリーランドの人物も登場した。

夢の中で子どもたちが宝探しをする内容になっていて、ゲームやファミリーディスコなどを盛り込んである。「宝物とは愛やいたわりの心のことで、みんなが手をつなげば必ずそこにある」というのがテーマ。パフォーミング・アーツ・グループ（PAG）の子どもたちのほか、インターナショナル・スクールに通う

バイリンガルの中学生たちも参加し、創作ダンスや各シーンの子ども役で活躍した。ストーリー・挿入曲ともにオリジナル。台本は子どもたちによるもの。聖心インターナショナル・スクールの先生方のバンド“KOKOROCHEs”の生演奏もあった。

(2) サンタズ・トイ・ボックス

バイリンガル・ファミリー・プログラム第20弾は、通算100回目を数える記念公演となった。キャストはPAGの子どもたちと、お父さんとお母さんたち。サンタクロースを支える“ミセス・サンタ”とサンタクロースのおもちゃ工場で留守を守る妖精たち、おもちゃたちの話。子どもたちのダンスの数々が華やか。M&M's, スヌーピー, たま, ポチの着ぐるみ, そしてパペットボックスも登場。衣裳はほとんどがお母さんの手作りで、ストーリー・挿入曲（中川ひろたか, しもとかおる, テリー・スザーンの作詞・作曲）ともにオリジナルでバイリンガル。振付はメリー・サインズ（イギリス）。恒例のファミリー・ディスコも行った。

協賛は、松下電器産業(株), ジュニアサミットキャンプ実行委員会, T.F.S., M&M's, Crayolaなど。100回記念公演の応援のため多くの団体に協力をいただいた。AVONからは雪だるまのクリスマスライトのプレゼントがあった。

2) 講座・クラブ

(ア) パフォーミング・アーツ・グループ (PAG)

子どもたち同士の触れ合いもPAGで行っている。PAGは週1回のバイリンガルの講座で、英語と日本語を使いながら演技, 歌, ダンス, そして表現力を指導。外国人の生徒はまだ少ないが, いろいろな国籍の子どもたちが集まり自分を表現することができる。日本以外の人や言葉との接触の場として, 外国人の指導者を招いている。1学期は『ファミリーランドの宝物』のダンス, バイリンガルの台本, そして歌の練習。1学期の後半は表現力の練習とクリスマス・ショーのプランを立てた。9月から12月の2学期は台本の制作, そしてダンス, 歌, 発声などの練習に取り組んだ。親子ともども, 一緒に出演することに喜びを覚え, 観客もこの親子による親子のためのファミリー劇場を高く評価した。

また, 元PAGメンバーのインターナショナル・スクールの中・高校生たちの参加希望の声にこたえて, シミュレーションとして「ティーン・パグ」(Teen PAG)の試みを実施した。中・高校生を対象としたPAGである。メンバーはユーゴスラビア, キューバ, 中国, 日本のバイカルチャーの子どもたち。シミュレーションのため練習場所の確保が難しかったが, 最後にはPAGとTeen PAGが一緒にバイリンガルの台本の練習を公演に向けて行った。Teen PAGのメンバーの大半はインターナショナル・スクールの生徒だったため6月に解散となった。

今後、Teen PAGのような中・高校生（特に外国人生徒）を対象としたプログラムを考えるならば、インターナショナル・スクールの生徒たちのニーズにこたえることができるような配慮が必要である。特に、中学・高校生は小学生より学校にいる時間が長く、[こどもの城]に着くころには夕方になってしまう。[こどもの城]の閉館時間（17時30分）後の利用についても考慮する必要がある。また、インターナショナル・スクールと日本の学校は学期のスケジュールが基本的に違う。国際交流を深めていこうとするなら、そのような事情を考慮して、対応していかなければならないだろう。

今後、PAGはインターナショナル・スクールの生徒たちの参加を増やし、そしてTeen PAGも本格的にスタートさせたい。外国人先生方の評価の高さを見ると、[こどもの城]のクラブや講座に外国人指導者を増やすことが本当の国際交流につながるのではないだろうか。

3) その他

広報部への協力（特別期間の催し物ちらし、講座募集ちらしなどの英語版作成、英字新聞などへの催し物案内）をはじめ、各事業部の英語表示などの作成の協力、外国人視察・見学の案内、電話の英語対応などを行った。

日本にいる外国人には、英語は読めるが日本語は読めない人が多い。そのため、英語表記による案内や説明が必要になる。まずは英語から始め、それから他の外国語も取り入れられるようにしていくべきだろう。

PAGやアートスケープ展は人と人とのコミュニケーション（国際交流）に大きく貢献している。国際交流部の活動をさらに大きなものにし、そして日常的なプログラムとして展開していくためには、部内のスタッフを増やし、他部との協力体制を強化していくことが必要になる。〈国際交流〉を単なる言葉として終わらせるのではなく、[こどもの城]の重要な活動の一部だと認識して、今後は他事業部と協力してプログラムを考えていきたいと思う。

4 営 業 部

(1) 業務の概要

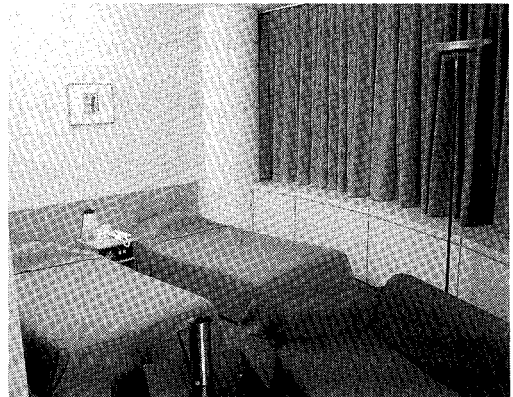
業 種	店 名 等	場 所	利用客席数	営 業 日 ・ 営 業 時 間 等	備 考
ホテル	こどもの城ホテル	6・7階	客室数 27 客室定員64	無休（12月29日から1月2日までを除く）	洋室24室（シングル3，ツイン10，デラックスツイン11）和室3（4人用1，5人用1，10人用1） 料金1泊6,300円（税込み）～
飲食 関係	レストラン 「ラブニール」	8階	客席数 60	毎週月曜日休業 営業時間：ランチタイム 11:30～14:00 ディナータイム 17:00～21:30	洋食全般およびパーティーなど
	カフェテラス 「アンファン」	1階	客席数 140	無休（12月29日から1月2日までを除く） 営業時間：7:30～20:30	喫茶，軽食および弁当仕出しなど ホテル宿泊者の食事
	すし「ひさご」	1階	カフェテラス「アンファン」内	無休（12月29日から1月2日までを除く） 営業時間：11:00～20:30	すし，和食および弁当・料理の仕出しなど
	コーヒーラウンジ 「アミティーエ」	2階	客席数 60	毎週月曜日休業 営業時間：11:00～20:00	喫茶，軽食
	劇場内 「スナック」	青山劇場 内地下ロビーおよび2階ロビー	立食	公演に合わせて営業 営業時間：開演前・幕間	喫茶，軽食
貸し室	研修室	8・9階	客室 10 ※一部通しで利用できる。利用人員350人ぐらいまで	無休（12月29日から1月2日までを除く） 営業時間：9:00～21:00	研修および会議等 料金：1単位時間 11,500円～（税別）
	ギャラリー	1階アトリウム		無休（12月29日から1月2日までを除く） 営業時間：10:00～18:00	各種展示会および実演など 料金：1日 30,000円（税別）
物品 販売	売店	1階アトリウム	1か所	毎週月曜日休業 営業時間：開館時間と同じ	絵画，造形用品，文具，遊具，玩具，印刷出版物，電気用品，音楽用品，衣料，スポーツ用品，劇場関連用品，催事関係用品，雑貨など
	自動販売機	館内各所	飲食・乳販売 12か所 たばこ販売 7か所 フィルム 1か所	無休	通常ドリンク類，牛乳類，スナック類

業 種	店 名 等	場 所	利用客席数	営 業 日 ・ 営 業 時 間 等	備 考
公衆 電話		館内各所	14か所	無休	
駐車場		地下2階 ～地下4 階	約113台 (業務車両 分を含む)	無休(12月29日から1月2日までを除く) 営業時間：8:00～22:30	一般車両は地下、バス等大型車 両は1階ビロティに駐車 料金：普通車両1時間500円 (税込み)

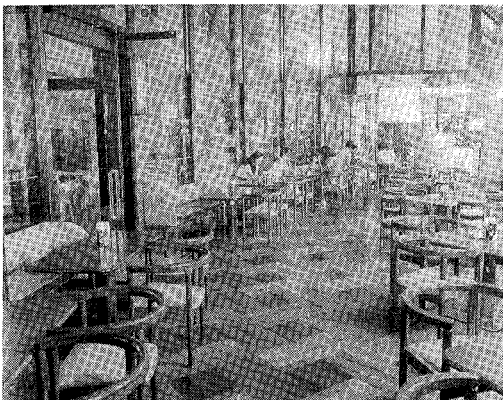
- 注) 1. この表は、平成5年4月1日以降の利用者サービス事業について掲げたものである。
 2. 春休み、夏休み、冬休み等の特別期間については、[こどもの城]全館の日程に合わせて休業日にも営業を行う。
 3. 劇場公演日程に合わせ、関連部門は休業日であっても営業する。
 4. 各事業部の事業上必要なときは、当該事業に合わせて可能な限り上記場所以外でも営業を行う。



▲研修室



▲ホテル客室



▲カフェテラス「アンファン」

(2) 業種別の状況

1) ホテル

営業収入は、本年度1億576万円で、前年度1億853万円に比べ277万円の減収となっている。

客室がどのように利用されたかを本年度についてみると、客室利用率(注1)は全体で84%、客数比率(注2)では71%となっており、前年度に比べ客室利用効率、客数比率ともほぼ横ばいである。

客数比率が客室利用率に比べて低いのは、主としてツインルーム及び和室の利用人員が客室定員より少なかったためなどの理由によるものである。今後とも利用効率の向上に努めるとともに、顧客に対するサービスの向上などに努力していく必要がある。

【ホテルの利用状況】

客室種別	客室利用率	客室比率
シングル	89.2%	89.2%
ツイン	85.5%	77.6%
和室	70.2%	54.1%
平均	84.1%	71.0%
総利用者数	15,620人	

(注1)

$$\text{客室利用率} = \frac{(\text{期間中利用室延べ人数})}{(\text{期間中日数} \times 27\text{室})} \times 100$$

(注2)

$$\text{客室比率} = \frac{(\text{期間中利用客延べ人数})}{(\text{期間中日数} \times \text{定員} 64\text{人})} \times 100$$

2) レストラン・喫茶

飲食5店舗の営業成績は、[こどもの城]の入館者数、劇場公演及び各種会議などによって大きく左右されることになるが、営業収入で見ると、前年度4億円、本年度3億4,200万円で、対前年度比86%、約5,800万円の減収になっている。来年度においてはPR活動をさらに活発化するとともに、各店のメニューの見直しを行い、外部の一般客の利用拡大を図る必要がある。また、今後も引き続き喫茶メニューの改善、料金の低廉化とサービス向上を図っていく必要がある。

3) 貸し室・ギャラリー

利用は開館以来、依然として増加傾向が続いている。売り上げ額は本年度1

億3,486円となっている。研修室の利用率も平均で67%となっている。特に午後だけを見ると78%で、限界に近づいている。

利用の内容は、外部への有料貸しのほか、〔こどもの城〕の企画による催事などにも利用されている。とりわけ春・夏・冬休み、ゴールデンウィークなどの特別期間中は、研修室、ギャラリーのいずれも内部利用の割合が極めて高く、〔こどもの城〕の限られたスペースでの充実したプログラム作りに寄与している。

【研修室利用状況】

区 分 目	項	年 計					
		有 料 利 用		内 部 利 用		計	
		件 数	利用率	件 数	利用率	件 数	利用率
研 修 室	午 前	2,012	56.0%	247	6.9%	2,259	62.9%
	午 後	2,471	68.8%	282	7.9%	2,753	76.7%
	夜 間	1,381	38.5%	280	7.8%	1,661	46.3%
	平 均	5,864	54.4%	809	7.5%	6,673	62.0%
ギャラリー		91	25.3%	116	32.2%	201	57.5%

(注) 利用率は次により算出した。

- 1) 研修室＝午前・午後の件数を359日×10室＝3,590で除した。
「計」は件数を359日×10室×3＝10,770で除した。
- 2) ギャラリー＝件数を360日×1か所で除した。

4) その他の業務

売店、自動販売機による販売、駐車場の提供、館内公衆電話の管理などについては、前年度に引き続き〔こどもの城〕事業活動に即応する形で利用者サービス事業の一環として実施してきている。これらの収入の状況は、本年度1億4,632万円となっている。〔こどもの城〕の利用を促進していくうえで、これらの利用者サービス事業はいずれも欠くことのできないものなので、引き続き多様な利用者需要に合わせたサービスの向上を図っていく必要がある。

【営業許可等の状況】

業 種	店 名 等	営業許可を 受けた日	営業許可番号	行 政 庁	備 考
旅 館 業	こどもの城ホテル	昭60. 10. 30	60澁保衛環旅 第 10 号	渋谷区保健所	表示基準適合（渋谷消防署） 昭62.10.1 澁予762号
飲 食 業 (飲食店)	レストラン 「ラブニール」	昭60. 10. 22	60澁保衛食ほ 第 1552 号	〃	
〃	カフェテラス 「アンファン」	昭63. 11. 12	60澁保衛食ほ 第 2307 号	〃	
〃	コーヒーラウンジ 「アミティーエ」	昭60. 10. 22	60澁保衛食ほ 第 1554 号	〃	
〃	劇場スナック	昭60. 10. 22	60澁保衛食ほ 第 1553 号	〃	
〃	自動販売機	昭60. 10. 31	60澁保衛食ほ 第2072～5号	〃	
飲 食 業 (喫茶店)	〃	昭60. 11. 20	60澁保衛食ほ 第2308～9号	〃	
〃	〃	昭60. 11. 30	60澁保衛食ほ 第 2310 号	〃	
乳類販売	〃	昭60. 11. 30	60澁保衛食ほ 第 2311 号	〃	
食料品販売	〃	昭61. 4. 28	60澁保衛食れ 第 20,21 号	〃	
乳類販売	〃	昭63. 6	60澁保衛食ほ 第 2816 号	〃	
たばこ小売	〃	昭60. 9. 30		大 蔵 省 関 東 財 務 局	

注) 期間が定められている許可などについては、当該期間満了後更新手続きをとっている。

営業部

IV その他の活動

- 1 こどもの城全国連絡協議会189
- 2 チャリティー事業196
- 3 こどもの城友の会197

1 こどもの城全国連絡協議会

こどもの城全国連絡協議会は、全国の児童の健全育成に資することを目的に、会員相互の連携により事業を展開した。本年度は特に全国の児童センター・児童館などのイベント出演・支援活動、児童厚生施設の講習会・研修会に講師派遣の協力活動を行った。

(1) 事業実施状況

1) 情報交換・資料提供・事業協力支援

加盟している児童館・児童センターの健全育成活動の活性化に資するため、〔こどもの城〕の活動紹介を中心に情報・資料の交換・提供、および直接に加盟の館の主催事業の支援活動を実施した。

(ア) 機関誌の発行

会員へ「ネットワーク」を年4回(6・9・12・3月)各4,800部余を送付し、健全育成活動の紹介に努めた。

(イ) 情報交換・資料提供

(1)〔こどもの城〕の情報提供

会員へ「こどもの城ニュース」を年6回(4・6・7・10・12・2月)各4,800部余と、「こどもの城事業年報」を送付し、各地域の児童館活動の参考に供した。

(2)地域児童館活動の紹介

会員へ「いま！児童館では～児童館等活動実践集(第6集)」(東京都児童会館発行)を送付し、各地域の児童館活動の参考に供した。

(ウ) イベント・講習会などの事業協力支援

(1)イベント支援活動

- 会員の児童センター・児童館などが実施するイベントへの支援活動を行った。
- ・「木と造形」(主催：富山県立こどもみらい館、期間：平成5年7月21日～10月3日)＝富山県立こどもみらい館のプログラムの企画立案のアドバイスとワークショップの指導を造形事業部が行った。
 - ・「遊びと造形発想展」(主催：群馬県立ぐんまこどもの国児童会館、期間：平成5年8月8～22日)＝群馬県立ぐんまこどもの国児童会館のプログラムの企画立案のアドバイスとワークショップの指導を造形事業部が行った。

(2) イベント出演

会員の児童センター・児童館などが実施するイベントに「こどもの城」のプログラムをあっせんした。

- ・「開館記念わくわく音楽コンサートおんがくがスキ！」(主催：名取市館腰児童センター，日時：平成5年9月19日)＝名取市館腰児童センターの開館記念プ



▲こどもの城児童合唱団のコンサート(ぐんまこどもの国)

ログラムに音楽事業部の“おんがくズキ”チームが出演した。

- ・「こどもたちからのサウンドメッセージ」(主催：群馬県立ぐんまこどもの国児童会館，日時：平成5年10月10日)＝群馬県立ぐんまこどもの国児童会館のプログラムに音楽事業部の「児童合唱団」が出演した。

(3) 講習会講師派遣

熊本県児童館連絡協議会／秋田県児童館連絡協議会／千葉県児童館連絡協議会／愛知県児童館連絡協議会／島根県児童館連絡協議会／富山県児童館連絡協議会／三重県児童館連絡協議会／栃木県児童館連絡協議会／神奈川県立青少年センター

2) 児童文化・芸能等の活動紹介

加盟している全国の児童センター・児童館などの所在する地域の児童文化活動・芸術活動・スポーツ活動の支援を目的とした，公演・競技会を開催した。

(ア) 「こどもの城おまつり劇場」の開催(青山円形劇場)

子どもたちが今もその伝承の担い手として，受け継がれている地方の伝承芸能を紹介し，その活動を励ます催し。今回は「こどもたちによる日本の四季」と題して，歌や踊りに描かれた四季折々の表情を楽しみバラエティーショーの形で構成した。

出演は，神奈川県厚木東高校人形浄瑠璃部(11日相模人形芝居)と川崎沖縄芸能保存会(12日沖縄の芸能)のみなさん。そのほかに，日本舞踊わらんべ座，「こどもの城」三味線グループと和太鼓グループ。

期 間：平成5年8月11・12日(2日間，4公演)

入場者：約1,200人

(イ) 「児童館こども卓球大会」の開催
(こどもの城体育室)

東京都内の児童館活動に参加している小・中学生たちによる卓球大会を開催し、子どもたちの交流を深め、児童館活動の活性化を図った。共催は東京都公立児童厚生施設連絡協議会

期 間：平成5年8月5

・6日(2日間)

参加者：58チーム、約368人



▲58チームが参加した「児童館こども卓球大会」

3) 児童厚生員等の研修・現任訓練

加盟している児童館・児童センターの児童厚生員の資質の向上に資するための講習会を開催し、併せて加盟している児童館・児童センターの職員研修の受け入れをした。

特に児童厚生員等の研修会は、児童館活動の実態を考えた実技を中心に実施している。5月は施設を取り巻く屋外の資源の活用方法(日本キャンプ協会の公認資格取得の単位となるよう配慮)、10月は施設のイベント活動の中核をなすレクリエーション財の活用方法(日本レクリエーション協会の公認資格取得の単位となるよう配慮)、1月は〔こどもの城〕各事業部の開発した実践プログラムの伝達の機会として実施している。

(ア) 第1回 児童厚生員等実技指導講習会

「学校5日制の拠点をめざして～児童館を拠点とした屋外の活用法」

地域の児童健全育成活動の拠点として重要な役割を担っている児童館の役割を考える時、子どもたちの遊びは児童館の館内に限定される性格の活動ではない。むしろ児童館のある地域のさまざまな資源を活用するプログラムを提供することによってこそ、その効果は実りを結ぶのである。そこで今回は“ガキ大将あそび”を中心に仲間作りを主題とした、実技講習会を実施した。

期 間：平成5年5月20～23日(3泊4日)

会 場：東京YMCA 山中湖センター

参加者：30人(男子6人・女子24人、15都道府県)、スタッフ3人・ボランティア4人

【プログラムの概要】

講義：「児童館と屋外あそび①～何故、屋外活動が必要か～」

「児童館と屋外あそび②～どうやって協力者を求めるか～」

実技：「カウンスルファイヤー～儀式からアイスブレイク～」

「異年齢集団作りのグループゲーム

～タウンでもできる追跡ハイキング～」

「ひとりひとりが輝く選択プログラム～食べる・作る・遊ぶ～」

「キャンプファイヤー～歌とゲームの集い～」

「ダイナミック野外あそび～ガキ大将を育てるゲーム～」

「室内オリンピック～簡単に愉快的なチャレンジ記録ゲーム～」

「キャンドルファイヤー～みんなで作るスタンツナイト～」

講師：東京小中学生センター 柴田俊明氏（日本キャンプ協会専門委員）

こどもの城 神谷明宏（日本キャンプ協会専門委員）

〃 佐野真一（日本キャンプ協会公認中級指導者）

〃 浦本桂子（日本キャンプ協会公認中級指導者）

(イ) 第2回 児童厚生員等実技指導講習会

「児童館遊びのおもちゃ箱～レク技術の基本を考える」

児童厚生員の基本的な活動として、ゲーム・ダンス・ソング・クラフトなどのレクリエーション技術の活用があり、今回は子どもたちの遊びを支援する立場から、レクリエーション活動の喜びを通して、人間交流を深めるコミュニケーションワークの実際を体験的に学ぶことを主題とした実技講習会を実施した。

期 間：平成5年10月22～24日（2泊3日）

会 場：こどもの城

参加者：59人（男子6人・女子53人、21都道府県）、スタッフ3人

【プログラムの概要】

実技：「ゲーム・ゲーム・ゲーム」

「児童館を拠点に屋外あそび」

「レッツダンス！ 心も体もおどります」

「ねえ、お話し聞かせて」

「ムッチャんのとびだせクラフト」

見学：「こどもの城事業概説・館内見学」

「東京都児童会館・電力館見学」

講師：東京都レクリエーション協会 池田雅彦氏（日本レクリエーション協会公認上級指導者）

レクダンス研究会「赤いくつ」 石綿久嗣氏

横浜レククラフト研究所 兼松ムツミ氏（日本レクリエーション協

会公認上級指導者)

横浜レクラフト研究所 遠藤弘子氏

こどもの城 神谷明宏(日本レクリエーション協会公認上級指導者)

(ウ) 第3回 児童厚生員等実技指導講習会

「豊かな感性を育てる造形活動をめざして～今ときあかす造形スタジオの謎」

児童館において実施されている造形表現活動は、施設の設備や予算によってとすれば単なる種目紹介になりがちである。しかし、子どもたちの豊かな感性を育てる造形活動の支援は、身近なところのテーマや素材をいかに活用するかで、特別な設備がなくてもプログラム展開が可能になる。

今回は「こどもの城」造形事業部が日常活動で実践してきたプログラムを、レストランのメニューになぞらえて、ワークショップの形式で紹介し、



▲“豊かな感性を育てる造形活動”をテーマに講習会

その背景にある考え方を伝達することを主題とした講習会を実施した。

期 間：平成6年1月28～30日（2泊3日）

会 場：こどもの城

参加者：50人（男子6人・女子44人，16都道府県）スタッフ2人

【プログラムの概要】

前菜「めん三昧 オニかめん・紙のめん・布のめん～造形クラブから一般プログラムへの展開～」

「ビデオ1分クッキング～顔のビデオ撮りを通して初対面のごあいさつ～」

メインディッシュA

「ヘルシー土こね～素材との出会い展“土と造形”～」

「素材ア・ラ・カルト～プログラム実技体験～」

メインディッシュB

「造形スタジオ厨房紹介～造形スタジオワークショップ〔展示・体験・制作〕～」

「日仏の味つけ ポトフとチャンコ～造形発見展・オープンスタジオ～」

「造形よもやま話 味つけ方法～グループ活動＝影をうつそう～」
「モダンアートどんな味？～こども体験美術館～」
「動くものたちの料理秘話～子どもがおもしろがるプログラムの要素から～」

メインディッシュC

「料理のカatalogから 明日の献立～材料，道具，作り方，ちょっとした工夫～」

メインディッシュD

「造形創造ランチボックス～プログラミング試行錯誤＝材料道具＋情報資料ノート～」

デザート

「造形料理味自慢！ お気に入り料理は？～研修のまとめ～」

講師：こどもの城造形事業部 田嶋茂典・前田ちま子・有福一昭・

喜久山悟・米澤明子・寺田クリスチャン・

横尾詠子

(エ) 現任訓練のための各児童厚生施設からの職員派遣

富山県立こどもみらい館職員／栃木県立こども総合科学館職員／群馬県立こどもの国児童会館職員／三重県立みえこどもの城職員

(2) 総会・幹事会等

平成6年3月3日，午前「幹事会」，午後「総会」をそれぞれ開催し，本協議会の事業予算・決算について審議決定した。

なお，本年度の各都道府県（指定都市を含む）児童福祉主管課・児童館連絡協議会・関係団体等の本会入会状況および役員は次のとおりである（平成6年2月現在）。

(ア) 会員数

区 分	都道府県	指定都市	団 体 等	合 計
入 会	42	9	6	57
未入会	5	3		8
合 計	47	12		

(イ) 役員

区 分	氏 名	ブ ロ ッ ク	所属する会員組織の役職名	勤 務 先
会 長	小島 弘伸	こどもの城	日本児童手当協会理事長	日本児童手当協会
副会長	津金 正司	東 京	東京都公立児童厚生施設連絡協議会長	東京都児童会館
〃	濱口 公子	近 畿	大阪府福祉部児童福祉課長	大阪府福祉部児童福祉課
幹 事	木村 吉基	北 海 道	北海道児童館連絡協議会長	釧路市福祉部児童家庭課
〃	大江 重子	東 北	宮城県児童館連絡協議会長	大河原町立上谷児童館
〃	森岡千代子	中 国 四 国	広島県児童館連絡協議会長	海田東児童館
〃	久々山義人	九 州	熊本県児童館連絡協議会長	本渡市役所
〃	弓掛 正倫	こどもの城	日本児童手当協会常務理事	日本児童手当協会
会 計 監 事	椿 幹夫	関 東	神奈川県公立青少年育成施設連絡協議会長	神奈川県立青少年センター
〃	伊藤 環	中 部	愛知県児童館連絡協議会長	常滑市民生部

(ウ) 会 計

こどもの城全国連絡協議会会計を設け、会費（１会員年5,000円）および日本児童手当協会助成金を原資として、前記の業務に関する経理を次のとおり施行した。

【平成 5 年度収支決算書】

科 目	収 入	科 目	支 出
	(円)		(円)
繰越金収入	715	役員会・総会費	377,484
会費収入	285,000	業務諸費	14,956
日本児童手当協会助成金収入	4,580,000	機関紙発行費	2,032,335
雑収入	2,757	協力援助費	2,442,786
合 計	4,868,472	合 計	4,867,561

(注) 収支差 4,868,472－4,867,561＝911円は次年度繰越金

2 チャリティー事業

本年度の青山劇場、青山円形劇場におけるチャリティー観劇は養護施設などの児童らを対象に延べ25回、647人を招待した。

その内訳は、養護施設などの児童37か所、349人、母子寮の母子26か所、108人、障害児・者のグループ22か所、111人、そのほかホームヘルパー、ボランティアなど79人となっている。

月 日	回数	場 所	演 目	人 数	対 象 者
4.3・4	2	青山 円形劇場	五線譜のなかの動物たち①	(人) 68	養護施設等の児童 母子寮の母子 社協のボランティア
7.22 ～24	3	〃	やってきたアラマ先生	17	〃
7.31・ 8.1	2	〃	五線譜のなかの動物たち②	23	〃
8.14 ～ 30	12	青山劇場	ウィンド・イン・ザ・ウィ ロー	329	養護施設等の児童 母子寮の母子 肢体不自由児施設の 児童
8.28・ 29	2	青山 円形劇場	さっちゃんのヘンテコリン 大冒険	43	養護施設等の児童 母子寮の母子
6.1.5 ～8	2	〃	トンガリぼうしの魔法つか い	131	養護施設等の児童 母子寮の母子 社協のボランティア
1.15・ 16	2	〃	五線譜のなかの動物たち③	36	〃
計	25			647	

3 こどもの城友の会

(1) 平成5年度の友の会の概要

年6回の「こどもの城ニュース」を含め、年12回のダイレクト・メールを「友の会」会員に発送し、行事予定、講座募集などの案内をした。この案内には、青山劇場及び青山円形劇場の公演の優先予約1回、料金割引による優待6回を含む。また、会員を対象として、次項のようなハイキングとキャンプをそれぞれ1回ずつ行った。

1) 友の会会員向けの催し物

	実施日	場 所 ・ 活 動 内 容
ファミリー ハイキング	5月23日	実施場所＝千葉県・木更津海岸（潮干狩り会場） 会員家族を対象とした、自然に触れる会員の親睦プログラム。今回は、潮干狩りを実施した。日帰りで、途中カーフェリーを利用し現地に到着した。参加者は、東京近郊の思いがけない自然を発見し、初夏の1日を親子で満喫していた。参加者は、子ども41人、大人32人、ボランティアリーダー9人、スタッフ4人の計86人。
ファミリー キャンプ	9月11・ 12日	実施場所＝神奈川県・南足柄市立「どんぐりの家」 どんぐりの家での3回目のキャンプ。今回は初めての試みとして、1日目宿泊泊、2日目に1泊コースに合流する2泊3日のコースも企画し参加を募ったが希望が少なく、2泊希望家族に確認後、1泊コースのみの実施となった。夏休みの直後でもあり、参加希望の家族にも、2泊はきつかったようである。実施時期や場所を含め、今後は宿泊日数について検討が必要である。 内容は、ファミリーでキャンプ（野外活動）を希望し、初めて体験する親子を対象とした初心者向けキャンプ。キャンプの基本であるテントの扱い方、食事の支度の体験と、たくさんの人でキャンプを楽しむプログラムとしてキャンプファイヤーなどを実施。参加者は子ども32人、大人36人、ボランティアリーダー12人、スタッフ4人の計84人。

2) 友の会会員・地区別分布

【地区別会員分布】

平成6年3月31日現在

	東京都					埼玉県	神奈川県				千葉県	茨城県	その他	不明	合計		
	特別区			市町村	小計		川崎市	横浜市	その他	小計							
	渋谷区	港区	その他														
家族数 (世帯)	210	219	1,299	269	1,997	204	135	181	89	405	173	35	147	17	2,978		
人 数 (人)	797	834	4,843	984	7,458	795	483	652	324	1,459	678	142	552	61	11,145		
「その他」の都道府県別内訳（家族数）																	
北海道	3	青森県	1	秋田県	4	山形県	1	宮城県	4	福島県	5	新潟県	4	栃木県	18	群馬県	9
山梨県	5	長野県	6	富山県	4	石川県	2	岐阜県	2	静岡県	24	愛知県	6	三重県	2	京都府	5
奈良県	3	大阪府	18	兵庫県	9	島根県	1	広島県	4	徳島県	1	高知県	1	福岡県	2	佐賀県	1
長崎県	1	大分県	1														

【就学区別】

区分	末就学児	小学生	中学生	高校生	大人	計	備考
家族数 (世帯)	1,182	1,931	286	117	2,976	2,978	全世帯のうち231世帯が大人のみの家庭
人数 (人)	1,389	2,687	310	129	6,626	11,145	

注) 1. 就学区分は、平成5年度の区分による。

2. 「家族数（世帯）」の各欄には、たとえば、小学生と中学生がいる家庭については「小学生」と「中学生」と両方の欄に計上してある。

3) まとめと今後の課題

会員数は、3,274世帯から2,978世帯へと前年に引き続いて減少傾向にあった。前項のハイキング、キャンプは参加者には好評であったが、この催しだけで会員数を押し上げるまでには至っていない。〔こどもの城〕の定期的な利用者確保につながる、広い年齢層を対象とした、包括的な対策を講じる必要がある。

(参考) 日本児童手当協会の助成事業

1) 事業所内保育施設の整備等に対する助成	201
2) 事業所内保育施設の保育従事者の研修及び指導	202
3) 企業委託型保育サービス事業に対する助成	203
4) 啓発活動	203
5) 職域児童育成事業に対する助成	204
6) 特殊ミルク共同安全開発等事業に対する助成	205
7) おもちゃ図書館普及推進事業	205
8) 児童福祉文化財普及等事業	205
9) 病児デイケアパイロット事業	205

日本児童手当協会の助成事業

1) 事業所内保育施設の整備等に対する助成

事業所内保育施設の整備等に対する助成については、厚生省をはじめ、各都道府県・指定都市の児童福祉主管部局を中心に、商工・労働・衛生各部局の協力を得て、制度の広報・普及に努めた。

また、関係各団体の機関紙に掲載または「助成のしおり」を配布するほか、商工会議所などに対し事業所内保育施設を整備し、児童の健全育成を図るよう指導・協力を依頼した。

(ア) 助成相談・決定件数

【助成相談件数】	施設（遊具等）の整備	138件（前年度 141件）
【助成決定件数】	施設の整備	59件（前年度 41件）
	遊具等の整備	62件（前年度 50件）
【助成決定後取消件数（助成決定件数のほか）】		
	施設の整備	2件（前年度 0件）
	遊具等の整備	0件（前年度 0件）

(イ) 助成状況

【整備区分別助成額】

(単位：千円)

	建 物 整 備		保 育 遊 具 等 整 備	
	か所数	助 成 額	か所数	助 成 額
新 築	40	410,698	34	13,241
増・改築	19	88,799	8	2,758
保育遊具等 単 独 助 成	—	—	20	7,077
計	59	499,497	62	23,076

※参考【保育施設整備費等の助成実績】

(昭和53年度～平成5年度) (単位：千円)

	建 物 整 備		保 育 遊 具 等 整 備	
	か所数	助 成 額	か所数	助 成 額
新 築	395	3,355,448	300	111,300
増・改築	154	567,376	88	30,272
保育遊具等 単 独 助 成			236	80,445
	549	3,922,824	624	222,017

【業種別建物助成状況】

(単位：か所)

	病院・ 医療	福祉 施設	機械部 品加工	繊維 縫製	食品加 工製造	小売り ・販売	サービス その他	計
新 築	26	1	0	3	3	1	6	40
増・改築	12	2	0	1	1	0	3	19
計	38	3	0	4	4	1	9	59
(%)	(64.4)	(5.1)	(0)	(6.8)	(6.8)	(1.7)	(15.2)	(100)

【都道府県別建物助成状況】

(単位：か所)

北海道……1	青森……1	宮城……2	茨城……1
栃木……3	埼玉……1	千葉……1	東京……3
神奈川……1	富山……1	福井……3	山梨……1
岐阜……1	愛知……4	滋賀……1	大阪……2
兵庫……1	奈良……1	鳥取……3	岡山……3
広島……1	山口……2	徳島……2	香川……3
愛媛……1	高知……2	福岡……1	佐賀……2
長崎……2	熊本……3	宮崎……2	鹿児島……2
福岡市……1			

計：33都道府県（市）59か所

2) 事業所内保育施設の保育従事者の研修及び指導

事業所内保育施設の保育従事者の資質の向上を図るため、都道府県・指定都市の協力を得て、次のとおり研修及び指導を行った。

1回の研修は、おおむね2日の範囲内で実施。講師（保育短大教授、医師、児童福祉の専門知識を有する者）は、主として開催地において依頼した。

(ア) 保育従事者の研修

【研修会の開催状況】

平成5年6月	神奈川県，名古屋市
7月	埼玉県，名古屋市（2回），石川県
9月	大阪府，京都府，奈良県，大阪市，京都市，岐阜県
10月	神奈川県（2回），大分県
11月	札幌市，北海道，栃木県，熊本県，長崎県，山梨県
12月	富山県，群馬県
平成6年1月	島根県，兵庫県，長崎県（2回）
2月	岡山県，三重県，福井県，新潟県，熊本県（2回），青森県，秋田県，岩手県
3月	福井県，広島県，広島市，静岡県

【参加した事業所数及び参加人員】

研修会に参加した事業所は，開催した道府県・市における事業所の53%で，受講者数は次のとおりである。

研修会参加事業所 853か所

研修会参加人数（保母） 1,108人

【研修・指導図書の配布】

全国の事業所内保育施設及び研修会受講者を対象に，次の図書及び教材を配布して，保育従事者の役割の重要性和，保育技術向上の指導に努めた。

①0.1.2.3 歳児の運動発達と体操実践……………(株)日本小児医事出版社発行

②やさしい表現あそび……………(社)全国児童館連合会発行

③事業所内保育施設の動向

④事業所内保育施設現況調査報告書

(イ) 保育施設の調査指導等

保育施設整備費を助成した事業所(5か所)について、建物の整備並びに保育状況等の実地調査を行い、必要な指導を行った。

3) 企業委託型保育サービス事業に対する助成

企業委託型保育サービス事業の円滑な実施を図るための社会福祉法人(認可保育所等児童福祉施設経営法人)への助成事業については、次の24法人に対して助成した。

また、本事業の広報及び助成の申し込み、事業報告等の審査事務等については、社会福祉法人日本保育協会に委託した。

【助成を行った法人】

広島愛育会(広島県)	白鳥福祉会(茨城県)
衣笠保育園(京都市)	産土会(大分県)
かたかご福祉会(富山県)	端山園(京都市)
清豊福祉会(鹿児島県)	あすなろ福祉会(香川県)
永興福祉会(京都市)	若葉会(茨城県)
後閑あさひ福祉会(群馬県)	ももの木保育園(京都市)
三和会(岡山県)	春日野園(京都市)
大宅保育園(京都市)	曙保育園(京都市)
あらぐさ会(福岡県)	正親福祉会(京都市)
みよし福祉会(香川県)	桑の実会(埼玉県)
ゆりかご保育園(京都市)	光久福祉会(大阪府)
あけぼの会(京都市)	山ゆり会(茨城県)

4) 啓発活動

(ア) 児童手当制度の啓発、広報のため「児童手当」誌を発行した。

(1)発行回数・部数 月刊(12回) 延べ58,200部

(2)配布先 中央官庁、地方公共団体、社会保険事務所、各県経営者協会及び商工会議所、中央児童福祉審議会委員等関係者

(イ) 児童手当(受給者のしおり)を作成、配布

(1)発行部数 500,000部

(2)配布先 地方公共団体、児童福祉施設等

5) 職域児童育成事業に対する助成

職域児童育成事業は、職域または地域の幼児及び小学校低学年児童等を対象に、集団遊び、体力づくり等の活動を通じて健全育成を図るもので、次の商工会議所（商工会）を対象に 119か所（前年度103か所）、33,500千円（前年度29,500千円）の助成を行った。

【商工会議所】

（単位：千円）

県 別	か所数	助成額	県 別	か所数	助成額	県 別	か所数	助成額
秋 田	2	750	福 井	1	500	山 口	1	500
茨 城	1	500	長 野	2	1,000	徳 島	1	500
埼 玉	2	1,000	京 都	1	250	熊 本	1	500
新 潟	1	500	兵 庫	1	500	大 分	2	500
富 山	1	500	広 島	2	1,000			
計 19か所 8,500千円								

【商工会】

（単位：千円）

県 別	か所数	助成額	県 別	か所数	助成額	県 別	か所数	助成額
北海道	8	2,000	石 川	1	250	山 口	1	250
岩 手	1	250	山 梨	1	250	島 根	2	500
秋 田	3	750	福 井	3	750	鳥 取	1	250
宮 城	3	750	岐 阜	4	1,000	徳 島	2	500
山 形	2	500	静 岡	2	500	香 川	3	750
福 島	2	500	愛 知	3	750	高 知	2	500
茨 城	3	750	三 重	3	750	福 岡	1	250
栃 木	3	750	滋 賀	3	750	佐 賀	2	500
群 馬	2	500	京 都	2	500	長 崎	4	1,000
埼 玉	3	750	大 阪	1	250	熊 本	2	500
東 京	2	500	兵 庫	3	750	宮 崎	3	750
新 潟	3	750	和歌山	2	500	鹿児島	3	750
長 野	3	750	岡 山	2	500			
富 山	2	500	広 島	4	1,000			
計 100か所 25,000千円								

6) 特殊ミルク共同安全開発等事業に対する助成

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会が実施した、次の事業に対して助成を行った。平成5年度助成額274,093千円。

- (1)先天性代謝異常児の治療のために必要な特殊ミルクの供給、品質管理及び改良を目的とする共同開発事業
- (2)周産期医療に係わる医師、保健婦等の研修及び母子保健に関する情報の提供事業
- (3)児童の発育・養育等児童福祉諸問題の調査研究事業
- (4)児童・家庭に関する動向の収集及び提供事業（子ども・家庭データバンク事業）

7) おもちゃ図書館普及推進事業

財団法人おもちゃ図書館財団が実施した、障害児の育成を目的とする「おもちゃ図書館」の普及推進事業等に対して助成を行った。平成5年度助成額10,596千円。

8) 児童福祉文化財普及等事業

財団法人全国児童館連合会が実施した、中央児童福祉審議会推薦による児童劇、映画を各地の児童厚生施設で上演等、児童福祉文化財普及を目的とする事業に対して助成を行った。平成5年度助成額161,676千円。

9) 病児デイケアパイロット事業

保育に欠ける児童が発病時に、保護者の仕事の都合で家庭での対応が困難な場合に、病児のデイケアを乳児院等児童福祉施設において試行し、今後のサービスの供給体制のあり方等について調査研究するための費用を社会福祉法人恩賜財団母子愛育会に助成した。平成5年度助成額27,051千円

※平成6年度から「事業所内保育施設の整備等に対する助成」「事業所内保育施設の保育従事者の研修及び指導」「企業委託型保育サービス事業に対する助成」「職域児童育成事業に対する助成」「特殊ミルク共同安全開発等事業に対する助成」「おもちゃ図書館普及推進事業」「病児デイケアパイロット事業」は、新たに発足した財団に移管された。

こどもの城事業年報 平成5年度

平成6年11月1日発行

財団法人 日本児童手当協会

理事長 小島 弘伸

〒150 東京都渋谷区神宮前5-53-1

電話 03(3797)5666

印刷所 オーイ・アート・プリンティング (本文用紙は再生紙を使用しています)